

多賀城市の歴史遺産

大代村 笠神村牛生

留ヶ谷村 高崎村 田中村

多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

多賀城市教育委員会



## 序 文

多賀城市では、市内各地域に存在する歴史遺産の保全を図るため、平成二五年度から、市内全域を対象とした文化財調査に着手しました。本市は、江戸時代に一三の村に分かれていたことから、村ごとの調査を行うことによって地域の歴史の特徴を明らかにしたいと考え、本事業を計画したのであります。

平成二五・二六年度には、旧八幡村、平成二七年度は笠神村・大代村・下馬村それぞれの調査を実施いたしました。これらの村々は本市の南部及び東半部に位置しており、多賀城海軍工廠の建設等に端を発した大規模な造成や道路建設等によってそれまでの村落風景が一変し、戦後は工場や住宅が立ち並ぶ近代的なまちとして生まれ変わり現在に至っております。そのような変遷を辿ってきた地域ですが、旧道沿いには石碑が残り、地域独自の行事や風習などは今も地元の人々の手によって守られ続けていることが判明いたしました。

今年度調査対象といたしましたのは、留ヶ谷村、高崎村、田中村及び、現在は塩竈市に編入されている旧笠神村の牛生地区です。本市のほぼ中央部にあたるこれらの地域には神社仏閣も多く、それらを核とした地域の結びつきや歴史・伝統を明らかにすることができました。本書は、今年度の調査対象地区に加え、昨年度調査を行った大代村を加えて、四村一地区の調査成果を収録したものであります。

旧一三か村を対象とした文化財調査も既に七か村が終了し、残すところ本市西部の六か村となりました。今後も引き続き地元の方々の協力のもと、地域の歴史文化を解き明かす作業を継続していく所存であります。最後になりましたが、本書を作成するにあたり、調査に御協力をいただいた方々に対し、心より御礼申し上げます。挨拶とさせていただきます。

平成二九年三月

多賀城市教育委員会

教育長 小畑 幸彦



## 例言

- 一 本書は、多賀城市内全域を対象とした歴史・民俗調査の報告書であり、その第四冊として作成したものである。
- 二 本書は、「平成二八年度文化庁 文化遺産を活かした地域活性化事業」の採択を受けて作成した。
- 三 本書で対象としたのは江戸時代の大代村、笠神村の一部である牛生地区（現在は塩竈市）、留ヶ谷村、高崎村、田中村であり、現在の多賀城市笠神一〜五丁目、鶴ヶ谷一〜三丁目、丸山一〜二丁目、下馬一〜五丁目、伝上山一〜四丁目及び塩竈市である。
- 四 対象地区の調査は、大代村を平成二七年度に、牛生地区、留ヶ谷村、高崎村、田中村及び大代村の補足調査を平成二八年度に実施したものであり、文化財課文化財係の千葉孝弥、同調査普及係の早坂優子が担当した。
- 五 本書は千葉、文化財課調査普及係の瀧川ちかこ、早坂が執筆した。第八章と第九章が瀧川、第三章第六節、第四章第四節、第五章第七節、第六章第六節、第七章第六節、図版作成が早坂、それ以外を千葉が担当し、編集は早坂が行った。一部仏像等の写真撮影にあたり、調査普及係の村上詩乃の協力を得た。
- 六 仏像については、東北芸術工科大学の長坂一郎氏に調査を依頼し、その成果は「附章 仏像調査」として収録した。但し、「志引観音講 木造 勢至菩薩」については、実見の機会が得られなかったことから、多賀城市教育委員会が撮影した写真をもとに所見をいただき、それを掲載した。
- 七 本書では類出する『多賀城町誌』、『多賀城市史』の引用にあたり、『町誌』、『市史〇巻』の略称を使用した。
- 八 本書に収録した石造物及び棟札等については、それぞれ通しの図版番号を付した。
- 九 調査に関する諸記録は及び資料は、多賀城市教育委員会が保管している。
- 十 本書の作成にあたり、下記の方々より協力をいただいた。
  - 宮城県公文書館
  - 宮城県図書館
  - 塩竈市教育委員会
  - 柏木神社（本郷敦子）
  - 向泉院（川崎泰泉）
  - 化度寺（根来宣昭）
  - 永広昌之（東北大学総合学術博物館協力研究員）
  - 長坂一郎（東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学教授）
- 大代地区の皆様
- 塩竈市牛生地区の皆様
- 留ヶ谷地区の皆様
- 高崎地区の皆様
- 東田地区の皆様

# 目次

序文	
例言	
目次	
第一章 平成二八年度の調査概要	1
第二章 地図と写真に見る地域の変化	2
第一節 絵図	2
第二節 地図	16
第三節 航空写真	28
第三章 大代村	32
第一節 地理的・歴史的環境	32
第二節 地名と屋敷名	34
第三節 寺社仏閣	37
第四節 石造物	42
一 凡例	42
二 分布と概要	42
三 板碑	43
四 近世・近代の供養塔	45
五 石燈籠・手水鉢・幟立・扁額	69
六 顕彰碑・沿革碑ほか	77
第五節 留ヶ谷村	120
第一節 地理的・歴史的環境	120
第二節 地名と屋敷名	122
第三節 寺社仏閣	126
第四節 石造物	129
一 分布と概要	129
二 板碑	130
三 近世・近代の供養塔	132
四 石鳥居・幟立・石燈籠・手水鉢	146
第四節 民俗	117
五 墓標	116
四 記念碑・顕彰碑	112
三 石燈籠・手水鉢・標柱	110
二 近世・近代の供養塔	108
一 分布と概要	108
第三節 石造物	108
第二節 寺社仏閣	107
第一節 歴史的環境	106
第四章 笠神村(牛生)	106
第七節 墓標	82
第六節 民俗	95
第五節 棟札・祈禱札ほか	86

五	顕彰碑・沿革碑ほか	150
六	墓標	167
第五節	棟札・寄進札・絵馬	171
第六節	金工	182
第七節	民俗	184
第六章	高崎村	192
第一節	地理的・歴史的環境	192
第二節	地名と屋敷名	194
第三節	寺社仏閣	198
第四節	石造物	202
一	分布と概要	202
二	板碑	203
三	近世・近代の供養塔	212
四	石鳥居・幟立・石燈籠・手水鉢・扁額	242
五	顕彰碑・沿革碑ほか	245
六	墓標	255
第五節	祈祷札	266
第六節	民俗	269
第七章	田中村	276
第一節	地理的・歴史的環境	276
第二節	地名と屋敷名	277
第三節	寺社仏閣	279

第四節	石造物	280
一	分布と概要	280
二	板碑	280
三	近世・近代の供養塔	283
四	手水鉢	293
五	墓標	294
第五節	棟札	302
第六節	民俗	305
第八章	地誌	311
第一節	大代村	311
第二節	留ヶ谷村	314
第三節	高崎村	321
第四節	田中村	324
第九章	名所・旧跡	325
参考文献		330
石造物一覧表		332
附章	仏像調査	



## 第一章 平成二八年度の調査概要

平成二八年度の文化財調査は、当初の計画に従って留ヶ谷、高崎、田中村を対象とした。これらの三ヶ村は多賀城市域のほぼ中央部に位置し、いずれも主として丘陵部に位置するものである。

ところで、平成二七年度に実施した旧笠神村の内牛生地区は、現行政区上は塩竈市となっているが、かつては笠神村の一部として存在したものであり、笠神村の歴史を解明する上で、同様の調査の実施が必要と考えられたことから追加調査を実施したものである。また、大代村については、平成二七年度に調査の大部分は終了していたが、諸般の事情により平成二七年度分の調査報告書に収録することができなかったものである。しかし、平成二八年一〇月、柏木神社の格別の配慮によって、旧社殿の建造物的調査および社殿内に保管されていた札類の調査を実施することができ、前者の調査報告は「多賀城市の近世社寺建築調査報告書」に、後者の成果は本書に収録することができた。

石造物の調査は、昭和五七年の三崎一夫氏の記録を手掛かりに、留ヶ谷、高崎、笠神牛生、東田中地区へと進めていった。留ヶ谷地区の向泉院には、江戸時代から近代に至る墓標一九一基が一箇所に集められており、東田中地区にも江戸時代から近代に至る墓地が旧情をとどめた形で残されていたことから、関係者の特別の配慮によって、調査を実施することができた。その結果、今年度の石造物調査では、中世の板碑、近世の供養塔、石鳥居、石燈籠、手水鉢、墓標等二二基について資料化することができた。それらの石材については、東北大学総合学術博物館協

力研究員 永広昌之氏に鑑定していただいた。

札類の調査では、神社や小祠などに納められた棟札・寄進札・絵馬など、七〇点について資料化した。

仏像・神像は、留ヶ谷の向泉院本堂と糸掛観音堂、東田中の観音講、牛生の須賀神社（祇園講が保管）で祀られているもの一四体を対象として、東北芸術工科大学 長坂一郎氏により調査を実施していただいた。

民俗調査では、地域の生活習慣や講の行事、寺院・神社の祭礼や行事、語り継がれた地域の歴史や伝承等について、五〇人から聞き取り調査を行った。

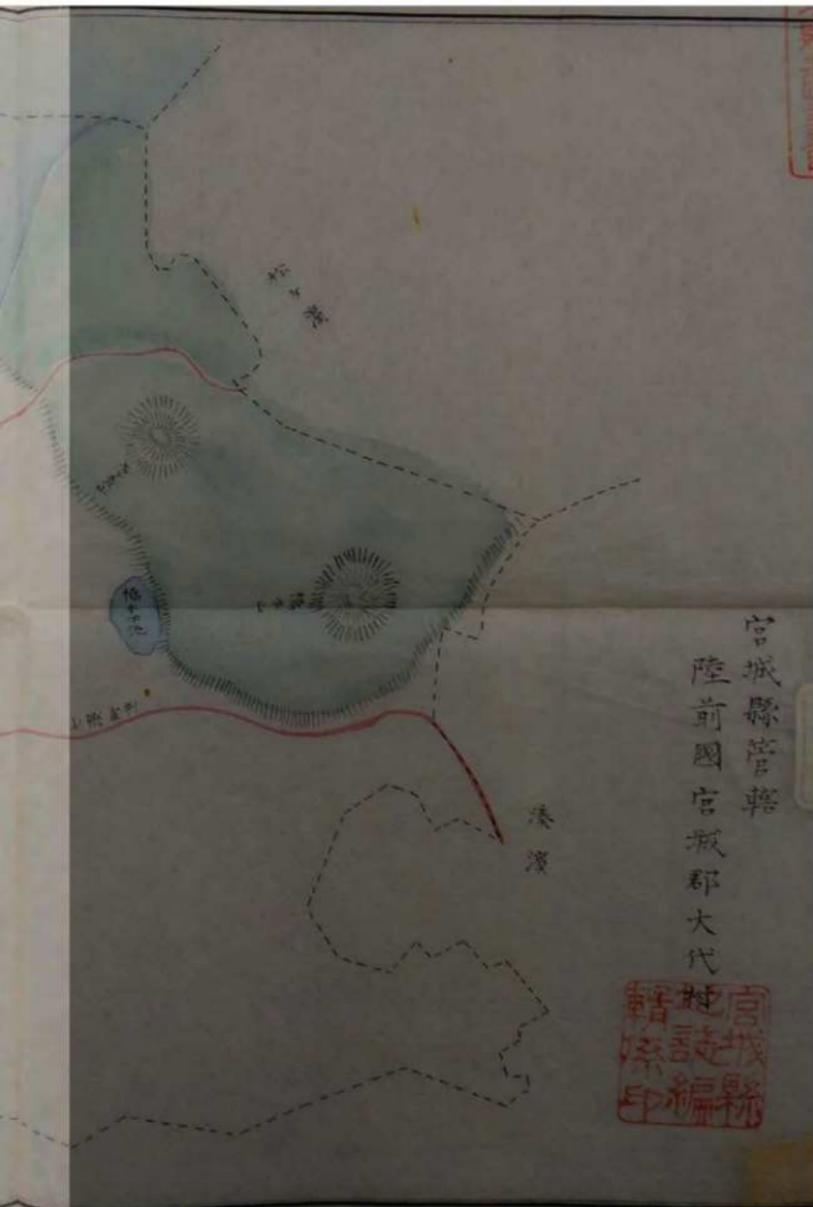
宮城県図書館と宮城県公文書館には、明治時代に作成された旧大代、留ヶ谷、高崎、田中村の絵図等が収蔵されており、公文書館には神社祭祀関係資料も保管されていたことから、それらについても調査および写真撮影を行うことができた。



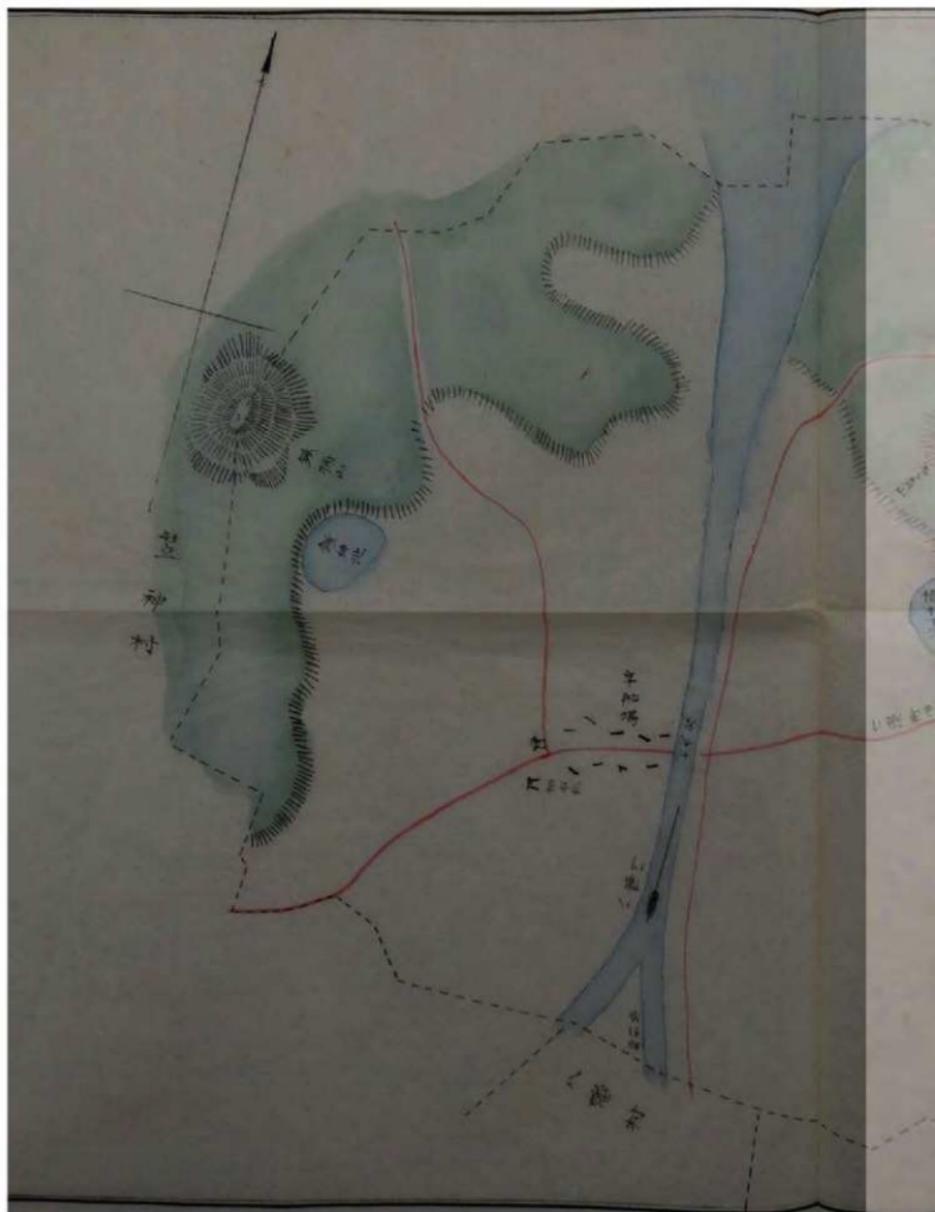
第1図 平成28年度調査対象地域

## 第二章 地図と写真に見る地域の変化

### 第一節 絵図



陸前国宮城郡地誌附図宮城縣管轄陸前国宮城郡大代村 明治10年代(1877~1886)  
宮城県図書館蔵(30×40cm)



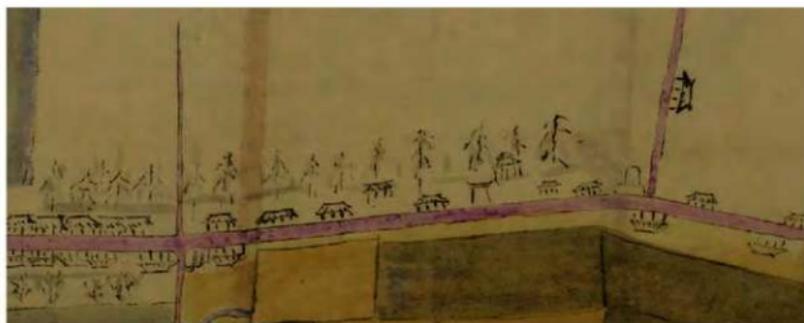
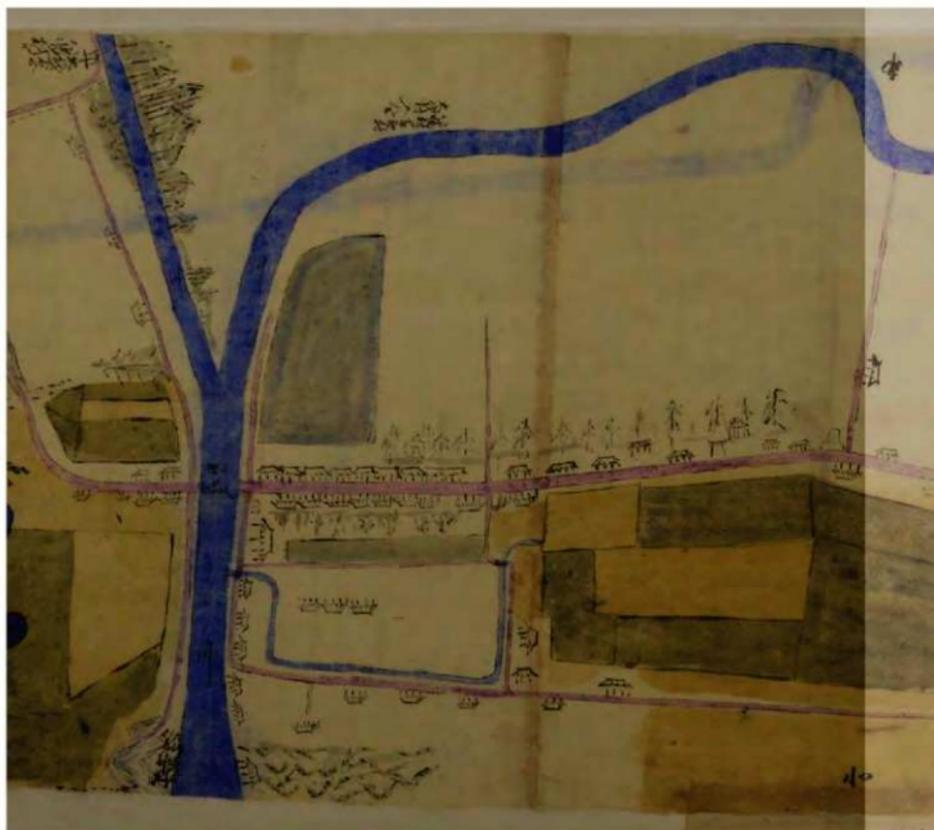


陸前国宮城郡大代村地引繪圖 明治8年(1875) 宮城県公文書館蔵 (41×74cm)

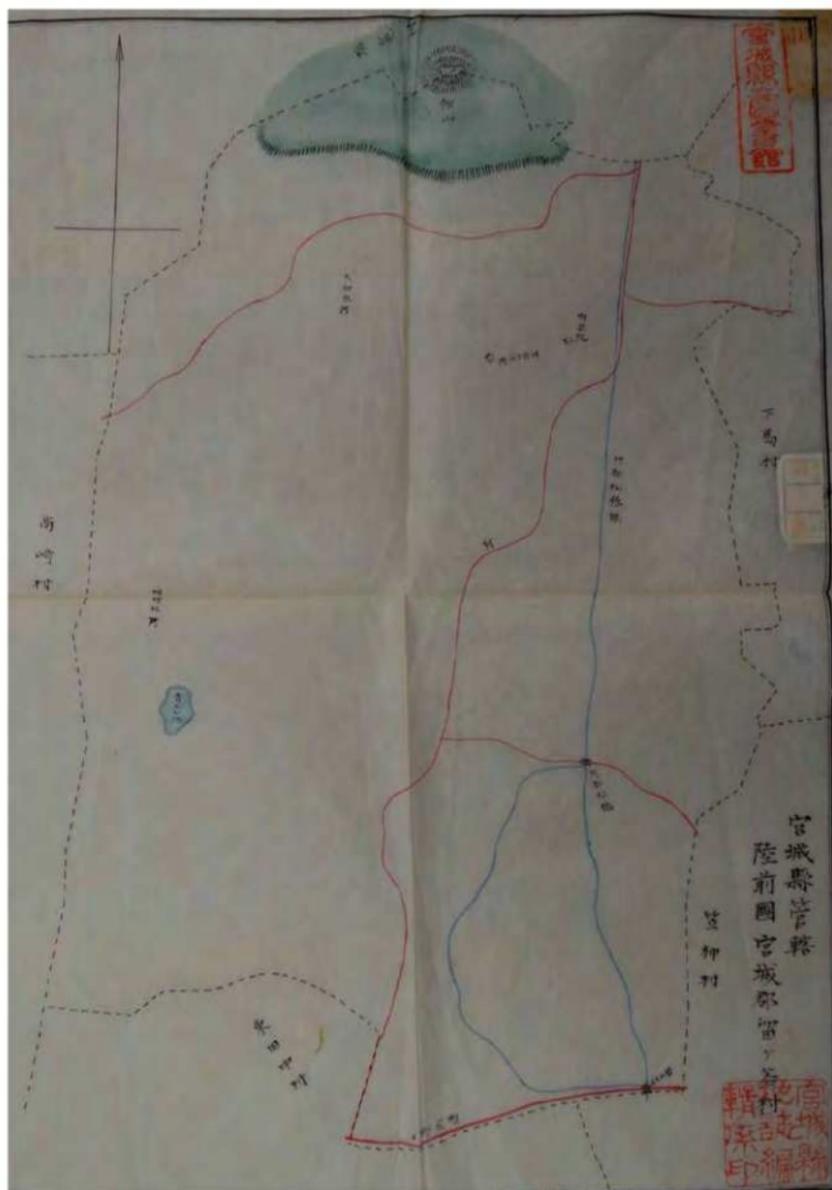




陸前國宮城郡大代村耕地魚絵図 明治5～7年(1872～1874) 宮城県公文書館蔵(58×93cm)

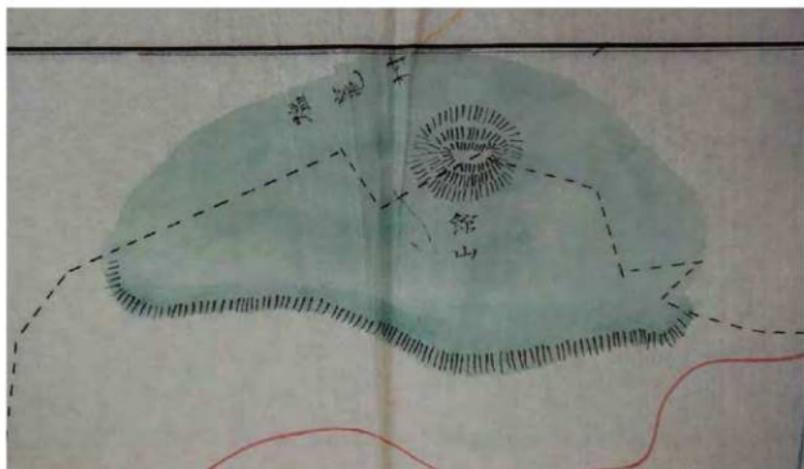


同上(部分)

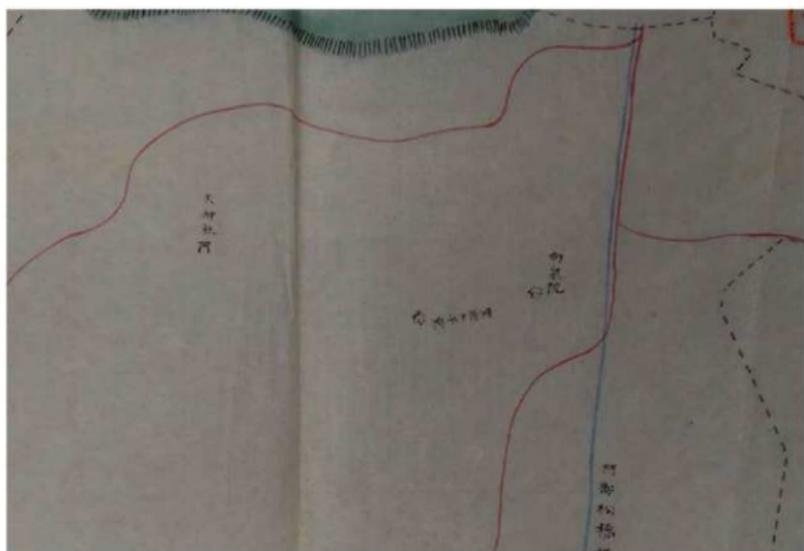


陸前国宮城郡地誌附宮城縣管轄陸前国宮城郡留ヶ谷村 明治10年代(1877~1886)

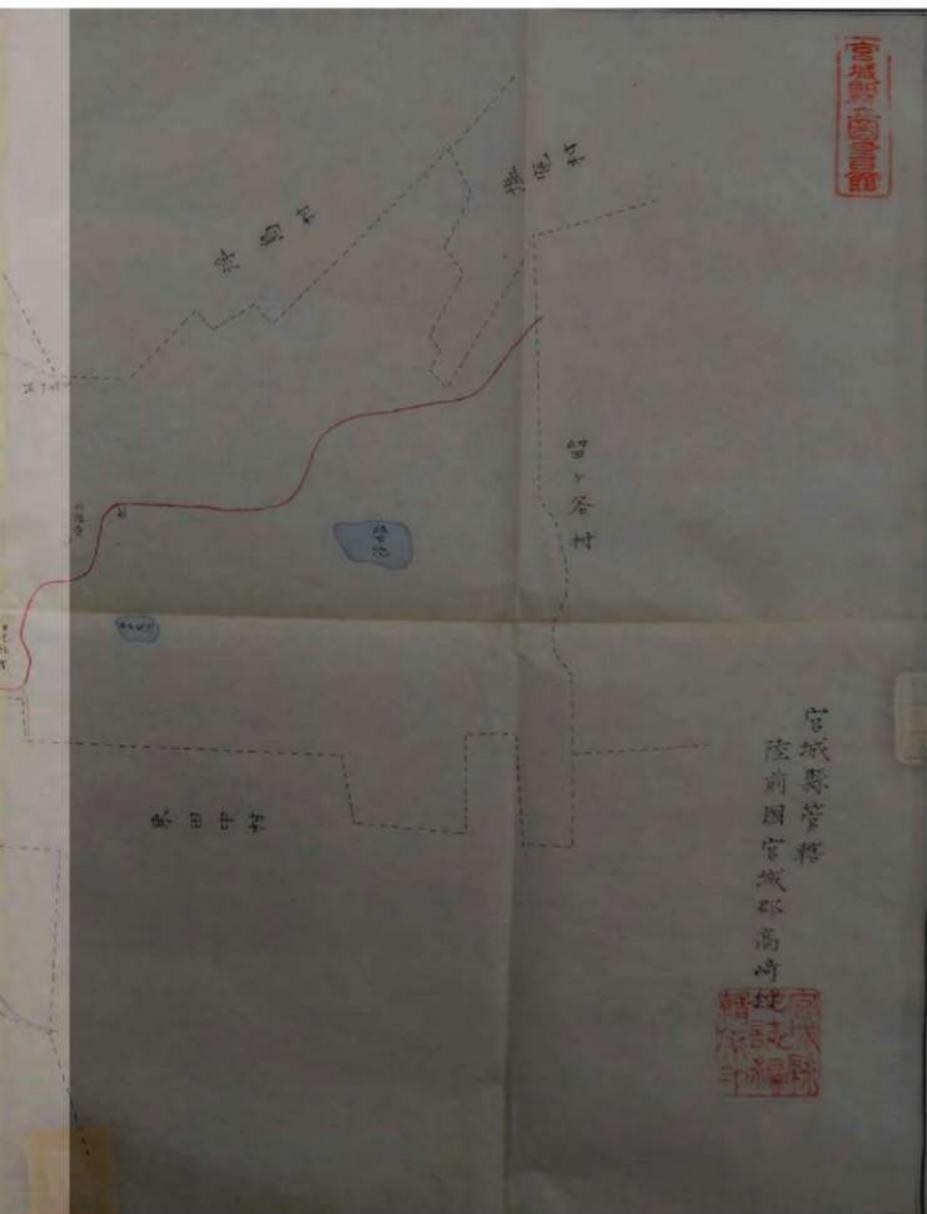
宮城県図書館蔵(40×29.5cm)



同右 (部分)

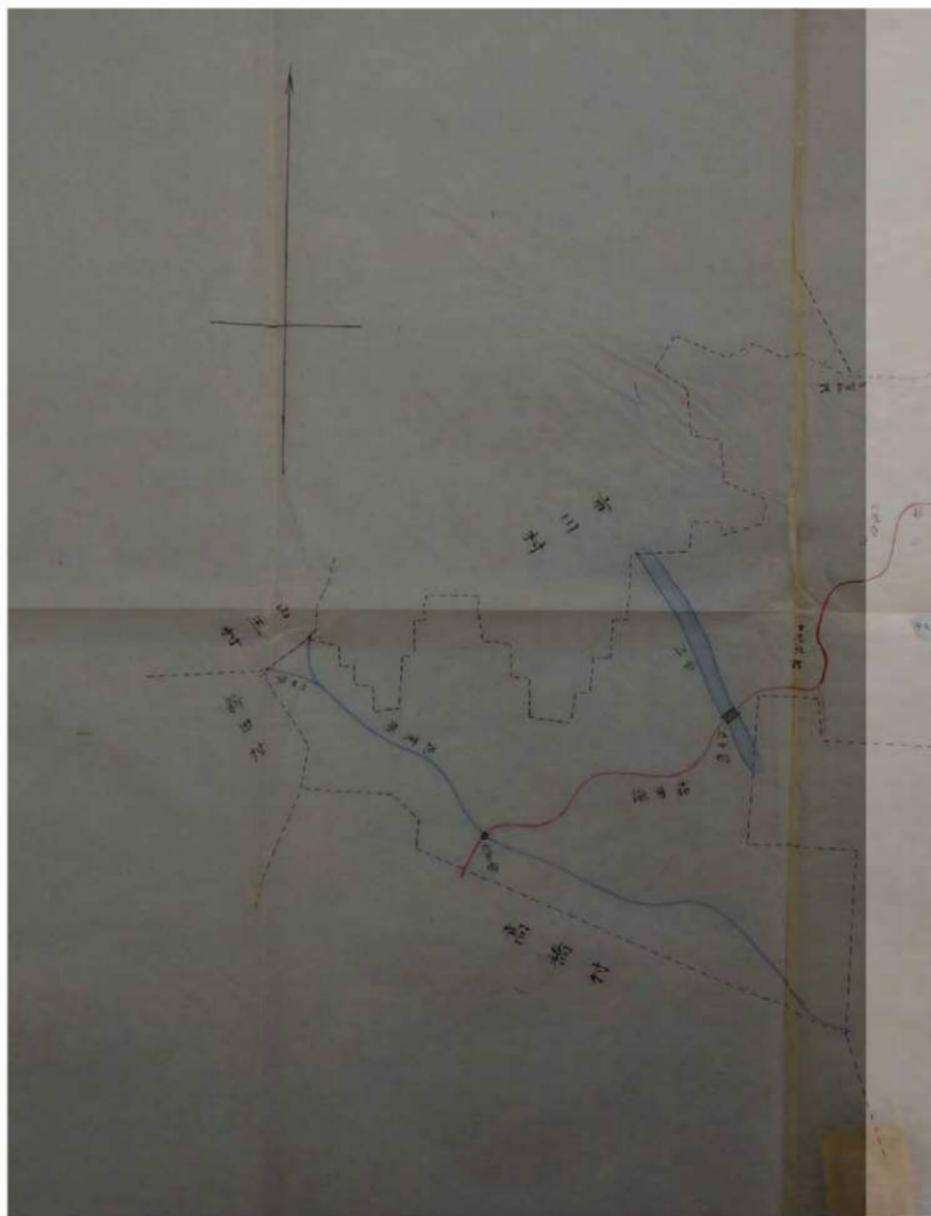


同右 (部分)



陸前国宮城郡地誌附図宮城縣管轄陸前国宮城高崎村 明治10年代(1877~1886)

宮城県図書館蔵(40×59cm)

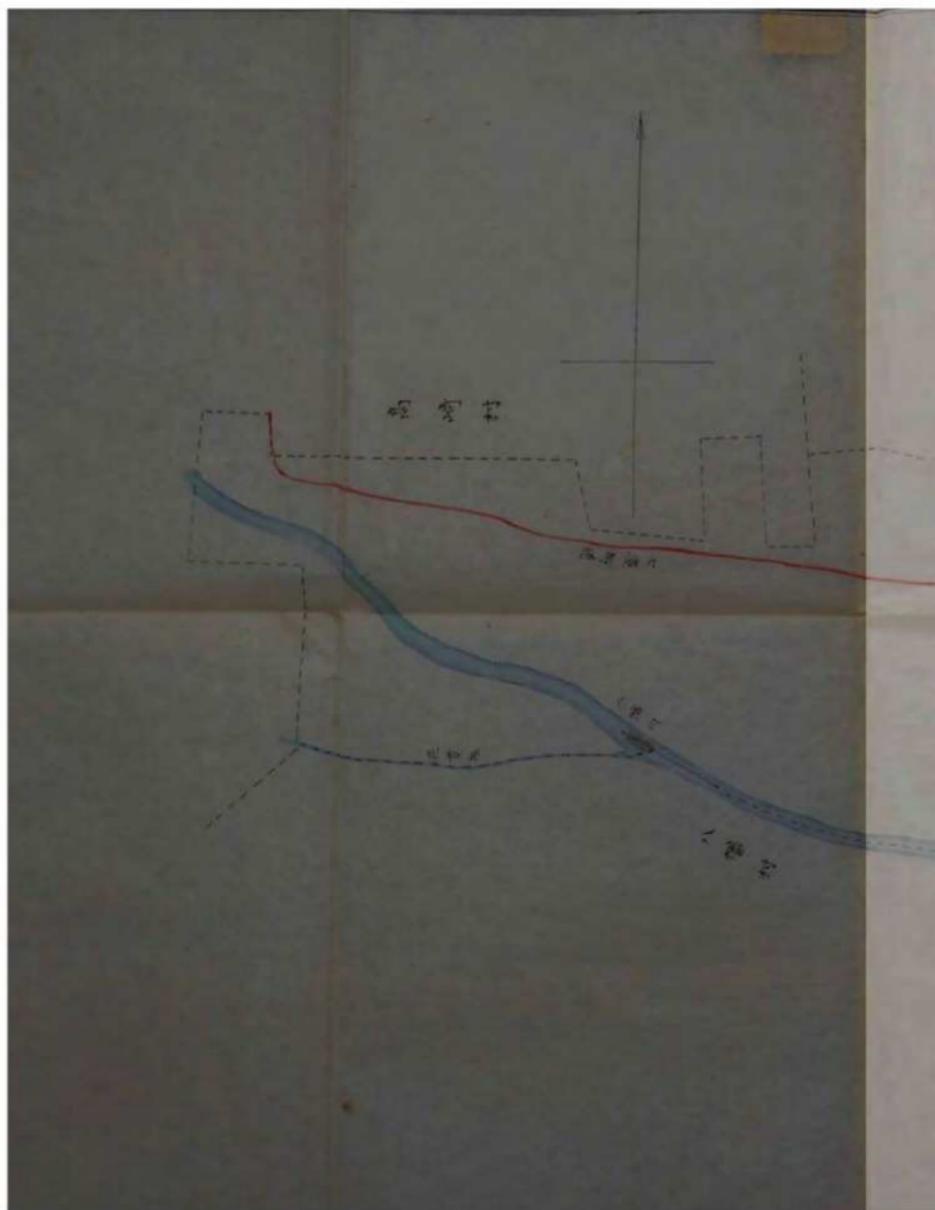




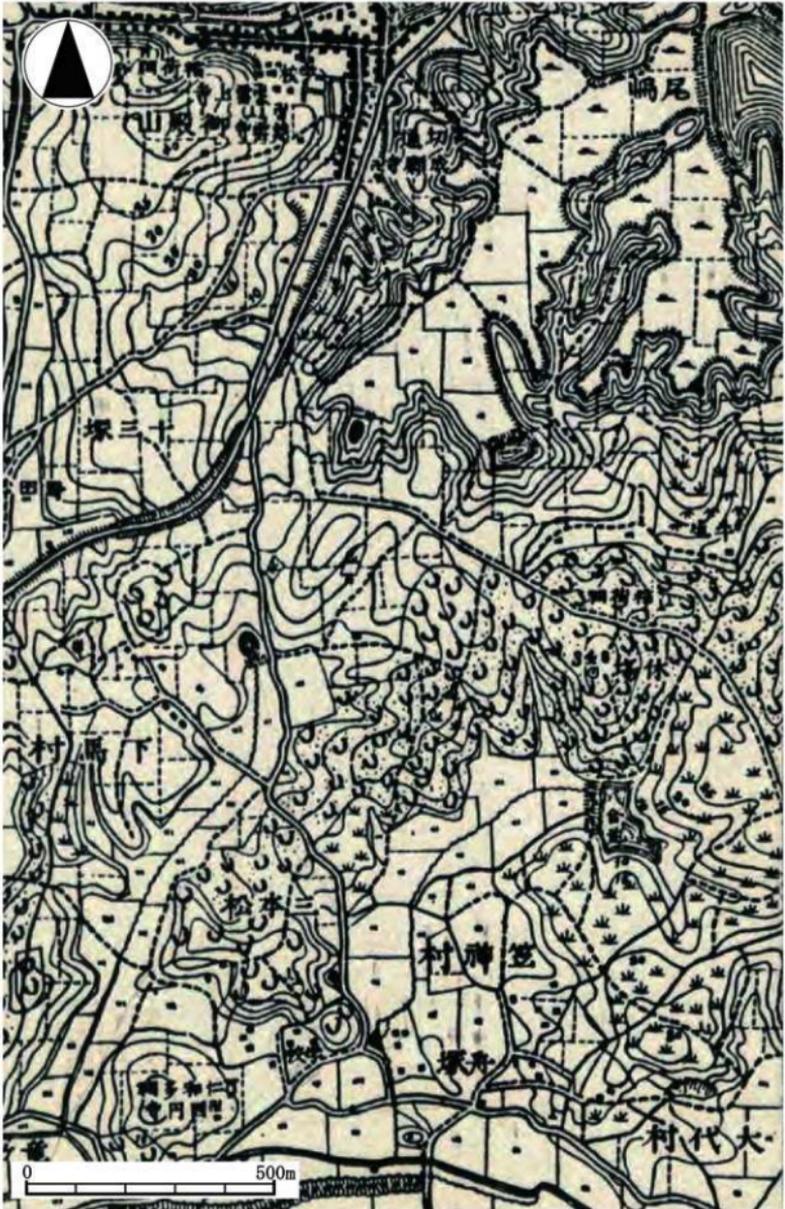
陸前国宮城郡高崎村地引絵図 明治8年(1875) 宮城県公文書館蔵(60 × 103 cm)







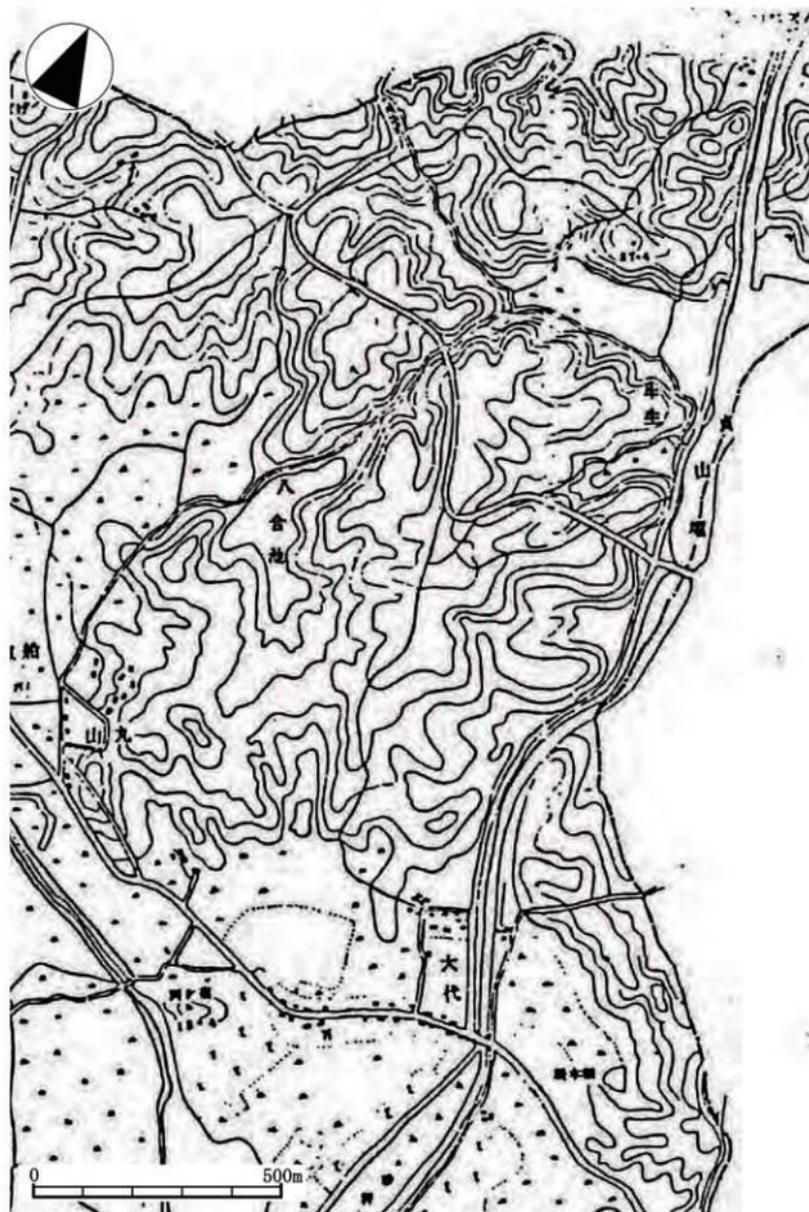
第二節 地図



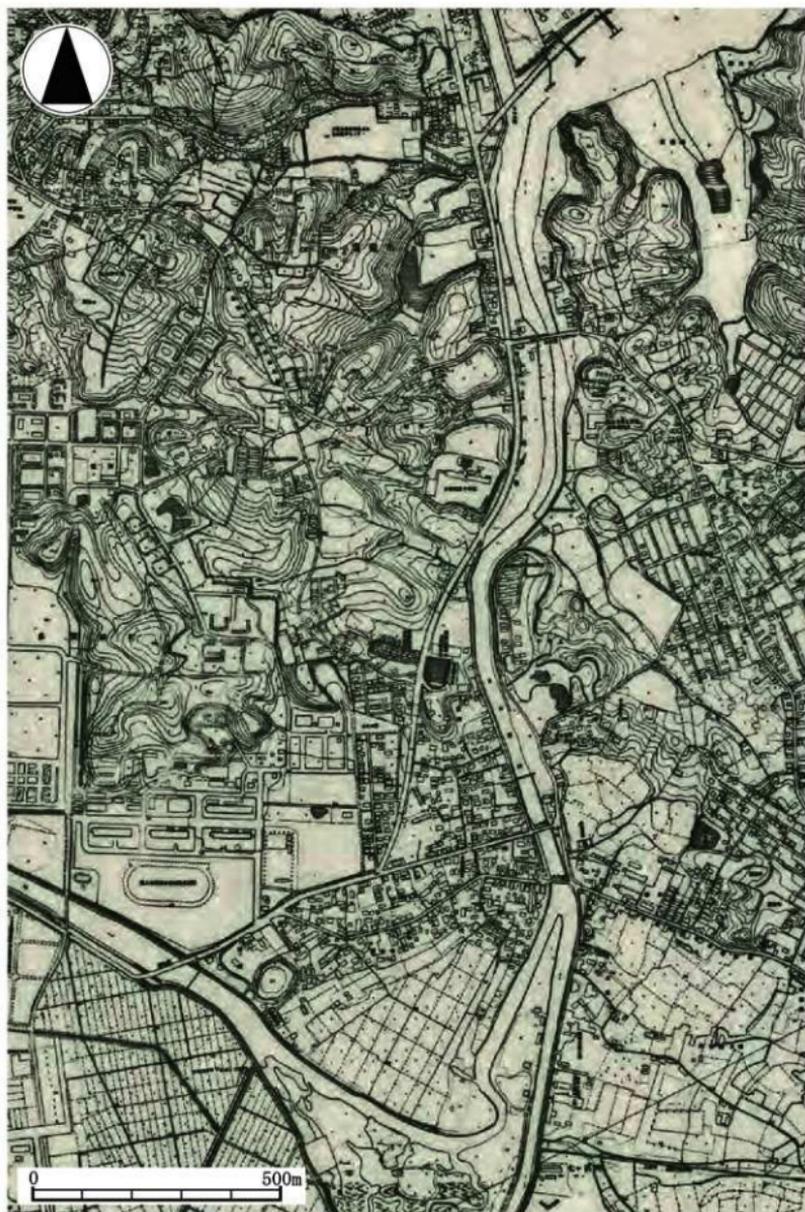
大代・牛生地区周辺地図 1 (明治 24 年第二師団参謀部測量・製版)



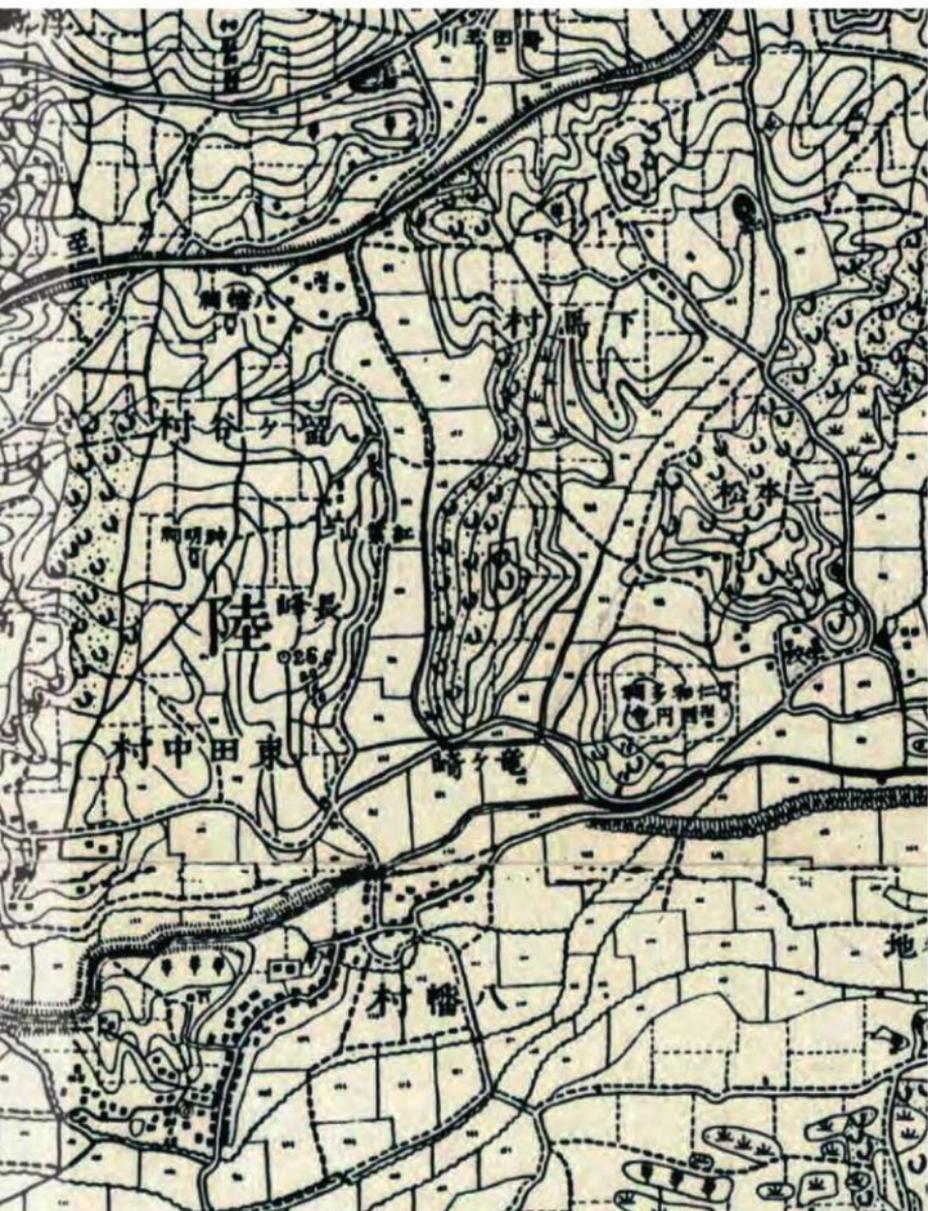
大代・牛生地区周辺地図2 (昭和6年国土地理院発行)



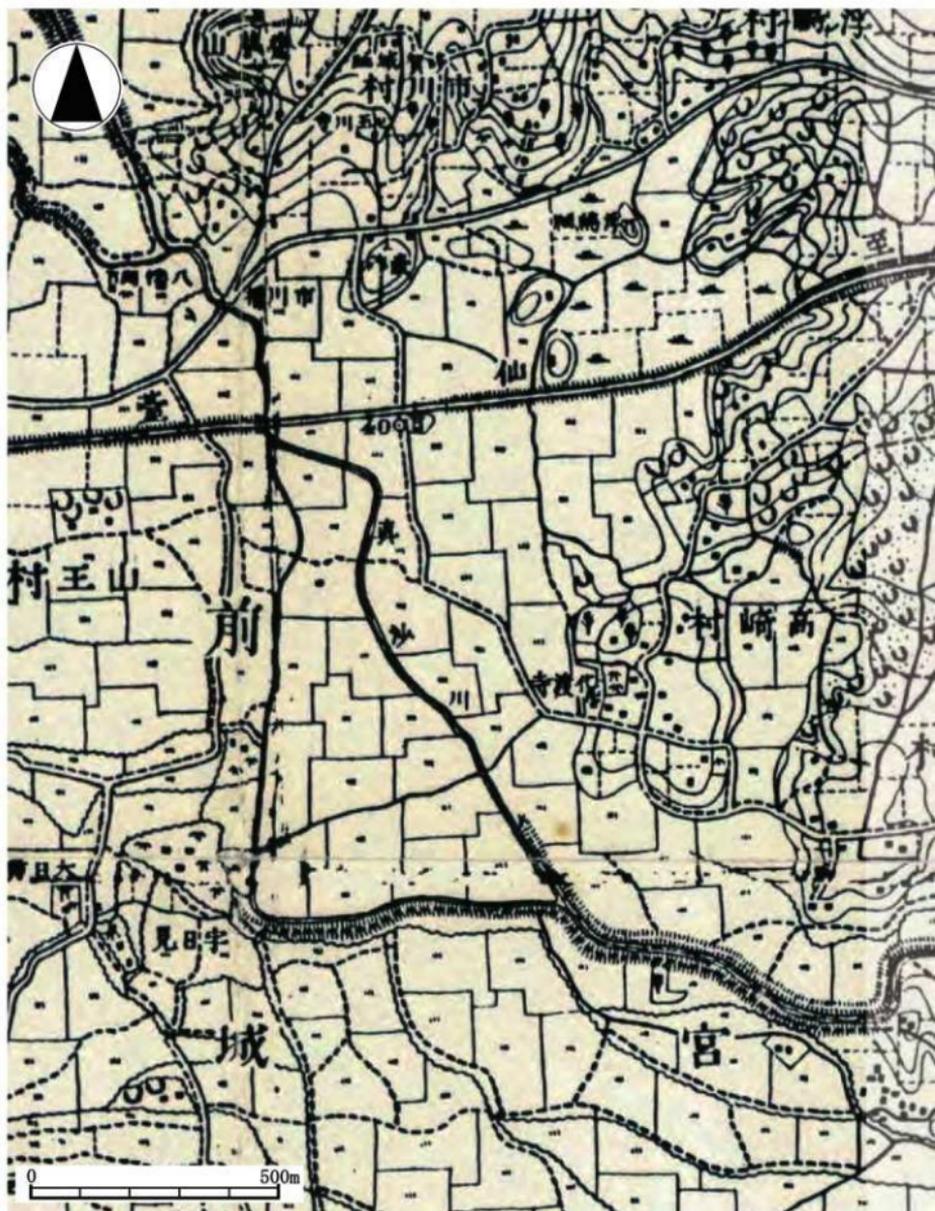
大代・牛生地区周辺地図3 (昭和13年)



大代・牛生地区周辺地図4（昭和44年）

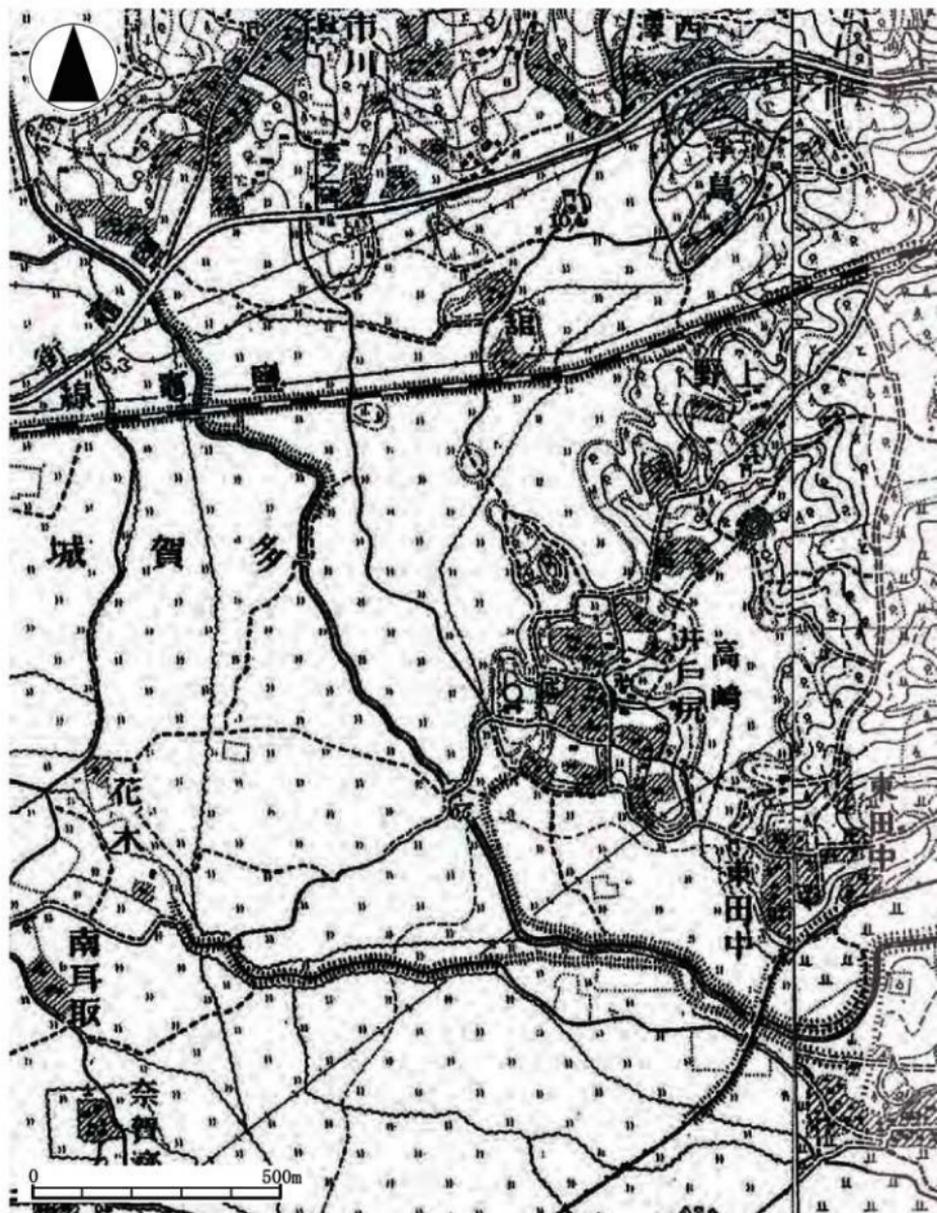


留ヶ谷・高崎・東田中地区周辺地図 1 (明治24年第二師団参謀部測量・製版)

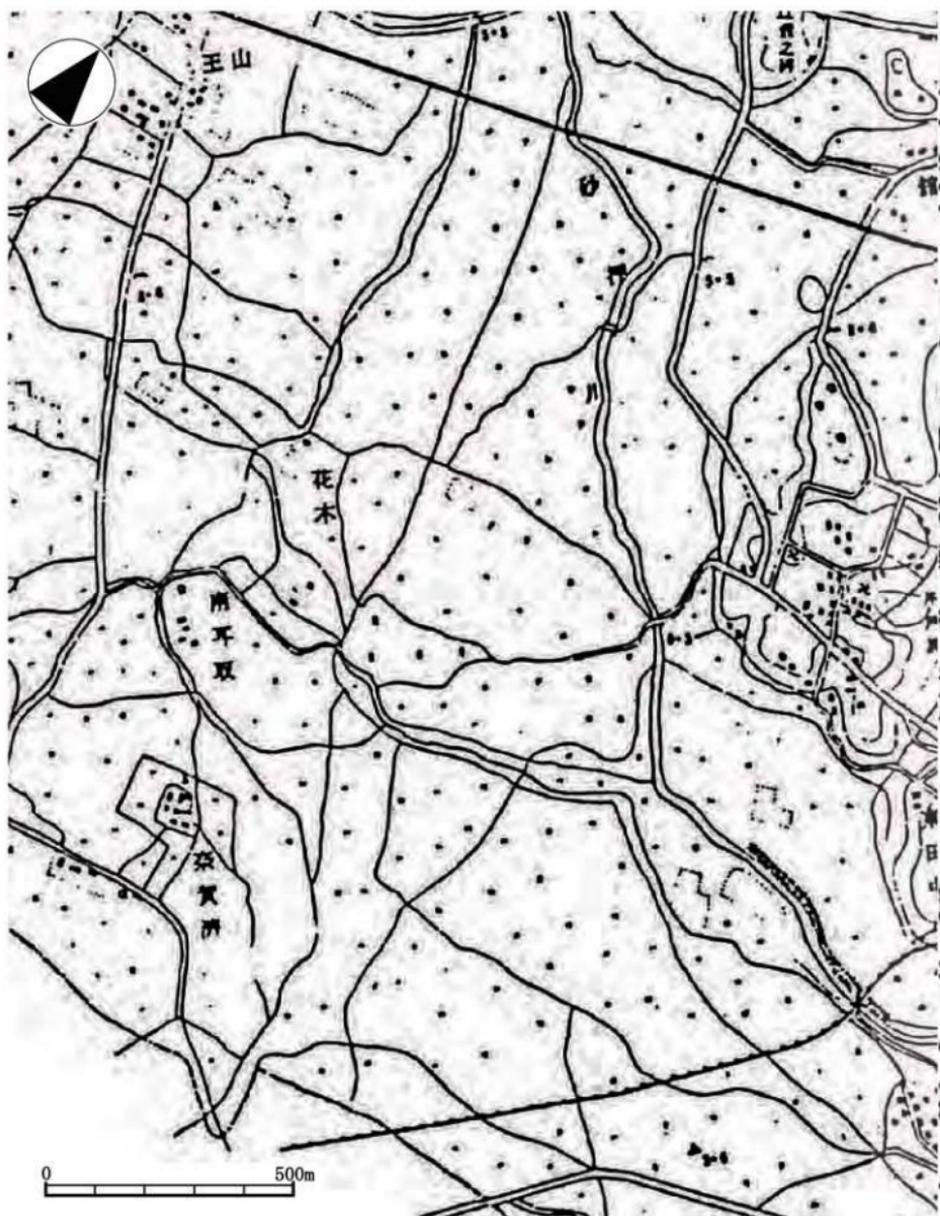




留ヶ谷・高崎・東田中地区周辺地図 2 (昭和6年国土地理院発行)

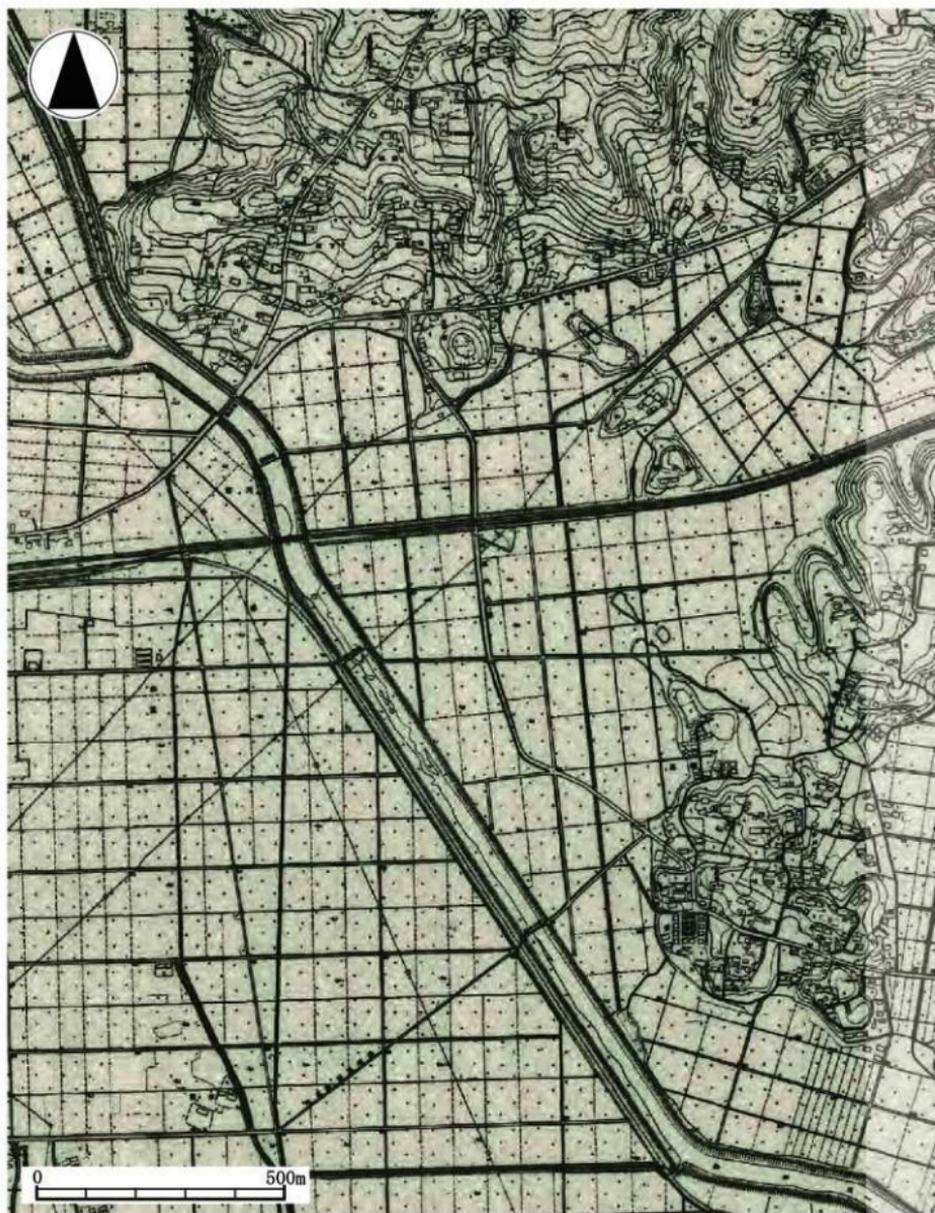








留ヶ谷・高崎・東田中地区周辺地図4 (昭和44年)



第三節 航空写真



大代・牛生地区周辺航空写真1 (昭和23年米軍撮影)



大代・牛生地区周辺航空写真2（昭和36年国土地理院撮影）



留ヶ谷・高崎・東田中地区周辺航空写真1 (昭和23年米軍撮影)



留ヶ谷・高崎・東田中地区周辺航空写真2 (昭和36年国土地理院撮影)

## 第三章 大代村

### 第一節 地理的・歴史的環境

#### 一 地理的環境

大代は多賀城市の東端部にあり、南部・北部・東部が七ヶ浜町と接している。おおよそ中央部を真山運河が縦断し、南西部は砂押川があつて、それらの三角州が形成されている。旧大代村は、現在の行政区では大代東、大代西、大代南、大代北、大代中地区にあたる。

地形的にみると、北東部の七ヶ浜町の境界付近が標高二〇メートル未満の丘陵部となつており、それ以外は浜堤や後背湿地が分布する低地となつている。現在、多賀城市から七ヶ浜町に至る県道の南側は緩衝緑地帯や仙塩流域下水道終末処理場となり、盛土や掘削によつて旧地形は大きく改変されているが、昭和四〇年代以前は、水田や畑が広がる景観が広がっていた。

風土記御用書出には、

一 南八当郡等神村境当村分鼓ヶ原ト申所より

一 北八当郡松ヶ浜境当村分石ヶ森ト申所迄

一 東八当郡湊浜境当村分舩形ト申所より

一 西八当郡等神村境当村分小沢ト申所迄

と四至を記している。鼓ヶ原は大代六丁目南端部にある鶴野の別称であり、石ヶ森は大代四丁目周辺、舩形は大代六丁目東端部であり、小沢は陸上自衛隊多賀城駐屯地の東端部付近である。南・北・東側については現在の大代地区と同様の範囲を示している。

#### 二 歴史的環境

大代地区には縄文時代から奈良時代前半にかけて、八箇所の埋蔵文化財包蔵地がある。橋本岡貝塚は縄文時代晩期の貝塚であり、昭和六三年度の確認調査では、ハマグリ、マガキを主体とした貝層を確認している（多賀城市埋蔵文化財調査センター 一九八九）。舩形岡貝塚は弥生時代中期の貝塚であり、大正八年に山内清男によつて発掘調査が行われた。この調査で発見された土器の底部に羽の圧痕があり、「石器時代にも稲あり」の論文で世間の注目を集めるに至つた、学史上名高い遺跡である。その発掘調査地点は明確ではないが、七ヶ浜町との境界に近い、大代六丁目の緩衝緑地帯の中にあると推定されている。緩衝緑地帯造成に先立ち、昭和四八年に宮城県教育委員会が実施した分布調査では、製塩土器を主体とした土器片が広範囲にわたつて分布する状況が確認されている。現在は東西六五〇メートル、南北五〇〇メートルの範囲が大代遺跡として登録されている。

大代横穴墓群は、多賀城市から七ヶ浜町に至る県道大代・七ヶ浜線沿いの丘陵南・西斜面にある。「陸前国宮城郡各村字調査」には小名として「蝦夷穴」があるので、明治九年には横穴の存在が知られていたようであり（註）、昭和一三年の『宮城縣史蹟名勝天然記念物調査報告書12「宮城県内の古墳及び横穴」には「今猶発掘されざる古墳」の一つとして記載されている（宮城県史蹟名勝天然記念物



大代貝塚標柱（昭和37年）

調査会 一九三八)。昭和五九年に県道改良工事に先立って多賀城市教育委員会が発掘調査を行った。存在を確認した三四基のうち一六基の調査を実施し、年代は七世紀から八世紀にかけての時期とした。出土品の中の金銅装頭椎大刀は中央とのつながりを示すものであり(多賀城市教育委員会 一九八五)、耳環は大陸の沿海州から積丹半島を経由して運び込まれた銅を原料としたものであるという(小嶋 一九九六)。この横穴の東側一〇〇メートルの橋本開横穴墓があり、七ヶ浜町に入っても併形開横穴、砂山横穴、薬師堂横穴が海岸部近くまで断続的に分布しており、海浜部を支配した豪族の墓域と考えられる。

大代村地域における奈良・平安時代の様子は明らかではないが、併形開貝塚の南側二五〇メートルの位置にある七ヶ浜町の新田前遺跡では井戸や大溝が発見され、「奏」と墨書された平安時代の土器が採集されている(宮城県教育委員会 一九七五)。

中世では信仰に関わる資料があり、北新田地蔵の近くに板碑が一基、本市との境界に近い湊浜の薬師堂には一四世紀の石窟仏がある。また「風土記御用書出」の中に「古館 豪族大木戸四郎大夫重信ノ居館といふ、年号者相知不申候事」との記載がある。「大木戸」は石ヶ森山から牛生にかけての地域であり、その周辺に館跡が存在した可能性はあるが、江戸時代の御船入堀掘削や、近年の宅地造成によって地形は大きく改変されており、遺構は確



蛭夷穴



橋本橋柱 (年代不明)



御舟入堀 (昭和44年)

説できない。

江戸時代の大代村は、「風土記御用書出」によれば耕地が二二貫一六五文と一三ヶ村中二番目に少ないが、名産に海産物が挙げられているように、御船入堀に面したこの村の生業は農業を主体とするものではなかった。御船入堀は、藩の貢米を仙台城下に輸送するため、寛文一〇(一七三〇)年にかけて開削された運河で、大代村には物資の検査を行う御石改所が置かれた。また、鶴野には享保二三年に五代藩主吉村が京都から鶴を取り寄せて放飼し、御鳥見役を置いたという。

註 大代村の「風土記御用書出」には旧跡として「ナシト云共先住民ノ住家ナルカ或蝦穴ト称シル穴処々ニ出現セルアリ」との記載があるが、大代村の書出は村探えの記録であり、「市史第2巻」の「第3章『安永風土記』にみる村々」では、この部分は後世の書き込みとしている。

## 第二節 地名と屋敷名

## 一 地名

大代村の地名については、「風土記御用書出」に小名として表示されているものがあり、小名とは表示されないが地名として表示されているものもある。また明治九年の「陸前国宮城郡各村字調査」には、村名、大字、小字がそれぞれ読み仮名を伴って書き出されており、字名に関する基本資料となっている（表1）。また、多賀城市役所には明治一九年の地籍図が保管されており、それらの位置関係を知ることができる。



第2図 大代村地籍図

その後、昭和八年には三塚源五

郎が『多賀城村聚落の機構 地名の研究』（私家版）を著し、主な地名の由来等について紹介している。三塚の研究には、安易な想像と見られる部分も含まれてはいるが、昭和八年当時の地域の様子は知る上で参考になる部分が多い。

漢字は当用漢字に、仮名遣いは現代語風に改め、句読点を補って可能な限り原文を引用した。昭和四二年刊行の『多賀城町誌』には町内の歴史が江戸時代各村単位でまとめられており、その中には現在では失われてしまった地名に関

する情報が多く含まれている。

以下、「風土記御用書出」は「書出」、「陸前国宮城郡各村字調査」は「調査」、「多賀城村聚落の機構 地名の研究」は「研究」、「多賀城町誌」は「町誌」の略称で記述する。

石ヶ森（いしがもり）大代・牛生間の御船入堀（貞山堀）に面した石山。御船入堀掘削時において難工事だったと伝えられる（町誌）。風土記に高さ二五間とある。大代四丁目に石ヶ森一号公園があり、その名をとどめている。



石ヶ森

鶴野（うずらの）「書出」に名所「鼓ミケ原（つづみがはら）」の記載がある。踏むと太鼓のような音がいたと言われ、万治年間以前はそう呼ばれたが、享保年間に獅山公が鶴を放し飼いたことから鶴野と呼ばれるようになった。大代六丁目の南端部。

蝦夷穴（えぞあな）俗に蝦夷の住みたるものと云っているが実は古代先住民の墳墓なりとのこと（研究）。

大代（おおしろ）大代村の村名であり、「書出」に「村名二付由来 但シ慶長年以前ハ大城村ト書キ記シ候モ同年以後ハ大代村ト改メベキ旨仰出サレタル故（城）代ト相改候事」とある。

大木戸（おきど）石ヶ森山から牛生にかけての地域（町誌）。

小沢（おさわ）村の西端部で笠神村と境を接する。陸上自衛隊多賀城駐屯地東端部付近。

柏木（かしわぎ）柏木神社所在地の小名として記載（書出）。



大木戸

表1 大代村小名

小名	風土記御用書出		陸前国宮城郡各村字調査		町誌
	小名	小名以西	小名	小名以東	
山崎	○		○		
小島	○		○		
中津	○		○		
中津第一	○		○		
城本	○		○		
高津	○		○		
新井	○		○		
元舟場	○		○		
小沢	○		○		
大木戸	○		○		
石ヶ森	○		○		
鶴野	○		○		
蝦夷穴	○		○		
大代	○		○		
多賀城	○		○		
宮城	○		○		
仙台	○		○		
青森	○		○		
岩手	○		○		
秋田	○		○		
山形	○		○		
福島	○		○		
茨城	○		○		
栃木	○		○		
群馬	○		○		
埼玉	○		○		
千葉	○		○		
東京	○		○		
神奈川	○		○		
新潟	○		○		
富山	○		○		
石川	○		○		
福井	○		○		
山梨	○		○		
長野	○		○		
岐阜	○		○		
愛知	○		○		
三重	○		○		
滋賀	○		○		
京都	○		○		
大阪	○		○		
和歌山	○		○		
奈良	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		
高知	○		○		
福岡	○		○		
佐賀	○		○		
長門	○		○		
山口	○		○		
広島	○		○		
岡山	○		○		
鳥取	○		○		
島根	○		○		
徳島	○		○		
香川	○		○		
高松	○		○		
愛媛	○		○		



河東田山（かとうだやま） 菊ヶ丘の西部にある標高約九メートルの小丘陵。『町誌』では、「この丘陵の東の方に昔河東田と称する豪族がいた」という伝説がある。その屋敷跡もあり庭に池を配したという池も残っている。そこで近辺では河東田山とも呼んでいる」としている（註）。河東田氏は仙台藩士であり、大代に



河東田山

田宅（在郷屋敷）があつたことが『伊達世臣家譜』で確認できる。菊ヶ岡（きくがおか） 豪家の女中きくが罪を犯して生き埋めにされたという伝承がある。『研究』は、きくを葬った岡から生じたとしており、その場所是一本の松が生じた土盛りとなつて田の一角に僅かに残っていると記している（註）。大代一丁目の砂押川北岸。



橋本団地（昭和44年）

新田（しんでん） 小名の一つとして記載（書出）。その場所は不明であるが、本地区東端部で、七ヶ浜町との境界が複雑に入り組んだ地区に、七ヶ浜町の新田前があるので、その近辺の可能性がある。

銭神（ぜにがみ） 雷神を祭っている（『研究』）。明治の地積図では村の北西部に位置し、北東部で雷神、南西部で小沢、南部で山崎、西原、北西部で笠神村に接している。

高原（たかはら） 大代から七ヶ浜町に至る旧道の南側。現在一帯が西園寺大代墓地となつている。

中嶋（なかみね） 村境にあり、舟揚川が御船入堀に合流するところ（書出）。中嶋（なかみね） 御船入堀の東側にあり、現在の柏木神社周辺。

西原（にしはら） 山崎・元舟場と菊ヶ丘に挟まれた地域。

橋本（はしもと） 元舟場の橋本か（研究）。大代五丁目のほぼ全

に相当。

舟場（ふなば） 『書出』に小名として記載されている。アジア太平洋戦争後の区分では、砂押川が北側に大きく屈曲する地点から雷神にかけての御船入堀右岸に、北から船場、元舟場と南北に並んでいるが、もとは一つの地域であつたと考えられる。

升形（ますがた） 大代は大城であり、枡形もそれに関係あるものか（研究）。

元舟場（もとふなば） 舟場の南約三町の所。舟場の跡あり（研究）。

山崎（やまさき） 八幡村から湊浜に通じる街道の北側にあり、大代一丁目北半部から三丁目にかけての地域。

雷神（らいじん） 大代三丁目北半部から笠神五丁目の南東部にかけての地域。

（※）読み方不明

註1・2 三塚源五郎が『多賀城村落の機構 地名の研究』を著した昭和八年頃のことで考えられる。

## 二 屋敷名

『書出』に屋敷数として茶屋敷 拾六軒、古屋敷 七軒、柏木屋敷三軒、東屋敷五軒との記載がある。また、名水の項に清水屋敷、柏木神社の地主として西屋敷善兵衛とある。西屋敷については『町誌』に貞山荘（旅館）の南前方とあるので、現在の大代三丁目七番周辺と考えられる。

### 第三節 寺社仏閣

#### 一 神社

##### 柏木神社

柏木神社は大代村の村鎮守である。現在は大代四丁目の住宅地の中にあるが、かつては現在地の南西約六七〇メートルの地点、現在の大代一丁目九番付近にあった。明治二年（一八九二）第二師団參謀部測量の地図には、八幡から七ヶ浜方面に通じる道路の南側に神社の表示があり、具体的な場所についての情報もある（第二章第二節）。

風土記御用書出には「柏木明神社」として記載がある。所在する小名は「柏木」となっており、社地は竪一六間、横一二間、社は東向きで四間造り、鳥居は東向きと記載されている。誰がいつ勧請したかは不明とある。

宮城県神社庁編纂になる『宮城県神社名鑑』には、明治二年五月二十六日調書（註）の「勧請、延暦二年（七八三、平安）御棟札御座候」との記載を引用しているが、この調書は現在確認できず、棟札については「今この棟札はない。」と記されている。また、「社殿は、寛保・宝暦・文政時代に修補を加えたものであった」との記載もあるが、それらを確認する資料はなく、詳細は不明とせざるを得ない。

柏木神社



境内にある「昭神徳」碑には、「後光明天皇承應年中本山派修験米賣坊永順ありて不動明王親音の二像を安置せしが王政復古に際して之を除き神号に復す」とあり、一七世紀中頃から、修験の米

宝坊が別当的な立場にあったことが伺われる。王政復古に際して神号に復したとあるが、昭和五年の銭神子安親音上棟棟札には、導師として「明性院末裔十五世主 本郷馨」とあり、現在柏木神社の宮司を務める本郷氏がその系譜につながることを記している。境内にある梵鐘は昭和五二年八月に鑄造されたものであることなど、修験の要素をとどめたまま現代に至ったと考えられる。

奉納 柏木神社 仏前

宮川本郷清彦

諸願成就

寄奉者

多賀城中大代一丁目三ノ三六

伊藤幸治

明治三十九年十月十二日

七十才

梵鐘銘文



梵鐘 1

昭和五十二年八月吉日

山形市御町  
株式会社新木調造所  
謹製



梵鐘 2

明治五十七年（一八七二〜一八七四）の「陸前国宮城郡大代村耕地産絵図」は、南北に流れる御船入堀とそれに東流する旧砂押川によって東と南を画された地域の耕地の状況を図示したものであり、旧砂押川の北にはそれと並行する道路と家並みが描かれている。家並みは御船入堀近くでは軒を接するように密集しているが、それより西側は道路の北側は耕地が多く、家並みはやまばらになっている。そのまばらになった家並みの道路の南側に鳥居と社と見られる建物が描かれている。昭和一二

年の戦地への葉書には、石鳥居と瓦葺の社殿が写っている。

明治四二年（一九〇九）四月二二日、柏木神社を笠神の仁和多利神社に合祀したいという「神社合祀願」が、柏木神社、仁和多利神社の社掌、氏子惣代人等関係者一同の連名により、多賀城村長志賀庸治から宮城県知事寺田祐之宛て提出された。

理由は、氏子が少なくて祭祀が行われず、今後も維持していく見込みがないとのことであった。この願いは受理され、大代村の村社柏木神社は、笠神村の村社仁和多利神社に合祀されることになる。ただし、この時期

の神社合祀は、書類上地元からの請願となっているが、実態は祭祀に係る負担軽減を図った政府の政策によるものであり、昭和一八年九月、アジア太平洋戦争が始まると、合祀先の仁和多利神社の社地一帯は海軍工廠建設用地となり、集落や墓地とともに寺社仏閣も用地外へ移転することとなる。仁和多利神社は、大代字中峯の現在の柏木神社境内地に移転することになり、柏木神社は再び大代の地に戻ることになる。

昭和二五年氏子の強い要望により、仁和多利神社は新たな社地を求めて笠神に遷宮することとなり、一緒に合祀されていた須賀神社も牛生に復歸したため、中峯には柏木神社のみ残ることになり、現在に至っている。

現在の柏木神社は、参道入り口に明治三五年（一九〇二）の幟立、明治三二年（一八九九）の石燈籠があり、鳥居をくぐった一段高い場所の



戦地への葉書に写る柏木神社  
(昭和12年)

正面に拝殿と本殿、西側に社務所、東側には鐘楼と手水社がある。現在の拝殿と本殿は、明治百年記念として造営されたものであり、手水鉢は昭和四五年旧九月奉納と記されており、境内が次第に整備されていった状況をうかがうことができる。

拝殿・本殿の西側には境内社として戦役将兵を祀る護国神社があるが、これは柏木神社の旧社殿であり、赤色の彩色が施されるなど後世の手が加えられているが、一八世紀後半の神社建築とされている（註②）。



第4図 柏木神社境内



護国神社社殿  
(柏木神社旧本殿)

註① 『宮城縣神社名鑑』には、「明治二年五月二十六日調査」、境内の「昭神徳碑」には「明治二年五月廿六日記官本郷勝勲源友幸の書状文書」、「光 塩郷多賀城七ヶ浜神社誌」には「明治二年社殿文書」と記載される。明治二年に、一三世主本郷勝勲によって作成された調査（または文書）に対し、一五世主本郷勝がそれぞれ異なった表記を行ったものであろう。既に失われた棟札の記載もあったように興味深い。現存していないため、詳細は不明とせざるをえない。

註② 平成二七年一〇月調査「多賀城市の近世社寺建築調査報告書」（平成一九年三月）に収録。

神社合祀願

宮城縣宮城郡多賀城村大代子船場

一村社柏木神社

右宮城縣宮城郡多賀城村笠神字上

ノ墓村社仁和寺神社二合祀致度

候間御許可被成下度左記事項ヲ

具シ此段願上候也

一合祀ヲ要スル理由

氏子少數ニシテ祭祀行ハレス今後維

持ノ見込無之キニ依ル

一建物器具其他所有財産ノ処分方法

建物ハ一切賣却ノ上代金ヲ合祀神

社ニ引渡其他賣却スヘキ財産及器

具无之境内地ハ合祀許可後譲與ヲ受

クル見込

明治四拾貳年 宮城縣宮城郡多賀城村大代

四月十二日 參番地村社柏木神社

社掌 本郷勝治

宮城縣宮城郡多賀城村大代

山崎五番地

氏子惣代人 渡邊權十郎

宮城縣宮城郡多賀城村大代

拾六番地

氏子惣代人 本郷菊之助

宮城縣宮城郡多賀城村大代

字舟場廿七番地ノ一

氏子惣代人 本郷富右衛門

宮城縣宮城郡多賀城村笠神

村社仁和寺神社

社掌 本郷勝治

宮城縣宮城郡多賀城村笠神

廿六番地

氏子惣代人 本郷清治

宮城縣宮城郡多賀城村笠神

廿八番地

氏子惣代人 板橋甚助

宮城縣宮城郡多賀城村笠神

參番地

氏子惣代人 河野嘉吉

宮城縣知事寺田祐之殿

前書之通相違無之候也

明治四十一年四月十二日

宮城縣宮城郡多賀城村長志賀康治印

神社合祀願御指令案

宮城郡多賀城村

村社仁和寺神社々掌

指令案一六七五號

外六名 本郷勝治

明治四十二年四月十二日願村社柏木

神社村社仁和寺神社二合祀ノ件

間届ク

年月日

知事



神社合祀願

## 二 仏閣

## 錢神子安観音堂

錢神子安観音堂は大代三丁目三番の住宅地の中に所在する。創祀年代は、観音堂の本尊である観音菩薩丸彫立像の台座に記された紀年銘にある正徳五年八月一八日である。後述するが「風土記御用書出」には記載がなく、当初から堂宇を伴っていたかどうかは不明である。

昭和三五年度の錢神子安観音堂造営棟札には、正徳五年八月一八日、小山の地に創祀、大東亜戦争の際現在地に遷座、昭和三十五年、創祀された場所に近い現在地に遷座、という変遷が明記されている。

創祀された場所の「小山」については、『多賀城町誌』には「自衛隊の東端倉庫の裏手にあたり、塩釜―大代の山街道の入口にあつたものを、海軍工廠の整地によって現在のところに移した」との記載があり、山街道は「浜街道」のことと考えられることから、自衛隊の東端倉庫の裏手となると、現在の大代二丁目一四番あたり(旧小字は錢神)と推定される。大東亜戦争に際して遷座した場所とは、現在の主要地方道仙台台・塩釜線を距てた、当初の場所から約三五〇メートル東側の地(旧字名は雷神)である。「創祀された場所に近い現在地」とは、一回目の遷座地の西側約一〇〇メートルの地(笠神村丸山)である。

昭和三五年度の棟札はここに新築した時のものであり、『多賀城町誌』に掲載されている写真は、この場所における様子を撮影したものである。

棟札に記された創祀・移転の経緯については以上のとおりであるが、『多賀城町誌』には次のような伝説が記載されている。



観音堂 (『多賀城町誌』より)

この観音像は仙台の八幡堂から岡田(仙台市)の人々が貰い受けたもので、岡田に行く途中で動かなくなり、そこに居合わせた大代の渡辺権右衛門が代わりに受け取り、大代まで運ばれてきた。当初、大代と等神の境の小沢の小山(註①)に石仏を下してそこに祀つたが、病気が流行したことで、自衛隊の塩釜街道の入口(註②)に移したというものである。この伝説は、棟札に記された創祀の地以前に、大代と笠神の境に祀られたことを伝えるものであり、このことから①笠神・大代村の境、②錢神、③雷神、④丸山と移転し、その後、主要地方道仙台台・塩釜線改良工事に伴い、平成元年に⑤現在地(小字雷神)へと移転している。

県庁文書の中に、明治七十九年(一八七四)一八七六(一八七六)に作成された、民

## 一 現境内八歩

## 調査

第二大區宮城郡小八區  
大代村字山崎

## 観音堂

大浪成光

方城目盛近

明立長

板橋金右衛門

作間盛顕



第5図 社寺境内区画図 (宮城郡大代村 観音堂)

有地宮城郡社寺境内區畫圖)があり、「第二大區宮城郡小八區大代村字山崎 観音堂」として南北四間、東西二間の南向きの境内が図示され、地主は渡辺権三郎と記載されている。

現在の境内は東向きで、東西七・六メートル、南北は西辺で六・〇メートル、東辺で四・六メートルの台形となっており、堂宇は桁行三・八メー

トル、梁行二・九間メートルである。入口には大正一四年に奉納された井内石の扁額がかけられている。

風土記御用書出にこの観音堂の記載はないが、「一 石仏 一 但シ石仏正観音、正保五年八月十八日割刻シアルヲ以安永三年迄三百廿三年二相成、地主権四郎別当之由ニ御座候事」との記載があり、『多賀城町誌』はこの石仏を観音堂の本尊としている。

現在、堂内中央の内陣には、右手に蓮華を持つ高さ八九・六センチメートルの聖観音立像が祀られている。円柱状の台座には、「大代村」や「大代」の地名とともに一九名の父名があり、中央に正徳五天八月一六日の年時が記されている。「書出」の

石仏の項には「正保五年八月十八日」の紀年路をもつ石仏について記載されているが、これらは同一のもので、「書出」の記載が誤記と考えられる。

堂内には舟形光背を有する菩薩石像が一体、木製の蝸燭立が一對ある。蝸燭立は本体が木製で、それぞれに「奉納／寄進大正拾年／八月十日／渡辺さき／佐々木と久よ」の墨書銘がある。



蝸燭立

註1 笠神村の南東隅、大代村と境界を接して小字小沢があり、小山は大代村の小字銭神の中と推定したところであるが、ここでは笠神村の南東の小沢にある「小さい山」という意味か。

註2 山街道と同じく「浜街道」のことと考えられる。

### 三 修験

#### 来宝院

来宝院については、飯肝入栄吉から提出された村書出とともに、来宝院五世永全から提出された書出が残されている。それらによれば、本山派修験であり、仙台城下の慈雲山良賢院の支配だったという。所在地は柏木神社と同じ「柏木」であり、道場は南向き竪三間半、横二間であった。来宝坊永順が承応元年（一六五二）に開院し、二世明性院永春、三世来宝院正永、四世明性院永成、五世来宝院永全（当住）と続いている。

仁和寺神社の元文四年（一七三九）の棟札に頼寶院、笠神船塚にある享保一二年（一七二七）の名号塔に頼寶院とあるが、これらの修験は同一と考えられ、本来は五世永全の書出にある「来宝院」が正しいのであろう。また、昭和三年の銭神子安観音上棟棟札には、導師として「明性院末裔十五世主 本郷馨」とあり、現在柏木神社の宮司を務める本郷氏がその系譜につながることを記している。

『多賀城町誌』によれば、道場は明治時代まで残っていたという。また「同院の墓地は、来宝壇山で俗に法印墓と称せられ、風景の良い山であった。これも多賀城海軍工廠の開設によって跡形もなく整地されてしまった。」とも記されている。来宝壇山は村書出に「高四拾八間（略）木立茂り遠見之品無御座、但シ何茂他村御境一円無御座候事」とあって、木立が繁り、眺望がきかないとの記載がある。具体的な位置については不明であるが、多賀城海軍工廠の開設によって整地されたという『多賀城町誌』の記載から、現在の陸上自衛隊多賀城駐屯地内の丘陵部に存在した可能性がある。

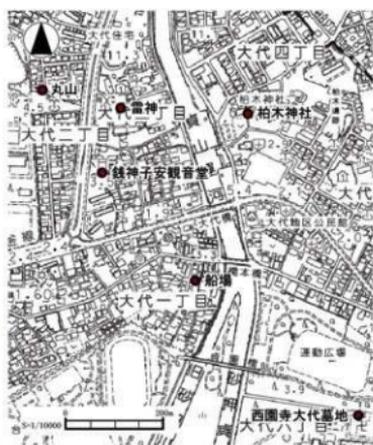
## 第四節 石造物

### 一 凡例

- 1 本章には、中世の供養碑である板碑一基、庚申塔をはじめとする近世・近代の供養塔二七基、石燈籠六基、手水鉢四基、幟立二基、扁額一枚について調査成果を収録した。
- 2 供養塔は、近世と同じ様式が続いているため、昭和期まで調査の対象とした。しかし、個人情報への配慮から、一覧表等には掲載したが図版には掲載しなかったものもある。
- 3 供養碑には、登録番号として〇〇一〇一から連続番号を付した。その中には過去の調査で確認されながら、今回の調査で確認できなかったものも含まれている。
- 4 図版中、右上の表示は、「図版番号・所在地（登録番号）」である。
- 5 図版は拓本、図版内積文、写真で構成した。拓本の縮尺は八分の一に統一し、図版内積文では可能な限り実際の文字に近いもので示した。写真は今回の調査で撮影したもののほか、過去の調査で撮影したものも含めて構成した。
- 6 積文は原則として常用漢字を使用した。
- 7 梵字は片仮名で表記し、(梵字)とした。
- 8 欠損や摩耗等により判読できない箇所については、文字数に応じて□または□で示した。
- 9 石材については、東北大学総合学術博物館協力研究員永広昌之氏の内眼観察による。

### 二 分布と概要

大代村地域で確認した石造物としては、中世の板碑、近世・近代の供養塔、近代の顕彰碑、石燈籠、幟立、手水鉢などがある。それらの所在地の概要については以下のとおりである。



第6図 大代地区石造物分布図

柏木神社 大代四丁目の柏木神社境内東側に、顕彰碑と並んで近世・近代の供養塔がある。これらの多くは、以前は参道の東側にあった。文化十一年の「湯殿山 月山 羽黒山」碑は大代一丁目九番にあつたものを移設したもので



第7図 柏木神社石造物配置図



柏木神社

あると言われ、明治五十七年の「陸前国宮城郡大代村耕地鹿絵図」に街道の南側に面して建つ石碑が一基描かれているものは、この碑であったという。

参道には近代の石燈籠、幟立があり、境内の手水舎には近代の手水鉢が据えられている。手水鉢は境内の東端、護国神社前にもある。

**西園寺大代墓地** 大代六丁目黄龍山西園寺墓地の入口近くに、地藏菩薩坐像と並んで近世・近代の供養塔が各一基ある。西園寺の檀家の墓地は、かつて笠神にあった西園寺と大代雷神、大代高原にあったが、海軍工廠建設に伴って高原に移転した。現在の西園寺墓地は、笠神西園寺と大代雷神の墓を受け入れるため、高原墓地を拡張整備したものである。



西園寺大代墓地

**銭神子安観音堂** 大代三丁目の宅地内にあり、境内入口の石段の両側に常夜塔と幟立、堂宇に接するように手水鉢がある。境内西側と北側に、堂宇を囲むように供養塔と墓標が並んでいる。いずれも以前の遷座地周辺にあったものが移設されたものである。



第8図 観音堂石造物配置図

**丸山** 大代二丁目の大代公園の北側に、中世の板碑、地藏蔵、近世の供養塔がある。

**舟場** 大代一丁目六番の個人宅に雷神塔が一基祀られている。かつては県道塩釜七ヶ浜多賀城線に面した大代のバス停付近にあったが、近年その場所の開発に伴って移設された。



丸山

**雷神** 大代三丁目七番の宅地内に羽三山塔が一基ある。



舟場



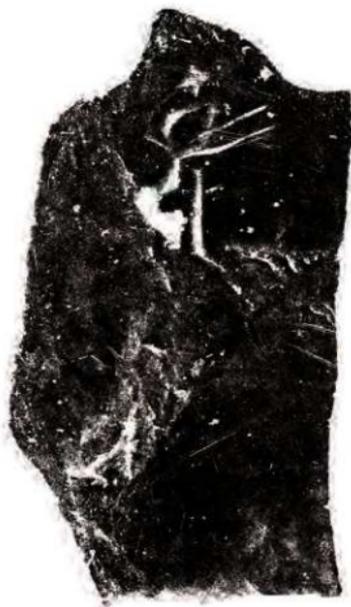
雷神

### 三 板碑

1は大代で唯一確認されている板碑である。金剛界大日如来を表す種子「バン」が一字刻まれている。無紀年の板碑であり、年代は不明である。

1  
丸山  
(No. 182)

丸山  
(パン)



S=1/8 0 30cm



昭和54年

## 四 近世・近代の供養塔

2は船場、3は雷神、4～14は柏木神社境内、15～22は銭神子安観音堂、23～25は西園寺大代墓地、26～28は丸山にある。

## 1 庚申塔

5は嘉永七年（一八五四）の庚申塔である。三月二日は、この年二回目の庚申の日にあつている。月日の下に「導師」の記載があるが、判読できない。下方に二名の交名があり、すべて無姓の男性名である。

## 2 自然神信仰の塔

雷神の塔（2・6・18）と山神の塔（7・8・14・21）がある。

2の雷神塔は、実際に落雷があつたことで建立したとの伝承をもつ。6は明治三二年（一八八九）の雷神塔で、碑面に「雷神」の二文字が大書され、台座に「奉納/明治廿二年/九月廿日/渡辺東太良/建之」と記されている。「雷神」の二文字は篆書体で刻まれている。

8は明治三〇年（一八九七）の山神塔である。下方に縦一四センチメートル以上、横三六センチメートルの長方形の区画を作り出し、「山守」の語句に続けて六名の人名と金額を記し、最後に石工の名を刻んでいる。六名は村の山林管理に携わる人々であり、山との関わりから山神への信仰を表したものであろう。金額の表示は、本碑建立のための負担金を明記したものと見られる。

21は無紀年の山神塔である。大型の板状の石材に「山神」と大書したものである。右側面には縦五八センチメートル、横二メートルの長方形区画があり、平坦に加工されているが、銘文等は確認できない。また、正面の下方にも同様の区画が作り出されていたようであるが、現在は確認できない。

28は明治二八年（一八九五）の山神塔である。下方に女性一〇名の交名と世話人の名があり、最後に「女講中」と刻まれている。

## 3 馬の守護神の塔

馬頭観世音塔と馬檀神塔がある。

11・17・19は馬頭観世音塔で、19は「為病撲殺ス」とあり、病のため殺害した事情を記している。

20は昭和一二年の馬檀神の塔である。「大力」は供養の対象となった馬の名称であろう。

## 4 山岳信仰の塔

出羽三山塔と足尾山の塔がある。

3は頭部に胎藏界大日如来を表す種子「パーアーンク」が窳彫りされ、その下中央に湯殿山、その両脇に月山、羽黒山の名が刻まれている。

4は中央に湯殿山、その両脇に月山、羽黒山の名が刻まれている。建立年次は右下に小さく記されており、他の山岳信仰の塔と同様に、日付は八日となっている。

10は足尾山信仰の供養碑である。足尾山は茨城県石岡市と桜川市の境に位置する標高六二七・五メートルの山であり、古来より山岳信仰の対象であった。

## 5 名号塔

23は享保八年（一七二三）の名号塔である。中央に六字名号、その両側に建立年月日を記し、その下に「現住西園寺/導師/龍水謹書」とあり、西園寺の龍水が筆を執つたこと、そして導師であつたことが明記されている。名号をはさんでその左側には頼宝院の名もあり、大代村の修験「来宝院」と見られる。その下に大代村の住人三名の交名が記され

ており、いずれも男性名の左下に妻あるいは母とあって、女性集団によって造立された名号塔であることが知られる。二三名中一六名が無姓、七名が有姓となっている。交名の下には關刻の請花がある。このような何某の妻あるいは母という記載方法は、八幡村宝国寺の元禄七年の名号塔に類例が見られるが、この名号塔で注目したいのは、二三名中一六名が無姓、七名が有姓であることである。このような有姓と無姓の人名が混在する事例は、八幡村における天保三年（一八三二）の蔵王山塔においても確認できるが、同塔の無姓の人名の場合、姓を省略した可能性を捨てきれず、この名号塔によって、有姓・無姓の人々が混在する集団の存在を確認することができた。交名の中の小泉、高橋、千田、平山（二名）、開□、桜田各氏については、供養塔の交名であることから、直ちに侍身分とは判断できず、大代村に関わりのある各氏を「伊達世臣家譜」の中には見出せなかった。

25は昭和四年の名号塔である。石材は自然面を多く残しながら、銘文を刻む部分は火灯窓状に平滑面を作り出している。また裏面も方形の平滑面を作り出し、念仏講中の女性二名と、世話人の男性三名の名を刻んでいる。請花の様式は明治以前のものとは大きく異なり、抽象化されたものとなっている。

#### 6 その他仏教関係の塔

9は大日如来塔である。

27は外側が舟形光背状を呈し、裏面は荒削りのまま、正面を平坦にして子安観音座像を半円彫りにしている。その下には女性七名の交名がある。

#### 7 その他の供養塔

22は猫又山の塔である。巫者の祈禱によってその祟りが告げられ、それを供養して排除するための造立と考えられている（多賀城市史編集委員会 一九八六）。

表2 主体別供養塔一覧表

番号	主体	所在地	和暦	西暦	図版番号
1	庚申	柏木神社	嘉永7	1854	5
2	雷神	銭神子安観音堂	明治20	1887	18
3	雷神	柏木神社	明治22	1889	6
4	雷神	総場	大正7	1918	2
5	山神	柏木神社	明治25	1892	7
6	山神	丸山	明治28	1895	28
7	山神	柏木神社	明治30	1897	8
8	山神	柏木神社			14
9	山神	銭神子安観音堂			21
10	馬頭観世音	銭神子安観音堂	文化11	1814	17
11	馬頭観世音	銭神子安観音堂	明治37	1904	19
12	馬頭観世音	柏木神社	昭和5	1930	11
13	馬頭神	銭神子安観音堂	昭和12	1937	20
14	馬頭神	柏木神社			13
15	湯殿山・月山・羽黒山	柏木神社	文化11	1814	4
16	湯殿山・月山・羽黒山	雷神			3
17	尾尾山	柏木神社	大正10	1921	10
18	名号	西園寺大代墓地	享保8	1723	23
19	名号	西園寺大代墓地	昭和4	1929	25
20	大日如来	柏木神社	明治39	1906	9
21	古事神社	柏木神社	昭和49	1974	12
22	猫又山	銭神子安観音堂			22
23	観音菩薩立像	銭神子安観音堂			16
24	地藏菩薩坐像	西園寺大代墓地	天保3	1832	24
25	子安観音菩薩坐像	丸山	享和1	1801	27
26	地藏菩薩坐像	丸山			26
27	菩薩像	銭神子安観音堂			15

2 船場 (No. 279)

大正七年 (一九一八)



雷神  
旧  
四月廿八日

大正七年



S=1/8 0 30cm

3 雷神 (No. 186)



月山  
(バアーンク)  
湯殿山  
羽黒山



S=1/8 0 50cm

4 柏木神社 (No. 146) 文化二年 (二八四)



湯殿山  
羽黒山

月山 年 五月八日

文化十二年 甲戌

S=1/8 0 50cm



5 柏木神社 (No. 147) 嘉永七年 (一八五四)

嘉永七寅年

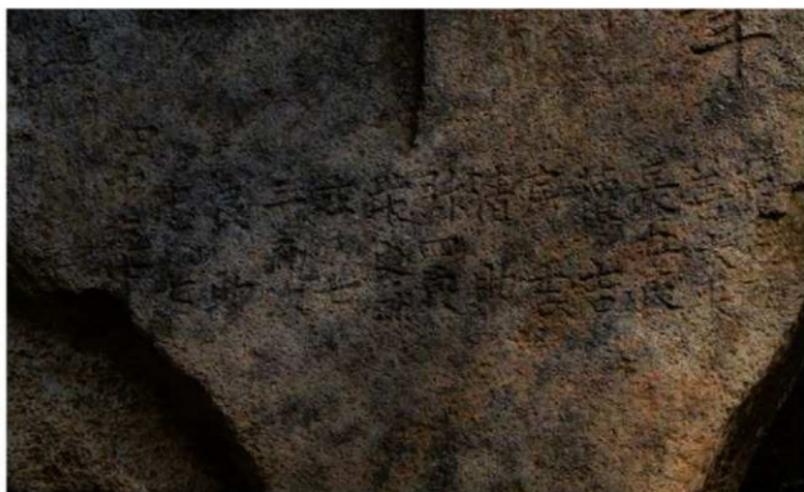
庚申

三月廿一日 導師 □□□□ □中左中

嘉助 善太平 長五良 權吉 屋吉 清助 亦四良 栄之丞 庄七 三□次 良助 忠七



S=1/8 0 50cm



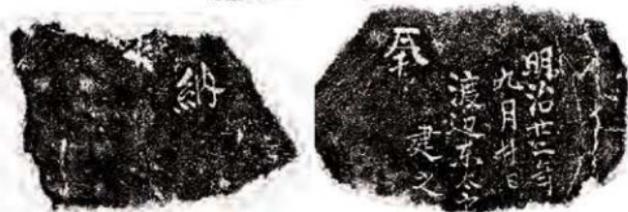
6 柏木神社 (No. 148)

明治三年 (一八八九)

雷神



明治廿二  
九月廿日  
渡辺東太良  
建之  
奉  
納



0 50cm  
S=1/8



7 柏木神社 (No. 149) 明治三十五年 (一八九二)

山神

明治廿五年

旧二月  
渡辺東



S=1/8 0 30cm



8 柏木神社 (No. 150) 明治三〇年 (一八九七)

山神

明治卅年

三月十二日

山守	小林彦二門
金二十五錢	板橋源五郎
金二十錢	同 甚助
同 錢	同 錢
同 錢	小野勇助
同三十錢	同三十錢
小林重二門	白吉
同五十錢	同五十錢
石工徳治	



S=1/8 0 30cm



9 柏木神社 (No. 151)

明治三十九年 (一九〇六)



大日如来

明治卅九年九月廿七日

佐藤五郎作改



S=1/8 0 30cm

10 柏木神社 (No. 152)

大正一〇年 (一九二一)



足尾山

大正十年一月吉日

森子之吉

建之



S=1/8 0 30cm

11 柏木神社 (No. 153) 昭和五年 (一九三〇)



昭和五年四月廿五日

馬頭觀世音

佐藤文藏

S=1/8 0 30cm



12 柏木神社 (No. 250) 昭和四九年 (一九七四)



古峯神社

柏木山十五世主 宮司 本郷 馨 謹書



13 柏木神社 (No. 154)



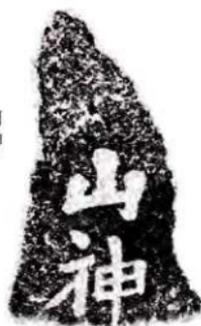
馬櫃神





15 銭神子安観音堂 (No. 181)

山神



S=1/8 0 30cm



14 柏木神社 (No. 155)

大代

□三郎

申松

五郎

平次郎

初太郎

孫兵衛

□□

□三郎

勘兵衛

菊地作内

八月十六日

正徳五天

庄元長吉

左平次

勘兵衛

傳兵衛

十三郎

權之助

弥三郎

茂太郎

利兵衛

大代村

傳□□

16 銭神子安観音堂 (No. 180)

正徳五年 (一七一五)



S=1/8 0 50cm



17 錢神子安觀音堂 (No. 165) 文化十一年 (二八四)



文化十一年

馬頭觀世音

十一月吉辰



18 錢神子安觀音堂 (No. 169) 明治二十年 (二八八七)



明治二十年

雷神

二月初一日





馬頭觀世音

為病撲殺ス

明治三十七

旧四月廿四日



S=1/8 0 30cm

19 鉢神子安観音堂 (No. 170)

明治三十七年 (一九〇四)



馬櫃神 大方髷

施主安住長之助

昭和十二年 旧十二月廿日



S=1/8 0 30cm

20 鉢神子安観音堂 (No. 171)

昭和十二年 (一九三七)

山  
神



S=1/8 0 50cm



横又山



S=1/8 0 30cm

22 銭神子安観音堂 (No. 175)



S=1/8 0 50cm

(キリク)

南無阿弥陀佛

(請花)

二月十六日

享保八癸卯年

現住西園寺

龍水拜書

導師 大代村

賴宝院

石工 作右衛門

作兵衛

九郎右衛門 妻

伊右衛門 妻

甚藏 妻

甚内 妻

三九郎 妻

今二郎 妻

六郎 妻

伊兵衛 妻

半之丞 母

作兵衛 妻

傳三郎 母

藤内 妻

小泉八兵衛 母

高橋七之丞 母

千田十右衛門 妻

平山彦兵衛 妻

開口藤内 妻

平山 妻

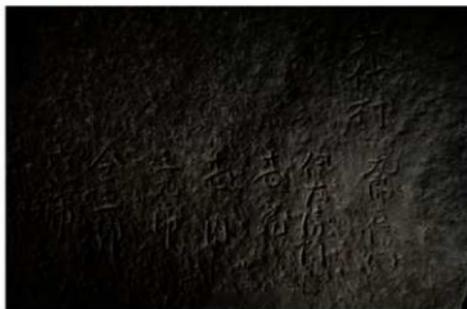
桜田覚兵衛 妻

小兵衛 妻

久八郎 妻

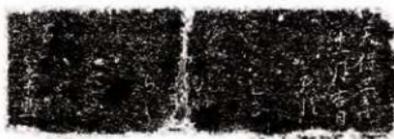
□助 妻

菅一郎衛門 妻



24 西園寺大代墓地 (No. 189) 天保三年 (一八三二)

天保三年  
十二月吉日  
□ □ □ □  
可祢  
ちよ  
てふ  
幸助  
石工



S=1/8 0 30cm





昭和四年

南無阿彌陀佛

(請花)

現曆七月七日

0 50cm  
S=1/8

念佛講中  
 教師 大友のい  
 講中 本郷きよ  
 本郷いと  
 本郷みね  
 渡辺みな  
 武田たつ  
 鈴木たけよ  
 永瀬けや  
 及川きいの  
 平山まん  
 松浦みつ  
 櫻井せん

渡邊さだ  
 本郷りつ  
 伊藤もと  
 安住つめ  
 伊藤りさ  
 菊地さな  
 故小野ひで  
 故土谷おとし  
 故屋□よ

世 平山惣次郎  
 話 渡辺権十郎  
 人 松浦儀蔵

石工塩釜町志賀清弥



昭和12年 柏木神社境内  
 (左端に本塔が写っている)



(地藏菩薩坐像)



享和元酉年  
(子安観音坐像)  
十一月十七日

おふみ  
おはつ  
おきみ  
おり□  
おきく  
おふく  
おつゑ  
お□



S=1/8 0 30cm



山神

三月十二日

明治廿八年

- 引地十ら
- 庄子戸め
- 酒藤はる
- 酒藤みよ
- 小幡きつ
- 小幡つな
- 庄子志る
- 鈴木志も
- 酒藤みね
- 小林もよ
- 世話人
- 寶藤鶴吉
- 女講中



0 50cm  
S=1/8



## 五 石燈籠・手水鉢・幟立・扁額

29・30は柏木神社に奉納された一対の常夜塔である。卒部は北面に「柏木神社」、南面に「奉納 御神燈」、西面に「国家安全」、東面に「明治三十二年五月廿七日 建之」とあつて同文である。29の基礎部には、社掌、区長、氏子惣代、世話人名が、30の基礎部には発起人名と石工寄附人名が記されている。

35は柏木神社の手水鉢である。上面は浅く菱形の平坦面を作り出して水穴を開けている。上面に「柏木」、側面に「奉納」とあり、三名の男性名が記されている。紀年銘はなく、九月二七日の日付が記されている。

39・40は銭神子安観音堂前の常夜塔である。39は明治二四年三月一八日、40は明治二六年旧四月吉日の造立である。39は世話人、石工ともに仙台の鈴木氏で、自神執事は渡邊氏である。基礎部に二三名の交名があるが、見沢、辻本、村方（カ）、升石などは、大代村地域の供養塔にはほとんど見られない姓である。40は卒部に「郭内々職工萬歳」とあり、奉納の主体者に関わるものと見られる。自神執事は渡邊権十郎氏であり、昭和四年の『多賀城町誌』でも「現在の地主別当は渡邊権十郎氏である」としているが、時間差があり、両者の関係は不明である。

38は銭神子安観音の扁額である。半月状の薄い縮状砂質泥岩（井内石）石材を使用し、中央上部に「奉納」、その下に「観世音」といずれも横書きで記している。右端部には縦書きで「大正十四年／旧八月吉日」と記している。「観世音」の三文字は、その周辺をノミ状工具で細かく敲いて陽刻したもので、表面は茶色で塗装されている。一方敲いた部分には敲打痕をそのまま残している。上部に一箇所釘穴がある。

## 29・30 柏木神社（No.158・159） 明治三二年（二八九九）



東側（南面・東面）



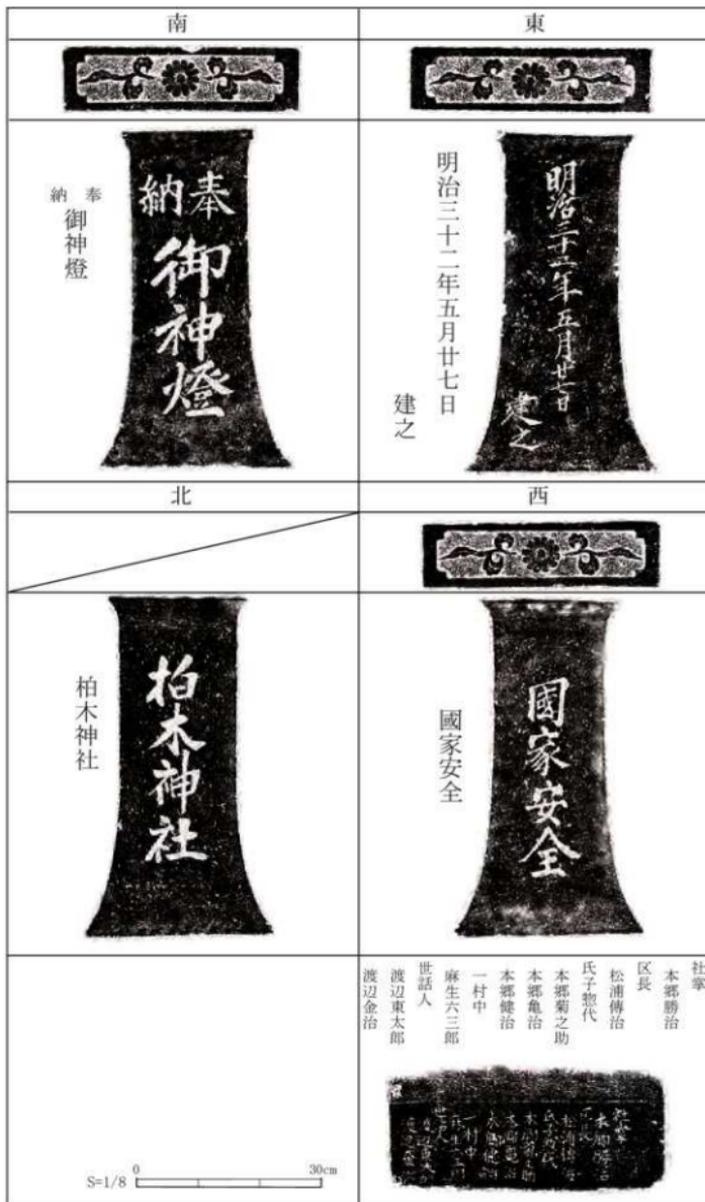
台座（東側西面）

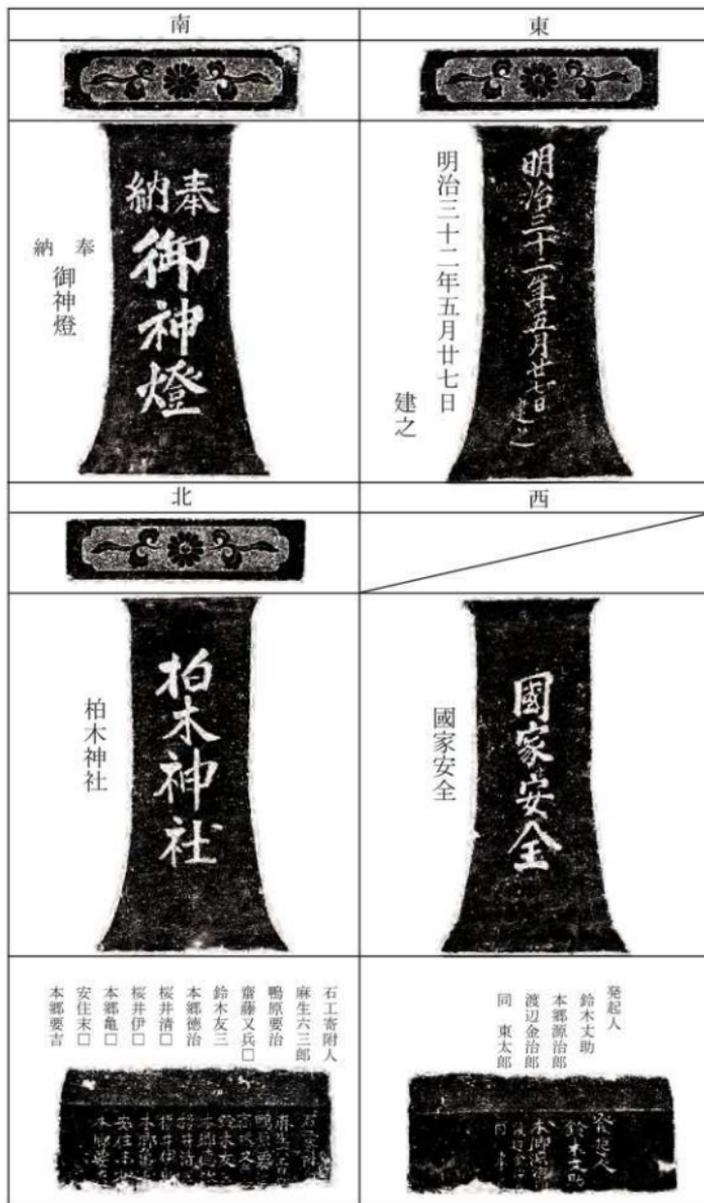


西側



東側





## 31・32 柏木神社 (No.272・273) 昭和十五年(一九四〇)

(東側)

(掌部南面)

奉

皇紀二千六百年記念  
納

(掌部西面)

國威宣揚

(掌部北面)

支那 大代區出征軍人一同  
事變

(台座東面)

至昭和十五年七月  
自同 土草男月  
出征遊従軍者

(台座西面)

平山運藏 櫻井秀雄  
鈴木 肇 佐藤正人

武田徳治郎

松浦信亮

鈴木 昇

櫻井伊三郎

佐藤勇作

阿部庄三郎

鈴木喜三郎

星徳十郎

本郷 晃

本郷寅藏

宮澤定雄

伊藤泰照

渡邊虎之助

眞野宜雄

松浦周治

坂田一太郎

佐藤 一

松本文左衛門

荒川辰男

本郷正二

本郷勇藏

鈴木合三

矢口丑之助

伊藤幸夫

佐藤千賀衛

安住長太郎

佐々木誠之助

穴戸 正

佐々木信之助

小野一六

本郷 環

後藤忠右衛門

(西側)

(掌部南面)

奉

皇紀二千六百年記念  
納

(掌部東面)

武運長久

(掌部北面)

昭和十五年四月三日建之

(台座南面)

宇佐美芳雄

櫻井千賀雄

佐藤 勇

鈴木平八郎

平山政男

鈴木運藏

伊藤幸一

永瀬弘次

出生願

三浦次男

貴田惣治

本郷 虎治

松浦義治

高橋末市郎

世話人

鈴木 武

本郷清吾

高橋政之助

伊藤清一

佐藤正志

伊藤 博

伊藤幸之丞

佐々木万之助

伊藤 榮

三浦 猛

伊藤次男

伊藤 榮

佐藤正巳

安住信一

渡邊好治郎

星忠次郎

村岡桃太郎

本郷 榮吉

渡邊 優

高砂榮夫

石工郡山吉雄



昭和15年



西側



東側



奉

村内安全

柏木神社



納

明治三十五年旧九月廿七日

柏木神社 建之

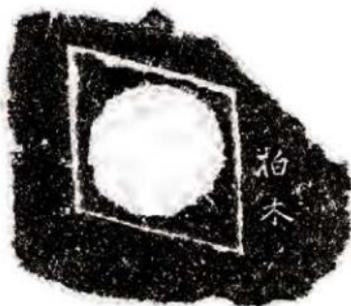


S=1/8 0 30cm

33・34 柏木神社 (No. 160・161) 明治三十五年(一九〇二)



柏木



35 柏木神社 (No. 156)



奉 納  
齋藤又平  
本郷要吉  
渡辺源内  
九月廿七日



S=1/8 0 30cm

36

柏木神社  
(No. 157)



奉 献

伊藤博一  
鈴木新蔵  
千葉藤工務店  
宮司本郷馨  
昭和四十五年旧九月廿七日

37

柏木神社  
(No. 251)



38

銭神子安観音堂  
(No. 176)

大正一四年(一九二五)



観 世 音

(次撰) 山方徳々夫  
カ

大正十四年  
旧八月吉日

南	東
	
<p>村内安全</p> 	<p>奉納</p> 
北	西
	
<p>仙臺市世話人 鈴木幸吉 自神執事 渡邊藤太郎 仙台市石工 鈴木文治</p> 	<p>維時 明治廿有四年 陸三月十八日 設立</p> 
<p>本郷 平山 □ 村方 升石 九口</p> 	<p>寄人 世話 伊藤 同 見沢 同 辻本 同 鈴木 有</p> 



S=1/8  30cm

## 41 鉢神子安観音堂 (No. 179)



南側



北側

## 六 顕彰碑・沿革碑ほか

42は昭和三年の「知所歩」碑である。多賀城村大代区における青年契約会の顕彰碑であり、オモテ面には文政一〇年から昭和初年に至る歴史を記し、ウラ面には歴代頭長、顧問、名誉会員、建碑寄附者名、発起人の名を記している。文政一〇年から明治七年までは若者組、明治二七年までは共進講、明治三七年までは振起会、それ以降は青年契約会となっている。建碑寄附者は一三二名で、その住所は仙台、六郷、七北田、笠神、塩釜、野神、東京、神奈川、両館、満州と広範囲に及んでいる。『多賀城市史5 歴史史料(二)』には、安永四年に作成された大代村の若者組の提書「若者衆中提定書」が収録されている。互助規定や、城下への五十集荷物・諸荷物運送の規定が示されており、交通・運輸との関わりが深い地域の特性が指摘されている。

43は昭和三〇年の「昭神徳」碑であり、柏木神社の創建一七〇年を記念した碑である。柏木神社が鹽竈大神の随従の神と伝えられること、延暦二年に勧請されたこと、承應年中に修験米賣坊が不動明王像と観音像を安置したこと、王政復古に際して神号に復したことが、明治五年に村社格となり、同四二年に仁和多利神社に配祀されたこと、昭和一七年に中峰の地に遷座したことなど、柏木神社の歴史を刻んでいる。

44は西園寺大代墓地の沿革碑である。大代区の住民はほとんどが笠神の西園寺の檀家であり、その墓地は笠神上ノ台にあった西園寺と大代雷神と高原の三箇所に所在していたが、アジア太平洋戦争に伴う海軍工廠建設によって大規模な墓地の移転が強行された経緯を述べている。現在地に墓地を造成し、移転するまでの経緯について、ほかに詳細な記録はなく、貴重である。

## 42 柏木神社 (No. 162) 昭和三年 (一九二八)

知所步

(オモテ)

多賀城村大代區者按舊記藩主青山公開鑿於此地運河經蒲生通荒濱陸路自垣釜至七濱要津也故仙藩於此地置番所以便米穀貨物船之著發自餘舟船又出入不少也一鄉之生業漁相半而各戶青年輩家業之俚暇運輪貨物仙府等往來殊繁矣文政十年櫻井彌市渡邊極右衛門伊藤儀右衛門等一日有駕於途上小事故而使一鄉青年結社於一團為三部稱若衆組以備有事矣嘉永五年渡邊善太兵衛就若者頭背議於組中而定鄉規以為維持一鄉安寧隣保互助之機閱鄉規曰遵奉公令投機博奕以勿求不正財若有背鄉規者假令雖小人雜輩不得交通鄉黨浴隣保之惠澤矣若有被水火盜之災厄者即一鄉協力而以救護之也若有工作屋宅者則前而援助之若有於家族寡者特要留意矣等凡而七條而謂是擬定書然而署名之總而廿有八名各營其嚴守是則有大代青年會原由也明治四年經若者頭本鄉千代之助至本鄉龜治改若衆組稱共進團廿七年再改振起會適遭日清役也會員本鄉龜吉伊藤竹治從軍出征矣此年併置學術研究會便於會員之講學或增殖基金之財產以堅基礎焉三十七年日露斷國交也會員而從軍者工兵中尉本鄉磐五郎以下海陸合而十六名也就中引地庄松戰死於九連城本會弔之以會葬矣日露役者皇國曠古之大戰也故為使出征者無後顧憂或於家族慰問盡本會亦奉公至誠焉爾後改會名三而至現稱其間改訂會則企圖會員身心陶冶增益公業利便或完備防火器具而應不時災厄或設高園會而娛慰高齡等事業可見者不堪也今于茲 恭惟 今上天皇陛下舉即位大典於京都實天下慶祝秋也仄聞昭和之年号據百姓昭明萬邦協和語一鄉即國家基也泰誓曰紂有臣億萬人亦億萬心武王有臣三千而一心紂以億萬之心亡武王以一心存微々大代一鄉雖不足言能以此會一心就和同之功者此一百有三年際于難遇之慶典錄此先人賴以待後昆之奮起振張此志而有報君國則當奉答 聖旨千萬分一歡謂爾

黃龍山主 沙門采微外謹誌

從五位 坂定議蒙類並書之





## 43 柏木神社 (No. 163) 昭和三〇年 (一九五五)

柏木神社は大代の鎮守にして鹽鹽場老翁光女を祀る二神は鹽鹽大神の隨從の神と傳へられ往古この邊土開拓に偉大なる功徳を垂れさせ給ふ即鹽鹽神と共に塩を煮柏の葉尔盛り諸生民に頒ち與へ給ふ故に柏木の稱あり明治二年五月廿六日祠官本郷勝衛源友幸の書上文書に勸請延暦二年と御棟札御座候とあるによれば柏木の地に創祀せられしは実に桓武天皇の御代なるを知る中古兩部の羽説横行し後光明天皇承應年中本山派修驗來寶坊永順ありて不動明王觀音の二像を安置せしか王政復古に際して之を除き神号に復す明治五年村社格加列同四十二年仁和寺神社に配祀昭和十七年新に中峰の地を相し遷祭す今茲に柏木鎮座千七十年を迎へ氏子擧げて記念祭を齋行し廣大無邊なる神恩に報ひ奉らんと云爾

大代総鎮 鹽鹽末社 延暦二歳 勸請柏木  
 恩如天地 威似雷霆 千年古社 神德惟馨  
 昭和卅歲舊九月廿七日 柏木山第十三世主 宮司明階 本郷 馨謹撰并書



## 44 西園寺大代墓地 (No. 190) 昭和五二年(一九七七)

臨濟宗妙心寺派 西園寺大代墓地沿革

宗教法入

多賀城市大代区に古くから居住した各家はその殆んど者が臨濟宗妙心寺派西園寺の檀越であり、その墓地は笠沖土台(現在西賀城公園)にあった西園寺と大代市神及び高原の三ヶ所に所在していた。そのうち、神神及び高原の両墓地は遠隔地にあつた故に永年の積弊としてその管理は西園寺住職から地元権託時代に委任され独自の運営を行つて来たのである。

偶々昭和十七年当時の多賀村に海軍工廠の設営を見るや、笠沖、神、中谷地地区を中心に廣大な用地の確保が行われ、菩提寺西園寺も一山の境内墓地建築物を移転するの事になり、先住僧外和向は幾多の困難をのりこえて昭和十八年牛生地区の現境に移転したが、それに伴ない同寺境内にあつた大代区関係の墳墓と菩提墓地はあけて古米松浦活田七名の共有であつた高原墓地に移され墓地隣接山林の一部を買収して約二百三十区劃の墓域を造営し、この難局をしのごくことが出来た。

昭和二十年八月太平洋戦争の終結を見てから二十余年、多賀城地区は旧海軍工廠跡を中心とする工業都市と仙臺両市の中間に位置しての住都市化が進み、その波及が西園寺大代地区に於ても世帯数の異常な増加を見るに至り、必然的に墓地拡張の必要が迫られる事になった。

これより先昭和三十三年から三十八年にかけて菩提寺西園寺は戦中移築した本堂を中心とする改修工事を行ったが、その整備事業の一環として高原墓地に寺外私堂(能化堂)を新築し菩提寺より本尊として無命地藏菩薩の像を勧請奉安して地区に檀越の誦法要を営むに遺憾なく表明し、その後も着目環境の整備に努めて来たが、如上の理由による墓地拡張の要請に堪へず昭和四十五年再び周辺山林を買収して第二次拡張工事を施工、約百三十九区劃の墓域を追加造成し延床積約三九百六十七平方メートルの墓地になった。この新築工事をコンクリート舗装し、ここに太平洋戦争前後にわたる困難な墓地整備事業も戦後六年を経て善く完成の域に達し大代各区域の魂のよりどころ(心の古里)は磐石の礎をきついたのであった。然るに昭和四十七年 宮城県的重要施設として計画された公共下水道建設事業の具体性に伴ない、その仙臺郡城下水道終末処理場がこの高原地区に設けられることになり、多賀城市もこの計画に同調して地域住民の協力を求めて来たのである。当初地区民としては世帯来幸を重ね「わが墳墓の地」として珍々整備して来た墓地をはずすに

及びす絶対反対の立場をとらざるを得なかつた。然し緊急を要する都市環境整備の公共的重要性に他には譲地の求められない実情を再三説明交渉を重ねられついでに得ずこれを承了り地区の組織として五項目の条件を提示して宮城県の計画に協力することになった。この中に重点項目として「墓地はその現所在地に存置することとし宮城県もこれに同意した」のであるが終末処理場の設置計画を詳細に検討するに墓地周辺は舗装され排水処理その他の環境保全に於て将来にわたり多くの問題を残すことが明らかになった。ここに於て昭和五十年二月墓地地使用者全員による大会を開いて意見を求め、種々協議した結果将来墓地拡張の必要性を考慮し、宮城県が当地地区民の要望するところを容認することを条件として墓地の移転やむを得ずとの結論に達した。

宮城県に對する要望事項は次の通りである。

- 一 墓地 建築物敷地 駐車場用地とて合計五千九百五拾平方メートルを現墓地と無償交換する。
- 二 各使用者墳墓の移転は勿論各種建築物 構築物の移転補償を充分にする。
- 三 墓地に通ずる道路 墓区内の歩道等は總て舗装工事を施行して整備する。
- 四 埋葬請手續等は一切県の責任に於て執行する。

宮城県は全面的にこの要望に應ずることになり、昭和五十二年三月十六日新墓地移転を許可して墓地移転問題は円満な解決をみるに到つた。

斯くて事業は実務に入り大代地区民は移転計画に従つて昭和五十一、五十二年度にわたり造成された約五百五十余区劃の新墓域と能化堂、地蔵塔、無縁塔、供養塔及び駐車場からなる新墓地に移転改葬の作業をすめ昭和五十二年六月廿六日墓地移転問題処理供養法を施行することができた。思うに僅か世帯余年の間に再度にわたる墓地の移転改葬に遭遇することは例を見ない稀事案であつたが、この困難な事業が何らの障もなく円滑に成就されたのはひとえに仏天のご加護とご先祖精霊の冥助にあることとよりであるが、更には大代各区域民の和合協力と宮城県当局はじめ関係各方面のご指導ご援助によるものであり、茲に衷心より感謝の意を表し、以上の経緯を記録して後世に伝えるものである。

昭和五十二年十一月吉日

昭子 壇越寺住職  
 瀧文 西園寺首任役員  
 伊藤 栄 加藤勝芳老六師  
 大代区総代会長  
 監修 西園寺代表役員 講話一此



## 七 墓標

45は凹礎を平裁し、切断面を平坦に加工して、裏面は荒削りのままである。正面は、外形が舟形光背状を呈し、内側を舟形に掘り窪めた中に地藏菩薩立像を半肉彫りにしている。□□童子とあるので、幼児の墓標であろう。

46は凹凸のない河原石状の石材を使用し、正面を舟形に掘り窪めて、その中に地藏菩薩立像を半肉彫りにしている。銘文は不明な箇所もあるが、「六十六部那後□／＼□□」とあり、肥後国の六十六□□（人名）の墓標と推定される。

47・49・50は外側が舟形光背状を呈し、裏面は荒削りのまま、正面を平坦にして地藏菩薩立像を半肉彫りにしている。47は「おやそ」の墓標である。

48は駒形の墓標である。頭部に凹相、その下に縦「七センチメートル、横一六センチメートルの隅丸長方形の区画を作り、その中央に「如意輪観音」その両側に建立年月日、左下に「伊達郡／佐藤彦市」と刻んでいる。

45 鉢神子安観音堂 (No. 164)

宝暦九年 (二七五九)



(地藏菩薩立像)

宝暦九月一日

□□童子



S=1/8 0 30cm

46 鉢神子安観音堂 (No. 166)

文政八年 (二八二五)



(地藏菩薩立像)

文政八 西 八月五日

六十六□ 肥後□

井□



S=1/8 0 30cm

47 錢神子安観音堂 (No. 167)

元治元年 (一八六四)



S=1/8 0 30cm

(地藏菩薩立像)  
元治元 甲子年  
八月廿三日  
おやす  
建之

48 錢神子安観音堂 (No. 168)

明治三年 (一八八九)



○  
如意輪観音

明治廿二年  
旧四月廿三日  
伊達郡  
佐藤彦市



S=1/8 0 30cm



(地藏菩薩立像)



0 30cm  
S=1/8

49  
鉢神子安観音堂 (No. 173)



(地藏菩薩立像)



0 30cm  
S=1/8

50  
鉢神子安観音堂 (No. 174)

## 第五節 棟札・祈禱札ほか

1・3は柏木明神の祈禱札で、いずれも家内安全を祈願したものである。紀年銘はないが、社号が柏木明神、柏木大明神となっており、神仏分離令公布以前、一八六八・一八六八年以前の年代が考えられる(註)。

4は牛頭天王の祈禱札である。頭部に薬師如来を表す種子「バイ」、その下に「奉修祇園午頭天王本地供疫病退散祈」、主題の左右下「別當／大正院」と記されている。薬師如来は牛頭天王の本地仏である。主題は、祇園午頭天王の本地を修め奉り、ともに疫病退散のところ、と読むことができる。「敷」は「ところ」と読み、水の流れるところ、通かなるところを意味する。大正院については、その所在地が明記されていないが、県内では柴田郡柴田町八間田の八雲神社の旧社名が祇園午頭天王であり、その別當が大正院である。午頭天王は仏号であり、明治初年の神仏分離令によって神号に変更される以前の名称であることから、1・3と同様の年代が考えられる。

5は八坂神社の祈禱札である。廣前(神前)における百度の大祓いに際し奉納されたものであろう。八坂神社は仙台市宮城野区岩切字若宮前に鎮座する神社で、江戸時代には祇園午頭天王社と称し、明治の初めに現社号に改めたといい、潮宜加藤千尋は戦前の宮司ということである。

6は青麻岩戸三光宮の祈禱札である。青麻岩戸三光宮は仙台市宮城野区岩切字青麻山に鎮座する青麻神社であり、その献膳に際して納められたと考えられる。年代不明。

7は宝国寺の祈禱札(説誦札)である。大般若経六〇〇巻を轉讀し、「三宝清明 五穀豊登 諸天伽護 災難不起」を祈願したものである。年代

不明。

8・13は守札等の木製容器である。立方体の箱形であり、蓋のオモテ面に墨書銘がある。わずかな違いはあるが、いずれも「湯殿山 日月寺／山先達 三覺坊／御祈禱之御守贖／仙臺宮城郡(村名)村／(人名)殿」となっており、ほぼ統一された様式となっている。

日月寺がある山形県西村山郡西川町大字岩根沢は、出羽三山への参詣口「八方七口」の一つである。三覺坊はその岩根沢口にあつた二六の宿坊の一つであり、それらを統括する別当寺が日月寺であった。三覺坊は宿坊を運営するとともに、各地方から各口の宿坊まで引率した里先達に代わり、山先達として三山への参詣を手引きする修験である。「仙臺宮城郡+(村名)村」という表記は、現在の岩根沢三神社本堂の境内にある出羽三山の供養塔にも認められる。これらの木製容器は、日月寺から通行手形をもらい、岩根沢口から三山に向かった参詣者に授与された「御祈禱之御守贖」を納めた容器と考えられる。「湯殿山 日月寺」という表記は、湯殿山を出羽三山の中心として表記したものと考えられ、現在も岩根沢三神社本堂には「湯殿山」の扁額が掲げられている。

神仏分離令により、日月寺が神道に代わつたのは明治三年(一八七〇)五月とされており(月光 一九九五)、これらの資料の下限年代を明治三年とすることができる。

14は月山大権現の祈禱札である。権現は仏号であり、明治初年の神仏分離令によって神号に変更される以前の名称である。

15・16・17・18は日月寺の護符である。日月寺は神仏分離令で寺号を廢した「月山神社出羽神社湯殿山神社撰社月山出羽湯殿山三神社」、通称岩根沢三神社であり、かつては長羅山日月寺という天台宗の寺院で

あつた。

19は昭和三五年度の銭神子安観音堂造営榎札である。オモテ面の「導師明性院末裔十五世主 本郷馨」は柏木神社宮司であり、自ら修験明性院の末裔と名乗っている。ウラ面には①正徳五年八月一日、小山の地に創祀され、②大東亜戦争の際現在地に遷座し、③昭和三五年、創祀された場所に近い現在地に遷座したことなど記されている。

①の創祀年代は、観音堂の本尊である観音菩薩立像、正しくはその台座に記された紀年銘である。創祀された場所を「小山」としているが、「多賀城町誌」には「自衛隊の東端倉庫の裏手にあたり、塩釜―大代の山街道の入口にあつたものを、海軍工廠の整地によって現在のところに移した」と記載されている。山街道は「浜街道」のことと考えられ、自衛隊の東端倉庫の裏手となると、現在の代二丁目一四番あたりと推定される。②の大東亜戦争に際して遷座した現在地とは、主要地方道仙台・塩釜線を距てて、当初の場所から約三五メートル東側の地。③の「創祀された場所に近い現在地」とは、一回目の遷座地の西側約一〇〇メートルの地である。

註 神仏分離令は一般に慶應四年（二八六八）三月三日から明治元年（一八六八）一二月一日の発令とされているが、東北地方では、戊辰戦争の影響を受けてその布達は遅れており、出羽三山に伝えられたのは明治二年（二八六九）五月だという（安丸 一九七九）。

1 護国神社 柏木明神祈禱札



奉獻  
柏木明神諸君 退散家内安全祈攸

2 護国神社 柏木明神祈禱札



奉獻  
柏木明神諸君 退散家内安全祈攸

3 護国神社 柏木明神祈禱札

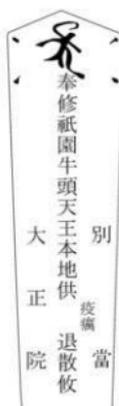


奉獻  
柏木明神諸君 退散家内安全祈攸



4 護国神社 牛頭大王祈禱札

(オモテ)



(ウラ)



5 護国神社 八坂神社祈禱札



6 護国神社 青麻岩戸三光宮祈禱札



7 護国神社 宝園寺祈禱札



湯殿山 日月寺  
山先達三覺坊  
御祈禱之御守牘  
仙臺宮城郡笠神村  
本郷栄吉殿



湯殿山 日月寺  
山先達三覺坊  
御祈禱御守札  
仙臺宮城郡大代村  
本郷寛吉殿



10 護国神社 日月寺守楯容器

湯殿山 日月寺  
山先達三覺坊  
 御祈禱之御守楯  
仙臺宮城郡笠神村  
 本郷栄吉殿



11 護国神社 日月寺守楯容器

湯殿山 日月寺  
山先達三學坊  
 御祈禱之御守楯  
仙臺宮城郡大代村  
 栄吉殿



湯殿山 日月寺  
三學坊  
御祈禱御守札  
仙臺宮城  
本郷寛吉殿



湯殿山 日月寺  
山先達 三學坊  
御祈禱之御守牘  
仙臺宮城郡大代村  
本郷寛吉殿



14 護国神社 月山大権現祈禱札



15 護国神社 日月寺護符



16 護国神社 日月寺護符



17 護国神社 日月寺護符



18 護国神社 日月寺護符





(ウ  
エ)

## 上棟

ありかたや

大慈大悲の

めくみもて

世の人ひとを

救くふ

みほ

とけ

言葉にかくのも恐多き様神子安親君の大御に護みて申すわが大代の親君は遠く中御門  
天皇の正徳五年といふ頃の八月十八日渡切芥夫が先陣外十数名の信者によって小山の地に創祀され後大  
東軍戦争の際現在の地に遷祀十御願所以來二百四十有五皇霜宮に大慈大悲を以て十方諸國  
に身を願はし世人の名を称する御舞を凝結ひて普々衆生に救を得せしめ給ふ  
然るにこの地余りに御語に便り悪しく御堂も崩壊つま破損甚志くまことに恐懼に染へずこの度大代戸主  
規約会の議事決議により元願地に移築し最良の地を選び御堂遷し奉るまことなり直ちに御堂復興発起人一同奮  
の上広く郡管内の志願者人々の協賛を仰ぎ御堂遷移工事土砂運搬等については協賛の人々進んでこれにあたり御堂建築工事を  
伊藤与平に請負はせしに敬身的に練達せる技術を盡しこのたび荘厳華麗に完工したるはまことに芽出たき様  
なり茲に落成奉告祭を執行ふことと相なりぬ 依つて御酒御舞を御前に供へ誠意事由を告奉る状を  
御心も趣に聞食めて自今后 此の信仰篤く志願書けき人々の上に無限の慈悲を垂れ給ひ無限の恩  
恵を與え給ひて身は益々健

かに守り給ひ家業は愈々繁栄せしめ給へとかしこみて日す  
皇紀二千六百二十年 昭和三十五年即八月十八日 導師

謹識

0 10 cm  
5/16

## 第六節 民俗

## 一 地域の概要

## 1 行政区

江戸時代の大代村の範囲には、現在大代西・大代中・大代東・大代北・大代南の五つの行政区がある。もとは大代東・中・西の三区のみであったが、昭和四〇年代に北区が、その後貞山運河東側の開発による住民の増加で、南区がそれぞれ設置されたという。

## 2 地域の移り変わり

## (1) 海軍工廠建設と地域の変化

昭和一八年、多賀城海軍工廠が設置され、大代でも土地の買取が行われるなど地域に大きな影響を与えた。現在、柏木神社は貞山運河の東側に鎮座しているが、昭和初期までは西区の町通り沿いにあった。その西側一帯には桑畑が広がっていたが、海軍工廠の施設部を設置するために、土地の買い上げが行われたとされている。

また、大代には海軍工廠の工事に携わる人々が暮らす「タコ部屋」と呼ばれる施設が存在していた。タコ（他雇）とは、そこで働く人を指し、朝鮮半島から連れてこられた人が多かったようである。大代には、町通りと貞山運河沿いの二か所に「タコ部屋」があり、そこから八幡の旧沖区まで歩いて仕事に通っていたという。その労働環境は厳しく、逃げ出す人が後を絶たなかった。

## (2) 仙台港建設と北区

昭和四六年に仙台港が開港するにあたり、その建設地に住んでいた人々は移転を余儀なくされた。大代北区は、この移転者の一部を受け入れるための宅地造成によってできた地区であり、北新田・追分・蒲生などから多くの人が移り住み、現在に至っている。また、北新田からは地蔵像や供養塔が移動され、大代の新たな信仰の場となった。



家が建ち並ぶ以前の北区（昭和44年）

## 3 屋号

大代には今回確認できたものだけで左記のような屋号が存在する。これらの種類としては、家屋の位置や方向によるもの、地形・地勢によるもの、家印によるもの、職業によるもの、家の先祖に関係するものがある。

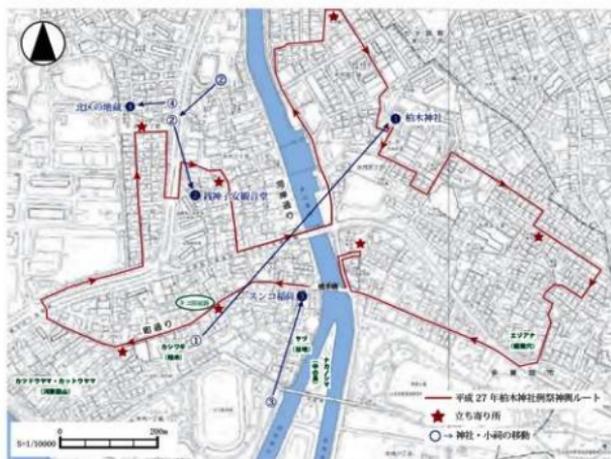
アブラヤ（油屋）、ウナギヤ（鰻屋）、カドノイ（角の家）  
カミノイ（上の家）、キタノイ（北の家）、ダテヤ（伊達屋）  
トウフヤ（豆腐屋）、ドフヤ（ドブ屋）、ナカノイ（中の家）、

ニシノイ（西の家）、マルイチ（一）、マルワ（卍）、モロヤ（膠屋）  
ヤツノイ（谷地の家）、ヤマコ（色）、ヤマコウ（金）

## 北区の話

来たばりの頃は、なにもねえ、山だったの。狐なんか来たり、朝起きると嬢が飛んで行くしね。「3年くらい経ったら（周りが家で）いっぱいになるから辛抱しろ」って（旦那に）言われたけど、最初は寂しくて泣いてたもんな。そしたら、3年どころじゃない、私たち春に来て、秋にはそこらへんさ（家が）いっぱいになったの。

（昭和5年生まれ 女性）



第9図 大代地区民俗調査関連図

## 二人々のつながり

### 1 戸主会

かつて大代には戸主会と呼ばれる組織があり、大代の多くの家が入会していた。解散されたとされる昭和三八年から五〇年以上が経っているため、現在この組織の詳細を記憶している人は少ない。しかし、柏木神社に奉納された燈籠に、その概要、解散にいたる経緯が刻まれている。

この燈籠は、戸主会が解散してから一六年後の昭和五四年に、その共有財産の整理が終わったことを記念して奉納されたものである。この銘文から、戸主会は一〇五名もの講員を有する大きな組織であったことが分かる。また、『多賀城市史3 民俗・文学』によると、講員はさらに西区、中区・東区の三つの班に分けられ、その班を基本単位として活動していたとされている（多賀城市史編纂委員会 一九八六）。

聞き書きから把握できた活動内容としては、講員が集まっていた総会の開催と、共有財産である山林の維持管理が挙げられる。総会の頻度や時期は不明であるが、講員の自宅を会場にして集まり、当番にあたった家をヤド（宿）と呼んだ。一戸から代表者が一人参加しなければならず、基本的にはその家の戸主が出席したという。

また、戸主会では共有財産として山林を所有していた。この山は貞山運河の東側一帯に広がっており、ナカバヤマ（仲間山）やムラヤマ（村山）と呼ばれていた。昭和四〇年代後半に売却され、その跡地には団地が立ち並ぶようになった。このナカバヤマで行われていたのが、コボレヒロイ（こぼれ拾い）である。コボレヒロイはコボレサライとも呼ばれ、山の松葉などを拾い集めることを言った。

コボレヒロイの日にちは決められており、指定された日に決められたメンバーで協力して落ち葉を拾った。各戸から一人ずつ参加することになっており、参加者の多くは女性であったという。集めた落ち葉は均等に分配され、肥料や燃料として用いられた。



戸主会により奉納された石燈籠

## (西側)

由 来

旧大代契約会(戸主会ともいう)は古来我々の先祖が一家の家長を会員として創設した權威ある組織であり、大代区の強力な意志決定の機関であった。然るに、第二次大戦後の地域社会の異常な発展、いわゆる民主化の嵐は家長をもつて一家を代表する姿の存在を許さなくなり、従来の慣行と伝統をとどめた会の運営には次第に困難を来すようになった。よつて昭和二十八年六月廿日の總會に於て、會員の総意により円満に契約会の解散をすることを決定するに至り、その後の財産処分等の事後処理のため委員八名からなる整理委員会を設置し、整理事業に関するすべての権限をこの委員会に委任することとを満場一致で決議した。

この決定により、永年にわたる祖先の偉大な業績と貴重な財産を後世に伝承することになり、ここに契約会の光輝ある歴史をこしたものである。

## (東側)

当時の会員数は百十五名で、そのうち財産権を有するものは九十五名であった。

その後の整理事務に当り旧来から所有する共有地の相続登記には幾多の困難があつたが逐次解決を見ることが出来た。会員には四回に分けて金五万円宛の配分金を交付した。更に今回整理事務の終結を記念して、今同整理事務者に記念品を贈り、て会員と関係者に記念品を贈り、その他公共的事業、区内関係各種団体にも助成金を分付して地域の発展向上に資し、こゝに会計経理上の残額もなく精算を終り、十五年余にわたる整理事業は總べて完了を見るに至つた。

この機に当り、概要を記して後世に伝えんとするものである。

(解散當時の会長 伊藤栄吉)

旧大代契約会整理委員会

委員長 伊藤 栄 委員 本郷栄吉

副委員長 伊藤幸治 同 本郷秀雄

会計 渡辺好治郎 同 故三浦 強

委員 安住仁太郎 同 故星 栄八

宮司 本郷清彦

## 燈籠銘文

## 2 葬儀の相互扶助組織

大代では、葬儀の相互扶助組織が、解散したのも含めて少なくとも八つ確認でき、それらはシボウクミアイ(死亡組合)、シボウケイヤク(死亡契約)、トナリグミ(隣組)、などと呼ばれている。隣近所で構成されており、加入戸数は八、二〇戸と組によって差がある。その範囲は、地域で定められている班とほぼ同じであるが、アパートなどの賃貸住宅の住人は含めないとすることが多い。古くからの家でのみ構成されるものもあれば、新しく転入してきた家も含める組もある。

主な活動内容は、葬儀の手伝いである。葬儀社による会館での葬儀が普及する以前は、シモン(死門)などの飾り物作りや、シラセ(知らせ)と呼ばれる連絡係を担当していた。現在では、葬儀の際の受付といった手伝いが多い。



西区の契約会で所有している講帳

## 3 信仰に関わる講

## (1) 明神講

柏木神社を信仰する家によつて構成される講集団である。平成二八年時点の講員数は二八名であり、明神講の講長は、柏木神社の責任役員総代会長が兼務することになっている。

戦前から明神講と呼ばれる講はあつたが、現在の明神講との直接的な繋がりはない。昭和二〇年代までは活動していたようであるが、その後いつ解散したかは不明である。現在は男女問わずに活動をしているが、昔の明神講は男性が参加するものとされていた。加入している家は、古

### 明神講の話

お明神講っていうの、男だけだからね。ある程度の農家、下っ端の人は入らなかつたから。勢力のある家の男の人の集まりだったね。回り宿だったの。女性禁止だったの。でも、ここの家の前はあちゃんが男勝りだから、男の人に混ざってたの。男の人たちの中に入って行って、有名だったんだ。(女で) お明神講さ来るのその人ばかりだ。

(大正15年生まれ 女性)

うちはね、地元の人でないから、うんと願ったんだけど入れてもらえなかつた。公民館建てたから。(公民館に集まっていた)。その前は順番に歩いたそう、ヤド(宿)で。そういうんだらば私も入れてちょうだいって言ったらば、他所から来た人は入れないよって断られて。

(大正11年生まれ 女性)

くから大代にある家であり、新しく転入してきた家の加入は認められなかつたという。加入していた戸数は、二五〇三戸ともいわれている。戦前は年に一回講員の家で集まりが持たれており、集まる家をヤド(宿)と呼んだ。ヤドに当たった家では、集まってくる講員のために御馳走を作らなければならなかつた。参加者は羽織袴姿で集まり、柏木神社の宮司がヤドに足を運んで祈禱をしていたという。その後、戦後しばらくは、柏木神社の跡地に建てられた公民館で活動していた。その当時も現在と同じ一月に集まっていたが、日には不明である。この頃になると、講員の数も減り、五〜六名の男性が公民館を訪れていたという。その後、明神講は解散となり、明神講と呼ばれる組織は長い間姿を消していた。しかし、その後昔のようにみんなで集まって柏木神社の神様を拝もうという声が上がリ、再び明神講が組織された。再結成後は、以前のようにな加入条件もなく、開かれた組織へと変化した。主な活動内容は、一月二七日の集まりと六月の旅行である。一月の集まりは、柏木神社の社務

所で祈禱を受け、直会をするというものである。平成二八年一月二七日は、一九名の講員が神社に集まった。講員は全員参加しなければならぬということではなく、当日参加可能な講員が集まる。六月の旅行は、約一〇年前から始めたものであり、この旅行を始めてから講員が増加したという。古峯講の旅行は遠出するのに対し、明神講の旅行は比較的近場に出かけている。しかし、講員の高齢化もあつて旅行の参加者が減少し、今後は一月の集まりのみの活動に変更しようとする動きも出ている。

### (2) 古峯講

栃木県鹿沼市にある古峯神社を信仰する講集団であり、コバハラ講と呼ばれている。平成二七年時点での講員数は五三名であり、大代全区の希望者で組織されている。

現在の組織は、昭和四八年に発足したものであるが、その前からコバハラ講は存在していた。しかし、現在のような大きな組織ではなく、講員は明神講の講員とほぼ同じであつたとされている。また、大代では、昔から海苔養殖を営む家が何軒もあり、加工の工程で用いる乾燥機が火災の原因になることを恐れて、その家や周辺の家が中心となつて加入していたという話もある。その頃は、回り宿で講員の家に集まって拝んでおり、古峯神社への参拝は、代表者が行う代参の形式がとられていた。昭和四九年に、柏木神社の境内に古峯神社の神を分霊して石碑が建てられ、この頃から柏木神社を中心として大代全区でコバハラ講の活動を行うようになった。講報には、昭和四八年からの記録が残されており、正式な発足年はこの年であると考えられる。現在のコバハラ講には、講長・会計・世話役・監事・顧問の役が置かれ、五三名の講員は八つの班

に分けられている。

主な活動内容は、一月三日の柏木神社での集まりと、四月の古峯神社への参拝である。一月の集まりは柏木神社で行われ、古峯神社の石碑の前で神職による祈禱が行われた後、社務所に移って直会が開かれる。四月の古峯神社への参拝は、希望者全員が参加し、代参の形式はとっていない。神社を参拝した後には観光に出かけることになっており、講員の娯楽になっている。



古峯神社の石碑



直会の様子 (平成28年1月13日)

### (3) 山の神講

子授けや安産の御利益で知られる、美里町(旧小牛田町)の山神社を信仰する女性の講集団である。大代では、中区と東区にその存在が確認でき、中区の山の神講は現在でも活動が続けられている。

#### 中区の山の神講

中区の四軒の家の女性によって構成されており、講員の年齢層は高めである。昭和二〇年に嫁に來た女性によると、当時は出産を機に加入し、

講員は同じく若い世代の若い女性たちであったという。人数も多く、講員の家をヤド(宿)として順番に回り、掛け軸を拝んで精進料理を食べた。昭和三七年の日付が入っている講帳には、二二名の女性の名前とともに、「旧三月十二日」の日付が記されており、この日にちが集まりの日であったと考えられる。また、年に一回、小牛田の山神社から札を受けて來ることも行われており、その当時は、代表三〜四名による代参の形式をとっていた。

現在は年に一回、講員の家で行われる集まりが、主な活動内容になっている。期日は決められておらず、ヤドの都合の良い日に集まる。当日は、各講員が蝋燭を持ってヤドを訪れ、ヤドの女性を作った精進料理や、出前の料理を囲む。蝋燭は、掛け軸の前に立てて使い、短いものほど御利益があるとされている。以前行われていた小牛田への参拝は、現在行われておらず、昭和五〇年頃にはすでになくなっていたという。



山の神講の掛軸

#### 東区の山の神講

東区の一〜三軒の家の女性で構成されていた講である。昭和二四年に嫁に來できた女性によると、嫁ではなく、姑たちが活動をしていたと

いう。年に一度、回り宿で集まりが行われ、掛け軸を拝んでいたが、その日にちなどは不明である。その後、いつの間にか解散してしまい、掛け軸の所在も分からなくなっている。

### 三 神社・小祠

#### 1 柏木神社

柏木神社は、大代西・中・東・北・南の五区を中心に信仰されている神社であり、祭神は薩塩場老翁・薩塩場老女である。現在は、貞山運河東側のかつて中峰と呼ばれた場所に鎮座しているが、以前は大代西区の町通り沿いに社殿があった。そのため、社殿があった一帯は、現在でもカシワギ（柏木）と呼ばれている。明治四二（一九〇九）年に、牛生の須賀神社とともに笠神の仁和多利神社に合祀されたが、合祀後も社殿は大代に残っており、祭りも行われていた。その後、笠神の仁和多利神社が海軍工廠建設に伴い、上ノ台から移動することとなり、昭和一七年に中峯の大代戸主会の共有地に移された。この時に、柏木神社は合祀された状態で、大代の地に戻ってきたことになる。この時点では、社殿は仁和多利神社のものであったが、昭和二五年に仁和多利神社が笠神の花立（現在の笠神一丁目一帯）に分離して移ることとなり、拝殿のみを中峰に残して移転した。この時に、なくなった本殿の代わりに以前町通りにあった社殿を本殿として利用したという。その後、昭和四三年に明治百年を記念して本殿を造りかえ、本殿として利用していた昔



旧本殿（現在の護国神社）

#### 柏木神社年中行事

1月5日	新年祭	旧5月27日	例祭
13日	古峯講	10月第4日曜日	例祭
14日	どんと祭	11月23日	新穀感謝祭 護国神霊社祭
27日	明神講		



古峯講



どんと祭



明神講



秋の例祭

からの社殿は、護国神社として境内に残され、現在に至っている。現在柏木神社の神職は、一八の神社の神職を兼務しており、市内では笠神の仁和多利神社・下馬の鎌倉神社・高崎の多賀神社・市川の多賀城神社の神事を執り行っている。今では宮司という呼び方が広くなされているが、昔はホウインサン（法印さん）とも呼ばれていたという。柏木神社に落ち着くまでは、各地を転々とする修験であったとも言われている。笠神のある家に世話になったのをきかっけに、その家から名字をもらい、この地に居付くようになったと伝えられている。

神社の組織には、責任代表役員・責任役員総代会長・責任役員総代副会長・総代という役があり、平成二十七年時点では三名の役員が神社の運営に携わっている。このうち、責任代表役員とは宮司のことであり、責任役員総代会長は明神講の講長も兼務することになっている。

祭日は旧暦五月二十七日と旧暦九月二十七日である。五月の祭りは、神社で総代たちが祈祷を受けるものであり、旧暦のまま行われている。秋の祭りは、神輿渡御が行われるなど、地域の多くの人が参加するため、現在では一〇月第四日曜日に行われている。秋祭りは、町通りであった頃にも行われており、柏の葉に赤飯を乗せて配っていたという。

## 2 銭神子安観音

大代三丁目の住宅地の一角に観音堂があり、観音像が祀られている。この観音像は代々渡邊家がベツトウ(別当)として管理してきたものがあり、「渡邊さん」とこの観音様」として地域の人々に親しまれている。この観音像は、現在の場所に来るまでに四回の移動があったとされている。最初に置かれたのは旧笠神の小澤という場所であったが、その後大代の銭神という場所に移されたという。銭神子安観音の「銭神」はこの地名からきている。そして、その場所が海軍工廠建設地になることから、昭和十七年頃に雷神の山の中に一時的に移され、終戦後に旧道二三号沿いに運ばれた。最後の移動は、観音堂に納められている棟札によると平成元年のことであり、道路の拡張工事のためであった。

祭日は九月一八日である。この日は渡邊家が供物を上げて拝んでいるが、以前は多くの地域の人々が集まっていた。特に旧道二三号沿いにあった頃には、毎年八〇〜一〇〇名の参拝者があり、渡邊家では参拝者に配

る赤飯の準備などで大忙しであったという。

この観音像は、子どもに関する御利益があることで知られており、授けや夜泣きをはじめとする様々な祈願がなされてきた。観音像に願をかける時には、ナナイロ(七色)の菓子が必要とされており、七種類の供物を上げて祈願をする。また、子どもに限らず、自分の体に不調がある場合は、観音像の同じ部位を薬で縛って祈願すると治るとされている。治ったらお礼参りをして、その薬をほどいて来るということが数年前までは行われていたという。このような祈願や、毎月一八日の月参りなど、多くの人が訪れ、観音像を信仰してきた。現在は参拝者の高齢化や震災の影響もあり、以前ほどの参拝者はないが、大代の人々に広く知られて親しまれている。



祭日の供物



現在地に移動する前の観音堂(昭和59年)

### 観音様のお話

息子が生まれた時に、寝小便たれて困るから願をかけたの。(息子が)20歳になるまで月参りするからって。そしたら治ったよ。だから、こんなに効く神様あるんだって思った。20年間欠かさずお参りしたんだ。

(大正11年生まれ 女性)

最初「お菓子をあげろ」と言われて、1種類あげても全然子どもが夜泣き止まらなくて。で、おばあちゃんに聞いたら、「お菓子は7種類だ」って。7つあげたら夜泣き止まりましたよ。

(昭和47年生まれ 女性)

## 渡邊家の観音様

昔、渡邊家の先祖に権右衛門という信心深い人がいました。ある日、仙台で用事を済ませて帰ってくる途中、大きな荷車に観音像を乗せて運ぶ岡田の人々に出会いました。しばらく一緒に歩いていましたが、岡田との分かれ道まで来ると、荷車はびたりと動かなくなっていました。それを見ていた権右衛門は、「俺に貸してみろ」と、観音像を背負いしました。それを見た岡田の男たちは、自分たちもそのようにして運ぼうと、観音像を背負おうとしました。しかし、権右衛門のようにできませんでした。困った岡田の人々は相談し、観音様は岡田ではなく大代に行きたいに違いないということになり、観音像を権右衛門に譲ることにしました。

権右衛門は大代との境である笠神の小澤まで来ると、そこに観音像を祀ることにしました。それからしばらくして、大代で病が流行りました。原因も分らぬまま病は広がるばかりで、大代の人々は困り果てていました。そんな時、権右衛門は、笠神に置いて来た観音像が気にかかりました。拝み屋に拝んでもらうと、病の原因が観音像であることが分りました。観音像が言うには、「私は大代に祀られたかたに、笠神に置いて行かれてしまったのが気に入らない。大代で祀り、その別当として渡邊家に面倒をみてもらいたい。」とのことでした。観音像の言う通りに大代の銭神に移すと病はびたりとおさまりました。それから現在に至るまで、場所の移動を繰り返しながらも、大代の地で多くの人々に信仰され、守られています。



観音像

## 3 スンコ稲荷（伏見稲荷）

大代の伊藤家に祀られており、スンコ稲荷や伏見稲荷と呼ばれている。多賀城市史のデータによると、昔この家の先祖が伊勢参りに行った際に、伏見稲荷を分霊してきたとされている。その際、杉の切り株の上に祀ったため、スンコ（杉っこ）稲荷と呼んだという。現在は個人の敷地内に祀られているが、昭和四〇年代初めまでは砂押川沿いの笹が生い茂る場所にあった。公園を作るために移動が必要になり、現在地へと運ばれた。

祭日は旧暦九月一九日である。この日は、この家の家族や知人が集まって供物を持ち、柏木神社の神職による祈祷が行われる。現在は敷地内にあることから、家族が中心となって祭りを行っているが、川の近くにあった頃は、たくさん地域の人々が祭りに参加していた。多い時には三〇名以上の人々が訪れ、伊藤家が赤飯・お浸し・魚などの御馳走を準備して、なしたという。現在地に移動させてからも、毎月一日になると一日参りといって近所の人たちが足を運んできたが、年月が経つにつれて参拝者は減っていった。



平成 27 年 10 月 31 日の例祭



スンコ稲荷の祠（中央）と供物

## 4 北区の地蔵

大代北区の集会所前に地蔵像、子安観音像、山神塔、板碑が祀られており、地蔵像は「北区のお地藏さん」として信仰を集めている。この地蔵は仙台市の北新田に祀られていたものであるが、昭和四〇年代の仙台港建設に伴う移転の際に、北区に移り住んだ人々によって大代に運ばれてきた。最初は県道二一三号沿いに銭神子安観音と並んで祀られていたが、道路拡張工事のため現在地に移された。地蔵祭で用いられる掛軸などが入った木箱には、「明治参十一年」「北新田地蔵講中」の文字があり、北新田にあった頃にはこの地蔵像を信仰する講があったことがわかる。北区に移されてからは、北区の婦人会が中心になって管理している。

祭日は八月二三日である。この日は北区の人々をはじめ、大代各地や、北新田から大代以外に移転した家の人まで多くの女性が集まる。現在の婦人会長の代になってからは、仙台市の警渡寺の住職を呼んで祭りをしているが、その前までは住職を呼ぶことはなく、地域の子どもたちによる奉納舞踊が行われていた。

祭日以外でも、地蔵像は北区の人々に大切にお祀りされている。毎日、婦人会長によって水と茶が供えられるほか、地蔵の前掛け・半纏・頭巾は、年に二回、盆と正月にその担当になっている女性によって作り直されている。毎月一日と一五日に参拝をするという人もいれば、前を通る度に手を合わせることを欠かさないとという人もおり、北区の人々の信仰の深さが窺える。



木箱の蓋の裏



平成 27 年 8 月 23 日の地蔵祭

四 行事  
橋本橋の灯籠流し

橋本橋は、真山運河に架かる中区と東区を繋ぐ橋である。この橋の袂では、毎年八月二〇日の夜に灯籠流しが行われ、西園寺の住職が来て、水難犠牲者の慰霊祭が開かれる。「多賀城町誌」によると、明治三三(一九〇〇)年の旧暦八月二〇日の夜、真山運河で行われた灯籠流しを見物するために多くの人が旧大代橋に集まったが、橋が壊れて一〇名が亡くなったという(多賀城町誌編纂委員会、一九六七)。水難犠牲者とは、この時に亡くなった人々のことであるとされている。また、平成二三年の震災以降は、その時の犠牲者の供養という意味合いも加えられた。

この灯籠流しは、大代全区の区長会が中心となっており、二年ほど前までは紐で連ねて浮かべていた。昔は、各家で作った灯籠を持ってきて流しており、海苔養殖を営む家の人々が舟を出して回収していたという。震災前までは、ナカノシマ(中の島)やナカジマ(中島)と呼ばれる中



地蔵像



水難犠牲者慰霊祭 1



橋本橋（平成27年8月20日）



水難犠牲者慰霊祭 2



盆踊りのようす

洲から花火を上げていたが、その後の復興工事の影響もあり、現在は行われていない。  
また、八月二〇日は盆も終わり、多くの家庭で盆棚の片付けが終わっている頃である。そのため、飾っていた古い提灯をこの日に橋まで納めに来る人も多かった。

## 五 生業

### 1 大代の海苔養殖

海に近い大代・牛生地区では漁業が盛んであり、それによって生計を立てる家が多かった。多賀城市埋蔵文化財調査センターでは、市内各地から収集した民俗資料を保管しているが、漁業に関わる資料は、大代と笠神の真山運河沿いの地区から収集したものがほとんどであり、それらの資料は海との関わりの中で育まれた暮らしの一端を伝えている。

中でも海苔養殖は両地域における重要な生業の一つであり、これに携わる家は多かった。しかし、外に働きに出る家が徐々に多くなり、海苔養殖から手を引く家が増えていった。平成二十七年時点で大代では二〜三戸が続けるのみとなっている。

大代では、暮らしの節々に海苔養殖との深い関わりを感じる事ができる。以前は、乾燥機による出火を恐れて、火伏せの御利益で知られる栃木県の高峯神社を信仰する古峯講に加入した家もあるとされる。また、八月の灯笼流しの際にも、以前は流した灯笼を拾うために海苔農家の舟が活躍したとする話もあり、大代の人々にとって海苔養殖は身近な存在であった。



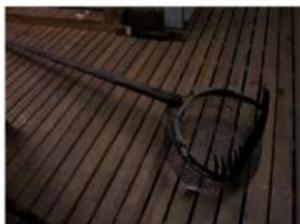
真山運河（昭和44年）

(2) 海苔の一年

海苔養殖は、海苔の種を育てることから始まる。春に海水温が上昇して成熟した海苔は胞子を放出し、胞子は海中を漂う。この胞子は石灰質のものに潜り込む性質があり、それを利用して種を育てるため、カチケンコやカキガラと呼ばれる牡蠣の殻を束ねた道具を使用する。

牡蠣殻の中に入り込んだ胞子は、糸状体に変化した状態で夏の期間を過ごす。そして夏を越した胞子は、秋の彼岸の頃になると牡蠣の殻から出て海中に浮遊しはじめ、海苔養殖用の網に付着して水温の低下とともに成長する。網が使われる以前は、竹製のヒビを利用しており、さらにその前は柴に種を付着させたという。

種が付いた網は、一つの網から数回収穫することができ、冷蔵庫に保管しておいた海苔網と交換しながら晩秋から春先まで収穫を続ける。



蛸筒籠



延縄



ガラス製の浮き



カチケンコ / カキガラ (牡蠣殻)



籠



枠

## 第四章 笠神村(牛生)

### 第一節 歴史的環境

牛生は笠神村の北東部に位置する地区である。「風土記御用書出」にも祇園社(須賀神社)が鎮座するところの小名として記され、明治九年の「陸前国宮城郡各村字調書」にも笠神村の小名として記載され、「ウシヨイ」と誤って読みが付されている。この牛生から芦畔にかけては、現在広い範囲が造成されて宅地となっているが、それ以前は、西側は丘陵部、東側は貞山運河に挟まれて、低地が広がる地形だった。

大正七年(一九一八)、牛生一本松の水面八二〇〇余坪を埋め立てて宅地造成が行われた。大正九年(一九二〇)、多賀城村では、牛生方面の水面三四五〇〇坪を埋め立てて将来の工場用地として確保し、同一三年には笠神、一本松付近の水面約三五〇〇〇坪を県が埋め立てて耕地とする案に同意している。昭和二年には、笠神一本松の海面毎立て地二二〇七一坪の所属未定地を多賀城村区域に編入することが議決された。

昭和六年になると、笠神一本松先の海面九〇〇〇余坪の埋立てを申請し、同一一年、牛生の水面八三〇〇〇余坪の埋立て地面、及び笠神一本松先の一三〇〇〇余坪の埋立て地を、同一三年には笠神字牛生の海面埋立て地四〇〇〇〇余坪を多賀城村に編入することが決定した。しかし、このような埋立て地の拡大、多賀城村への編入は、昭和一六年のアジア太平洋戦争の開戦によって頓挫することとなる。

牛生地区は、海に近いという地理的環境から漁業に関わる住民が多く、

大代漁業組合に加入していた人が多かった。大代漁業組合は、昭和七年の法改正によって出資組合多賀城漁業組合となり、昭和一七年には県水产課の指令に基づいて統合され、塩竈漁業組合に編入することとなったことが、須賀神社鳥居前にある、昭和四三年の顕徳之碑に記されている。昭和二三年頃、多賀城村、塩竈町、七ヶ浜村、利府村の一部に合併の動きがあり、多賀城村のうち、牛生地区住民は合併を希望したが、村全体の合意は得られなかった。昭和二四年、牛生が多賀城村から分離し、塩竈町に編入して塩竈市となり、現在に至っている。



昭和20年頃の牛生 (塩竈市芦畔町 佐藤今朝古氏提供)

須賀神社の南側、現在住宅地となっている一番は、かつて低丘陵の間の低湿地に営まれた水田であった。牛生の南側の小字「芦畔」は別名「東方田(とぼた)」というが、「とぼ」とは開墾田のことであり、牛生や芦畔の山間には、このような小規模な水田が点在していた。中央の水田の中に、鳥居の印とともに小さな塚状の土盛りが描かれているが、現在、笠神一地丁目10番に移設されている板碑(花立A No.202)は、かつてこの場所に祀られ、「田の神」と呼ばれていたという話もある。昭和40年頃に水田は埋め立てられ、自動車販売所、宅地へと変化していく中で、かつての集落の景観は大きく変化していった。

## 第二節 寺社仏閣

## 一 神社

## 須賀神社

須賀神社は須佐之男命を祀る神社で、本社は京都市東山の八坂神社である(本郷 一九七二)。八坂神社は祇園さんの名で親しまれているように、須賀神社も祇園さま、天王さまと呼ばれている。

「風土記御用書出」には牛生という小名に「祇園社」とあり、明治維新の際、現社号に改めたという(本郷 一九七三)。「書出」には勧進した人も年代も不明と記されているが、神社側では元応元年(一二三九)としており、「明治二年文書」という資料にある「氏子の者共、後醍醐天皇の元応元年、病門鎮護の神として仁波多利権現社をまつり、鬼門除けの神として祇園社をまつる」という部分に依っている(本郷 一九七二)。また「書出」には、社地についての記載は欠けているが、社は辰巳向きの二尺作で、同じく辰巳向きの鳥居があり、祭日は六月一五日となっている。

須賀神社は、明治四年(一八七二)七月に村社格となり、仁和寺多利社に保管されている明治三年(一八九〇)の須賀神社雨覆修繕棟札には、菱沼慶治、栗野末八の二人の木工によって雨覆の修繕が行われたことが記されている。この修繕に際し、遷宮の祠掌を務めたのは本郷勝治であった。ところが、同四年(一九〇八)二月三日、笠神村上ノ台にあった無格社の仁和寺多利社に合祀されることとなる。大代村の柏木神社が同社に合祀される三月余り前のことであった。昭和一八年、アジア太平洋戦争に際し、仁和寺多利神社境内が海軍工廠用地になると外

への移転を余儀なくされ、現在柏木神社が鎮座する大代中峯の地に移転している。昭和三六年八月、牛生在住の氏子の願いによって官の許しを得、旧社地である現在地に本殿を造営して神霊を迎え、旧に復したとされている(本郷 一九七二)。

合祀と移転、そして五四年の歳月を要して故地への復帰という須賀神社の歴史であるが、実際は、社殿は解体されることなくそのまま牛生の境内地にあった。仁和寺多利社に神霊が移されたことで、公式的には廃社となるが、地元の人々は従来どおり祭祀を続けていたという。

明治末期、政府が進めた神社合祀は、幣帛料の削減など財政政策としては成果を取めたということが出来るが、古くから地域で祀られてきた神と、その地域の人々とのつながりを断つことはできなかった。

(オモテ)



(ウラ)



須賀神社棟札

### 第三節 石造物

#### 一 分布と概要

笠神村牛生地域で確認した石造物としては、近世・近代の供養塔、石燈籠、手水鉢、近代の顕彰碑・治草碑、墓標などがある。それらの所在地の概要については以下のとおりである（石造物の記載方法については第三章第四節一項を参照）。



第10図 牛生地区石造物分布図

須賀神社 丘陵南麓の鳥居の脇に「須賀神社」の標柱、「頌徳之碑」、スサノオの御足元石との伝承を持つ牛神石がある。境内には石灯籠二基と手水鉢や、顕彰碑である「創祀六百六十年記念」碑、「創祀六百八拾年祭碑」がある。



第11図 須賀神社境内石造物分布図



須賀神社



須賀神社入口

芦群 芦群町一〇番の宅地内に山神塔と石祠がある。山神塔は、かつて西側約一四〇メートルの山林内にあったものを移設したものである。

牛生 A 西園寺がある丘陵の北端部で、民家の北側の藪の中に佐藤家

の墓地がある。改葬後、現地に残された天保三年（一八三三）から明治四年（一八七一）までの墓標が四基ある。

牛生 B 牛生町一番の宅地内に水神塔と龍神塔がある。水神塔は、かつて須賀神社の神事に関わりがあったとされる井戸の傍らにある。



芦群



牛生 A



牛生 B

#### 二 近世・近代の供養塔

##### 1 自然神信仰の塔

51 は山神塔である。天保一二年（一八四一）、彦惣が施主となって個人で造立したものである。

52 は小型の水神塔である。オモテ面に「水神」、側面に「高砂□／大工佐藤」の文字が確認できる。かつて須賀神社でお湯立ちの神事が執り行われる際、それに使用する水を汲んだ井戸の脇に立っている。

53 は小型の龍神塔である。龍神は水を司る神であり、漁師からの信仰も厚い。



山神

施主

彦惣

天保十二年三月十二日



S=1/8 0 30cm

51 芦畔 (No. 722)

天保二年 (一八四二)

龍神



S=1/8 0 30cm

53 牛生B (No. 737)

水神



大工佐藤  
高砂口



S=1/8 0 30cm

52 牛生B (No. 724)



三 石燈籠・手水鉢・標柱

54は文久二年、55は慶應三年の石燈籠で、いずれも竿に節がない常夜塔である。54には「笠神村／三郎右門」、「石工／銀右門」、55には「直右工門」と奉納者・石工の名が記されている。

56は大型の手水鉢である。「奉納／明治十二年／旧六月十五日／小林彦惣／昭和五十四年旧六月十五日／孫彦次郎改刻／石工 伊藤正一」と、この手水鉢の由来を記している。奉納者の小林彦惣は、天保一二年の山神塔の施主彦惣と同一人物である。

58は須賀神社の標柱である。昭和三八年に塩釜消防団東部分団によって建立されたものである。



(西側)



(東側)

54 須賀神社 (No. 729) 東側

文久二年 (一八六二)

(東面)



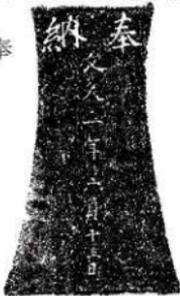
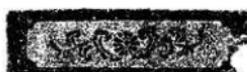
笠神村

三郎工門

石工

銀右門

(南面)



奉納

文久二年六月十五日

55 須賀神社 (No. 730) 西側

慶應三年 (一八六七)

(南面)



奉納

慶應三年六月十五日

(西面)



直右工門



S=1/8 0 30cm

奉納

明治十二年

旧六月十五日

小林彦惣

昭和五十四年旧六月十五日

孫 彦次郎改刻

石工 伊藤正一



明治百年記念

奉獻

氏子一同

(オモテ面)

村社 須賀神社

(側面)

昭和三十八年旧六月十五日

塩釜消防団東部分団

分団長 三浦芳治郎

分団員一同



## 四 記念碑・顕彰碑

59は須賀神社創祀六六〇年、61は創祀六八〇年に関わる記念碑である。61には神社の縁起が記されており、創建年代を「累世祠職明性院記」(註)に拠るとして、元応元年(一三一九)としている。

60は鈴木新三郎の顕彰碑である。鈴木氏は、多賀城村に属していた笠神牛生を塩竈町に編入するため奔走した人で、その功績を讃え、明治百年記念の年に建設したものである。

註 柏木神社の歴史に関わる「明治二年五月二十六日調書」等については現存しないため詳細は不明であり、本資料についても同様である(本書38頁参照)。



創祀六六十年記念



創祀六百八拾年祭碑



須賀神社

昭和三八年 (一九六三)

## 念 記 十 六 百 六 十 六 祀 創

御祭神 建速須佐之男命

祭日 旧六月十五日

本殿一坪 拜殿十一坪 境内地六二〇坪

由緒

恭しくも牛生鎮守須賀神社は累世祠職明性院記によれば後醍醐天皇の元應元年笠神村の者共鬼門守護の神としてこの地に創建するところにして建速須佐之男命を祀る 明治四年七月村社格に加列 同四十一年十二月仁和多利神社に合祀せしか 大東亜戦争後昭和二十二年本殿を造営して神霊を迎え奉り 同三十七年宗教法人として復興設立登記す 同三十三年表坂を構築しこのたびはまた氏子崇敬者挙げて丹心淨財を献じ拜殿を新営し境内を整備して 一つは以つて創祀以来蒙り奉る廣大居辺なる神恩に報い奉り 一つは以つて尊くも輝しき由緒と輝事由とを石に碑し後世に傳へ奉らんとす

牛生鎮守 須賀神社 後醍醐代 創祀昌民 悉崇勸業

村栄家繁 恩以富嶽 威如天日 齋奉丹心 報賽徳光

皇紀二千六百二十三年

昭和二十八年五月吉日

須賀神社十五世宮司

昭和五十四年旧六月十五日

須賀神社十六世宮司

本郷 馨 謹識

本郷清彦 代 建立

須賀神社責任役員總代 鈴木新藏  
責任役員總代 佐藤寛三

總代

小林彦次郎

全

鈴木清五郎

全

佐藤一郎

全

佐藤市太郎

全

鈴木武治

全

小林彦七

全

伊藤幸造

全

高橋雅男

全

津久浦精

全

伊藤政一

全

佐藤又四郎

全

小野幸一

全

鈴木芳■天

全

阿部幸雄

全

水間製藏

全

佐藤作治

全

佐藤孝

全

鈴木平藏

全

遠藤宇内

全

佐藤勘一

## 60 須賀神社 (No. 735) 昭和四三年(一九六八)

鈴木新三郎翁ハ明治二十二年父新之丞氏ノ長男トシテ宮城郡多賀城村笠神字牛生ニ生ル篤実温厚ニシテ家業ニ精勵シ當時大代漁業組合ヲ補佐シ爾來理事及ビ組合長ヲ歴任スル事実ニ二十有余年ニ及ブ其ノ間昭和七年法ノ改正ニ依リ出資組合多賀城漁業組合トナリ昭和十七年県水産課ノ指令ニ基キ軍協統合セラレ塩釜市漁業会ニ編入シ同時ニ漁業權獲得等ニ日夜尽瘁ス偶々昭和二十二年塩釜港發展ニ伴ヒ一本松地区海面ノ塩釜市ノ所有ニ帰セシカ我々漁民ノ生活ニ脅威ヲ感ズル事甚ダ大ナルヲ思ヒ翁ハ組合員ノ先頭ニ立ツテ多賀城村議會ヲ説得シテ昭和二十四年塩釜市ニ分村合併完了マデ東奔西走席暖マル暇ナク幾多ノ苦難ト闘カイ其ノ心勞察スルニ余リアリ当今牛生及ビ大代区浅海漁業ノ發展途上ニアルハ之レ編ニ翁ノ業績牧挙ニ逸ナキ所以ナリ

茲ニ明治百年ヲトシ頌徳碑ヲ建立シ永ク頌スト爾云

昭和四十三年十一月三日

松本文四郎

謹撰

發起人

塩釜市牛生地区行政委員

元 同

小林彦七  
佐藤養吉  
伊丹松之助  
伊藤泰昭

建立者芳名願不同

小林彦七	阿部林吉	佐藤養助
伊丹松之助	鈴木二郎	佐藤市太郎
佐藤養吉	佐藤又平	伊藤留雄
伊藤泰照	佐藤又四郎	佐藤幸之丞
松本文四郎	鈴木芳夫	鈴木幸雄
佐藤勘一	佐藤長助	伊藤哲夫
佐藤静	鈴木えなち	佐藤作治
鈴木尚雄	鈴木二萬	鈴木敏雄
鈴木利吉	鈴木章	仙石久吉
鈴木八雄	阿部幸雄	鈴木鬼藏
鈴木龜太郎	渡辺幸衛	郷古功
鈴木龜治	鈴木清五郎	小林彦次郎
鈴木詔詞	阿部良三	鈴木武雄
鈴木國有	佐藤豊藏	穴戸勇
水間豊藏	佐藤朝吉	伊藤幸造
鈴木武次郎	伊藤政一	岩泉睦夫
小林盛	阿部きよ子	鈴木春治
佐藤三之助	鈴木健一	赤間與市
佐藤栄七	鈴木七郎	鈴木武治
佐藤三藏	鈴木仙之助	鈴木兵之助
佐藤勝治	鈴木新二	櫻田由之助
		伊藤盛

尾島町

伊藤石材店刻

# 創祀六百八拾年祭碑

鎮守須賀神社  
御祭神  
建速須佐之男命

責任役員總代

佐藤寛三  
小林一夫

總代 世話役 (順不同)

小野幸一	鈴木菊治	村上彦之
佐藤勘一	水間正夫	菊池尚市
小林彦一	赤間元男	青柳伸
伊藤政一	鈴木春治	佐藤今朝吉
佐藤又一	佐藤留雄	阿部善一
鈴木清	鈴木秋夫	鈴木春夫
佐藤賢治	佐藤襲三	熊谷保
佐藤榮七	菊池勝衛	阿部喜一
我妻豊	佐藤正芳	
鈴木勝矢	松本久忠	
佐藤勝治	小川弘	
佐藤三郎	鈴木敏雄	

参母

平成十一年旧六月十五日  
須賀神社第十七世宮司  
本郷敦子

牛生町内会長	鈴木新一
芦畔町内会長	福島紀勝
舟入東町内会長	佐藤勘一

## 五 墓標

62・64は自然石、63・65は半截した円礫を使用したものである。前者は男女連名の墓標となっている。

62 牛生A (No.725)

天保三年(一八三二)・弘化四年(一八四七)

七十三才

弘化四未年八月四日

鐵叟淨輪信士

月溪知明信女 (請花)

天保辰年七月八日

年五十五



63 牛生A (No.726)

嘉永元年(一八四八)

嘉永元年

○ 杜性智甫信女 (請花)

四月十日

さよ



64 牛生A (No.727)

文久三年(一八六三)・明治六年(一八七三)

三藏六十

明治六十月廿

瓊道玄□信士

□妙照信□

文久三亥四月三日

65 牛生A (No.728)

明治四年(一八七一)

勇吉

明治四未三 妻

○ 章宗智憲信女 (請花)

二月五日 六十才



## 第四節 民俗

### 一 地域の概要

#### 1 塩竈市への編入

現在、牛生町は塩竈市の一部であるが、昭和二十四年までは多賀城村に属していた。牛生は海に近いこともあり、海苔・牡蠣の養殖が盛んな地域であった。この時代に牛生にあった家のほとんどが養殖業に携わり、漁業が生業の基盤になっていた。牛生は塩竈町に隣接するという地理的条件から、生活の上では塩竈と密接しており、生業の面でも塩竈漁業組合に加入していた。

『塩竈市史Ⅱ 本編Ⅱ』によれば、この時期多賀城村・塩竈町・七ヶ浜村・利府村の一部の合併が持ち上がったが、話がまとまらないうちに塩竈町単独での市制移行となった。牛生は合併を望んでいたが、それが成らなかつたために、多賀城村から分離し、塩竈に編入する動きが活発になったとされている。この時「行政区域編入二閲スル請願書」が出され、編入を希望する主な理由として、漁業並びに水産加工業の面で塩竈と密接な関係にあること、児童の多賀城小学校への通学が不便なことが挙げられている(塩竈市史編纂委員会)



第12図 牛生地区民俗調査関連図

一九八六。このような経緯で、牛生は昭和二十四年二月一日に塩竈市に編入され、現在に至っている。

#### 2 屋号

ウエノイ(上の家)  
カミノイ(上の家)  
シモノイ(下の家)  
トボタ(十穂田)  
ヤブノイ(藪の家)

#### 二 人々のつながり

##### 1 契約講

現在のように多くの住宅が建ち並ぶ以前牛生には契約講が一つあり、牛生の旧家約二〇戸が加入していたとされている。解散からかなりの年月が経っており、詳細は不明である。

現在牛生には、葬儀の補助をしたり、訃報を知らせる組織がいくつかあるが、それらは地域の戸数が増えると同時に、近隣の家が集まって組織していったとされている。その中のいずれかが古くからの契約講の流れを汲むものなのか、それとは無関係に新たに組織されたものなのか、現時点ではまだ明らかになっていない。

## 2 信仰に関わる講

## (1) 祇園講

須賀神社を信仰し、守る組織であるとされ、ギンゴコウ(祇園講)と呼ばれている。須賀神社の氏子であっても入っていない家が多く、平成二八年時点では、九戸によって構成されている。

主な活動内容は、毎年一〇月一五日前後に行われる集まりである。一戸から一人が参加し、参加者はほぼ男性である。講で所有している「祇園講當前帳」によると、昭和四八年までは旧暦一月一五日和一〇月一五日であったが、話し合いの結果、翌年からは新暦で行うとされている。また、固定されていた一五日という日にも、平成二〇年からはその前後の講員の都合の良い日に行われるようになった。平成二七年までは一月と一〇月の年に二回行われていたが、平成二八年から一〇月の一回のみに変更された。

当日は近隣の店に講員が集まって、講で所有している御神像(附章参照)を拝み、柏木神社の神職による祈禱を受ける。平成二七年頃までは、トウマエ(当前)やヤド(宿)と呼ばれる当番の家を会場にしていたが、その後近隣の店を利用するようになったという。この日に拜まれる御神像が須賀神社の御神体であるとも言われており、「祇園講當前帳」とともにヤドで管理されている。

## (2) 山の神講

牛生にも、美里町(旧小牛田町)の山神社を信仰する女性の講集団があったとされている。活動をしなくなってからかなりの年月が経っており、その詳細を把握することは難しい。春先に講員の家に集まったり、

小牛田に大勢で連れ立って参拝に行っていた様子が断片的に伝えられている。

## 三 神社・小祠

## 1 須賀神社

牛生の鎮守の神であり、祭神は須賀佐之男命である。スカンジヤ(須賀神社)と呼ばれているが、以前はギンゴサマ(祇園様)と呼ばれることもあった。高台にあるために海上からもよく見え、船乗りの目印になっていたとされている。明治四二年に笠神の仁和寺神社に合祀されるが、昭和三六年に分離した。合祀された際も社殿の移動はなく、牛生に残されていた社殿で祭りも行われていたという。

神社の組織には、会長・副会長・会計・祭典委員(総代)という役があり、祭典委員は一五名ほどで活動している。かつては神社を管理するベツトウ(別当)がおり、決められた二戸が務めていたというが、現在は役員によって神社の運営がなされている。

祭日は旧暦六月一五日であり、今まで祭日の変更はないという。安永三年の「風土記御用書出」にも祭日としてこの日にちが記録されている。当日は柏木神社の神職による祈禱が行われ、神社の役員たちが集まる。神職によって赤い幣束が供えられるが、柏木神社管轄の神社の中で、赤い幣束を使うのはここだけである。柏木神社一四代宮司が祭祀を執り行っていた昭和初期までは、オユダチ(お湯立ち)という神事が行われていた。拝殿の前で二つの釜に湯を沸かし、宮司がその湯を笹の葉を使って周囲にかけるものであったという。湯が体にかかると風邪をひかないと言われ、七ヶ浜・塩竈・松島の方からも御利益を求めて多くの人が訪



焼失した舞殿



オユダチの水を汲んだ井戸と水樽箱



直金のようす

れたという。神社付近にある個人の敷地内には、オユダチの水を汲んだとされる井戸が残っており、傍らには水神碑が祀られている。

前日の旧暦六月一日には宵祭りが行われる。この日も柏木神社の神職による祈禱があり、参加者はキユウリ二本と日本酒を持って神社を訪れる。宵祭りでキユウリを供えるまでは、たとえ畑のキユウリが収穫に適した大きさになったとしても食べてはいけないとされており、昔は厳しくこの決まりを守る家が多かったという。供えられたキユウリと日本酒はナオライ（直金）で振舞われるが、ナオライではこの二つ以外を口にしないという決まりもある。余ったキユウリは翌日の本祭のナオライで漬物にして出される。キユウリを供える理由としては、須賀神社の神様はカツパ神であるからとも言われている。

また、須賀神社では祭日に神楽が奉納されていた。奉納し始めた時期は定かではないが、終戦後であるとも言われている。その後、須賀神社だけではなく、塩竈神社にも奉納するようになり、その縁で塩竈神社から舞殿が譲られた。しばらくはこの舞殿で神楽を奉納していたが、平成五年に不審火によって焼失した。

## 2 防人様

須賀神社社殿の横に、サキモリサマ（防人様）と呼ばれる石の祠が祀られている。速須佐之男命を先導して守る神であると言われているが、詳細は不明である。須賀神社の祭日に、柏木神社の宮司による祈禱が行われ、須賀神社と同じように赤い幣束が供えられる。



防人様



平成28年7月17日例祭のようす

## 3 牛神石

須賀神社の鳥居の横には、ウシガミイシ（牛神石）という石があり、これが牛生の地名の由来になっているとされている。この石にはオアシ（御足跡）と呼ばれる楕円形の窪みが二つあり、これはその昔、坂上田村麻呂がここから七ヶ浜に渡る時に馬（または牛）の蹄をかけた跡であると語られている。

石は昭和四三年頃、道路拡張のためにここに移動されたもので、元々は個人の敷地の入口にあった。



牛神石

## 第五章 留ヶ谷村

### 第一節 地理的・歴史的環境

#### 一 地理的環境

留ヶ谷は多賀城市の中央部北側にあり、北部が塩竈市と接している。北部をJ R東北本線が横断しており、東部は野田の玉川と称される小川が流れている。旧留ヶ谷村は、現在の行政区ではおおよそ留ヶ谷一・二・三丁目、中央一・二丁目、三丁目の一部にあたる。

地形的にみると、東宮浜層や利府層と呼ばれる標高約二六メートルの丘陵地が主体であり、それに大小の谷が入り込んだ複雑な地形となっている。北側は浮島、西側は高崎の丘陵部に続き、南側は砂押川に向かって傾斜している。東側は、伝上山地区のある丘陵部との間が大きな谷状の地形となっており、昭和三六年の航空写真ではその跡全体が水田となっている。南半部はアジア太平洋戦争末期、多賀城海軍工廠建設に伴って男子工員寄宿舎等が建設され、地形が大きく改変された。現在では学校や住宅地となっているところが多いが、北半部には丘陵上の畑や、谷の際に開かれた水田があり、旧地形をど似た地域がまだ残されている。風土記御用書出には、

#### 塋

- 一 南八当部八幡村境当村分龍ヶ崎と申所々
- 一 北八当部塩竈村境当村分野田と申所迄

#### 横

- 一 東八当部下馬村境当村分能ヶ田と申所々
  - 一 西八当部高崎村境当村分上野と申所迄
- と四至を記している。龍ヶ崎はJ R多賀城駅南正面の丘陵南端部、野田

はJ R東北本線が横断するあたりであり、能ヶ田は野田の玉川の周辺、上野は市道史跡連絡線を挟んだ地域で、明治一九年の地籍図では高崎分となっている。北・東・西側については現在の留ヶ谷地区と同様であるが、南側は丘陵の裾部を含み、西側は現在より西側の地域まで含む広い範囲が留ヶ谷村であった。

#### 二 歴史的環境

留ヶ谷地区には縄文時代から近世にかけて、七箇所の埋蔵文化財包蔵地がある。縄文時代の遺物は、本地区に含まれる高崎遺跡の東部、野田遺跡、留ヶ谷遺跡から石鏡が数点出土しているが、この時期の具体的な様相は明らかではない。古墳時代の遺跡としては稲荷殿古墳があり、横穴式石室を持つ七世紀の円墳であることが判明している（多賀城市史編さん委員会 一九九二）。同時期の須恵器窯が高崎遺跡の東部で発見されている（多賀城市教育委員会 二〇〇七）。奈良・平安時代のものとしては、野田遺跡で多賀城創建期の竪穴住居が（多賀城市教育委員会・塩竈市教育委員会 二〇〇五）、高崎遺跡の東部で奈良時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物、土器埋設遺構を発見している。留ヶ谷遺跡では土壘や堆積土から灰釉陶器が出土している（多賀城市教育委員会 一九九八）。中世の遺跡としては矢作ヶ館跡、桜井館跡がある。矢作ヶ館跡小規模な低丘陵を利用した単郭式の山城で、南北約四〇メートル、東西三五メートルの楕円形の平場を取り巻くように空堀がめぐっている。一三世紀後葉の古瀬戸瓶子が出土している（多賀城市教育委員会 二〇〇三）。桜井館跡は、西側から延びてきた舌状台地の先端を堀切で分断した東西一三〇メートル、南北八〇メートルの館跡である。平場の

西側から北西部にかけて土塁があるが、中央の平場では同時期の遺構は確認できなかった（多賀城市教育委員会、二〇一四）。留ヶ谷遺跡は土塁や空堀、平場等が南北一七〇メートル、東西八〇メートルの範囲で確認できる。中世の館の一部を江戸時代に屋敷として利用しており、現代に至るまで使用していたことが明らかになっている（多賀城市教育委員会、一九八七）。

上幅六メートル以上の空堀からは、一五世紀以降の瓦質播鉢や青磁椀、慶長年間の肥前陶磁（唐津）が出土しているが、一三・一四世紀の東海地方産無釉陶器の甕や播鉢も出土しており、周辺に鎌倉時代の遺構も存在した可能性がある（多賀城市教育委員会、二〇〇八）。



東から見た紅葉山・青木沢方面（昭和44年）



東上空から見た多賀城市中央部の様子（平成4年）

## 第二節 地名と屋敷名

## 一 地名

各資料に見える留ヶ谷村の地名は表3のとおりである。各地名の解説を行うにあたり、「風土記御用書出」は「書出」、陸前国宮城郡各村字調書」は「調書」、「多賀城村聚落の機構」地名の研究」は「研究」、「多賀城町誌」は「町誌」の略称により記述する（第二章第三節を参照）。

青木沢（あおきさわ） 神明社の小名として「青木」がある（書出）。「町誌」には「青木沢に町役場が落成」とあり、戦前・戦後には現在の多賀城市役所周辺を指す地名であった。しかし、明治一九年の地籍図でみると、村の南半部は多賀城市役所等が立地する低丘陵の東麓から自衛隊宿舎の西側周辺にかけて、下田、下長峯、上長峯、青木、景屋敷と稲荷殿が南北に細長い地域として示されており、青木はその西側よりにある小名であった。



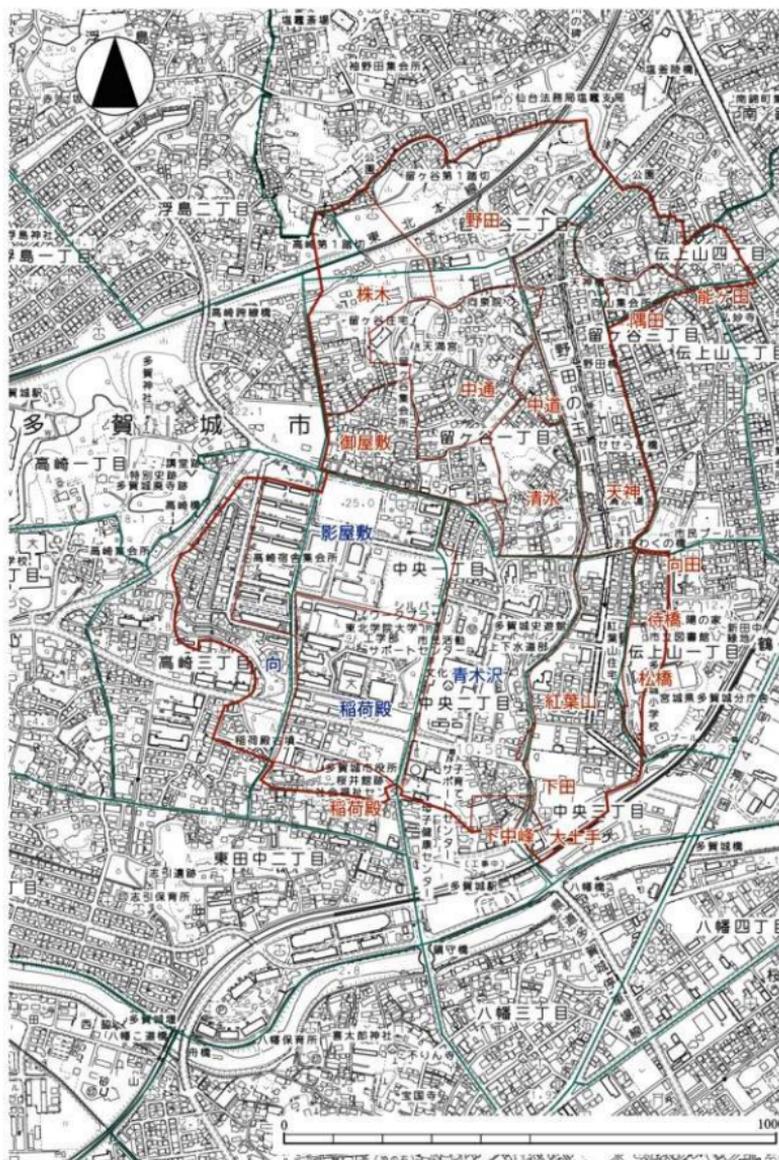
第13図 留ヶ谷村地籍図

表3 留ヶ谷村小名

	風土記御用書出		宮城郡各 村字調書	戦後
	小名	小名以外		
むとう	○			
青木	○			
田子屋	○			
大久保		○		
龍ヶ崎		○		
大久保		○		
野田			○	○
能久田			○	
隅田			○	
中道			○	○
株木			○	○
御屋敷			○	○
景屋敷			○	○
稲荷殿			○	○
青木沢	△		○	○
中沢			○	○
上長峯			○	○
下長峯			○	○
清水			○	○
迎松			○	
松下			○	○
紅葉山			○	○
大土手			○	○

旭ヶ丘（あさひがおか） アジア太平洋戦争が始まり、本市に海軍工廠ができること、留ヶ谷区の影屋敷、稲荷殿、青木、上中峯、下中峯周辺から高崎区にかけての一带は、工員養成所や工員寮の宿舎用地として開発され、終戦後は進駐軍に接収されて近代的な宿舎に改造され、区画整理も行われて近代的な住宅地に変わった。接収が解除された後は国有地となり、宿舎は開放されて一般住宅となった。昭和三四年旭ヶ丘区という独立した行政区となった。

稲荷殿（いなりでん） 塩竈（市の）土井氏の（所）有。元稲荷殿ありしもその後荒廃し、跡形もなくなっていた。最近小作人鈴木某病気に罹り、祓いをしたるに、稲荷大明神現れ「自分のお宮は破れたままにし、自分の座っている地を全部田にして、肥料を頭から施していられるのが残念で病気にしたのだ。お宮を建てて立派に祭つてくれるならば、たちどころに治してやる」とのこと、小作人は大いに恐縮して地主と相談



第14図 留ヶ谷字名分布図

の上、田のほとりに小祠をたててこれを祭った。すると病氣もやがて全快したとの地方人の話（『研究』）。

大土手（おおどて） 村の南東部。砂押川の北側で、丘陵部の麓。現在の中央三丁目南端部。

面和久橋（おもわくのはし） 野田の玉川に架かる橋で、その北が天神、南側が紅葉山となる。「封内名跡志」には、八幡より塩竈に越える所の圭橋（土橋）と記されている。現在の留ヶ谷三丁目と中央三丁目の間。

御屋敷（おやしき） 村の西側で西は高崎村の上野と接している。『研究』では、屋敷の形はあるが、何時如何なる人の住所であったかは不明としており、『町誌』では、開墾した時、焼土、灰や土器類が出土したことを記している。現在の留ヶ谷一丁目の西端部にあたるが、明治一九年の地籍図ではその西側（現在の上野クラウンド）も含むような形状に示されている。

影屋敷（かげやしき） 屋敷の形はあるが、何時如何なる人の住所であったかは不明（『研究』）。現在、東北学院大学工学部構内の北平部

株木（かぶき） 留ヶ谷一丁目の北西部。

上中峯（かみなかみね） 明治の小名。現在の東北学院大学工学部構内。

桜井山（さくらいやま） 多賀城市役所西側の高台で、全体が桜井館跡となっている。留ヶ谷村南端の村境。

清水（しみず） 阿部の松橋のあたり。道路に沿って清水湧出している（『研究』）。阿部の松橋は面和久橋のことで、その北西約一四〇メートルの地点、丘陵の東麓に井戸がある。現在はコンクリートで覆われているが、「書出御用書出」の名水の



桜井山

項に「清水屋敷 白清水」とあり、いかなる早魃にも枯れることはない」と記されている。

下田（しもた） 現在の中央三丁目付近であり、昭和三八年の航空写真で見ると南北に細長い水田地帯となっている。その形状は明治の地籍図とほぼ一致している。

下中峯（しもなかみね） 明治の小名。現在の多賀城市役所周辺。

隅田（すみた） 現在の留ヶ谷三丁目の北東部。

田子屋（たごや） この地の鈴木本家の居所。数百年前初めて田圃に掘立小屋を作り、開墾に従事し、子孫はそのままそこに住しているため、人呼んで田子屋という（『研究』）。向泉院の小名として記載されている（『書出』）。

寺山（てらやま） 『町誌』に「東北電力の工員養成所あたり」とあるので、現在の中央二丁目二十五、多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館周辺。その東側の高層住宅周辺にノランバがあったという。

中沢（なかざわ） 明治の小名。現在の中央一丁目の北部。

中通（なかどおり） 留ヶ谷一丁目の中間。

中道（なかみち） 留ヶ谷一丁目の東端部。

能ヶ田（のげた） 現在の留ヶ谷三丁目の北東部。

野田（のだ） 留ヶ谷村の北部。現在の留ヶ谷一丁目。

古館（ふるたて） 邊見遠江守とかの居館。玉川堤の南隣の小高き山。その上に約一反歩くらいの



古館



寺山

平地あり。その周囲に土塁及び外堀の形が残っている。古館は矢矧(やはぎ)館とも言い、その麓の田を矢矧田と言っている」と古館主人鈴木老の言(『研究』)。

松橋(まつばし) 村の南東部、笠神村石崎と接している。現在の多賀城小学校敷地の西半部からその北側にかけての地域。明治期には北側の待橋を含む地域であった。

待橋(まちばし) 村の南東部、笠神村の遠下と接している。松橋の北  
迎田(むかいだ) 明治の地籍図では留ヶ谷村の中央東側にあつて広い範囲に及んでいたが、現在では中央三丁目北東部の狭い地域となつている。  
むとう 天神社の小名として記載されている(『書出』)

紅葉山(もみじやま) 留ヶ谷の丘陵地帯と田圃を距てて向山から小学校裏手にかけて丘陵地帯(『町誌』)とされ、現在の多賀城小学校の北西部にその名が残る。「封内名跡志」には天和四年(一六八四)に仙台藩五代藩主吉村が郡司に命じて楓を植えたことが記されている。



旭ヶ丘地区(平成7年)



待橋



第15図 留ヶ谷村屋敷名分布図

## 二 屋敷名

〔風土記御用書出〕に次の五つの屋敷名が記されている。

清水屋敷	十軒
野田屋敷	六軒
田子屋敷	四軒
入屋敷	三軒
台屋敷	四軒

## 第三節 寺社仏閣

### 一 神社

#### 1 天満宮

「風土記御用書出」に「村鎮守 天神社」とあり、勸進した人も年代も不明と記されている。社は南向きの三尺作で、南向きの鳥居があったという。野田屋敷の弥五助と次兵衛が別当を務め、祭日は九月二五日となっている。

現在の境内は平成二年に造成されたもので、東西約二〇メートル、南北約三五メートルであり、その北端部に同年新築された社殿が建っている。かつての境内・社殿は現在地の西側にあり、鳥居と社殿の間には長床もあった。

社殿に四点の棟札が保管されており、大正二年の雨屋修繕棟札には「菅原皇大神」、昭和一四年の奉鎮祭天神社増築棟札には「天神社」、昭和三三年の改築棟札には「天満宮」の名称があり、昭和一四年から昭和三三年の間に天神社から天満宮へ名称が変化した可能性がある。

『多賀城町誌』によれば、天満宮は、もとは板井氏の内神（屋敷神）であり、太郎天神とも呼ばれたという。昭和五八年の棟札には「太郎天神」と記されている。



天満宮

### 2 神明社

「風土記御用書出」には青木という小名に「神明社」とあり、勸進した人も年代も不明と記されている。社は南向きの二尺作で、南向きの鳥居があったという。地主も別当もなく、祭日の三月一五日と九月一五日は、近辺に畑を持つている者四五人が申し合わせて神事を執り行うと記されている。

神明社は「多賀城町誌」には青木ではなく、稲荷殿にあったという地元の話を紹介している。青木と稲荷殿は続きの土地で、ともに東北学院大学の敷地になっており、明治二四年第二師団参謀部測量図には、その敷地に相当する位置に神明祠の表示がある。

アジア太平洋戦争末期、神明社の境内地は、多賀城海軍工廠建設に伴って男子工員宿舎等の建設予定地となり、天満宮境内に移転した。平成二年、境内地の整備が行われた際、天満宮に合祀され、社殿は取り壊された。

### 二 仏閣

#### 1 糸掛観音

「風土記御用書出」に「観音堂 宮城郡三拾三番札所之内拾八番」とあり、小名は向泉院境内と記されている。勸進した人も年代も不明であ



平成2年天満宮建築時（左から神明社、旧天満宮社殿、新天満宮社殿）

るが、地主、別当ともに向泉院であり、「観世音」と記された横額は、松嶋村瑞岩（巖）寺の先住天嶺和尚の筆とある。本尊は高さ五寸、金仏の聖観音坐像で、行基菩薩作とされているが現存しない。祭日は三月一日と八月一日と記されている。

『塩松勝譜』には、掛系観音として、「堂アリ観音大師像ヲ安ス。僧都恵心ノ製スル所ナリ。村婦蚕ヲ折レハ験多シ。懸テ堂中ニ満ツ故ニ称名ス。」とある。また、向泉院附掛系観音堂として、「寺前ニ観音堂アリ。大土ノ像モ亦行基ノ製スル所。村婦蚕ヲ折リ験多シ。乃五色ノ糸ヲ以テ之レヲ賽ス。糸掛リテ堂ニ満ツ。故ニ掛系観音ト称ス。」とあり、養蚕との関わりで、村の女性達の信仰を集めたことが記されている。名称はいずれも掛系観音となっている。もとは寺山にあり、元禄七年、向泉院とともに移転してきたと『多賀城町誌』には記されている。

## 2 太子堂

「風土記御用書出」の中の旧跡の項に「入屋敷 太子堂の跡」の記載があり、「石ハ多賀城城主の節被相建候義ニモ御座候哉唯今ハ松一本在之太子堂松と申伝候事」と記載されている。書出が作成された安永三年の時点で既に詳細不明の状態となっているが、『多賀城町誌』には「もとは入屋敷にあつたさうであるが、今



太子堂



糸掛観音堂（『多賀城町誌』より）

は向泉院の隣り田子屋（註1）の鈴木清蔵氏宅内に残っている」と記し、現在向泉院の西隣、鈴木氏宅地内にある「タイシドウ」を書出にある太子堂としている。

建築史的には三尺四方の堂建築であり、江戸後期と江戸末期から明治期の様式とが混在しているという（註2）。現在の本尊は、大正十一年に新調された僧形坐像の木像で、鈴木氏が保管している。この堂に関する資料はほとんどなく、祭日も三月一日か二月八日か明確ではない。

## 3 藤樹地蔵尊

留ヶ谷野田の旧家の入口に一間四面の堂宇があり、藤樹地蔵と呼ばれる地蔵菩薩立像が祀られている。子供の夜泣きを止めるのに効き目があり、夜泣き地蔵とも呼ばれている。堂内に保管されている明治二十四年（一八九一）奉納の扁額には「藤樹地蔵尊」とあり、昭和一二年の勧請札には「南無妙法蓮華經 奉勧請藤樹大明神」とある。明治二十四年の扁額は、その時期の存在を確実に示すものであるが、地誌等には記載がなく、不明な点が多い（註3）。



糸掛観音堂（『多賀城町誌』より）

註1 田子屋は向泉院周辺の小名であり、鈴木氏の屋号は院の下の家である。

註2 『多賀城市の近世社寺建築調査報告書』（平成一九年三月）

註3 堂内に勧請札一点、扁額一点、絵馬三 points があり、最も古いものは文久二年（一八六二）の絵馬である。しかし、No.10の義経と弁慶を描いた絵馬は天満宮に奉納されたものであり（多賀城市郷土館保管の写真で確認）、ほかにもこの地藏尊に奉納されたものではない資料が混在している可能性があることから、上限年代を示す資料としては扱わなかった。

三 寺院

1 向泉院

「風土記御用書出」に、留ヶ山向泉院についての記載がある。所在地の小名は田子屋であり、臨濟宗で、仏殿は南向きの竪四間半、横六間の規模となっている。本尊は高さ五寸の聖観音座像であるが、作者は不明となっている。末尾に「寺書出一冊相添指出申候事」との記載があるの

で、詳細はその寺書出に記載されていたと考えられるが現存していない。『塩松勝譜』には「向泉院附掛糸観音堂 玉川ノ南数百歩ノ丘上ニ在リ。相伝フ。僧正行基ノ創建スト。後久ク廢セリ。正徳三年。僧衆田再興セシト。（巡覧記二曰ク。南叟西堂開基。松島瑞嚴寺ニ隸ス）とあり。正徳三年（一七一三）の再興と、瑞嚴寺の末寺であることを記している。向泉院はもと寺山にあり、元禄六年（一六九三）に現在地へ移ったという伝承がある。当時、現在地には蒲生の邑主和田氏の妾宅があり、元禄六年に逝去した後、その住まいを庫裏にしたという。『町誌』ではこの和田氏とは、御船入堀を開削した織部（房長）と推定している。和田氏側室の墓標は元禄六年五月五日の年次が刻まれたもので、境内北側の墓地内に現存している。



向泉院（『多賀城町誌』より）

一 現境内一反四畝廿九歩

内

四畝廿歩

一反九歩

墓所  
堂宇敷地  
其外

立木雑木二本 二尺廻

立會

右住職

菅野□左工門

調査

大浪成光

万城目盛近

右住職

花山向冷



第16図 陸前国宮城郡寺院境内外区画図（留ヶ谷村向泉院）

宮城県公文書館所蔵の複製をトレース

## 第四節 石造物

### 一 分布と概要

留ヶ谷村地域で確認した石造物としては、中世の板碑、近世・近代の供養塔、鳥居、幟立、石燈籠、手水鉢、近代の顕彰碑・沿革碑、墓標などがある。それらの所在地の概要については以下のとおりである（石造物の記載方法については第三章第四節第一項を参照）。

**野田 A** 留ヶ谷二丁目の、塩竈市との境界に近い道路沿いに八基の供養塔が祀られている。かつては現在地よりも北側の、行政区上は塩竈市袖野田町にあったものである。

**野田 B** 留ヶ谷二丁目一番と二番の境界付近にあったが、平成二五年一〇月に宅地開発によって移動することとなり、現在は宮城郡松島町の龍潭寺に移設されている。

**野田 C** 留ヶ谷二丁目九番の櫻井家敷地内にあったが、宅地開発によって移動することとなり、現在は塩竈市尾島町の祇ヶ崎稲荷神社の境内に移設されている。

**野田 D** 野田 C の西側、留ヶ谷二丁目九番の櫻井家敷地内に地蔵堂があり、藤樹地蔵と呼ばれる地蔵菩薩立像が一体祀られている。



野田 D



野田 A

**向泉院 A** 本堂北側の墓地に歴代住職の墓標があり、新たに造立された歴代住職の墓標に並んで中興の象田和尚の墓標と、和田織部側室の墓標がある。山門前に石仏立像が一体、糸掛観音堂前に手水鉢が一基、石燈籠が二基あり、観音堂内には板碑が一基保管されている。これは『市史4巻』に「昭和五十二年、中央二丁目にある東北電力学園で実習作業中、地下五メートルの深さから発見された」と記されているもので、寺山と呼ばれるところである。



向泉院 A

**向泉院 B** 向泉院の北側に駐車場があり、その一角に供養碑四基と墓標一八八基が集められている。墓標は、寺山のノランバナなど周辺各地から移設したものと、詳細は不明である。



向泉院 B



第17図 向泉院境内石造物分布図

清水 A 面和久橋の北西約一四〇メートルの地点に井戸があり、それに隣接して出羽三山塔と水神塔がある。

清水 B 面和久橋の西約六〇メートルの地点、個人宅への通路沿いに名号塔と馬櫓神がある。

青木沢 多賀城市役所の庁舎北側に沿革碑が二基ある。



清水 A



清水 B



青木沢



第18図 留ヶ谷石遺分布図1



第19図 留ヶ谷石遺分布図2

## 二 板碑

66は金剛界大日如来を主尊とした無紀年の板碑である。種子は「ア」であり、その下に「一見卒塔婆、永離三惡道、何況造立者、決定成菩提」と偈頌が記されている。この偈頌は県内の板碑に散見されるものであるが、四句目を「必生安楽国」としたものが「諸回向清規式」や「浄土諸廻向宝鑑」に引用されており、この偈頌はそれを改作したものと説明されている（加藤 一九九〇）。偈頌に続いて「施主」と刻まれているが、両者の間隔はせまく、しかも施主の二文字は偈頌の影りより細い。「市史4巻」では追刻の可能性を指摘している。細長い板状の石材を使用した板碑である。紀年銘がなく、年代は不明である。



(ハン)  
一見卒塔婆  
何況造立者  
永離三惡道  
決定成菩提  
施主



写真：『多賀城市史 4』より

## 三 近世・近代の供養塔

## 1 庚申塔

69は文化一三年(一八一六)の庚申塔。中央に「庚申」の二文字が大書され、上部には日天と月天が瑞雲を伴っている。講中として二名の交名が記されている。日付は九月吉祥日とあるが、九月二四日がこの年五回日の庚申の日にあたっている。

## 2 自然神信仰の塔

68は文化四年(一八〇七)の山神塔で、留ヶ谷村中による造立。自然神信仰の供養塔としては市内では古い事例。

83は嘉永四年(一八五二)の水神塔。当村中とあり、留ヶ谷村中によって造立されたもの。頭部には金剛界大日如来を表す「バン」が寛彫りされている。世話人として三名の名があり、石工は辻本屋七兵衛。

## 3 馬の守護神の塔

67、71、72、73、75、76、は馬頭観世音塔、74、82は馬糞神。

67は宝暦一年(一七六一)の馬頭観世音塔であり、市内では一八〇〇年代以降の造立が多い中、この塔はそれより三十九年前の造立であり、市内では古い事例である。

75は明治二年(一八九五)の馬頭観世音塔である。主題の左右に「志ろく□□馬」、「阿お毛馬」とあるのは馬の毛色を記したもので、それぞれ白栗毛馬、青毛馬であろう。

74は昭和一九年、82は明治二九年の馬糞神の塔である。いずれも個人で造立したものである。

## 4 山岳信仰の塔

84は元治元年(一八六四)の出羽三山塔である。頭部には胎藏界大日如来を表す「アーンク」が寛彫りされているが、涅槃点が一つ欠落している。中央には中央に湯殿山、右に月山、左に羽黒山が勢いのある筆運びで大書されている。日付の八日は出羽三山の御縁日。「邑中」に続け

て「講中」三二名の交名があり、先頭は肝入深□郎、久右衛門、次に菅野□右衛門と続き、以下は全員無姓である。

## 5 名号塔

70は弘化二年(一八四五)の「南蒙無量仏」の塔である。「南蒙」の意味は不明であるが、「南無」に通じるものか、と推定される。無量仏・無量寿仏は阿彌陀仏の異称であるから、南無阿彌陀仏を主題とした名号碑と理解できる。請花の両側に無姓の男性六名の交名がある。右側に「右八玉川」と記され、道標としての役割も担っていたようである。

81は安永二年(一七七三)の名号塔である。名号は円相や種子を伴わず、文字は全体的に稚拙な筆運びとなっている。請花の両側に無姓の男性九名の交名がある。

## 6 題目塔

77は明治三五年の題目塔である。現在、塩竈市の祝ヶ崎稲荷神社境内に移設されているが、もとは櫻井氏宅に祀られていたものである(註)。底部にホゾ状の造り出しがあり、台座にはめ込んで固定されていたもので、台座も現存している。

80は大正五年の題目塔である。中央には題目に続けて「櫻井家先祖代々六親眷属法界萬(以下不明)」とあり、左下には建立年次に続けて「櫻井(以下不明)」、「七ヶ濱村星興左工門五女〇全(以下不明)」と男女二名の名があり、施主となった夫妻と見られる。右下には大正一五年死去の男性と、昭和二年死去の女性の没年、行年、法名が記されており、施主夫妻の没後、追刻した可能性がある。

註 この塔の傍らに「南無妙法蓮華経桜井家馬□神/昭和六十二年五月九日吉日」と墨書された尖頭方柱状の木製塔婆がある。

67 野田 A (No. 576)

宝曆十一年 (二七六)

宝曆十一年辛巳

馬頭觀世音

三月三日 建立



0 30cm  
S=1/8

68 野田 A (No. 577)

文化四年 (二八〇七)

文化四年卯年

山神

二月十二日 留谷村中



0 30cm  
S=1/8

69 野田 A (No. 578) 文化二三年 (二八六)



S=1/8 0 50cm

日天 (瑞雲) 文化十三年  
月天 (瑞雲) 九月吉日

庚申

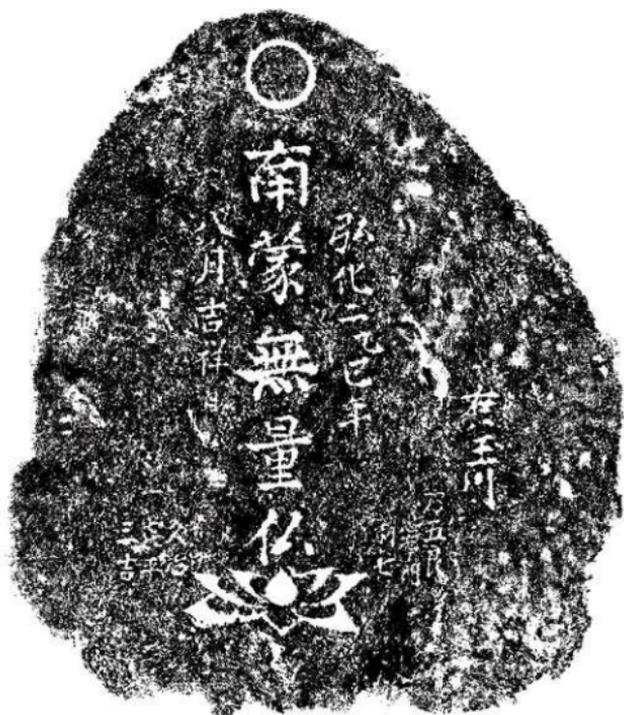
講中

与七  
半三郎  
長四郎  
新右門  
久四郎  
勘右門  
源八郎  
勘右門  
善五□□  
勘四郎  
義右門



70 野田 A (No. 579)

弘化二年(一八四五)



S=1/8 0 50cm



○南蒙無量仏

(請花)

弘化二乙巳年

八月吉祥日

右八玉川

万五郎

忠右衛門

朝七

久治

崑平

三吉

71 野田 A (No. 580) 慶応三年 (一八六七)



S=1/8 0 30cm

馬頭観世音  
慶應丁卯三年  
善三郎

十月十二日

石工  
庄吉



72 野田 A (No. 581) 明治二五年 (一八九二)



S=1/8 0 30cm

馬頭観世音  
明治廿五年

日





馬頭観  
明治  
九月



0 30cm  
S=1/8

73  
野田 A (No. 582)



馬櫛神  
昭和十九年四月七日  
願主 大川豊太郎



0 30cm  
S=1/8

74  
野田 A (No. 583) 昭和一九年(一九四四)

75

野田B (No. 589)

明治二十八年 (一九九五)



S=1/8 0 30cm

馬頭觀世音

明治廿八年

志らく□□馬

阿おも馬

六月廿九日

桜井□□吉



76

野田B (No. 590)

明治四十五年 (一九一二)



S=1/8 0 30cm

馬頭觀世音

明治四十五年二月十八日

鈴木忠八



櫻井善七建之

南無妙法蓮華經

明治三十五年旧十二月十八日



S=1/8 0 30cm

77 野田C (No.591)

明治三十五年 (一九〇二)

(地藏菩薩立像)



78 野田D (No.665)





大正十五年六月四日

行年八十四

古巖 永松居士

昭和二年四月七日

行年七十八

永室 妙壽大姉

南無妙法蓮華經 櫻井家先祖代々親眷屬法界萬

櫻井

大正五稔六月廿四日 七ヶ濱村星與左工門五〇

全

S=1/8 0 50cm

81 清水B (No.586) 安永二年(一七七三)



0 50cm  
S=1/8

安永二巳年  
南無阿彌陀佛  
七月二十九日  
(請花)

施主  
伊藏  
吉  
熱口  
六郎  
幸之助  
吉兵衛  
幸右衛門  
千太郎  
庄六



82 清水B (No.587) 明治廿九年(一八九六)



0 30cm  
S=1/8

明治廿九年  
馬櫃神

十二月三十日 菅野久次郎建





水

水神

八月八日 當村中

嘉永四亥年

石工

辻本屋七兵衛

世話人

伊藏

久治郎

兵太郎

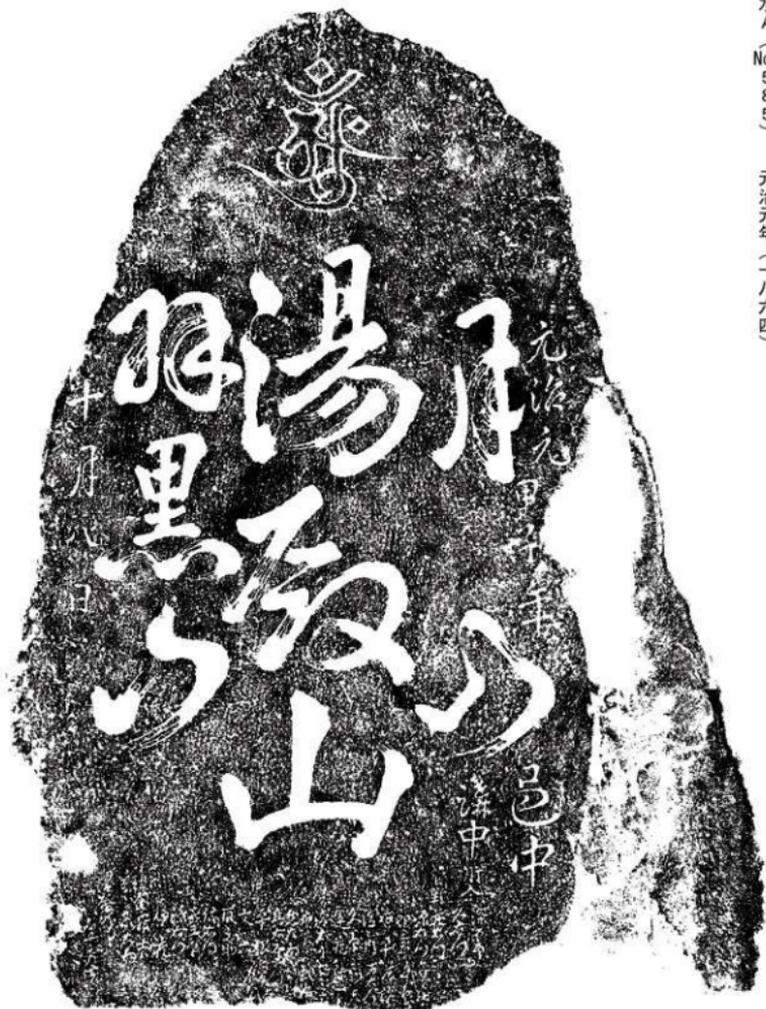
S=1/8 0 30cm



84

清水A (No. 585)

元治元年 (一八六四)



S=1/8 0 50cm

(バアーンク)  
湯殿山

月山

元治元 甲子年

羽黒山

十月八日

邑中  
講中 肝入

深三郎

久右エ門

菅野藏右エ門

源右エ門

子之  
与右エ門

卯三郎

治平

清之助  
万右エ門

久太郎

運藏

清太郎

市太郎  
民藏

惣太郎

兵太郎

平松

文六

辰之助

弥右エ門

喜三郎

口右エ門

伊藏

塩釜口吉

喜右エ門

塩釜町

石工庄七



## 四 鳥居・幟立・石燈籠・手水鉢

85は天満宮の鳥居である。現在の木製の鳥居が設置される以前のもので、現在は解体されて境内北側に置かれている。大正七年に奉納されたもので、「留ヶ谷安全」と記されている。文字を刻むところは平滑に仕上げているが、それ以外は凹凸のある荒々しい面をそのまま残している。

86・87、88・89はそれぞれ対となる幟立である。大正一二年に契約連中によって奉納されたもので、「区内安全」と記されている。

92は嘉永二年奉納された手水鉢である。世話人六名の交名があり、いずれも無姓の男性名である。

93は明治一九年の手水鉢である。当番菅野東左エ門によって奉納されたものである。

85 天満宮 (No. 372) 大正七年 (一九一八)

奉納 大正七年旧九月廿五日

奉納 大正七年旧九月廿五日

留ヶ谷安全

留ヶ谷安全



0 30cm  
S=1/8

86・87 天満宮 (No. 374・375) 大正一二年 (一九一三)

奉 大正十二年旧九月廿五日

奉 大正十二年旧九月廿五日

奉 大正十二年旧九月廿五日

契約連中

納 区内安全

契約連中

納 区内安全



東側



西側

0 30cm  
S=1/8



東側



西側

納

区内安全

契約連中



奉

大正十二年旧九月廿五日



S=1/8 0 30cm

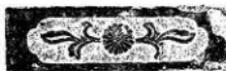
88・89 天満宮 (No.376・377) 大正二年(一九一三)



東側



西側



納 奉  
御神燈



西側南面

納 奉  
御神燈



東側南面

大正七年旧九月廿五日



西側東面

大正七年旧九月廿五日



東側西面

90・91 天満宮 (No.370・371) 大正七年(一九一八)

92 天満宮 (No. 366) 嘉永二年 (一八四九)



S=1/8 0 30cm

嘉永二年

九月廿五日

世話人 善三郎

□□

久兵衛

耕治

奉納

長太郎

□□



93 天満宮 (No. 367) 明治十九年 (一八八六)



S=1/8 0 30cm

当□

菅野東左衛門

明治十九年

九月十五日





東面



明治七戌年十月十八日



南面



奉納



おみ おさ お□ お□

北面

94 向泉院A (No.573) 東側

明治七年(一八七四)



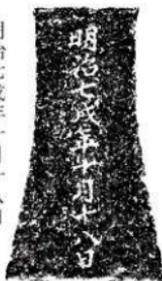
東面



西面



明治七戌年十月十八日



南面



奉納



おまの おかね おりへ おきやう

北面

95 向泉院A (No.574) 西側

明治七年(一八七四)



S=1/8 0 30cm

## 奉納

嘉永四年 亥年

八月十八日

清内

善三良

清太良

政吉

世話人 万太良



## 五 顕彰碑・沿革碑ほか

97は昭和五年の「興隆」碑である。向泉院の沿革を記したもので、寺の由来に続き、柏洲和尚による本堂屋根の改造、庫裏の改築を記している。裏面には「庫裏改築並位牌室増築寄附者芳名」として寄附者一三二名、特志者一名、総代四名、世話役四名の名が記されている。

98は明治三十五年建立の「天満宮一千年祭記念碑」である。

99は明治三十九年建立の「日露戦役記念碑」である。多賀城村留ヶ谷區からの従軍者八名を讃え、ウラ面に特別賛助者五名、賛助者三四名が列記されている。紀年銘の「上癸」は吉日のこと。

100は大正七年の「鳥居献燈記念碑」である。寄附者名、建設委員の名が列記されている。

## 97 向泉院B (No.383) 昭和五年(一九五〇)

妙心管長碧雲洞承天老大師筆頭

(オモチ)

留谷山向泉院は草創の縁由未だ詳ならず。松島中興大悲圓満國師を勧請して開山始祖となす爾來二百餘年の間平僧地たり圓通院柏洲和尚此の山に隱栖の後其嗣宗柏和尚之を繼承し法子柏洲和尚に傳ふ和尚住山の當初は農村畢年凶作の影響を被り寺門も又萎靡し頗る荒敗を極む和尚苦心して措振復興を期すること多年漸く權信の協力を求め以て本堂屋根の改造續て庫裏の改築をなす

茲に於て輪奐肯て盡さずと雖も則ち弊は常宇の整備を窺る故に和尚遷化の後 管長親下特に生前の功績を録し中興の嘉稱を加へ給ふ和尚並に總代諸氏の功實に視る可き也現住清洲和尚に當むるに願末を記せんことを以て予山僧不敏なりと雖も従来の宗盟遂に辭すること能はず聊か梗概を載りて其の責に任すと爾云ふ焉頌日

不須輪奐 整備昭衍 一 鄧膺處 道義源泉

積功累德 嚴護正傳 歸崇壇信 具足三緣

昭和二十五年十一月十六日 前住妙心現西園果徵外護誌

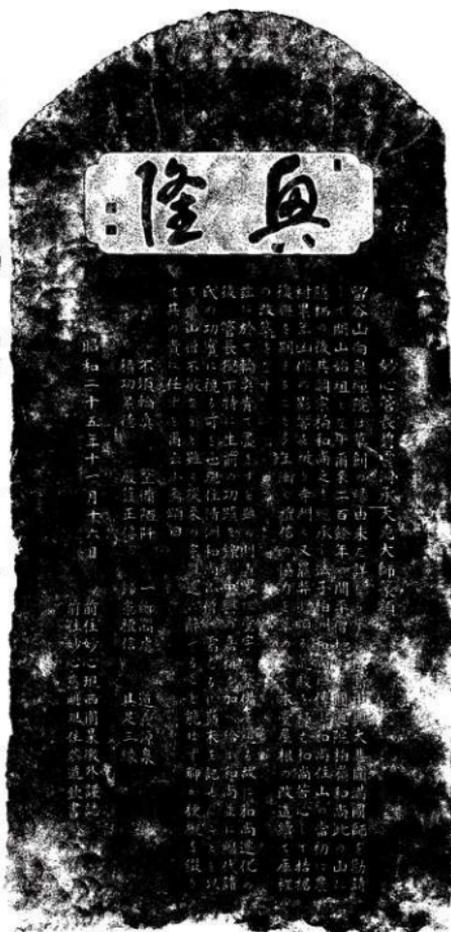
前住妙心慈明現住慈道歡書

## 興隆



(ウラ)

(オモテ)



0 50cm  
S=1/8

天満宮一千年祭紀念碑

明治三十五年七月二十九日

旧六月二十五日



菅野拾松 鈴木重太郎  
菅野春吉 櫻井善七  
鈴木萬藏 鈴木忠八  
菅野拾吉 鈴木龜吉  
櫻井善三郎 菅野武治  
鈴木方七 鈴木傳之助  
鈴木喜三郎 菅野庄治  
菅野久次郎 堂野若阿  
菅野勇治 鈴木信之助  
鈴木清治 菅野留松  
鈴木鶴治 鈴木徳治  
鈴木信四郎 鈴木徳藏  
菅野徳四郎 鈴木徳治  
菅野善吉 鈴木権内

見澤助治撰



S=1/8 0 50cm

(オモテ)



S=1/8 0 50cm



## 日露戰役紀念碑

日露戰役紀念碑 笠神小學校長山内養三郎題額  
 嗚呼明治廿七八年日露之戰  
 古今史乘所未曾見國家安危  
 之所繫也我師收全捷效膺懋  
 之功是雖由我大君之稜威  
 抑又非有軍人之忠勇與國民  
 之後援焉能策斯偉勳乎此役  
 我多賀城村留谷區從軍者八  
 人今刻其氏名於貞珉旌之閭  
 里以為後昆紀念庶幾振起我  
 區尚武之氣風乎

明治三十九年六月上澣

星守二撰并書



陸軍歩兵 一等卒 鈴木友之丞  
勳八等

全 菅野勇七  
勳八等

全 鈴木榮五郎  
勳七等

全 菅野九平  
二等卒

陸軍輜重輸卒 鈴木久三郎  
勳八等

全 櫻井直次  
勳八等

全 鈴木由右衛門  
勳八等

海軍四等機関兵 鈴木久四郎

發起者 菅野捨松  
勳七等

多賀城村長 菅野捨松

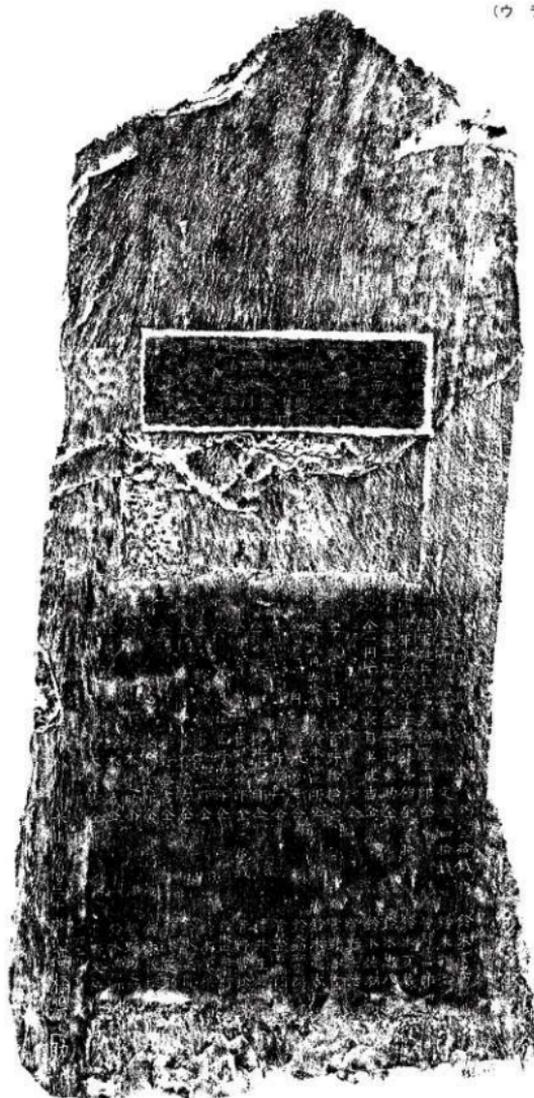
全村留谷區長 鈴木喜郎

周旋者 菅野久次郎

區長代理 菅野左一

西南戰役從軍者 鈴木重太郎  
 近衛一等卒 鈴木喜代治  
 鈴木榮之助

(ウ ラ)



明治卅八年  
天候失序穀  
不稔而民窮  
聖上  
皇后兩陛下  
憫之特免縣  
下租且賜金  
二萬五千円  
時村長菅野  
捨松與村民  
胥謀改修市  
川便灌溉以  
其備賃資衣  
食民頼安焉  
星守二撰

		特別贊助者	
	八幡 陸軍歩兵伍長勤務上等兵	伏谷 定	金三拾錢
	岩切 陸軍砲兵上等兵	佐藤平四郎	金四拾錢
	玉川 陸軍歩兵二等卒	佐藤善作	全
	東京 海軍一等機関兵	葉山奏助	金三拾錢
	金一円下馬区長	目黒健吉	全
	贊助者		全
	金 参 円	菅野捨松	全
	金貳円五拾錢	鈴木喜三郎	全
	金 老 円	鈴木万七	全
		菅野左一	全
		櫻井甚三郎	全
		菅野久次郎	金二拾錢
		菅野清次郎	全
		菅野喜三郎	全
	金五拾錢	菅野捨松	全
		菅野春吉	全
		鈴木重太郎	全
		鈴木栄之助	全
		鈴木留藏	全
		鈴木寅吉	全
	金四拾錢	鈴木清次郎	全
		鈴木文治	全
		菅野清之助	全
		鈴木栄松	全
		鈴木惣五郎	全
		鈴木丑之助	全
		鈴木捨松	全
		菅野菊之助	全
		鈴木清四郎	全
		菅野文治	全
		石工	全
		奉植杉繪二十本	高橋清之助



# 鳥居獻燈紀念碑

## 寄附人名

全	鈴木源一郎	一金十二円	菅野庄治	一金三円	伊藤惣四郎
全	鈴木助右工門	全	鈴木捨松	全	鈴木清四郎
全	花洲 鎌田作右工門	全	菅野孫四郎	全	阿部留次郎
全	土井運治	全	菅野兵右工門	全	菅野喜代治
全	櫻井為松	全	鈴木重太郎	全	鈴木多利藏
全	崎野千代吉	全	鈴木榮之助	全	鈴木久兵衛
全	我妻文次郎	全	鈴木八吉	全	鈴木栄八郎
全	小野寺文助	全	鈴木勇治	全	鈴木三之助
全	堀 喜之助	全	菅野留松	全	鈴木文七
全	留ヶ谷区契約二十八名	全	鈴木徳治	全	鈴木文七
全	鈴木善藏	全	菅野菊之助	全	鈴木養治
全	菅野捨松	全	鈴木亀吉	全	鈴木文四郎
全	櫻井甚三郎	全	鈴木丑之助	全	鈴木惣治
全	菅野左吉	全	鈴木徳治	全	鈴木きくよ
全	鈴木喜三郎	一金八円	鈴木寅吉	全	本郷勇次郎
全	鈴木清次郎	全	鈴木久次郎	一金五円	浮島蜂谷与助
全	菅野三喜	全	鈴木文藏	一金二円	塩釜村主 熊吉
全	菅野善吉	全	鈴木久三郎	全	菅野萬之助
全	櫻井善七	一金五円	菅野吉兵衛	全	菅野文治
全	菅野春吉	全	川崎宗柏	全	高崎 今村 積壽
全	鈴木竹次郎	一金三円	權太豊原宮城屋	全	浮島 蜂谷源太郎

大正七年旧九月二十五日

菅野与七

石工

塩釜町

志賀清弥

区長 菅野捨吉  
代理 鈴木助右工門  
櫻井甚三郎  
建 鈴木喜三郎  
鈴木善藏  
設 鈴木多利藏  
菅野喜代治  
菅野右市  
委 菅野春吉  
人 櫻井善七  
鈴木重太郎  
鈴木竹次郎  
鈴木榮之助

(オモチ)

101  
天満宮 (No. 378)  
昭和三年 (一九五八)



記念碑

留ヶ谷天満宮は文化財保存会長大河  
管田新田に天神社又は大田神社といふ  
管田新田公は學者出身の政治家又其の常  
なり水原氏と會ひ並へ大いに大陸文化の輸入に  
文學下も亦て當時の第一人者で大學教師に  
臥思の特長あり新田思馬の如衣今尚こ  
有名なり人口に膾炙されて居る是等三年  
家終半之内神といふ代も現在の場所  
昭和三十二年十二月某日のため破損  
人々の寄附により改築すこれを記念して碑を  
尚この附近に名所旧蹟あり

一 留ヶ谷山の泉流 和野新田に居住せり  
一 阿倍の待橋 野田新田に居住せり  
一 紅葉山 野田新田に居住せり  
一 清水 (五箇) 留ヶ谷一帯の丘陵を紅葉山と言ふ天  
昭和三十二年二月二十五日 留ヶ谷天満宮文化財保存会大

S=1/8 0 50cm

## 碑 念 記

### 多賀城町文化財保存会長兼類

留ヶ谷天満宮は俗に天神社又は太郎天神と稱し菅原道真公を祀る

菅原道真公は学者出身の政治家でその深い学識を認められ宇多天皇の信任厚く右大臣となり藤原氏と肩を並べ大いに大陸文化の輸入に貢献し寛平六年遣唐使に任命された。又詠や文章にも秀で当時の第一人者で太宰権師に左遷された時の詠歌「去年の今夜清涼に侍し秋思の詩篇独り断腸恩賜の御衣今尚ここにあり捧げ待ちて毎日余香を拝す」は余りにも有名であり人口に膾炙されている延喜三年歿す。その遺徳を敬慕しこの神社建立し永く旧家櫻井氏内神として祀りいつの代か現在の場所に奉遷された向学に燃える者の参拝今尚絶えることがない。明治三十五年一千年祭を行い修理を加へ更に大正二年修増築を行う。偶々昭和三十三年十二月暴風のため破損神木を用い留ヶ谷区民並びにその他敬神の念篤き人この寄附により改築すこれを記念して碑を建てたる

尚この附近に名所旧蹟あり

一、留ヶ谷山向泉院 和田新田に居住せし和田氏の菩提寺である

一、阿倍の待橋 野田の玉川の下流にかけた橋を安倍の待橋とも言い

一、紅葉山 阿倍貞任にゆかりがある潮の満干に依って海水がさしてくる

留ヶ谷一帯の丘陵を紅葉山と言う天和四年甲子春伊達綱村郡司に命じてこの山へ楓樹を植えさせた

一、清水(しみず) 紅葉山のほとり渾々清水の湧く井戸あり用水飲料水としている

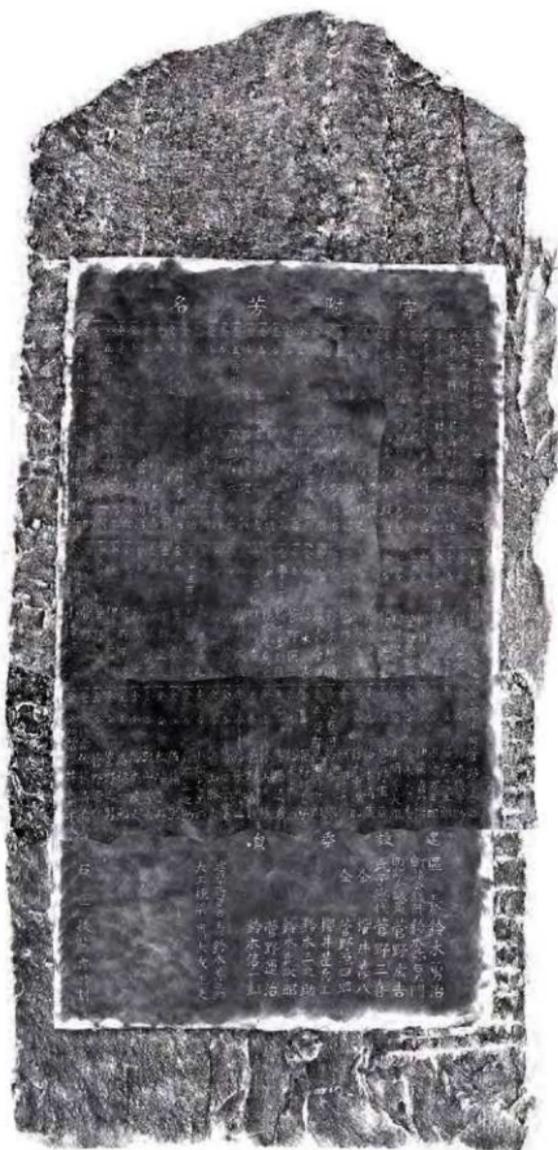
昭和三十三年二月二十五日

多賀城町文化財保存会長 賀川邦雄 撰

多賀城町長 山田勇四郎 書



(ウ ラ)





## 昭 忠 碑

## 第一師團長陸軍中將正四位勲一等功五級赤井春海家額

今茲昭和五年十一月宮城郡多賀城村在郷軍人分會ノ首唱ニ依リ舉村協力一致碑ヲ建ヲ以テ明治廿七八年戰役以降君國ノ爲從軍セル村内將士ノ忠勇義列ヲ顯彰シ其芳名ヲ不朽ニ傳ヘ後進ヲシテ永ク感奮興起スル所有ラシメントス恂ニ本ヲ立ツルノ美舉ト謂フベシ抑多賀城村ハ一千餘年前既ニ鎮國ノ城府ヲ置カレタル舊跡ニシテ又 後村上帝ノ皇子タリシ時三年駐駕ノ聖地タリ今ヤ僅ニ殘礎ヲ留ムルニ過ギザルモ山河依然トシテ往年ヲ想見スルニ足ル其靈氣磅礴トシテ冥冥ノ裡ニ幾多ノ郷人ヲ奮起セシメ國難ニ臨ンデ義才泰山ニシ身ヲ鴻毛ニスルニ至ラシメタリ今次建ツル所ノ碑ハ實ニ郷人ノ報本反始赤誠報國ノ結晶ニシテ從軍將士ノ威靈ヲ留ムル者ナリ豈其レ靈氣ノ充溢スルナカランヤ嗚呼舊跡更ニ此碑ヲ得テ靈氣益顯赫其感孚スル所蓋甚大ナル者アルヤ必セリ然ラバ則チ多賀城村ハ往古ノ城郭荒廢ニ帰スト雖モ爾今ニ城護國ノ士相踵イデ出現スル復奚ノ疑ハンは予ノ斯建碑ヲ指シテ本ヲ立ツルノ美舉ト讚稱スル所以ナリ古聖ノ所謂本立ツテ道生ズトハ其レ斯ノ謂カ

昭和五年十一月  
仙臺陸軍歩兵中佐從五位勲四等功五級菊地米三郎謹撰  
菊池市之進謹書



昭和三十五年(一九六〇)

## 記 功 碑

古く天平宝字の頃から陸奥の国府鎮守府所在地で東奥文化発祥地であった当町はこの由緒深い歴史と共にここに耕土の美田化を図り一段と光彩を得たのは衷心より欣びに堪えない処である。本地区は宮城郡多賀城町及び仙台市高砂、岩切の一部の東西に長いほぼ菱形の未整理地で小区画の水田が密集し地区全般に用排水道路等が不完である即ち用水は七北田川を水源とする宝堰水系、中野堰水系及び砂押川、加瀬溜池に依存しているがいずれも未流部は不規則な配置と水路断面の不整のため円滑を欠き加えるに下流に塩釜湾を控えているため潮害旱害を蒙ることも稀れでなくまた排水は地区中央を流下する砂押川を幹線として地区内の悪水は大体これに排出されるがこれまた位置断面等が不適当なため年々各所に湛水を見る実情であった。たまたま昭和廿五年当時建設次官の衆議院議員内海安吉先生の御協力により砂押川の改修工事が宮城県土木部において着工することになったのでこれを機として我ら関係農民多年の宿望であった区画整理事業を村長賀川邦雄氏外関係者が発起隣里郷党挙げて一丸となりこれが実行に当たったのである。その後衆議院議員宮城県土地改良協会長本間俊一先生はじめ関係各官庁の御指導監督を頂き積雪寒冷単作地帯農業振興臨時措置法の適用を受け総事業費一億三千余万円四ヶ年継続事業として国庫の助成を受け、かたわら昭和廿七年四月土地改良区設立の認可を得ると共に大場清之進氏組合員の衆望を担い理事長に就任し役員一体となり事業に邁進し昭和廿九年竣工を告げたのである。整理前の総耕地面積六百五拾五町一反一畝歩整理後の総面積八百五拾町二反四畝廿五歩内田七百拾九町三反二畝廿四歩畑廿五町八反三畝廿八歩宅地四百七拾八坪道水路敷地九拾四町九反二畝五歩で交換分合による土地の集団化と灌漑排水農道の整備は累年の被害を除去し近代的営農の確立と高度の文化樹立の基盤となり同時に労力の節減は勿論年々米二千三百余石麦一千三百余石の増収となつて農業経営の大きな力となり地方永遠の豊饒が約束されることになった。これもとより上司の支援に因るといへども役員諸氏の誠意努力と組合員各位の和衷協力の結果であるのでここに事業の概要を記録しその功を永く子々孫々に傳えんとするものである。

昭和三十五年三月十六日

宮城郡多賀城町土地改良区

宮城県農林部長 伊藤 馨 撰文

## 愛 土 碑

宮城県知事三浦義男書

## 六 墓標

104は元禄一四年の墓標である。法名の上に、山形+旧+鳥からなる合字があり、「鳥八旧」と呼ばれている。本来は「舊」の変形した文字で、梵字の「タン」を漢字に表したものとする考えが有力である。室町時代末期から江戸時代中期にかけての墓標に見られ、曹洞宗、浄土宗関係の墓地に多いとされている。合字の際の順番や変形の仕方にも多様であり、本例では「八」の字が山形になって、「旧」は「旧」の字になっている。

108は元禄六年の慧香院殿の墓標である。頭部に二重線の円相があり、その下に法名と請花、その左右に紀年銘がある。文字の彫り方は前曲を残すアケ彫りであり、請花も大きく、丁寧な作りとなっている。慧香院殿は、仙台藩で一千五〇〇石を拝領した和田織部の側室と言われ、その住まいが向泉院の庫裡になったと伝えられている。その身分にふさわしく法名には院号があり、規模は、八幡の額主で一三四〇石を拝領した天童氏の当主やその夫人の墓標に近似した大きな墓標となっている。

109は、享保一七年に死去した向泉院の中興象田耕公和尚の墓標である。墓標名に「瑞岩天嶺誌」とあり、瑞巖寺の一〇五世天嶺和尚の筆によることが記されている。

## 104 向泉院B (No. 401) 元禄一四年(一七〇二)



0 30cm  
S=1/8

旧鳥 桂室□□禪定尼 (請花)  
元禄十四年 巳年  
六月廿三日 敬白

105

向泉院B (No. 446)

文化二年(二八二四)



文化十一  
○智光童女

七月十八日

0 30cm  
S=1/8

106

向泉院B (No. 470)

嘉永四年(二八五二)



嘉永四年  
妙雪童女

十日

0 30cm  
S=1/8

107

向泉院B (No. 387)

元治元年(二八六四)



元治元年  
子歲十一月六日



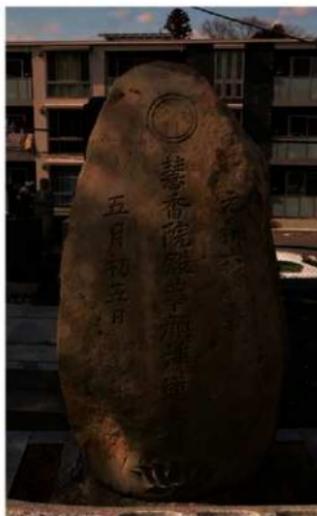
當山中興十二世國福第一座泉岳宣座元禪師

0 30cm  
S=1/8

向泉院A (No. 570)

元禄六年 (一六九三)

○慧香院殿華顏淨蓮大姉  
元禄六癸酉季  
五月初五日  
(請花)



S=1/8 0 50cm



當山  
 享保壬子十七年九月十四日宋  
 妙心第一座家田畹公和尚  
 中興  
 瑞岩天嶺誌



S=1/8 0 30cm

## 第五節 棟札・寄進札・絵馬

20～23は天満宮の棟札・寄進札である。

20は大正二年の菅原皇太神兩屋修繕棟札である。菅原皇太神は菅原道真のことで、この時期の天満宮の名称であることが知られる。

21は昭和四年の天神社増築棟札である。オモテ面の主題の両脇にある「屋船久々能知神」はヤフネノククノチカミ、「屋船豊受姫神」はヤフネノトヨウケヒメノカミで家屋の守護神であり、「手置帆負神」はタオキホオイノカミ、「彦狭知神」はヒコサシリノカミで建築や祭器製作の神である。ウラ面に神職、区長、氏子総代、大工棟梁、瓦屋棟梁の名が記されている。神職榑原久は祓ヶ崎稲荷神社（塩竈市）の宮司である。瓦屋棟梁の存在から、この時の増築部が瓦葺であることが知られる。また、名称は「天神社」となっている。

22は昭和三年の天満宮改築棟札である。どのような改築かは不明であるが、玉川（塩竈市）の鈴木氏が請負い、大工棟梁は市川（多賀城市）の大友氏であった。

23は昭和五八年の太郎天神社臨時大祭の寄進札である。ウラ面に「椀井家代々古詞」として、椀井家と天満宮のつながりを示す二首の短歌が記されている。『町誌』では老母が「太郎らがまめで帰らぬことあらばおらが屋敷におかぬ天神」、老父が「ばばあらが如何なることを言うたどておれに免じて居れや天神」と詠んだとしている。この寄進札では、老父の「如何なることを」が「何と」と記載されている。

24～29は糸掛観音堂の寄進札、棟札、読誦札である。

24は大正一二年の岩坂寄進札である。柏洲が住職の時代、鈴木氏と櫻

井氏が寄進したものである。

25は大正一三年に、宮城郡三十三番札所をめぐる大代念仏講の人々によって奉納されたものである。向泉院境内にある糸掛観音はその第一八番札所となっている。ウラ面には、糸掛観音堂の本尊聖観世音を現に向泉院境内に奉安せりと記している。

26は昭和一三年の観音堂修繕並び屋根葺替棟札である。屋根葺き替えの材料となる谷地萱三〇駄が寄付されたこと、屋根葺きが六人、大工が一〇人などの記載がある。ウラ面は日支事変二年目につき、「国家宣揚祈武運長久」などの文字が記されている。住職は柏洲。

27は昭和四四年の観音堂廻廊修復棟札である。日付は五月の大回向の日となっている。

28は昭和四四年の観音堂改造修復棟札である。ウラ面には、観音堂の修復の経緯について記し、この改造修復によって、本堂と観音堂が連結したと記している。

29は大般若波羅密多経読誦の功德によって願意達成を願う読誦札である。主題を囲むように、持国天王、增長天王、廣目天王、多聞天王の名が記されている。

30～33は藤樹地藏堂内の勧請札、扁額、絵馬である。

30は昭和一二年の勧請札である。オモテ面中央の主題は「南無妙法蓮華経 奉勧請藤樹大明神」となっており、日蓮宗系の導師によって勧請されたことがわかる。主題の両側にはそれぞれ「南無久遠釈迦牟尼佛」「南無高祖日蓮大菩薩」と仏・菩薩名が記され、その両側には右に不動明王、左に愛染明王の種子が配されている。また右上には「三天、左上には「二聖、右下には「如来秘密」、左下には「神通之力」と記されている。不動明

王と愛染明王の種子は、いずれも縦長で空白点と仰月点が残れるなど日蓮宗の曼荼羅等に見られる独特の書体となっている。二天とは毘沙門天王と持国天王、二聖とは薬王菩薩と勇施菩薩であり、「如来秘密 神通之力」は妙法蓮華經如来寿量品第一六にある経文である。

ウラ面の「一天四海 皆歸妙法」は日蓮宗で使用する経の「おつとめ回向文」の中にある文で、全世界がすべて妙法蓮華經の教えに帰依するという意味である。「家内安全 子孫繁栄」の願意に続き、施主は櫻井氏三名の連署となっているが、名は記されていない。

31は明治二四年の扁額である。オモテ面は横書で「奉献／藤樹地蔵尊／諸願成就／江口太郎兵衛」、ウラ面は縦書きで「時維明治二十四年六月下浣之日／多賀城郭八幡町／願主／江口太郎兵衛」と記されている。江口氏は、藤樹地蔵尊の地主櫻井家に嫁した娘の実家であり、この扁額により、この地蔵尊の上限年代を知ることができる。

32と33は絵馬である。願文、画題が確認できたものが二九点あり、その内訳は、願文のみが二点、拝みが五点、鏡餅等の供物が五点、馬が四点、猫（犬）が四点、蛇が三点、その他六点となっている。

63は縦三二・五センチメートル、横七五センチメートルと藤樹地蔵尊内の絵馬の中では最大である。右に敷物の上に座る男女が描かれ、その前には肴を盛り付けた膳が用意されている。男女の左には土俵で小熊と相撲を取る子供が描かれ、子供の腹巻には「辰」の文字が見える。その左上には瑞雲の上に、請花の上で合掌する如来像が描かれている。左下に「塩竈町／桃井辰五郎／茂登／辰治郎／敬白」とあり、辰五郎と茂登は右側に座っている男女、辰治郎は相撲を取る子供であろう。熊と相撲を取れるほど強い子に育ってほしいという祈願の絵馬と考えられる。

表4 留ヶ谷札類一覧表

場所	種別	表題	年代	図版番号	場所	種別	表題	年代	図版番号
1 天満宮	陣札	菅原第大神前屋修繕	大正2 1913	29	23 藤樹地蔵堂	絵馬	鞍	明治37 1904	44
2 天満宮	陣札	大神社増築	昭和14 1939	21	24 藤樹地蔵堂	絵馬	熊馬	明治28 1905	41
3 天満宮	陣札	天満宮立派	昭和33 1958	22	25 藤樹地蔵堂	絵馬	鏡餅	明治44 1911	42
4 天満宮	寄進札	太郎大神社臨時大祭	昭和56 1983	23	26 藤樹地蔵堂	絵馬	鏡餅・男狝み	明治44 1911	43
5 永寿観音堂	寄進札	岩板	大正12 1923	24	27 藤樹地蔵堂	絵馬	馬	大正4 1915	45
6 永寿観音堂	寄進札	岩板	大正13 1924	25	28 藤樹地蔵堂	絵馬	熊馬	大正4 1915	46
7 永寿観音堂	陣札	観音堂修繕並ニ屋敷修繕	昭和13 1938	26	29 藤樹地蔵堂	絵馬	鞍	大正8 1919	47
8 永寿観音堂	陣札	観音堂修繕修葺	昭和44 1969	27	30 藤樹地蔵堂	絵馬	馬	大正12 1923	48
9 永寿観音堂	陣札	観音堂修繕修葺	昭和44 1969	28	31 藤樹地蔵堂	絵馬	男狝み	昭和3 1928	50
10 永寿観音堂	談話札	大判般若波羅密多経		29	32 藤樹地蔵堂	絵馬	馬	昭和60 1985	49
11 藤樹地蔵堂	船清札		昭和12 1937	30	33 藤樹地蔵堂	絵馬	猫		51
12 藤樹地蔵堂	結願	藤樹地蔵尊	明治24 1891	31	34 藤樹地蔵堂	絵馬	鏡餅		52
13 藤樹地蔵堂	絵馬	文久2 1862	32	35 藤樹地蔵堂	絵馬	鞍		53	
14 藤樹地蔵堂	絵馬	鏡餅・御神酒	明治3 1870	33	36 藤樹地蔵堂	絵馬	鏡餅・男狝み		54
15 藤樹地蔵堂	絵馬	龜・松	明治14 1881	34	37 藤樹地蔵堂	絵馬	鞍		55
16 藤樹地蔵堂	絵馬		明治15 1882	35	38 藤樹地蔵堂	絵馬	末道		56
17 藤樹地蔵堂	絵馬	男狝相撲・夫婦	明治23 1890	63	39 藤樹地蔵堂	絵馬	御神酒・女狝み		57
18 藤樹地蔵堂	絵馬		明治24 1891	36	40 藤樹地蔵堂	絵馬	御神酒・鏡餅		58
19 藤樹地蔵堂	絵馬	出家狝み	明治30 1897	37	41 藤樹地蔵堂	絵馬	鞍		59
20 藤樹地蔵堂	絵馬		明治32 1899	38	42 藤樹地蔵堂	絵馬	夫		60
21 藤樹地蔵堂	絵馬	ついでつゝ鳥	明治34 1901	39	43 藤樹地蔵堂	絵馬			61
22 藤樹地蔵堂	絵馬	闘武者二人	明治35 1902	40	44 藤樹地蔵堂	絵馬	自動車		62

（ウラ）

維大正二年六月吉日

爾ヶ谷區長 菅野 捨吉  
 世話人 櫻井 甚三郎  
 加野 喜三郎  
 野木 善七郎  
 鈴木 左衛門  
 鈴野 之助  
 野田 市藏  
 大工 助市藏



陸前國宮城郡多賀城村爾ヶ谷區  
 奉祭鎮守菅原皇太神雨屋修繕一字  
 天上無窮五穀成就村民安全

（オモテ）



（ウラ）

昭和十四年  
 四月十五日  
 落成

神職 神原久 大工棟梁  
 區長 菅野方之助 結城 喜藏  
 氏子總代 櫻井庄藏 瓦屋棟梁  
 菅野廣之亮 佐藤 鐵藏  
 菅野二喜 鈴木重右二門番



屋船久々知能神 手置帆負神  
 奉鎮祭天神社増築  
 屋船豊受姫神 彦狹知神

（オモテ）



22 天満宮棟札 昭和三年（一九五八）



23 天満宮奇進札 昭和五八年（一九八三）



24 糸掛観音堂寄進札 大正十二年（一九二二）



大正十二年八月  
**一岩阪**  
 鈴木善藏殿  
 櫻井甚三郎殿  
 現住  
 柏洲代

25 糸掛観音堂寄進札 大正十三年（一九二四）

(オモテ)



旧鎌倉城部三十二口札所観世音口  
 第九番宮城郡多賀  
 廿七口阿部の松橋代経て  
 遷入屋入口、六口分  
 □口者宮城郡多賀城村  
 大正十三年 大代念佛講中  
 八月 同行廿八人

(ウラ)



本尊聖観世音  
 現住  
 向泉院境内ニ  
 奉安

26 糸掛観音堂棟札 昭和十三年（一九二四）



昭和十三年十一月廿八日廿九日両日  
 観音堂修繕並二屋根葺替  
 材料谷地萱 三十駄末永福治寄附  
 葺賃祖家ノ寄付屋根葺六人 五八  
 天気晴 大工十人 土工 結城善藏

(ウラ)



相徒總代人  
 （此ノ年ハ日支事變）  
 第二ヶ年目成リ  
 國家宣揚折武運長久  
 現住  
 鈴木源一郎 五十七  
 末永福治 四十二  
 鈴木運治 七十  
 鈴木喜三郎 七十二  
 菅野春吉 七十三  
 菅野ひさの 六十五  
 柏洲代 四十三





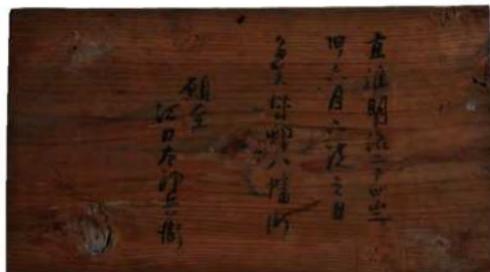
(オモテ) 31



藤樹地蔵堂扁額

明治二十四年（一九一〇）

(ウラ)



(オモテ) 30



藤樹地蔵堂勸請札

昭和二年（一九三七）

(ウラ)



二天  
南無妙法蓮華經奉勸請  
南無高麗口廣大菩薩  
神通之力

如來秘密



一天四海皆歸妙法  
家内安全子孫繁榮  
昭和十二年（一九三七年）四月廿五日  
施主 櫻井 櫻井

櫻井

34

藤樹地蔵堂絵馬



32

藤樹地蔵堂絵馬



35

藤樹地蔵堂絵馬



33

藤樹地蔵堂絵馬



38

藤樹地蔵堂絵馬



36

藤樹地蔵堂絵馬



39

藤樹地蔵堂絵馬



37

藤樹地蔵堂絵馬



41

藤樹地蔵堂絵馬



(オモテ) 40

藤樹地蔵堂絵馬



42

藤樹地蔵堂絵馬



(ウラ)





45

藤樹地藏堂絵馬



43

藤樹地藏堂絵馬



46

藤樹地藏堂絵馬



44

藤樹地藏堂絵馬



49

藤樹地藏堂絵馬



47

藤樹地藏堂絵馬



50

藤樹地藏堂絵馬



48

藤樹地藏堂絵馬



53

藤樹地蔵堂絵馬



51

藤樹地蔵堂絵馬



52

藤樹地蔵堂絵馬



54

藤樹地蔵堂絵馬



55

藤樹地蔵堂絵馬



57

藤樹地蔵堂絵馬



56

藤樹地蔵堂絵馬



58

藤樹地蔵堂絵馬



0 10 cm  
0-1-1

31



(オモチ)

60

藤樹地蔵堂絵馬



(オモチ)

59

藤樹地蔵堂絵馬

(ウラ)



(ウラ)



62

藤樹地蔵堂絵馬



61

藤樹地蔵堂絵馬



0

10 cm

9-1/4



63

藤樹地蔵堂絵馬



0

10 cm

9-1/4

## 第六節 金工

現在山形市三日町の聖徳寺に、向泉院に關わる鯛口が一口伝世している。中央の撞座は一六葉の蓮華文を表したもので、形骸化した小さな蓮弁に対し、中房が大きい。中房には蓮子も表現されているが、全体に摩耗している。この撞座がある撞座区の外側には中区(註)、さらにその外側に銘帯があり、それらは降線によって区画されている。銘文は、銘帯と中区に陰刻されており、いずれにおいても、つりさげた状態でその中央上部から左右に書き分けられ、銘帯では右に「奉納 這ヶ一口紅葉山觀世音菩薩」、左に「寛保三元西天五月十八日 仙臺 大西五郎次清治作」、中区では右に「宮城郡留ヶ谷村施主」、左に「菅野善八郎基信」と記されている。「這ヶ」は「這箇(しゃげ)」で、語意は「この(これ)」であるから、「この一口、紅葉山觀世音菩薩に奉納」となるのであろう。紅葉山は留ヶ谷の丘陵地帯を指す地名であり、觀世音菩薩は糸掛觀音の本尊であるので、本来は觀音堂に掛けられていたと推定される。大西五郎次は仙臺城下の鋳物師であろう。

聖徳寺側の話によると、仙台領が飢饉で荒れた年、数人の農民集団が藩境を超えて聖徳寺に助けを求め、施しを受けた礼に向泉院の鯛口を渡したという。現在この鯛口は、聖徳寺境内にある太子堂に掛けるものとして使われており、太子堂の祭日である四月二日と年末年始のみ表に出される。アジア太平洋戦争の金属器の供出時には、聖徳寺の鯛口を差し出して向泉院の鯛口を手元に置いたといひ、留ヶ谷どの繋がりを示すものとして大切に伝えられてきた。

註 部位の名称については久保常晴「鯛口」『仏教考古学講座 第八巻』に従った。



第20図 鯛口

S=1/3



聖徳寺太子堂 (山形市)



全体



部分



部分

## 第七節 民俗

## 一 地域の概要

## 1 行政区

留ヶ谷村の範囲は、現在の留ヶ谷・旭ヶ丘・向山の一部、新田中の一部にあたる。天満宮などの神社・小祠や旧家は留ヶ谷地区に存在する。

## 2 屋号

オモテヤシキ（表屋敷）、イリノイ（入の家）、インノシタノイエ（院の下の家）、ダイノイ（大の家）、タゴヤ（田子屋）、タカヤシキ（高屋敷）、トウフヤ（豆腐屋）、ナカノイ（中の家）、ニシノイ（西の家）、ノダノイ（野田の家）、ハラッコ（原っこ）、ヒガシノイ（東の家）、フダテ（古館）、ムケエノイ（向ここの家）、メイケン・メイケン（明源）、メーノイ（前の家）



第21図 留ヶ谷地区民俗調査関連図

## 二人々のつながり

## 1 契約講

## (1) 留ヶ谷契約講

「第一契約」や「二の契約」と呼ばれている。留ヶ谷で最も大きい契約講である。宝暦二（一七六二）年からの記録が残っており、留ヶ谷村に最初に移り住んだ二七戸で結成されたと伝えられている。その後二戸が脱会し、二五戸で活動していたが、平成一五年に解散した。契約講の共有地の大部分を売却したことや、葬儀社による葬儀の普及などから解散に向かったとされている。

契約講には講長が一人おり、講員は地域ごとに野田・中通り・清水の三つの班に分けられていた。この班が活動の基本的な単位になっており、葬儀の手伝いは人手不足や喪家の親戚などでない限り、他の班にまで手伝いに行くことはなかったという。

主な活動内容は、年に一回の集まりと葬儀の手伝い、共有地の管理であった。集まりは当初、講員の自宅を会場に行われていた。昭和一一年生まれの男性が契約講に参加し始めた昭和二〇年代後半には、まだ講員の自宅で行われていたが、その後いつの頃からか近隣の店を利用するようになった。集まる家のことをヤド（宿）と呼び、一年ごとに当番を回したが、自宅を会場にするのが困難な場合、講長に相談をして他の講員の家で行うこともあったという。原則として、一戸から男性一名が出席する決まりになっており、女性が出ることはあまりなかったという。集まりの時に使うお膳や桶などは契約講で所有しており、お膳一式と講帳はヤドで管理することになっていた。この集まりは、昭和二〇年にアジア太平洋戦争の影響で一時休止されており、宝暦一二年からの記

録が残る講帳もここで記録が中断している。講帳の最後の記録は左記の通りである。

「時局大東亜戦争奇烈ヲ極メ 敵機ノ本土ニ空襲毎日 □シ□時ニ當リ □物資日増欲亡ラ来シ 契約ヲ續行スル事困難ニヨリ 座本鈴木弥右工門氏宅ニ於テ中止スル事ニ決定ス 昭和二十年旧二月四日 尚契約振舞道具ハ鈴木弥右工門氏宅ニ預リ置キ申候事」

講帳によると、契約を休止する昭和二〇年までは、旧暦二月と一〇月に集まりが持たれており、当時二六戸だった講員は、一三戸ずつに分けられて二月か一〇月のいずれかに出席することになっていた。この一三名は毎回固定されているわけではなく、少しずつ顔ぶれが変わるように調整されている。当番のことを座本と表記しており、当時はこの呼び名が使われていたようであるが、現在はヤドという呼び名以外を確認することはできない。

葬儀の手伝いに関しては、自宅で行っていた頃にはその家に手伝いに行ったり、飾り物作りなどをしていた。親戚に不幸を知らせに行くシラセ（知らせ）や、墓穴を掘るアナホリ（穴掘り）といった役があり、シラセは二人一組、アナホリは既婚の男性で妻が妊娠していない者が当たる決まりであったという。その後、火葬の普及や葬儀社による会館での葬儀が主流になり、契約講の出番は少なくなっていくた。

(2) 第二契約講

留ヶ谷契約講に加入している家よりも後の時代に留ヶ谷に移住したり、分家になった家によって組織されている契約講である。「第二契約」や「二号契約」と呼ばれ、平成二九年時点で二戸が活動している。契

約講で所有している「契約帳」によると、大正一四（一九二五）年に一六戸で結成し、その後一時休止をした後に昭和二七年に再開したとされている。結成当時の会則は左記の通りである。

会則

本会ハ共同一致シテ左ノ任務ニ当ルヲ目的トス

第一條

不幸災難ノ場合

ニハ一同ニ相助合フ事

第二條

会員ニ限リ十日以上重

病ノ際ハ御見舞金ト

シテ金拾円ノ事

第三條

家族中ニ五才以上ノ死

亡ノ時ハ手傳ヒノ事

但シ白米一升持參ノ事

第四條

普請ノ時ハ相互ニ手

傳ヒスル事

第五條

毎年春秋契約ノ席

ニテ金一円ノ積立スル事

第六條

積立金入用者ハ会長

ヨリ借用スル事

第七條

借入人ハ毎年十月契

約ノ席ニテ元利金返

済スル事

第八條

会員中無断退会

者ハ積立金ハ無効ノ

コト



第二契約で保管する契約帳

ここから、当時は生活の様々な面で相互扶助が行われていたことが確認できるが、現在の主な活動は年に一回の集まりと葬儀の手伝いとなっている。集まりは年に一回近隣の店で行われるが、以前は年二回、四月と十一月に講員の自宅で行われていた。当番をヤド（宿）と呼び、ヤドの補助を担当する役をトエデと呼んだ。講帳によると、昭和四七年に年二回の集まりのうち、秋の集まりを宿泊施設や近隣の店で行う移動契約に変更している。昭和五一年からは、年に一回近隣の店で行う現在の形式になった。

葬儀の手伝いに関しては、自宅で行っていた頃にはその家に手伝いに行ったりしていたが、葬儀社による会館での葬儀が多くなってから契約講の役割は減少し、現在では受付を担当する程度になっている。

## 2 信仰に関わる講

### (1) 山の神講

子授けや安産の御利益で知られる、美里町（旧小牛田町）の山神社を信仰する女性の講集団である。留ヶ谷の山の神講は、向山・隅田地域（註し）の約一〇戸の女性によって構成されていた。昭和三〇年に嫁いできた女性によると、嫁に来た頃は姑が入っており、嫁いで五年ほど経つて子どもが産まれてから、姑と入れ替わりで入ったという。

主な活動は年に一回の集まりと小牛田の山神社への参拝である。現在では当時の集まりの日にちを聞くことは難しいが、昭和五三（一九七八）年の聞き書きのデータ（註2）では三月二日であったとされている。この日は当番にあたった講員の家で、輒燭を立てて掛軸を拝み、精進料理を食べた。当番をヤド（宿）と呼び、一年ごとに回した。また、山神

社の春祭りに全員で参拝に行くこともあったという。この山の神講は昭和五〇年代の前半まで続けられていたが、講員が出産をする年齢ではなくなり、掛け軸も古くなったことから、山神社に掛軸を納めて解散した。

### (2) 「観音講」

留ヶ谷の山の神講に入っていた女性たちが、山の神講を解散後に始めたとされる講である。観音を信仰する講ではないが、このように呼ばれている。一年に一回田植えが終わった頃に集まり、向山の道の分岐点にある題目塔を拝み、ヤド（宿）で精進料理を食べた。ヤドを一年で回す山の神講とは異なり、観音講のヤドは固定されていた。この日は高崎の鬼子母神堂、もしくは仙台の日蓮宗の寺院から僧侶が来て題目を唱えたという。題目塔は高い場所にあることからタケエカミサマ（高い神様）と呼ばれ、平成の始めの頃に同じ銘文を彫り込んで作り直したとされている。この題目塔には年号が刻まれておらず、いつからあるか不明であるが、昔馬に乗って遠くから来て、ここで亡くなった人の供養のために建てたと伝えられている。観音講は、ヤドを務めていた女性が亡くなったのをきっかけに、平成一〇年前後に解散した。



題目塔

### 三 神社・寺院・小祠

#### 1 天満宮

留ヶ谷の鎮守の神とされており、テンジンシヤ（天神社）やオテンジンサマ（お天神様）、タロウテンジン（太郎天神）と呼ばれている。神

社の扁額には「天満宮」と書かれているが、このような呼び名になったのはそれほど昔のことではなく、元の「天神社」という呼び名が広く受け入れられている。この神社は、当初櫻井本家の氏神であり、屋敷内で祀られていたとされている。いつの頃かは不明であるが、留ヶ谷村で祀る神がないために村の鎮守の神になり、場所を移動させたと伝えられている。それから大きな場所の移動はなく、平成二年に社殿の建て替えを行った際に若干東に位置を変えた。

留ヶ谷契約講の解散前は契約講で祀っていたが、現在は櫻井家にその役割が返っており、この家の男性が中心となって社殿の管理や祭りを行っている。毎月一日には月参りを行い、拜殿を掃除し、オハネと呼ばれる米を供える。

祭日は四月一日である。安永三（一七七四）年の「風土記御用書出」では、九月二五日が祭日であるとされており、境内の嘉永一（一八四九）年の手水鉢にもこの日付が刻まれている。そのため、本来の祭日は九月二五日であるが、その後四月一日に変更されたと考えられる。当日は塩竈市の祓ヶ崎稲荷神社の神職が祈禱を行い、櫻井家に関係のある人々や、元契約講の講員などが集まる。この日は参道に三対六流れの幟が上げられる。このうち二対は天満宮の幟であり、幟を奉納した家と櫻井家のベツカ（別家）が保管している。残りの一対は、後述する神明社の幟であり、三対の幟は立てる幟立が決められている。また、例祭で供える赤飯は、肥前陶磁の鉢に装う決まりになっており、この鉢は櫻井家で保管している。例祭前夜には、櫻井家の人や元契約講の講員、近隣の住民などが集まって拜殿で酒を飲んで過すが、これをオヨゴモリ（お夜籠り）やヨマツリ（夜祭り）と呼んでいる。

#### 太郎のお伊勢詣り

昔、現在の天満宮が櫻井家の屋敷の中で祀られていた時代のことです。櫻井家に太郎という後継ぎ息子がいました。ある時、太郎はお伊勢詣りに行くことになり、仲間たちを連れて旅立ちました。

しかし、帰る日になっても太郎たちは帰らず、心配になった母親は「太郎らんがまめでかへらぬものならば おらがやしきにおかぬ天神（太郎たちが無事に達まで帰らないことがあれば、もううちの屋敷でお祀りしませんよ、天神様）」と歌を詠んで天神様に祈願をしました。それを聞いた父親は、天神様に畏れ多いことを言ったと「ばばあらが如何なることを云うたとて おれに免じておれや天神、婆が何を言ったとしても、私に免じてうちにて下さい、天神様」と歌を詠みました。両親の願いが天神様に通じたのか、その後太郎たちは無事に伊勢から帰ってきました。

このことから、天神様は「太郎天神」とも呼ばれるようになりました。太郎の両親が詠んだとされる歌は、天満宮の棟札にも書かれており、現在でも櫻井家で大切にされています。



天満宮幟 1



4月の例祭



天満宮幟 2



ヨマツリのようなす



### 肥前陶磁（唐津）鉢

口径 25.4 センチ、器高 12.4 センチの施釉陶器鉢である。底部には小さな高台が貼付されている。外面は体部上半部に、内面は体部上半部と底部に、白土を入れた刷毛目装飾が施され、外面底部を除く前面にオリーブ色の釉が施されている。白土を入れた刷毛目装飾は 18 世紀前半の碗に多く、片口などに見られるが鉢は少ないという。外面の体部には線状の融着痕、内面の底部には砂による重ね焼き痕があり、刷毛目も粗いことから、粗製品と見られる。肥前地方で制作された唐津様式の鉢であり、年代は 18 世紀第 2 四半期に位置づけられる（元九州陶磁文化館館長 大橋康二氏の御教示による）。



神明社殿 (左側)



神明社幟

2 神明社

清水の鎮守の神とされており、清水の人々が中心になって信仰している。現在は社殿もなく、天満宮に合祀されているが、平成二年までは天満宮の西隣りに社殿があった。『多賀城町誌』によると元は稲荷殿にあつたとされているが、昭和十七年前後に海軍工廠の寄宿舎を建設するため、契約講の共有地に移されたという。

現在の祭日は四月一五日である。安永三年の「風土記御用書出」では、祭日は三月一五日と九月一五日とされているため、本来の祭日はこの日にちであつたと考えられる。平成二年に天満宮に合祀されてからは、天満宮の祭日である四月一五日と一緒に祭が行われている。当日は参道の中央の織立に神明社の幟が上げられる。この幟は清水の六戸の家が共同で保管しているものであり、一年ごとに当番を回している。当番にあつた家は、一年間幟を自宅に保管し、祭日の朝に幟を上げに行く。

## 3 向泉院

留ヶ谷・下馬地区を中心とした市内中央部、塩竈市の一部などに、約九八〇戸の檀家を抱える臨済宗妙心寺派の寺院であり、現在の住職は一七代目という。山号は紅葉山であるが、かつては留谷山であつたと伝えられている。この寺はかつて寺山という場所にあり、そこから現在地に移つたと『多賀城町誌』には記されている。移動した時期は定かではないが、向泉院が寺山にあつた頃、現在向泉院がある場所には仙台市の蒲生一帯に領地があつた和田織部房長の側室の住居があつたとされている。この側室の墓標は現在でも境内の墓地に残っており、元禄六(一六九三)年の年号が刻まれている。そのため、向泉院が移つたのはその後と考えられる。

寺の組織に関しては、檀家は全員花園会の会員になっており、檀家をまとめる責任役員会という組織がある。責任役員会には平成二八年時点で五名の責任役員がおり、さらにその下にある総代会では一八名の総代が活動をしている。どちらも任期は四年となっている。それ以外にも、青年部と女性部という組織があり、それぞれ約二〇名が加入している。また、約一〇年前に御詠歌の組織も結成されており、一三名の女性が活動をしている。

向泉院では一年を通して様々な行事が開かれている。五月の大回向法要は最も大きな行事であり、周辺の臨済宗妙心寺派の寺院を中心に住職が集まり法要を行う。八月には精霊迎え供養、九月は彼岸会、十月は法話会・音楽の夕べ、十一月は大悲堂慰霊法要が行われる。

## 4 糸掛観音堂

向泉院の境内に観音堂が祀られており、糸掛観音と呼ばれている。向泉院が寺山にあった頃から近くにあり、現在地に移る際に一緒に移動したとされ、現在でも向泉院が管理している。昔、留ヶ谷では養蚕が盛んであり、この観音堂はその守り神のような存在であったと伝わっている。観音堂の前の石燈籠には女性の名前が刻まれており、女性の信仰を集めていたと考えられる。

本尊は高さ五センチほどの小型のもので、盗難防止のために観音堂ではなく、向泉院に安置されていた。その代わりとして、「身代わり観音」と呼ばれる小型の像を糸掛観音堂に納めていたが、近年はどちらも向泉院で厳重に保管している。観音像は三年に一度御開帳されることになっており、記念の法要も行われてき



大回向法要



彼岸会



糸掛観音御開帳記念 (昭和13年)

## 5 藤樹地蔵

昭和十三年の法要を最後に長い間行われていなかったが、最近では平成十一年に記念法要が執り行われた。天満宮を祀る櫻井家のベツカ(別家)の屋敷内に地藏像が祀られており、藤樹地蔵や夜泣き地藏と呼ばれ、信仰を集めている。子ども達の夜泣きに御利益があるとされておられ、市内だけではなく、七ヶ浜の方からも多くの人が訪れていたという。祈願の際には、建物内にあるオマクラ(お枕)やハラマキ(腹巻き)を借りて、お礼参りの際に自分で作ったものと合わせて二つにして奉納する。

祭日は旧暦四月二四日である。現在は、祭日の前後でこの家の都合の良い日に行われており、赤飯や菓子類が供えられる。



御堂外観



供物と地藏像

## 櫻井家の天神と地蔵

櫻井本家では天神様が祀られています。その分家ではお地藏様が祀りされています。ある田植えの時期、人手が足りなくて櫻井家の人々は困っていました。すると、どこからか二人の子どもが現れ、一人が馬のハナドリ（鼻取り）をし、もう一人はスカオシ（馬蹴押し）をして代かきを手伝ってくれました。この二人のおかげで作業は進み、櫻井家の人々はとても喜びました。お昼になり、二人の子どもにもご飯をあげようとしたのですが、その姿が見当たりません。辺りを探すと、水口にお地藏様が泥をつけて横になっていました。そこで、櫻井家の人々は、このお地藏様が忙しくて困っている家の人たちを助けようと、子どもの姿になってハナドリをしてくれたのだと語り合いました。そして、スカオシをしてもらったもう一人の子どもは、本家でお祀りしている天神様であろうと伝えられています。

現在でも、このお地藏様は櫻井家の分家の屋敷内で祀られており、子ども達の夜泣きに御利益があるとして多くの人に信仰されています。



地藏像

## 6 太子堂

向泉院の西隣りに、太子堂と呼ばれる御堂がある。御堂の近くの家によって代々祀られており、この家の氏神なのではないかとも言われている。聖徳太子を祀っているとされており、『多賀城市史 第3巻 民俗・文学』によると、塩竈方面からの参拝者が多く、酒屋・水商売・大工な

どを生業とする者が、商売繁盛を願って祈願するとされている。また、安産の御利益もあり、御堂に置いてあるオマクラを借りる慣わしがあるとされている。このオマクラは、十数年前まで太子堂を祀っていた家の女性が作っていたが、女性が亡くなってからは置かれなくなっている。現在は行われていないが、以前は年に一度の祭りがあった。現在はその祭日は不明になっているが、市史には三月一八日か二八日と記述されている。この日は太子堂を祀る。家の人々が御堂の前で供え物をして手を合わせたという。

また、太子堂の御神体として木彫りの像があるが、盗難防止のため、普段は家の中で保管されているという。



太子像

註1 留ヶ谷の山の神講と観音講は、旧下馬村の向山・隅田の家の女性たちによって構成されていた。この地域は留ヶ谷村との境界に近く、契約講や檀那寺などとの関わりにおいては留ヶ谷の人々との関係が深い。

註2 平成三年に発行された『多賀城市史 第3巻 民俗・文学』の編纂のために行った聞き書きのデータ。

## 第六章 高崎村

### 第一節 地理的・歴史的環境

#### 一 地理的環境

高崎は多賀城市のおおよそ中央部に位置しており、ほぼ全域が丘陵部となっている。旧高崎村は、現在の行政区では高崎一丁目、二丁目、三丁目にあたる。

地形的にみると、利府層・松島層と呼ばれる標高二〇メートル未満の低丘陵が北側から枝葉状に延びてきており、その痕跡は多賀城廃寺の南側に幅一〇〇〜三〇〇メートルの谷状の地形として、南北六〇〇メートルにわたって確認できる。また北西部には埋没谷に起因する谷地があり、亜泥炭層などが厚く堆積する軟弱な地盤となっている。

風土記御用書出には、

豎 一 南八当郡田中村境当村分鍛冶屋敷と申所より

一 北八当郡浮島村境当村分上野原と申所まで

横 一 東八当郡留ヶ谷村境当村分西原と申所より

一 西者当郡田中村境当村分江中と申所まで

と四至を記している。鍛冶屋敷は化度寺の南側で小名「表」の南端部であり、上野原は多賀城廃寺跡周辺の小名「上野」のことであろう。江中は、東田中一丁目の西側から砂押川右岸にかけての地域であり、東境の西原については不明である。南、北、西側については、おおよそ現在の高崎地区と同様の範囲を示している。

#### 二 歴史的環境

高崎地区には古墳時代から近世にかけて、二箇所の埋蔵文化財包蔵地と一箇所の特別史跡がある。古墳時代の遺跡である高崎古墳群は、かつて古墳が三基あったといわれているが、現在確認できるのは一号墳のみである。古墳本体は未調査であるため詳細は不明であるが、一号墳の規模が大きいことから古墳時代中期と指定されている。発掘調査はこれまで古墳周辺で実施されており、竪穴住居跡や掘立柱建物跡など、いずれも古代の遺構が発見されている。また、遺跡北端では東西大路東道路に囲わる整地層を発見しており、丘陵部に向かって道路が延びていた可能性が考えられている（多賀城市教育委員会 二〇一）。

高崎遺跡では、多賀城廃寺跡の西側で約七〇棟の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区からは大量の灯明皿が一括廃棄された状態で出土し、周辺で万燈会のような仏教儀式がとりおこなわれていたと考えられる。

高崎遺跡の発掘調査では、各地区で中世の遺構遺物が発見されており、旧高崎村地域の様相については既に概要が報告されている（多賀城市教育委員会 一九九五）。それによれば、化度寺等が立地する低丘陵周辺から中国産の青磁、天目茶碗、東海地方産の陶器類、施釉陶器鉢・花瓶、地元窯産の無釉陶器鉢・搦鉢、産地不明の瓦質土器搦鉢等が出土しており、施釉陶器鉢・花瓶、瓦質土器搦鉢以外は、一二世紀後半から一四世紀前半のおおよそ鎌倉時代の年代が与えられるものである。また、この地区では板碑が八基あり、紀年銘があるものはすべて鎌倉時代後期のものである。

同地区には「館屋敷」と呼ばれる一画があり土塁・空堀・段築の存

在が認められる平場が確認できる。「平姓八幡氏系譜」には、寛正六年（一四六五）に八幡村の領主八幡景盛の子盛忠が高崎氏を称し、居住したと記されており、化度寺の東側にある館屋敷はその館跡と考えられている。平成二・三・四に実施された発掘調査では、古代から中世にかけての掘立柱建物の柱穴等発見されているが、館跡に関わる明瞭な遺構は確認できなかった。しかし、その周辺では掘立柱建物や大溝跡が発見されており、館屋敷周辺に館に関わる遺構が広がっていた可能性がある。高崎遺跡一二次調査で発見した溝跡は、最終的に埋められた形跡があり、その年代は、最上層から長石軸が施された陶器鉢が出土していることから一六世紀末以降と見られ、宮城郡東部を支配していた留守政景の黒川郡移転に伴って破却された可能性がある。

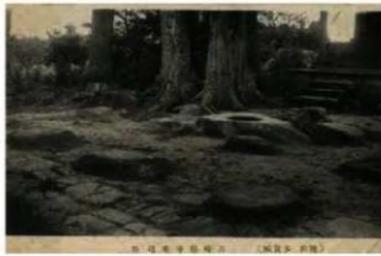
また『留守家文書』には高崎に「五大院」及び「修正田」があったとの記載が見える。加えて板碑も多数確認されていることから、中世において高崎地区一帯が広く宗教的な場も包括しながら使用されていたことが伺える。弥勒地区では、近世の建物跡や土壇、陶磁器、カワラケ、古銭などが発見されており、江戸時代後期の屋敷跡の存在が考えられる。特別史跡の指定を受けているのは多賀城廃寺跡で、多賀城跡とともに大正十一年に史跡、昭和四十二年に特別史跡に指定された。江戸時代から存在が知られており、瓦が多賀城跡のものと同じであるとの記載も見えるなど、早くからその重要性が認識されていた。昭和三十六年から始まった発掘調査の結果、多賀城と同時期の創建で、中心伽藍の配置が大宰府付属の観世音寺と共通することなどが判明した。特別史跡指定を記念し、多賀城町（当時）が環境整備事業を実施し、全国で二番目に史跡公園化され現在に至っている。



万灯会で使用された土器（高崎遺跡第11次調査）



上野の北側に残る旧水田（平成7年）



高崎廃寺東塔址『多賀城陸附近名所繪業書』



上野・旭ヶ丘

## 第二節 地名と屋敷名

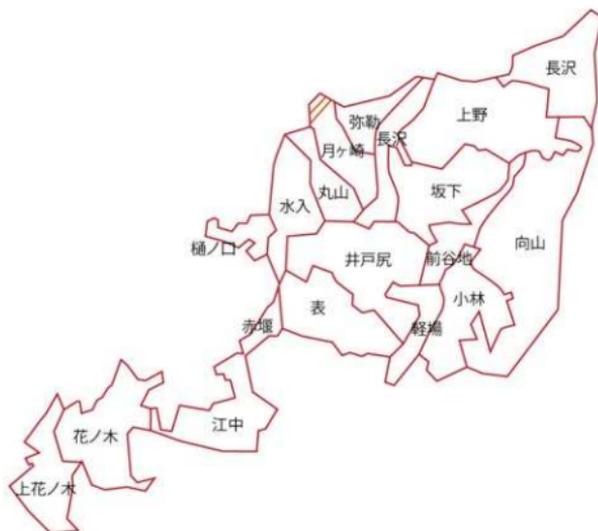
## 一 地名

各資料に見える高崎村の地名は表5のとおりである。「風土記御用書出」には小名の項の書出しがなく、神社や寺の小名として表記されたものがある。

以下、各地名の解説を行うにあたり、「風土記御用書出」は「書出」、「陸前国宮城郡各村字調書」は「調書」、「多賀城村落の機構、地名の研究」は「研究」、「多賀城町誌」は「町誌」の略称により記述する（第一章第三節を参照）。

表5 高崎村小名

	風土記御用書出		宮城郡各村字	戦後
	小名	小名以外		
塔の越	○			
舞台	○			
花ノ木			○	
下花ノ木			○	
江中			○	
赤堰			○	
樋ノ口			○	
水入			○	○
月ヶ崎			○	○
長沢			○	○
弥勒			○	○
上野			○	○
坂下			○	○
丸山			○	○
井戸尻			○	○
表			○	○
前谷地			○	○
小軽			○	○
向山			○	○
前沢			○	○



第22図 高崎地籍図

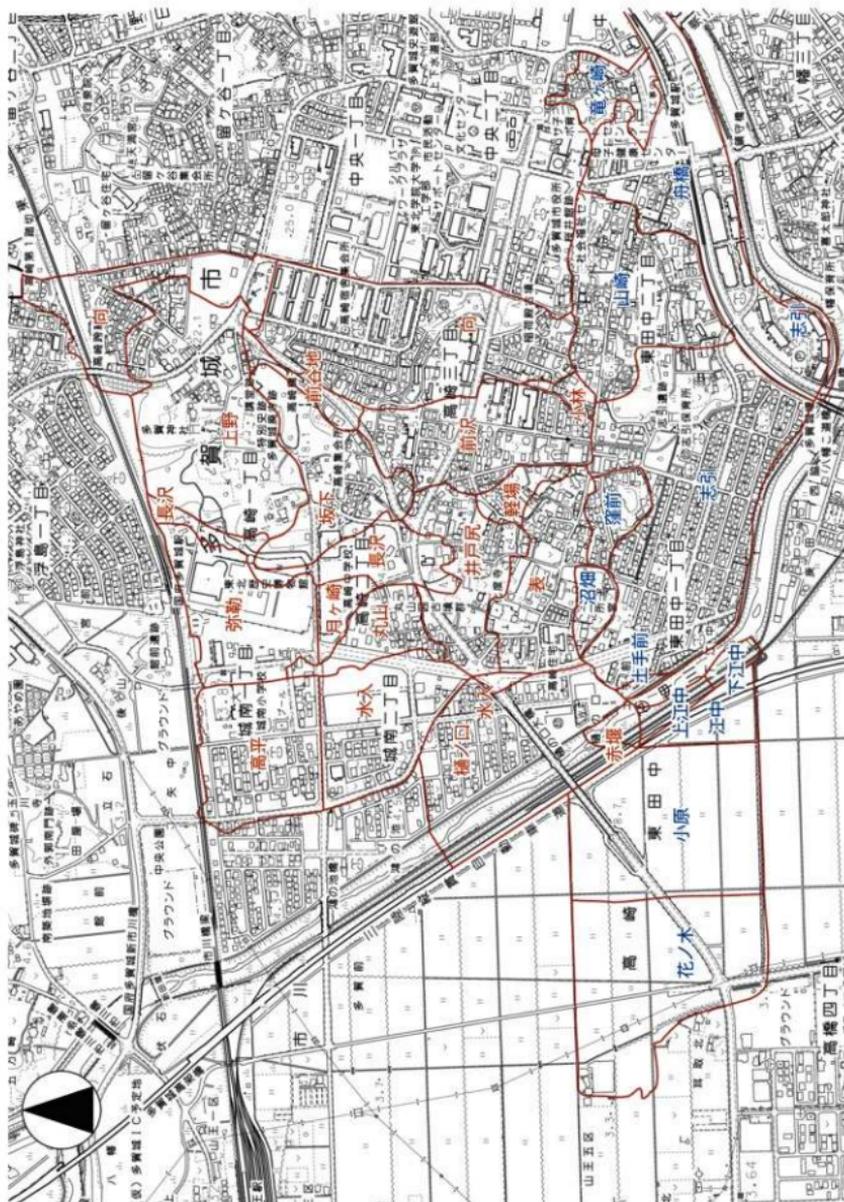


表23 図 高崎字名分布図

赤塚（あかぜき）「研究」に役場下の堰とある  
ので、現在の東田中一丁目の北西端部付近。

井戸尻（いどじり）「館」の東下は大井戸と称  
する清水あり。この井戸の下流の意（「研究」）。

上野（うのの）高崎にて最も高き地で、やや  
広き台地をなしている所。塔の臺とか、塔の越原  
（塔残原、塔の原などと言つて多賀城鎮護寺の  
あつたところ（「研究」）。

江中（えなか）東田中一丁目の西側に下江中、  
砂押川の西側に江中の地名が残つており、明治  
一九年の地籍図では砂押川右岸の小名として表記  
されている。

表（おもて）「研究」に役場の前通りとあり、高崎で最も前方で日当  
たりのよい所とある。現在の高崎二丁目の南端部付近。

軽場（かるば）井戸尻の東方にあり、今は畑となつてはいるが、明治  
初年まではカルバ山といつてかなり淋しい所で、人をだます狐が棲んで  
いた（中略）「カルバ」は狩場で、多賀城時代に蝦夷征伐のつわ者たち  
が狩をやつたところではあるまいか（「研究」）。

小林（こばやし）村の南西部、現在の高崎三  
丁目の南半部付近。

坂下（さかした）東街道の塔ノ原に登る坂の  
下方（「研究」）。多賀城廃寺の南西部付近。

下花ノ木（しもはなのき）※花ノ木参照  
高崎（たかさき）丘陵部の南側に位置する



坂下



井戸尻（北西より）



上野

という地形からついた名勝であろう。正安二年  
（一三〇〇）の留守家政讓状には「高崎塩竈神宮  
寺」とあり、「平姓八幡氏系譜」には、寛正六年  
（一四六五）に宮城郡高崎村に居住し、氏名（うじ  
な）とした、と記されているので中世にさかのぼ  
る地名である。江戸時代も村名として継続した。

館（たて）化度寺の東隣高地。土塁や外堀の跡も歴然と残っている  
（「研究」）。

月ヶ崎（つきがさき）村の西側で、小名弥勒の西側・南側に隣接。  
地形的には、丸山の丘陵の先端という意味か。※丸山参照

塔の越原（とうのこしはら）「書出」の中の旧跡の項に「塔の跡」が  
あり、その註として記載されている。「五重之塔相建候跡之由申伝候今  
以石場相残居申候事」とあり、塔は多賀城廃寺の塔であることから、そ  
の場所の地名とされている。

塔ノ臺（とうのだい）「上野」の別称（町誌）。  
塔ノ原（とうのはら）「上野」の別称（町誌）。

長沢（ながさわ）村の北側で、小名弥勒の東側に隣接。地形的には  
丘陵南麓に形成された湿地帯から起こつた地名であろう。

糠塚（ぬかづか）上野の南方数町の所に小丘  
がある。俗に糠塚または糠塚山と呼んでいる（研  
究）。旧役場跡（化度寺）の西にわずかに下つた  
南側（町誌）。

念仏壇（ねんぶつだん）多賀城廃寺の南西に  
あり、寛文一一年の念仏供養塔（名号塔）を中心



念仏壇



館

に四基の供養塔が並んでいる。この供養塔の存在から生じた地名と考えられる。

**花ノ木**（はなのき） 村の南西部。明治一九年の地籍図に、村の南西部に「花ノ木」「上花ノ木」があり、「調書」に「花ノ木」「下花ノ木」がある。現在、砂押川の西側、高崎・東田中の水田中に、字名として「花の木」がある。

**樋ノ口**（ひのくち） 明治一九年の地籍図に見られる。村の西端部にあり、現在も砂押川に架かる「樋の口大橋」に名を残している。舞台「書出」に化度寺の小名として記載。

**丸山**（まるやま） 村の西側で小名月ヶ崎の西側・南側に隣接。地形的には、高崎の丘陵から北西方向に延びる幅の狭い尾根部に位置している。

**前谷地**（まえやち） 高崎廃寺と旭ヶ岡の間は南側に開く幅の狭い谷状地形であり、その谷に形成された谷地に起因する小名と見られる。

**水入**（みずいり） 村の西部。明治一九年の地籍図では、小名井戸尻の北西部に位置している。

**弥勒**（みろく） 北の浮島村との境（町誌）。村の北西部で戦前・戦後には、現在の東北歴史博物館敷地内となっているが、明治一九年の地籍図ではその北東部を中心とした地域の小名であったように見られる。  
**向**（むかい） 多賀城廃寺の北東にあり、東北本線によって南北に分割されている。現在は盛土されて住宅地となっているが、平成七年に開発される以前は多少の谷が入り組んだ複雑な地形だった。高崎一丁目



丸山



樋ノ口



第23図 高崎屋敷名

一 一番に公園の名称として残っている。  
割石原（わりいしはら） 上野の山続き、北方に昔の東街道に沿って行くこと数町、塩釜線を越して十間あまりの所に大きな割石があることから起こった地名（研究）。

二 屋敷名	
上野屋敷	二軒
坂下屋敷	二軒
井戸尻屋敷	二軒
館屋敷	一軒
南屋敷	一軒
表屋敷	一軒
長沢屋敷	二軒
弥勒屋敷	一軒
井戸上屋敷	一軒
鍛冶屋敷	一軒
高屋敷	一軒
北屋敷	二軒
古屋敷	一軒

## 第三節 寺社仏閣

## 一 神社

## 1 多賀神社

高崎字上野に所在する。社殿はかつて多賀城廢寺の塔の基壇上に鎮座し、その西側を南西・北東方向に延びる道路に面して鳥居と長床があった（加藤・新野 一九五五）。明治五年九月、村社格となっている（宮城県神社庁 一九七六）。昭和四一年、廢寺の環境整備によって北側約二二〇メートルの位置に南北約四五メートル、東西約三〇メートルの新たな境内地が設けられ、社殿、鳥居等移転して現在に至っている。地元では「お伊勢様」と呼びならわされていたという（宮城県史蹟名勝天然記念物調査 一九二七）。

延享二年撰の「鹽竈社記」には「多賀城跡東側、高崎之地、往古有大社、今亡、其旧址、許多礎石、及堂塔之蹟現存焉、此恐式内多賀神社旧墟也乎」とあり、式内社の可能性について触れている。

『多賀城六百年史』では延喜式内社とする説があることを紹介しているが、奈良時代の多賀城廢寺と同じ場所に式内社があることへの疑問を呈し、この神社が式内社であるならば後世に他所から移したと見るべきであること、そしてむしろ市川にある多賀神社がそうである可能性を述べている（三塚 一九三七）。

宮城県神社庁が編集した『宮城県神社名鑑』ではこの神社を延喜式内社としている。根拠は示されていないが、「古の陸奥国多賀郷の中心地にして所謂多賀城（陸奥国府）鎮護寺の境内に在り」という状況を考慮したものと考えられ、多賀神社に関わる古代の史料三点を提示している

（宮城県神社庁 一九七六）。具体的には延暦一五年に陸奥国多賀神に従五位下の位が授けられたこと（『日本後記』）、康和五年に御卜に多賀神の神事を穢した祟りあるを以て社司に中祓を課したこと（『朝野群載』）、また「延喜式」に陸奥国百座（大小四座）の一つとして宮城郡のなかに多賀神社があるという記載である。しかし、いずれの史料もこの多賀神社を特定する内容ではない。

境内には明治九年八月の手水鉢があり、石鳥居は大正九年四月に奉納されたものである。

## 2 神明社

「書出」には、塔の越にあつて、誰がいつ勸進したかは不明としている。社は南向きの二尺作である。土地は村の共有地で地主はなく、別当は化度寺、祭日は八月八日となっている。宝暦一三年から安永元年（一七六三～一七七二）にかけて作成された「封内風土記」には神明宮として、勸進の時期は不明と記されている。

この神明社は、所在する小名が「塔の越」であることから、多賀神社と同一の可能性も考えられるが、両者に接点がないため、不明とせざるを得ない。

## 3 熊野三社

「書出」には、化度寺境内にあつて、誰がいつ勸進したかは不明としている。社は東向き二尺作であり、地主・別当ともに化度寺であり、



現在の多賀神社

祭日は九月一日となっている。「封内風土記」には熊野三所権現社とあって、多賀城の城主が国家安全を祈って勧進したという伝承を記載している。

地元住民の聞き取り調査では、かつて化度寺境内の北西部外にオグマンサマと呼ばれる石祠が祀られていたという。アジア太平洋戦争の際、大規模な土取り工事のため移転することとなり、一旦東側約一四〇メートルの「沼倉屋敷」に移転した後、再度その南側約六〇メートルの現在地に移転した（第六節 民俗 参照）。その場所に立つ昭和三年の熊の神塔が、傷んだ石祠の代わりに祀られたものだという。

#### 4 仁波多理権現社

「書出」には、化度寺境内にあって、誰がいつ勧進したかは不明とされている。社は東向きであるが、安永三年当時大破して、社の作りは書き上げられないと記されている。地主・別当ともに北屋敷の助八であり、祭日は八月八日となっている。安永元年（一七七二）に完成した「封内風土記」には、「二渡権現社」とあって、勧進の時期は不明と記されている。

仁波多理権現社は、オグマンサマとともに化度寺境内の北西部外に祀られていたが、アジア太平洋戦争時の土取り工事の際、廃されたという。

### 二 仏閣

#### 1 太子堂

「書出」には北屋敷にあって、多賀城があつて七堂伽藍があつた当時、

塔の越原にあつたが、いつのころか現在の場所に移つたと聞いている、としている。

境内は竪一六間、横五間であり、堂は南向きであるが安永三年当時大破して、堂の作りは書き上げられないと記されている。また、本尊は高さ二尺八寸の石仏立像であり、作者はわからないが、古い時代の仏像には見えないとも記している。地主・別当ともに北屋敷の助八であり、祭日は九月一七日と三月一九日となっている。

現在、北屋敷にあたる高崎二丁目九に助八の子孫が現存しており、その敷地の南側に太子堂がある。石垣を組んだ壇の上に立つ東西二間、南北一間の切妻の建物である。その中には石仏立像を中心に二基の供養塔が立っている。

### 三 寺院

#### 1 化度寺

化度寺は高崎二丁目五に所在する曹洞宗の寺院である。昭和六年三月九日に焼失したため、ほとんどの記録は失われたという。参道には昭和四九年に建立された門柱があり、「明應七年高崎彦三郎盛忠方開基当時八天台宗ノ其ノ後焼失千六百十五年元和元年三月吉日ノ積橋大雪大和尚方曹洞宗トシテ再建現在ニ至」と記されている。

高崎盛忠については、「平姓八幡氏系譜」の中に記載があり、この寺に関わる重要な資料となっている。



太子堂

盛忠 高崎彦三郎從六位下越中守

近侍於関東管領足利左兵衛督成氏朝臣寛正六年四月居於宮城郡高

崎村、因以為氏號、明應七年九月二十日高森留守出羽守藤原郡宗

君與黒川濃守源氏房陣於黒川郡相川時為留守家之援兵而戦死、

年五十八、法諱得慶、號化度寺、母同景時、

盛忠は八幡村の領主八幡景盛の子であり、寛正六年（一四六五）に高崎村に居住したことで高崎氏を称したことが明記されている。その法号が化度寺である。しかし明応七年の盛忠の開基や、当初天台宗であったことについては確認できる資料がない。高崎氏が高崎の地の領主でありえたのは、留守政景が宮城郡東部の領主であった天正一八年（一五九〇）八月までであり、豊臣秀吉の奥州仕置によって留守氏が黒川郡に移されると、その支配下にあった高崎氏の領主としての立場も失われたと考えられることから、明応七年から天正一八年までは高崎氏の庇護の下にあったと推定される。

二七〇年以上の空白を経て、安永三年の「風土記御用書出」に曹洞宗の寺院、高崎山化度寺についての記載がある。所在する小名は「舞台」とあるがその地名は現在伝わっておらず、明治九年の「陸前國宮城郡各村字調書」にも見られない。仏殿は南向きで竪三間半、横二間半の規模であり、門も南向きとある。本尊は大造の地藏菩薩坐像であり、高さ一尺二寸、行基菩薩の作と伝わっている。このような簡単な内容であるが、文末に寺書出を一冊添えて差し出すとあるので、詳細はそれに記載されたであろうが、現存していない。

「書出」の異本（註）には、開山は雪橋和尚であること、本山は仙台城下の八塚森城山大林寺であって、末寺はないこと、かつては塔の越と

いう場所にあったと伝えられるが、いつのころか現在の場所に移ったこと、熊野三社（化度寺境内）と神明社（塔の越）の別当だったことが記されている。

「塩松勝譜」には化度寺の項には、礎石（廃寺の塔の礎石）の西側

第二大区宮城郡小八區  
高崎村字表圓

化度寺

### 一 現境内

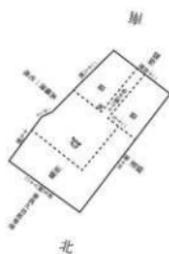
五反五拾十歩  
立本百十三本  
三反四拾二歩  
五反五拾二歩

調査

二反廿四歩 墓所  
三反四拾二歩 堂宇敷地  
五反五拾二歩 其外敷地

大浪 成光  
万城目 盛近

宮城県公文書館所蔵の複製をトレス



立本百十三本

内 第二本 但立可子五拾圓

第七本 同 一四拾五圓

第十四本 同 四拾五圓

立會

右村飯

芦立 景福

第24図 社寺境内区画図（宮城郡高崎村 化度寺）

二百余歩の位置にあるとした上で、「久シク廢ス。中世小庵ヲ遺趾ニ建テ名ヲ存ス。又廢ス。延宝中。禪僧雪橋茲ニ移建ス。地藏像ヲ安ス。僧正行基ノ製。寺前ニ熊野神祠及仁波多利神祠ハ。此寺古來奉祠スル所。今尚ホ存ス」という記載がある。廢寺が廢れた後、中世に小庵を建てたがまた廢れ、延宝年中（一六七三〜一六八〇）に雪橋が現在地に移して地藏菩薩を安置した。寺前の熊野神社と仁波多利神社は、この寺が古くから奉祠しており、今も存在しているというものである。

化度寺の場所としては、「書出」は塔の越、「塩松勝譜」は廢寺の塔の西側二百余歩の位置にあつたと記しており、「書出」作成時、化度寺が他所から移転したという伝承は既にあつたようである。後者は廢寺の後身であるかのような表現となっているが、この点については不明である。

念仏壇の寛文九年の庚申供養塔、同じく文政四年の名号塔、化度寺境内の宝永三年の供養塔には高崎山化度寺の名があり、名号塔には「住持空診」の名も見られる。高崎村の寺院として存在していた様子を伺うことができる。



化度寺

四 その他

(1) 日光院

化度寺から続く低丘陵の西端部に日光院と呼ばれる小祠がある。堂宇の中には、頭部を三角形に加工した板状の石碑があり、「カーン（梵字）日光大権現」と刻まれている。この日光院に関する資料はないが、『町誌』には次の伝説が収録されている。ある時一夜の宿を求めた旅の僧が病に

かかり、息を引き取る時に逆さに埋葬してほしいと遺言したが、正位で葬ったところ村に病気が流行したため、逆さに埋葬し直したところ病気が収まったというものである。その供養のために小祠を建立して祀つたのが日光院であるが、この名称の由来、年代ともに不明である。

高崎の念仏壇にある寛文九年の庚申塔には、化度寺と並んで日光院の名があり、導師を務めていたと考えられる。また、日光院の堂宇の西側には延宝七年（一六七九）に建立された日光院妻の墓標がある。娘が施主となつての建立と見られ、日光院が妻帯していることが確認できる。このことからみれば、日光院は修験の道士の可能性がある。

堂内には、「日光大権現御坂修繕旗立二対寄附人名」と題した大正一三年旧四月一三日の寄進札があり、寄附人三二名、世話人六名の名が記されている。また「落成寄附人名」と題した寄進札もあり、三二名の名がみられる。



日光院



東 耕地区  
西 用水堀  
南 往 北 化度寺 堂所 境

宮城県公文書館所蔵の複製をトレース

第25図 社寺境内区画図（宮城県高崎村 日光院）

## 第四節 石造物

### 一 分布と概要

高崎村地域で確認した石造物としては、中世の板碑、近世・近代の供養塔、鳥居、幟立、石燈籠、手水鉢、近代の顕彰碑・治草碑、墓標などがある。それらの所在地の概要については以下のとおりである（石造物の記載方法については第三章第四節を参照）。



第27図 高崎地区石造物分布図1



第28図 高崎地区石造物分布図2

**上野A** 上野の東端部に馬頭観世音塔が三基あったが、現在は留ヶ谷の向泉院駐車場内に移設されている。

**上野B** 廃寺北側の宅地内、敷地西側に年代不明の供養塔が一基ある。

**多賀神社** 境内に供養塔一基、手水鉢一基、鳥居一基、昭和三年の石燈籠、境内東側には今村武志の顕彰碑がある。

**念仏壇** 多賀城廃寺の南西に念仏壇と呼ばれる一角があり、道路沿いに五基の供養塔がある。

**太子堂** 石積みの上上に建てられた東西二間、南北一間の切妻の建物であり、井戸尻Cとした宅地の南側にある。堂内に石仏立像と二基の供養塔があり、堂の脇に二基の板碑がある。

**井戸尻A** 題目塔を祀った一間四面の堂宇があり、祈禱札等とともに無紀年の板碑が一基保管されている。堂宇の前には山神塔が一基ある。

**井戸尻B** 「タテノイエ」の屋号と呼ばれる宅地内東側に早魁にも枯れないという井戸があり、その脇に水神塔とその由来を記した碑がある。

**井戸尻C** 敷地の北東部に南北九メートル、東西七メートル、高さ一・五メートルの塚の上に板碑が一基ある。また居宅の裏には紀年銘のない供養塔が二基ある。

**表A** 居宅の裏に近代の題目塔が一基、石仏立像が一基ある。

**表B** 居宅の裏に近代の題目塔が一基ある。また宅地前の畑に高崎地区の日蓮宗普及に関わる「妙法碑」が一基ある。

**表C** 化度寺南側の東西道路、井戸尻から東田中方面に通じる南北道路が交差するところに近代の馬標神塔が二基ある。昭和四年のものは道標でもあり、かつては十字路の南西にあったものである。

**表D** 小字表の南端近くに次郎屋敷と呼ばれる開けがあり、その東側に接して題目塔が一基ある。

**オクマンサマ（熊野神社）** 集合住宅の敷地内に熊野神社と呼ばれる小祠があり、近代の供養塔二基が祀られている。

**化度寺** 参道の両側に板碑が二基、近世の供養塔が七基ある。板碑の内、弘安七年の碑は、かつて「鬼子母神堂」の本尊であったもので、そ



井戸尻A



第29図 化度寺境内石造物分布図

れ以前はその南西約一〇〇メートルの叢の中にあつたという。表Bの「妙法碑」に、発見から堂宇に祀るまでの経緯が記されており、平成二年に鬼子母神堂が火災で焼失した後、一時所有者によつて現地から持ち込まれたことがあつたが、平成十三年、市指定文化財への指定を機に化度寺境内に移設された。境内西側は墓域となつており、住職の墓地、化度寺の檀家大石氏の墓地があり、一三基の墓標がある。

日光院 正面の参道に沿つて石燈籠、幟立があり、その西側には近代の沿革碑が二基ある。堂宇が立つ丘陵端部の南下から西下にかけては板碑が二基、供養塔が八基ある。また、堂宇の西脇に日光院妻の墓標があり、参道東側に三基、西側にも一基の墓標がある。

## 二 板碑

八基確認した。いずれも『市史4巻』「多賀城市内の供養碑」に収録されているものである。110は胎蔵界大日如来を主尊とした板碑である。種子は「ア」である。111は阿彌陀如来を主尊とした元亨四年の板碑である。種子は「キリク」である。「先考」は亡父のこと、その五七日の忌日に追善の供養塔婆として造立したものである。112は胎蔵界大日如来を主尊とした板碑である。種子は「ア」であり、下半部は欠損している。113は金剛界大日如来を主尊とした無紀年の板碑である。種子は「パン」である。114は、線刻による界線によつて碑面が三分の一と三分の二に二分され、一石型双式板碑のような形態をとつて、それぞれに主尊が配され

ている。右側の広い区画は全体に碑面が平滑に加工され、横線によつて上下に二分されて、上半部に主尊釈迦如来を表す種子「バク」が大書されている。下半部は幅一〇センチメートル間隔で界線が刻まれ、その中央の区画に「如法守護」、その下に「十羅刹女 三十番神」、弘安七年の紀年銘が記されている。「如法」とは法華経のこと、十羅刹女と三十番神はこの経を守護し奉る神であり、この銘文を記したものは天台宗の板碑とされている（加藤 一九九〇）。一方、左側のせまい区画は、上半部に種子「ウーン」が刻まれているが、碑面はほとんど加工されていない。また、右側の区画が、主尊・趣旨・紀年銘と完結しているのとは対照的である。『市史4巻』「多賀城市内の供養碑」では、左側の主尊「ウーン」を、鬼子母神を表す種子としているのは、鬼子母神も十羅刹女とともに法華経護持の神であることに依るのであろう。

『市史4巻』「多賀城市内の供養碑」では、この板碑を経塚に建てられたものと推定し、本来は現在111がある塚にあつたものではないか、という千々和到氏の指摘を紹介している。「如法守護」十羅刹女 三十番神」の銘を記したものは、名取市大門山遺跡の乾元二年の板碑にも見られ、如法経理納供養の板碑としている（名取市教育委員会ほか 一九八八）。

115は胎蔵界大日如来を主尊とした嘉元四年の板碑である。ほとんど整形されない厚手の石材を使用しており、碑面は粗い。中央上部に種子「ア」が大書されている。116は胎蔵界大日如来を主尊とした正応三年の板碑である。種子は「ア」である。紀年銘の「大歳」は歳回りを表す語句である。117は地藏菩薩を主尊とした無紀年の板碑である。種子は「イー」である。年代は、八基中紀年銘を有するものが四基あり、いずれも鎌倉時代後期に造立されたものである。



石(乙)



110 井戸尻A (No.348)



石(キリク)



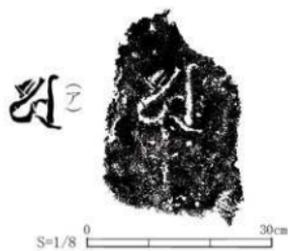
111 井戸尻C (No.356) 元享四年(一二二四)

右志者為先孝  
元享二年八月四日  
五七日追善也



S=1/8 0 30cm

112  
太子堂  
(No. 291)

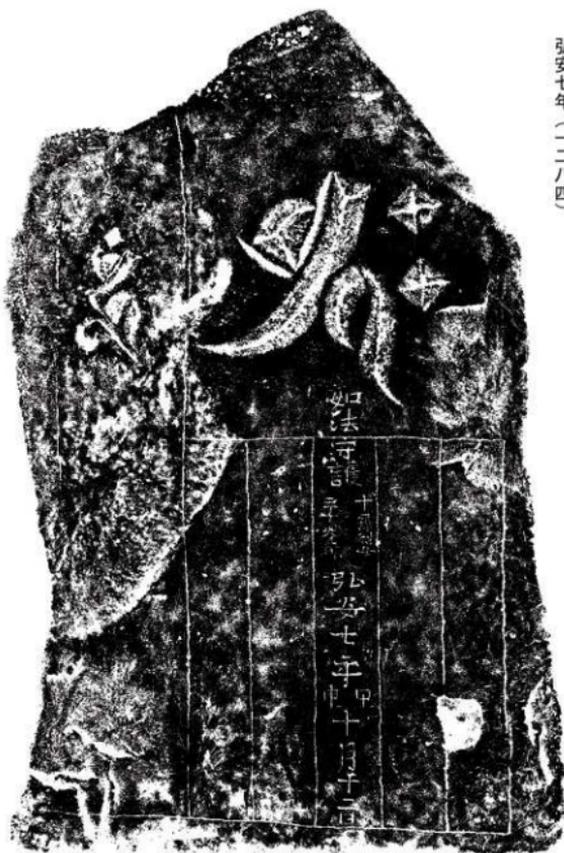


113  
太子堂  
(No. 292)



114  
化度寺 (No. 293)

弘安七年 (二二八四)



(スク)

如

(ウーシ)

如

如法守護

十羅刹女  
三十番神

弘安七年

甲 十月十二日

S=1/8 0 50cm



祀られていた当時の板碑と鞘堂



115

化度寺 (No. 294)

嘉元四年 (一三〇六)

乙  
亥

嘉元  
二年  
丙  
午  
二月  
日



S=1/8 0 50cm



116

日光院 (No. 318)

正応三年 (一二九〇)



日光院

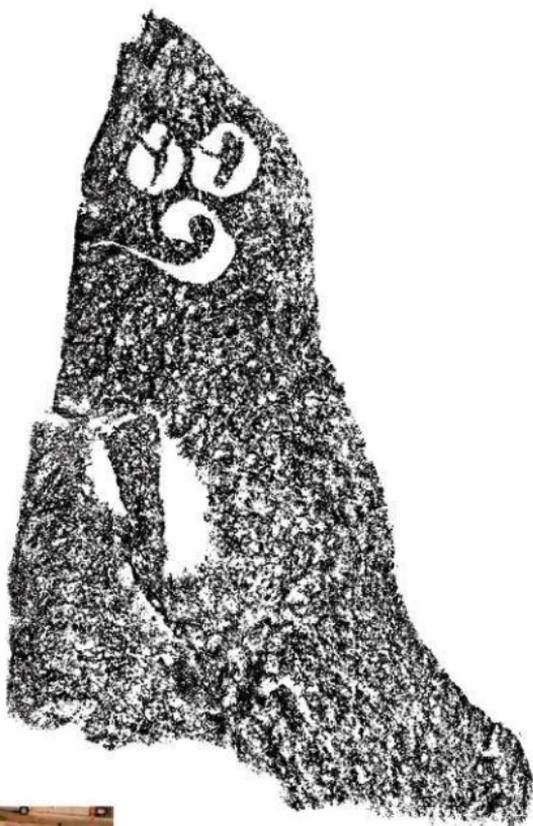
正應三年九月十三日

大歳

庚寅

S=1/8 0 30cm





0 30cm  
S=1/8



## 三 近世・近代の供養塔

## 1 庚申塔

123は寛文九年九月晦日の庚申塔である。大きな円相の下に「御奉供養石塔一休者也」とあり、庚申の二文字は、一文字目と二文字目の間の左右に配置されている。主題の下に「孝子・「敬白」記されており、中世の墓碑に類似した書式となっている。九月晦日(三〇日)はこの年五回日の庚申の日である。この庚申塔造立の導師として高崎山化度寺と日光院の名がある。131は青面金剛像を刻んだ延享二年(一七四五)一〇月二二日の庚申塔である。頭部がやや三角形を呈する石材を使用し、底部を平坦に加工して台座の石上に据えている。オモテ面の中央部を舟形に掘り窪め、青面金剛像を半肉彫りで表現して、その面脇に紀年銘を刻んでいる。舟形に掘り窪めた部分の外側はやや荒々しい面となっているが、上部には瑞雲を伴った日天と月天を配している。中央よりやや下には猿と鶏が左右に配され、周辺をやや彫り窪めた中に半肉彫りで表現されている。猿の脇には「化度寺」と記され、化度寺が導師となっていたことを示している。最下部には二名の交名があり、すべて無姓の男性名である。一〇月二二日はこの年五回日の庚申の日にあつた(註)。

## 2 自然神信仰の塔

141は文化一五年二月二日の山神塔である。山神の祭りは二月と十月の一七日に行われるところが多く、七日、九日、一日、二日、一日、一八日というところもあるという(庚申談話会 一九七五)。この塔は、山神が山から里に下つて田の神となる春の祭礼の日、村中によつて造立されたものである。150は無紀年の山神塔である。個人の造立であり、二月二日の日付のみ記されている。141と同様、春の祭日に造立し

たものであろう。149は大正四年の水神塔である。江戸時代から存在が知られていた井戸の脇に造立されたもので、造立に係る費用を寄附した有志者一三人の名が刻まれている。

## 3 馬の守護神の塔

118・119は主題である馬頭観世音の右上に松尾山と記している。近隣で該当するものとしては、最上三十三観音の第九番、松尾山観音(山形市)が考えられよう。125は昭和六年の馬頭観世音塔である。個人の造立であり、頭部に氏神と記して、施主が「馬頭観世音」を氏神として祀つたことを明記している。145は明治三五年の馬頭観世音塔である。個人による建立である。144は昭和四年の馬頭観世音塔である。盛岡産の源氏という馬の霊を祀つた旨を記している。表題の脇には多賀城駅、多賀城廃寺、役場、岩切驛等への距離を記し、道標的な役割も果たしている。134は天保二二年の馬頭観世音塔である。138は明治三八年の馬頭観世音塔である。140は大正八年の馬頭観世音塔である。上半部に主題、その左右に紀年銘を記し、下半部は平清に削り出し、「羅城号墓」と題した漢詩を刻んでいる。一文字隠れているが七言絶句と見られる。139は、昭和一八年の馬頭観世音塔である。

## 4 山岳信仰の塔

135 136 137は、三つの石材を使用した文久元年(一八六一)の出羽三山塔。最も大きい136には「湯殿山」と大書され、頭部に湯殿山を表す胎藏界大日如来「アーノク」を窺彫りしている。「開眼」とはこの石塔造立のこと、導師である光徳院信庵は天童氏の家中寺である光徳院(八幡村)の住職で、村を超えての活動を示している。

## 5 名号塔

122は文政四年の名号塔。名号の上に胎藏界大日如來の種子「ア」を刻んでいる。124は寛文一一年の名号塔である。頭書の「圓」は円相を漢字で示したものと見られ、同様の表現は、後述する宝永三年の虫供養塔にも見られる。念仏供養のため、諸旦那が建て奉ったと記載されている。現世安穩 後生善処 は妙法蓮華經卷第三、藥草喻品第五の散文が出典である。「咄」は人をしかりつけるときに発する語で、出典は「五分戒本」碧巖録」とされる（仏教語大）。「碧巖録」は特に臨濟宗において尊重される代表的な公案集である。「宮城郡高崎村 同郡田中村」と二つの村が併記されていることから、この念仏供養は高崎村・田中村が合同で執り行ったことが知られる。127は元禄五年の名号塔である。頭部に大きく円相を刻み、その下に名号、請花、二六名の交名を記している。すべて有姓の男性名である。129は正徳五年の名号塔である。頭部の円相、その下に名号を刻み、その左右に紀年銘がある。下部に無姓の男性名による交名がある。130は天保一二年の名号塔である。文字を刻む面は平滑に仕上げている。133は寛政四年の名号塔である。

## 6 題目塔

153は明治二八年の題目塔である。題目の下に廣潤山二二世日研とあり、花押が据えられている。側面に願主として兄弟一名の名が記されている。廣潤山は仙台市の日蓮宗寺院法蓮寺。154は明治三十一年の題目塔。題目の下に、猿が陽刻されており、殺した老猿の供養のため造立したとの伝承がある。題目を挟んで「帝釈」「天王」と記されている。その意味は不明であるが、帝釈天の石仏には日蓮宗と関係したものが多くという指摘がある（庚申談話会 一九七五）。143は大正三年の題目塔である。側面

に「為鈴木勇四郎供養」とあり、造立の理由が明記されている。147は明治二〇年の題目塔である。毛利氏によって造立されたもので、毛利氏敷地内の堂宇の中で祀られている。

表6 題目塔ほか一覧

番号	田村名	所在地	種別	年代	備考
1	高崎	井戸尻A	題目塔	明治20年	1887
2	高崎	井戸尻A	祈禱札	明治21年	1888
3	高崎	井戸尻A	祈禱札	明治25年	1892
4	高崎	井戸尻A	祈禱札	明治27年	1894
5	高崎	表A	題目塔	明治27年	1894
6	笠神	西園寺	題目塔	明治28年	1895
7	高崎	太子堂	題目塔	明治28年	1895
8	高崎	太子堂	題目塔	明治31年	1898
9	留ヶ谷	野田C	題目塔	明治35年	1902
10	高崎	表B	題目塔	明治44年	1911 昭和57年三崎氏確認
11	八幡	八幡神社	題目塔	明治44年	1911
12	八幡	八幡神社	題目塔	明治44年	1911 昭和57年三崎氏確認
13	高崎	表A	題目塔	大正2	1913 昭和57年三崎氏確認
14	高崎	表B	題目塔	大正3年	1914
15	高崎	表B	題目塔	大正3年	1914 昭和57年三崎氏確認
16	高崎	表B	題目塔	大正4年	1915 昭和57年三崎氏確認
17	留ヶ谷	向楽院B	題目塔	大正5年	1916
18	高崎	井戸尻A	祈禱札	大正11年	1922
19	高崎	表B	題目塔	大正15年	1926 昭和57年三崎氏確認
20	八幡	本丸	題目塔	昭和11年	1936
21	留ヶ谷	藤樹地蔵	勧請札	昭和12年	1937
22	高崎	表B	「妙法」 禪	昭和13年	1938
23	高崎	表B	題目塔	昭和28年	1953 昭和57年三崎氏確認
24	田中	沼畑	題目塔	昭和41年	1966 昭和57年三崎氏確認
25	高崎	次郎屋敷	題目塔	昭和46年	1971
26	高崎	オダマンサマ	題目塔	昭和47年	1972
27	高崎	表	題目塔	昭和49年	1974
28	八幡	八幡神社	牛頭天王	平成6年	1994
29	八幡	八幡神社	庚申	平成7年	1995
30	高崎	井戸尻A	祈禱札		
31	高崎	井戸尻A	祈禱札		
32	高崎	表C	題目塔		
33	下馬	向山	題目塔		昭和57年三崎氏確認

## 7 その他の仏教関係の塔

128は宝永三年の虫供養の塔である。虫供養とは、農作のために殺した虫の霊を慰めるための供養である。頭書の「圓」は円相を漢字で示したものと見られ、その下に「虫供養銘曰」と主題を記し、その両面に八文

字・一〇行からなる漢詩を記している。その下に造立の趣旨と紀年銘を記し、その下に請花を刻み、さらにその下に四三名以上の交名を記している。確認できるのはすべて有姓の男性名である。造立趣旨の中には「ミズ、ケラ、エビなど虫類の名が見られ、それらの供養を目的とした供養塔である。〔銘曰〕として漢詩を記す様式は、八幡の宝国寺にある宝永元年（一七〇四）の經典供養塔にも見ることができ。121は無紀年の伊勢大権現の供養塔である。個人の造立であり、年次はなく、二月一六日の日付のみ記されている。頭部に阿弥陀如来の種子「キリーク」を刻んでいるが、書体が崩れ、梵字の体裁をなしていない。126は「有縁無縁三界萬靈」塔である。この世に生きとし生けるものすべての霊をこの塔に宿らせているというものである。三界とは、欲界（食欲、性欲等欲の世界）、色界（物質の世界、無色界（欲も物もない世界））のこと、または過去、現在、未来をさすこともあるという。155は熊の神の塔である。昭和一七年頃まで化度寺西側にあったオグマンサマ（お熊野様）と呼ばれた石の祠を移動した後、古くなった祠の代わりに建てられたものである。

註 本塔は、県内の庚申塔を集めた『宮城県庚申塔』（渡邊一九八三）に収録され、宮城県南部では最初に現れる背面金剛像として紹介しているが、紀年銘を延宝三年と誤読している。

118

上野A (No. 379)

明治六年（一八七三）



S=1/8 0 30cm

松尾山

明治六年 西三

馬頭観世音

八月吉日

戸枝仲七





松尾山  
明治廿二年 旧 四月二日  
馬頭觀世音  
施主 高寄村  
鈴木源三郎



S=1/8 0 30cm

119  
上野 A (No. 380)  
明治二年 (一八八九)



昭和二十三年 四月十五日  
馬頭觀世音  
鈴木源治郎



S=1/8 0 30cm

120  
上野 A (No. 382)  
昭和三年 (一九四八)

121  
上野B (No. 357)



(キリク)  
二月十六日  
御伊勢大権現  
曾我庄吉

S=1/8 0 30cm

122  
念仏壇 (No. 343)



(ア)  
文政四巳年  
南無阿彌陀

七月吉日 □



文政四年 (二八二)



S=1/8 0 30cm

123  
念仏壇 (No. 344)

寛文九年 (一六六九)



0 30cm  
S=1/8



庚 申

御奉供養石塔一休者也

高崎山化度寺伍口雲説

孝子

敬白

干時寛文九年晦日 日光院



124 念仏壇 (No. 345)

寛文二年 (一六七二)



S=1/8 0 30cm

圓 同名同號阿彌陀佛

寛文十一年  
 為念仏供養諸且那  
 奉建立石塔一鉢依  
 孝子  
 宮城之郡高崎村

此供口則現世安穩  
 復生善處文者也咄

敬白

八月二十九日 同郡 田中村





昭和六年 旧四月八日  
氏神 馬頭観世音  
曾我庄松



S=1/8 0 30cm

125  
念仏壇 (No. 346)  
昭和六年 (一九三二)



天明四年  
主人 お志ん  
助之丞 吉又  
有縁無縁三界萬霊  
三月廿四日



S=1/8 0 30cm

126  
化度寺 (No. 298)  
天明四年 (二七八四)

○

南無阿弥陀佛

(請花)

八月十八日

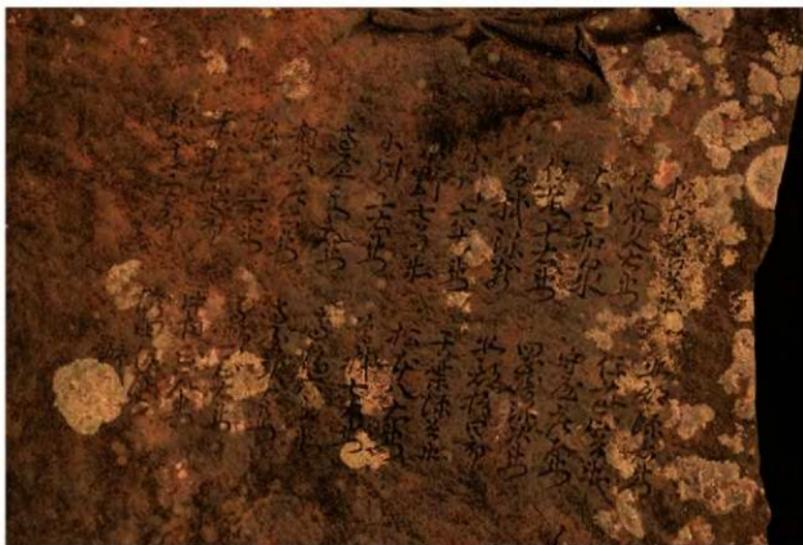
干時元禄五壬申卷

- |        |        |
|--------|--------|
| 松本次郎兵衛 | 安部源右衛門 |
| 伊藤久右衛門 | 伊藤正兵衛  |
| 大山和泉   | 守屋庄左衛門 |
| 伊藤十右衛門 | 岡崎弥次衛門 |
| 曾我弥藏   | 安部權四郎  |
| 小川六右衛門 | 千葉源兵衛  |
| 小野七兵衛  | 松本八右衛門 |
| 小川二右衛門 | 曾我七右衛門 |
| 守屋口右衛門 | 高橋六兵衛  |
| 相沢庄右衛門 | 守屋八右衛門 |
| 松本三右衛門 | 高野正右衛門 |
| 赤井源七郎  | 中村正左衛門 |
| 松本三十郎  | 瀧田信左衛門 |

姉



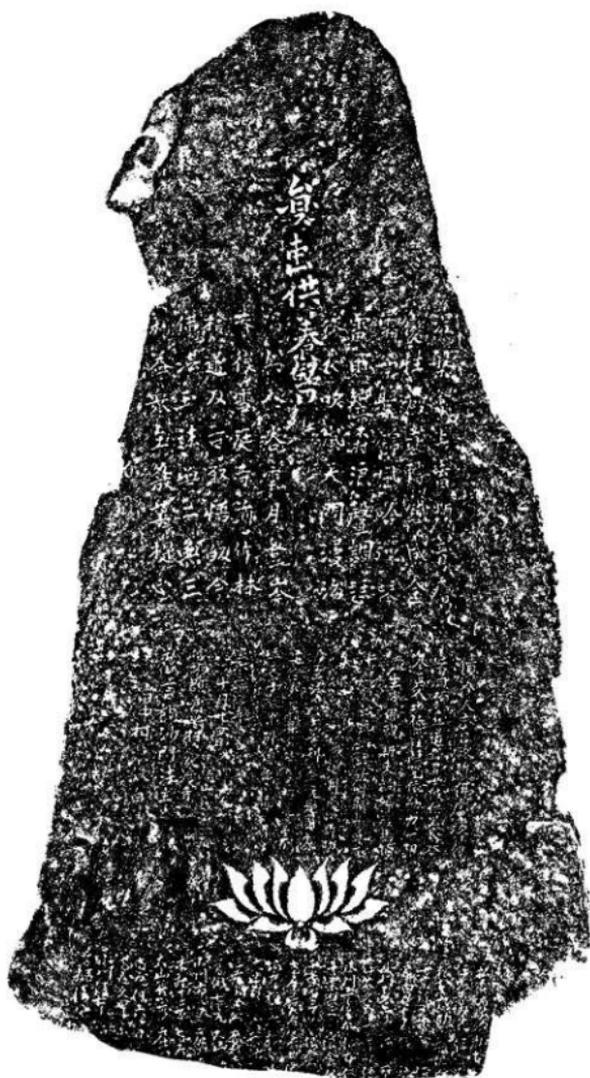
S=1/8  30cm



128

化度寺 (No. 296)

宝永三年 (一七〇六)



S=1/8 0 50cm

圖虫供養銘曰

涅槃會上畜類育瘠  
 變性為道轉□成金  
 霜葉□□風吟強琴  
 雷雨響□浪聲調愁  
 作花吹嵐天門漫海

陽鳥入谷雲月登岑  
 春後雪庭寺前竹林  
 捨邇及言仗悟皈今  
 佛法王法無二無三  
 利益衆生發菩提心

債今人志曰歎新佛慮次第  
 者同願在道俗男女彼供養奉  
 尽其人功德僧供咒依動力一切  
 衆生成佛馭耕夫餉婦疲馬傾  
 □螻蟻□蚊蝦蜈蚣蚯蚓眼耳鼻舌  
 身意如所不成通用處以斯功  
 乃至法界平等利益祝是國家  
 安全鄉里繁昌畢竟何累當不  
 立文字放□別傳咄々

寶永三<sub>丙戌年</sub>  
 十月廿四日

高崎山  
 宮城郡高崎村 化度寺  
 積氏言說沙門法主  
 田中村 敬白

高橋清八郎	小川清七郎	守屋久四郎	守屋清六	大山善三郎	木村十兵衛	小川	曾我七	伊藤□衛門	大山五郎右衛門	阿部權七	守屋吉左衛門	千葉才三郎	千葉□三郎	小川三郎兵衛	伊藤久五郎	小川□三郎	戸井田長十郎	千葉弥兵衛	松本六助	伊藤忠太郎	松本太郎左衛門
阿部	小川	小笠	戸井田	守屋久	守屋久	戸井田	大山助三	赤井岳	赤井善	松本	赤井源	沼倉久	沼倉	松本傳	赤井傳	阿部市□	伊藤源三□	仁兵	相沢五	伊藤	松本



○ 南無阿彌陀佛

正徳五年

九月三日

久右衛門内	權	源三郎内	作左衛門
次右衛門母	□母	文三郎母	十右衛門内母
与□三母	□母	清右衛門母	長五郎内母
二右衛門内	□母	喜三郎母	三兵衛母
四郎左衛門母	□母	太郎左衛門	与五郎母
			茂兵衛内母
			清六内母
			□左衛門母
			□右衛門内母
			久三郎母
			市右衛門母
			長十郎内母
			□左衛門母
			□右衛門内母



S=1/8 0 30cm



○ 南無阿彌陀佛

八月十五日

天保十二年丑歲

(請花)

長右工門

當村 由五郎

養助 小三郎

久太郎  
仲太郎  
万右工門

0 30cm  
S=1/8







(カーン)  
日光大権現



132  
日光院 (No. 341)

S=1/8 0 30cm

133  
日光院 (No. 324)  
寛政四年 (一七九二)

寛政四子年  
南無阿彌陀佛  
十月吉日  
(請花)  
丹次  
李五郎  
与兵衛  
兩村



S=1/8 0 30cm

134

日光院 (No. 325)

天保二年 (一八四一)



S=1/8 0 30cm

馬頭觀世

天保十二年

三月吉日

当村



135

日光院 (No. 328)

文久元年 (一八六一)



S=1/8 0 30cm

月山

文久元



アーンク

湯殿山

當村中

開眼導師  
光徳院信徳



S=1/8 0 30cm



羽黒山  
十一月八日

S=1/8 0 30cm



138

日光院 (No. 332)

明治三十八年 (一九〇五)



S=1/8 0 30cm

建之

明治三十八年

馬頭觀世音

旧八月八日

沼倉栄五郎



139

日光院 (No. 338)

昭和十八年 (一九四三)



S=1/8 0 30cm

馬頭觀世音

昭和十八年二月十日

多賀城村高崎

松本寅松





S=1/8 0 30cm

大正八年

馬頭觀世音

十一月十九日

題羅城號之墓

松籽搬運二十

奉公無比實堪

霜風一夜梧桐

縷々村中哀語

今村積口





山神  
二月十二日 村中

文化十五寅年



S=1/8 0 30cm

141 多賀神社 (No. 280) 文化十五年(二八二八)



南無妙法蓮華經馬樞神  
毛利忠五郎建之

明治廿七年旧九月廿八日



S=1/8 0 50cm

142 表A (No. 362) 明治二十七年(二八九四)

143

表B (No. 350)

大正三年 (一九一四)

為鈴木勇四郎供養



大正三年十一月建立

南無妙法蓮華經 日蓮大菩薩

旧十二日

毛利新三良  
鈴木源之助  
鈴木健治



0 30cm  
S=1/8





# 馬櫛神

東 多賀城驛至一杆百廿米

大字大代ヲ經テ七ヶ濱村至

北 多賀神社多賀城廢寺址至八百廿米

野田の玉川ヲ經テ塩釜町至

南 大字高橋ヲ經テ高砂村至

本村後場ヲ經テ多賀城陸垂垂村八百十米

西 大字市川ヲ經テ岩切驛至

昭和四年十一月村道改修成日

源氏胤盛岡の産

性温良王家に奉

任して勞役亦服

すること十有一

年昭和三年一月

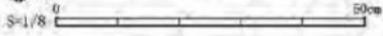
十九日俄し斃る

誠は憐憫に堪へ

ず茲に其靈を祀

鈴木源之助氏

塩釜町



馬 櫃 神

東 多賀城驛ニ至ル一杆百〇四米

大字大代ヲ経テ七ヶ濱村ニ至ル

北 多賀神社多賀城廢寺跡ニ至ル八百七十米

野田の玉川ヲ経テ塩釜町ニ至ル

南 大字高橋ヲ経テ高砂村ニ至ル

西 本村役場ヲ経テ多賀城跡ニ至ル一杆八百四十米

大字市川ヲ経テ岩切驛ニ至ル

昭和四年十一月村道改修成りし日

源氏號盛岡の産

性温良主家に奉

仕して勞役尔服

すること十有一

年昭和三年一月

十九日俄に驚る

誠に憐憫に堪へ

る

鈴木源之助建

塩釜町

石工 志賀清弥



145

表C (No. 361)

明治三五年(一九〇二)

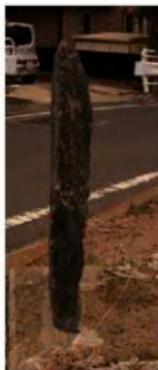


0 30cm  
S=1/8

馬櫃神

明治卅五年九月七日

戸枝留右工門建之



明治廿年五月  
南無妙法蓮華經 七面大明神

毛利氏



S=1/8 0 30cm



147 井戸尻 A (No. 347) 明治二〇年(一八八七)

小川家先祖代々の靈に記る  
南無證明涌現多寶如来  
南無妙法蓮華經  
南無久遠実成釋迦牟尼佛

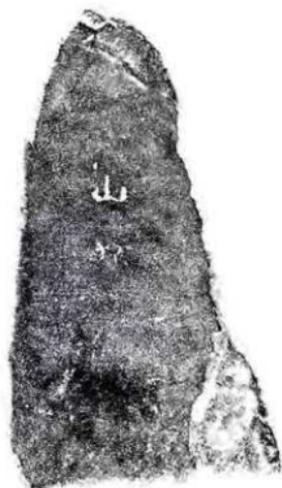
昭和四十六年九月鈴木栄次郎建之



146 表 D (No. 738) 昭和四十六年(一九七二)



山神



S=1/8 0 30cm

148 井戸尻 A (No. 349)

149

井戸尻B (No. 364)

大正四年 (一九一五)

水神

旧三月二十二日

大正四 卯年

有志者

金拾円 鈴木源之助

金六円 戸枝留石工門

金五円 松本善松

金五円 毛利新三郎

金五円 戸枝三之丞

金四円 大山源之丞

金四円 曾我重五郎

金四円 小西桃治郎

金貳円 阿部勇太郎

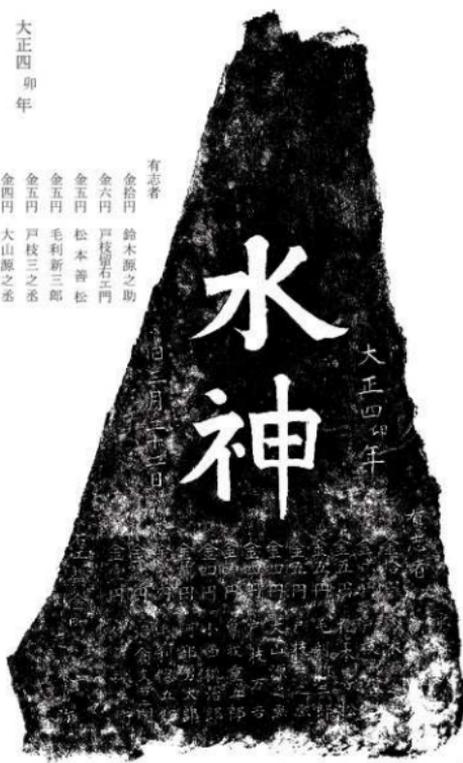
金貳円 毛利忠五郎

金貳円 沼倉友右門

金壹円 伊藤権兵衛

石工 塩釜町

志賀清弥



0 30cm  
S=1/8



150

井戸尻C (No. 354)

山神

二月十二日

治平



0 30cm  
S=1/8





納  
妙法守護大大神  
奉



0 30cm  
S=1/8

151  
井戸尻C  
(No.355)



正徳三年九月廿日



0 30cm  
S=1/8



152  
太子堂  
(No.288)  
正徳三年(一七三)

153 太子堂 (No. 289) 明治二十八年 (二八九五)



南無妙法蓮華經

廣潤山  
廿二世 日研  
(花押)



明治廿八年十月廿九日

願主 鈴木榮松  
弟 健治



S=1/8 0 30cm

154 太子堂 (No. 290) 明治三十一年 (二八九八)



明治三十一年  
帝釋

南無妙法蓮華經

天王  
二月八日 鈴木健二



S=1/8 0 30cm



昭和卅三年十二月  
熊の神  
鈴木源吉  
建之



0 30cm  
S=1/8

155  
熊野神社 (No. 358)  
昭和三十三年 (一九五八)

沼倉家先祖代々之靈に祀る  
南無證明涌現夕寶如来  
南無妙法蓮華經 日寛  
南無久遠実成釋迦牟尼佛  
(花押)

昭和四十七年十月源吉建之



0 30cm  
S=1/8

156  
熊野神社 (No. 359)  
昭和四十七年 (一九七二)

## 四 石鳥居・幟立・石燈籠・手水鉢・扁額

157は多賀神社に奉納された扁額である。

158は明治九年に、小川氏によって多賀神社に奉納された手水鉢である。

159は大正九年に多賀神社に奉納された石鳥居である。社掌は武本時保で、奉納したのは高崎井戸尻の鈴木氏である。文字が刻まれる部分は平滑に加工し、それ以外の部分は荒々しい面を残している。

160・161は日光院の幟立である。大正一三年に区内一同によって奉納されたもので、世話人は曾我氏である。

162・163は常夜燈形の石燈籠である。162は安政三年（一八五〇）に長右衛門の娘いねが奉納したものである。163は元治二年（一八六五）に高崎村の女性五名、田中村の女性一名が合同で奉納したものである。これらは、現在石段前に設置されているが、本来一対として奉納されたものではないが、いずれも奉納者が女性である点が注目される。また、163に見られる高崎村と田中村の女性による奉納のあり方は、二つの村の関係を考えさせる資料である。

164は狛犬の台座銘である。「白犬天神」とあり、大正一〇年に井戸尻の鈴木氏によって奉納されたものである。

## 157 多賀神社 (No. 739)



多賀神社

## 158 多賀神社 (No. 281)

明治九年（一八七六）

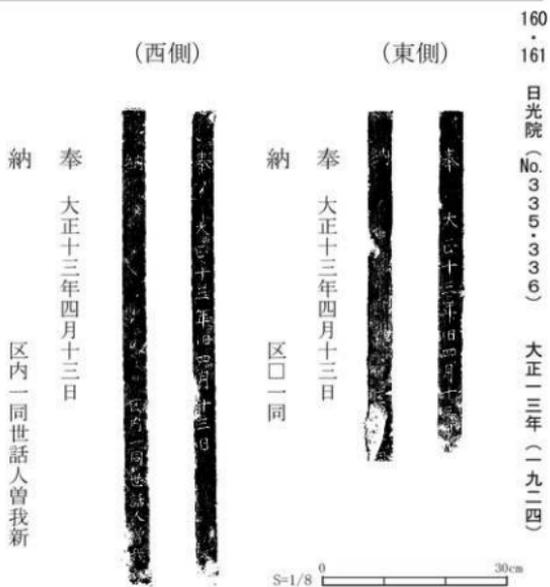
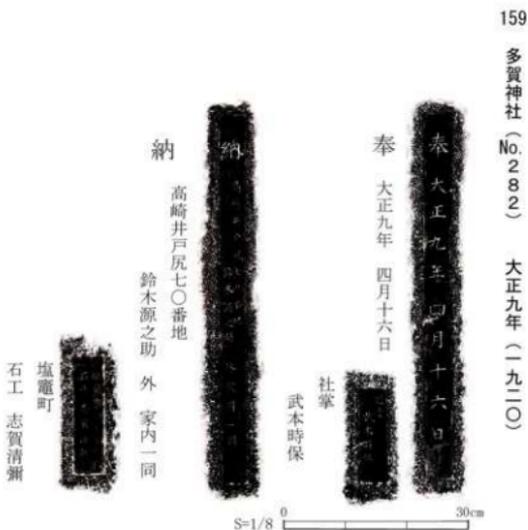
奉

明治九子  
八月廿三日

納

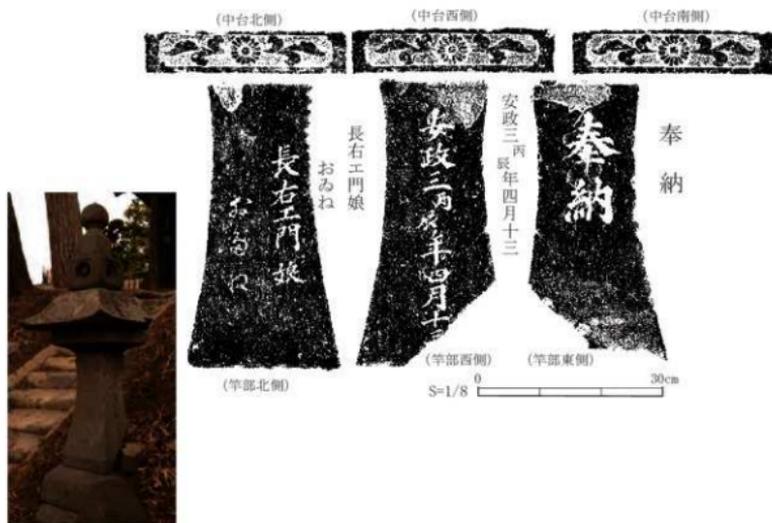
小川利右エ門

0 30cm  
S=1/8



162

日光院 (No. 326) 安政三年 (一八五六)



163

日光院 (No. 331) 元治二年 (一八六五)





神天犬白

神天犬白

(正面)

石工  
弥清賀志

(左側面)

大正十三年三月三日  
高崎七〇番井戸尻

(右側面)

大正十三年三月三日  
高崎七〇番井戸尻  
鈴

S=1/8 0 30cm

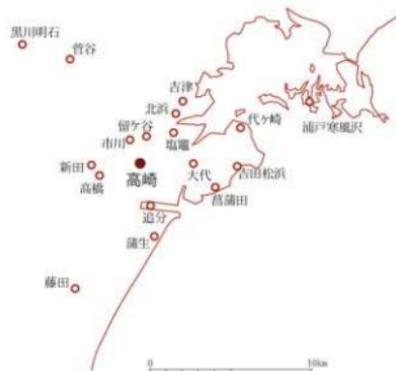
164  
表B (No.352)  
大正一〇年(一九二一)

五 顕彰碑・沿革碑ほか

165は昭和一五年の「御井戸碑」である。江戸時代から知られる井戸の由来を記したもので、大正四年の水神塔とともに井戸の脇に立っている。高崎と東田中を中心とした五六名によって造立されたものである。

166は昭和一三年の「妙法」碑である。日蓮宗への信仰が厚い高崎の里人が付近から鬼子母神の古碑を見つけ、明治二五年に県知事の許可を得て堂宇を建てて祀り、信者を得た経緯を記したものである。高崎を中心とした、近代における日蓮宗信仰を知る上で貴重な情報が記されている。本碑はその開宗五〇年記念として建立されたもので、ウラ面には本碑建立にあつたの寄附者名が記されており、信者の地域的広がりをも知ることができる。

169は、高崎・東田中区への電燈架設に係る「記念碑」である。大正一四年に建立されたもので、高崎・東田中の住民二七名、多賀城村架設惣代、高崎区長、架設世話人五名、建碑世話人三名の名が刻まれている。



第30図 鬼子母神堂信者分布図



御井戸碑

夫神者人之依崇增威人者依神之德添運云區民報本之至誠子孫相承千百歲不變真足以為天下民生之模範矣去多賀神祠西南數町松杉鬱蔥靈氣蒼焉有一泉鄕俗稱御井戸清冽口出諸水上居民數十戶古來使用之於是有志胥謀冀盡畫策設金融機關名水神講確資効力浚深以時其朽者新之其壞者修之障保互相救援以欲永維持此美風是和協一致之結果也若風伯雨師旱天雖有逞威時有此堅牢冀却反民心之團結在則何足憂焉故茲當建碑叙其梗概以口貞琅使後昆知其所由云爾

昭和十五年三月中流

星 守二謹撰

今村積壽 書

皇紀二千六百年建之

- |        |        |       |
|--------|--------|-------|
| 高崎     | 中川權三郎  | 講元    |
| 戸枝權石三門 | 赤井きむ   | 鈴木源之助 |
| 松本寅松   | 東田中    | 世話人   |
| 毛利新五郎  | 伊藤長作   | 伊藤源三郎 |
| 大山源五郎  | 赤井春作   | 今村積壽  |
| 戸枝長之丞  | 小川新吉   | 戸枝德治  |
| 曾我新吉   | 赤井大次郎  | 戸枝九兵衛 |
| 小西興次郎  | 伊藤箕三郎  | 大山深之丞 |
| 毛利興吉   | 相澤朝治   | 阿部勇太郎 |
| 留春春吉   | 伊藤源三郎  | 相澤巳之吉 |
| 小幡善松   | 小川興市   |       |
| 今村みつ   | 小川平太郎  |       |
| 今村隆三郎  | 小川龜一郎  |       |
| 鈴木 榮   | 小川豊作   |       |
| 鈴木庄左衛門 | 遠藤常吉   |       |
| 鈴木源一郎  | 相澤武治   |       |
| 赤井喜代治  | 相澤留吉   |       |
| 鈴木源之進  | 伊藤權七   |       |
| 曾我庄松   | 菅野善内   |       |
| 松本喜三郎  | 高橋つぎ   |       |
| 鎌田平藏   | 飯 區    |       |
| 毛利忠四郎  | 伏谷 萬   |       |
| 阿部權十郎  | 鎌田平三郎  |       |
| 曾我庄三門  | 湖山勇之助  |       |
| 毛利寛重   | 加藤五吉   |       |
| 三河素秀   | 鈴木仁左三門 |       |
| 松本長治   | 大友徳四郎  |       |
| 大山庄之丞  | 阿部清次郎  |       |
| 戸枝利之助  | 浅野みつ   |       |
| 大堀清吉   |        |       |

石工  
志賀清彌





法妙

法蓮寺住職権僧正梅森寛了篆額

高崎の里人毛利新三郎翁夫妻并に鈴木氏慈母貞等深く法  
 華宗を信じ毛利氏は徒歩にて身延山に参詣せしこと七度  
 貞氏九十歳の天壽を保つ帶て新三郎の妻多代久しく病む  
 や一に平處を祈願十然るに靈驗違はず西南下餘を距る  
 其の中二鬼子母神の古碑あらはる此より多代の病日全  
 りすし今庵中翁感恩終生護法を以て任じ今才明治廿五年  
 三月休職知事の允可を得新に堂宇を建て之に於て瞻依す日  
 蓮宗法蓮寺住職梅森寛了師の指導にて今や法化近郷にあ  
 まわく信者堂に溢るに至る

昭和十三年八月上旬

八幡 星野 守三  
今村 権三

0 30cm  
S=1/8

## 法 妙

法運寺住職権僧正梅森寛了篆額

高崎の里人毛利新三郎翁夫妻并に鈴木氏慈母貞等深く法華宗を信じ毛利氏は徒步にて身延山に参詣せしこと七度貞は九十歳の天壽を保つ嘗て新三郎の妻多代久しく病むや一心に平癒を祈願するに靈驗違はず西南丁餘を距る叢の中に鬼子母神の古碑あらはるこれより多代の病日ならずして癒ゆ翁感恩終生護法を以て任となす明治廿五年三月本縣知事の允可を得新に堂宇を建て之れに攝依す日蓮宗法運寺住職梅森寛了師の指導にて今や法化近郷にあまねく信者堂に溢るゝに至る

昭和十三年八月上澁

八幡 星 守二 撰

高崎 今村積壽 書

石工 志賀清弥





開宗五十年記念第二世毛利寛要

名 芳 者 助 賛

一金十円也	星 守二	一金三円也	和泉吉治	一金五円也	佐藤とみ
一金十円也	今村積壽	浦 生	阿部清次郎	浦戸寒風澤	高嶋養二郎
留ヶ谷	櫻井いち	追 分	阿部豊次郎	菅 谷	高橋秀一
一金七円也	講中一同	一金三円也	加藤庄之助	菅 谷	渡邊康次
一金六円也	櫻井庄藏	一金三円也	加藤清六	區 内	講中一同
一金五円也	櫻井甚兵衛	一金三円也	加藤まさ	區 内	大山源五郎
一金三円也	馬場清治	一金三円也	加藤たり	區 内	鈴木庄左衛門
塩 釜 町	毛利林次	高 橋	阿部たか	區 内	鈴木徳治
一金五円也	古河寅次郎	新 田	鈴木仁左衛門	區 内	戸枝徳治
北 浜 町	櫻井たけ	市 川	遠藤寛達	區 内	鈴木 榮
一金五円也	講中一同	大 代	講中一同	區 内	毛利与惣吉
一金三円也	高田哲雄	黒川明石	高橋清之助	區 内	菅野善内
一金三円也	鈴木惠津	黒川明石	高橋盛治	區 内	赤井きわ
一金三円也	手跡はる	黒川明石	高橋盛治	區 内	鎌田平藏
吉 津	森 四郎	黒川明石	高橋盛治	區 内	阿部権十郎
一金五円也	講中一同	黒川明石	高橋盛治	區 内	戸枝みん
代ヶ崎	赤間竹治	黒川明石	高橋盛治	區 内	鈴木万吉
一金五円也	講中一同	黒川明石	高橋盛治	區 内	鈴木万吉
葛 蒲 田	講中一同	黒川明石	高橋盛治	區 内	鈴木万吉

建設世話人

大山深之丞

鈴木庄左衛門

戸枝徳治

毛利新四郎

建設者

毛利新五郎

鈴木源之助





## 碑 念 紀

大正十三年九月十日宮城縣電氣課の電燈架設工事初まるや前年稀有なる旱魃にて作物豊ならざるに拘らず惣代區長及世話人私心を挟まず私事を抛ち本區民と共に協力一致之に當り大正十四年三月三日竣工点燈さる依て之を紀念す

総工費金壹千円内縣請負金  
參百七円

点燈戸数高崎三十一戸  
東田中五戸

大正十四年六月一日 建之

## 高崎區

鈴木 榮

鈴木源之助

戸枝三之丞

毛利新五郎

戸枝權右衛門

小西桃次郎

曾我庄松

戸枝万吉

赤井文次郎

沼倉春吉

毛利與惣吉

小幡善松

大山庄之丞

毛利忠四郎

大場清吉

松本喜三郎

阿部今朝吉

阿部權十郎

松本清三郎

小川庄之助

中川權三郎

化度寺

学堂

東田中

伊藤久五郎

伊藤長作

小川庄次郎

伊藤定吉

多賀城村架設惣代

鈴木源一郎

高崎區長

曾我重五郎

架設世話人

鈴木積壽

鈴木源之助

鈴木庄左衛門

大山深之丞

相澤巳之吉

東田中

建碑世話人

鈴木善松

戸枝徳治

阿部勇太郎

石工 塩釜町 志賀清弥



## 六 墓碑

170、173は化度寺の住職の墓地に祀られているものである。

170は無縫塔の残欠である。享保一五年に死去した「大林十一世」の墓碑である。171は無縫塔で、「前永平不金中大和尚」の墓碑である。172は自然石の墓碑で「當寺四世大和尚」と刻まれている。173は無縫塔の残欠である。「石柱和尚神師」「亥正月十四日」の文字が確認できるが、詳細は不明である。

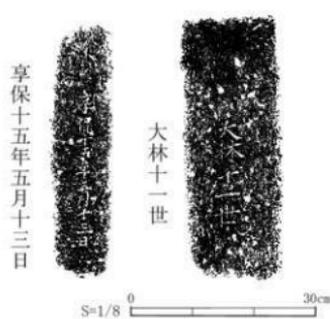
177、186は仙台藩家臣大石氏の墓碑である。「藤原姓大石氏系譜」によれば、大石氏は、延文中中（一三五六―一三六〇）に大曾根長清の二男長景が伊達宗遠に仕えて伊達郡大石城に住み、以来大石氏を称した。長景より九代後の元實の代に政宗に仕え、知行五貫四五九文で八幡村の要害屋敷を賜ったという（以下、便宜的に八幡村大石氏初代とする）。元實の墳墓は宮城県高崎村化度寺にあるとの記載はあるが確認できない。元實の子が季實であり、177、186は季實から尚實まで七代にわたる当主とその妻の墓碑である。「伊達世臣家譜」には大石氏として三氏の系譜が書き上げられているが、元實の家系は取録されていない。

177は元禄六年（一六九三）に没した二代季實の墓碑である。大石氏の墓碑の中では最も古く、「為」の字に続いて法名が記されている。178は正徳二年（一七二二）に没した茂實の墓碑である。茂實は季實の子守實の嫡男であったが早世した。法名の上に円相がある。179は正徳四年（一七二四）に没した三代守實の墓碑である。守實は季實の二男であったが嫡男満太郎が早世したため、家督を継いだ。法名の上に記された「婦真」とは、迷いの世界を脱して本元に帰ることで、具体的には死を意味する。180は享保二年（一七一七）に没した二代季實の妻の墓碑である。

法名の上に円相があり、この墓碑以降すべての墓碑に円相がある。181は享保一七年（一七三二）に没した三代守實の妻の墓碑である。法名には比久尼が用いられている。182は天明四年（一七八四）に没した四代景實と、同二年（一七八二）に没したその妻の連名の墓碑である。この墓碑以降、夫婦連名の墓碑となっている。景實は守實の二男であったが、嫡男茂實が早世したため家督を継いだ。宝国寺にある文化元年（一八〇四）の「念仏塚」塔に造立者である元實の祖父として記載がある。183は文化一四年（一八一七）七代道實と、同一一年（一八一四）に没したその妻の連名の墓碑である。道實は二九歳、その妻は二〇歳といずれも若くして死去している。184は享和二年（一八〇二）に没した五代定實と、文化七年（一八一〇）に没したその妻の連名の墓碑である。オモテ面に法名、ウラ面に没年と行年等が記されている。定實は、明和元年（一七六四）に庚田の庚申供養塔を造立した人であり、「念仏塚」塔に造立者元實の父として記載がある。185は明治四年（一八七二）に没した八代尚實と、慶応四年（一八六八）に没したその妻の連名の墓碑である。尚實は、仙台藩士大石氏として最後の当主であり、この大石家墓地に残る墓碑としては最も新しいものである。186は文政二年（一八一九）に没した六代本實と、嘉永四年（一八五二）に没したその妻の連名の墓碑である。本實は、文化元年（一八〇四）の「念仏塚」塔の造立者である。187は延宝七年の日光院妻の墓碑である。頭部に円相があり、「為清閑禪定尼菩提也」と供養の文言を主題としている。日光院が妻帯者であることから、僧侶ではなく修験の道士と推定させる資料である。



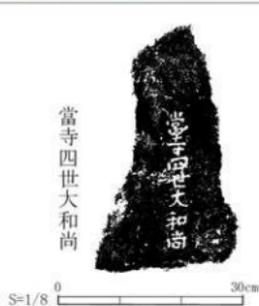
171 化度寺 (No. 301) 天保二年 (一八三二)



170 化度寺 (No. 300) 享保十五年 (一七三〇)



173 化度寺 (No. 303)



172 化度寺 (No. 302)

174 化度寺 (No. 305) 享保二年 (一七一七)



S=1/8 0 30cm

○ 禪眼覺定信士 (請花)

享保二丁酉年

三月十三日

杉田助之進



175 化度寺 (No. 306) 享保十一年 (一七二六)



S=1/8 0 30cm

◎ 華岩妙榮信女 (請花)

享保十一年 丙午歲

四月十日 大石市兵衛妻

六十三歲



176

化度寺 (No. 307)

文政八年 (一八二五)

与八  
文政八乙酉天  
○ 太鐵奈路信士 (請花)  
十二月廿九日  
親行年六十四才



0 30cm  
S=1/8

177

化度寺 (No. 308)

元禄六年 (一六九三)

干時元禄六毛  
為雪岑了美信士  
十月十七日  
大石佐渡



0 30cm  
S=1/8





○冬圓明白善信士

(請花)

干時正徳二毛  
十一月廿九日大石文衛門茂實

干時正徳二毛



S=1/8 0 30cm

178 化度寺 (No. 309)

正徳二年 (一七二二)

帰真

鐵心亮船信士

靈位

(請花)

正徳四年  
六月十七日 大石勘十郎守實

正徳四年

五十六歳



S=1/8 0 30cm

179 化度寺 (No. 310)

正徳四年 (一七二四)

180

化度寺 (No. 311)

享保二年 (一七二七)



S=1/8 0 30cm

○ 機擘妙輪信女 (請花)  
十月七日  
大石佐渡 妻  
享保二年 壬子年

181

化度寺 (No. 312)

享保十七年 (一七三二)



S=1/8 0 30cm

○ 樹參榮柏比丘尼 (請花)  
十一月廿七日  
大石勘十郎妻  
享保十七年 壬子年



○ 實道英心居士  
花林貞春大姉 (請花)  
天明二 寅 正月十六日  
同人妻七十六

大石源右工門景實  
天明四 辰 八月四日 八十四



S=1/8 0 30cm

182 化度寺 (No. 313) 天明二・四年 (二七八二・二七八四)



○ 古法玄流居士  
花紅妙柳大姉 (請花)  
文化十一年甲戌年三月十六日  
同人妻年二十才

大石源治藤原道實  
文化十四丁丑年八月四日 年二十九才



S=1/8 0 30cm

183 化度寺 (No. 315) 文化一・二・四年 (二八二四・二八一七)

184

化度寺 (No. 314)

享和二・文化七年 (一八〇二・一八一〇)



○ 大安正悦居士  
壽筭妙量大姉



同人妻七十四歳  
文化七 庚午年正月七日  
享和二 壬戌年十一月廿七日  
大石源之丞七十五歳寂



185

化度寺 (No. 317)

慶応四・明治四年  
(一八六八・一八七二)



○ 大石源大夫 政名  
源十郎 三十八  
明治四未巳五月廿一日

大霍了道居士  
心月妙性大師

慶應四辰年二月十六日  
同人妻年五拾歳



0 30cm  
S=1/8



嘉永四亥年 行年八十二才  
九月十二日



○ 家興宗隆居士 藤原  
貞室妙操信女 行  
五十九

文政二卯年 俗名  
十一月八日 大石左源治



S=1/8 0 30cm



187 日光院 (No. 319)

延宝七年 (一六七九)



千時延宝七巳未年

日光院

妻

孝女

○ 為清閑禪定尼菩提也

(請花)

十二月廿六日

敬白



188 日光院 (No. 320)

享保二十年 (一七三五)



享保二十年

覺口禪定門

189 日光院 (No. 322)

延享三年 (一七四六)



延享三年

○ 沽嬰良鐵禪定門

(請花)

十二月十日



190 日光院 (No. 3 2 3) 天明七年 (一七八七)

行年 八十一歳  
天明七丁未年  
○大心了道信士  
十一月廿二日 父 久藏 (請花)



S=1/8 0 30cm

191 日光院 (No. 3 2 7) 安政六年 (一八五九)

平左工門  
安政六未年  
○観法妙喜信女 (請花)  
九月五日  
母行年五十五才

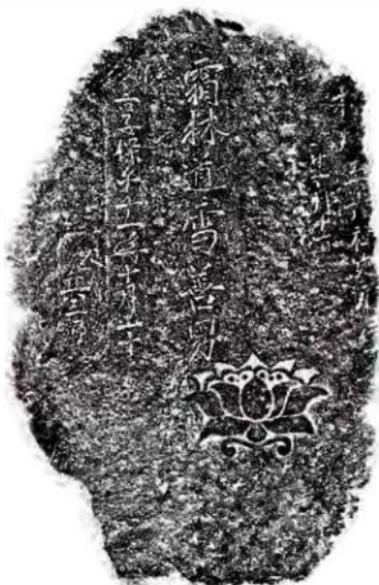


S=1/8 0 30cm



192 日光院 (No. 3 4 2) 享保一一・延享四年 (一七二六・一七四七)

延享四丁卯年  
林風五光禅定尼  
十一月十一日  
霜林道雪善男  
享保十一年十月二十  
父 兵三郎 (請花)



S=1/8 0 30cm



## 第五節 祈祷札

64は明治二二年の祈祷札である。二聖とは薬王菩薩と勇施菩薩、二天とは毘沙門天王と持国天王のこと。これに十羅刹如と鬼子母神が加わって法華経信者を守護する。二聖の下にあるのは不動明王、二天の下にあるのは愛染明王の種子で、日蓮宗の曼荼羅では、不動明王と愛染明王がこのような細長い書体の梵字で記されるのが通例である（日興上人御本尊集編纂委員会 一九九六）。

65は明治二五年の祈祷札である。中央に題目、続けて妙法字賀神と記している。頭部の「ハ」は結界を表す記号と考えられている。「如日月光明能除／諸幽冥斯人行世間」は、「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と説いた「右衛門大夫殿御返事（斯人行世間事）」の一節である。

66は無紀年の祈祷札である。中央に題目、続けて妙法字賀神と記している。頭部の「ニ」は結界を表す記号と考えられている。ウラ面に「家内安全／子孫長久事」と趣旨を記している。

67は大正一一年の祈祷札である。中央に題目、続けて妙法字賀神と記している。「為悦衆生故 現無量神力」は妙法蓮華経如来神力品第二である。ウラ面「家内／安全」と趣旨を記している。紀年銘の「四七年」は「一一年」四と七に分けて記したものである。

68は無紀年の祈祷札である。中央に題目、続けて妙力稲荷大明神と記している。その左右に「如日月光明／能除諸幽冥」と「右衛門大夫殿御返事（斯人行世間事）」の一節を記している。ウラ面には頭部に鬼繞に妙一、その下に「家内安全／子孫長久」と趣旨を記している。

69は明治二七年の祈祷札である。中央に題目、続けて天子稲荷大明神と記している。その左右に「如日／月光」、その下に「為悦衆生故／現無量神力」と記している。「如日／月光」は「右衛門大夫殿御返事（斯人行世間事）」からの引用であろう。「為悦衆生故／現無量神力」は妙法蓮華経如来神力品第二である。ウラ面に「家内安全 子孫長久」と趣旨を記している。

64 井戸尻 A 祈祷札 明治二二年（一八八八）



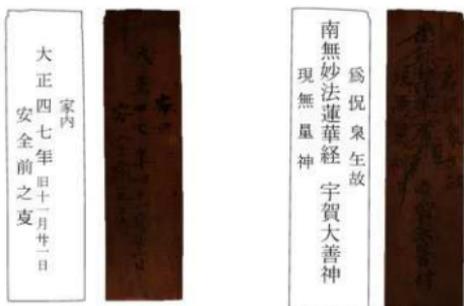
65 井戸尻A 祈禱札 明治二五年（一八九二）



66 井戸尻A 祈禱札



67 井戸尻A 祈禱札 大正四年（一九一五）



68 井戸尻 A 祈禱札



69 井戸尻 A 祈禱札

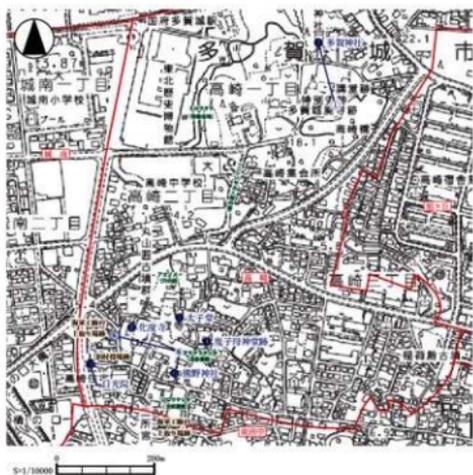


## 第六節 民俗

### 一 地域の概要

#### 1 行政区

江戸時代の高崎村の範囲は、現在の高崎・城南地区がその範囲にあたる。神社・寺院・小祠や旧家は高崎地区に存在している。



第31図 高崎地区民俗調査関連図

### 2 地域の移り変わり

#### (1) 多賀城村役場

高崎には、大正六年（一九一七）から昭和三四年までの間、多賀城村役場が置かれていた。場所は高崎字井戸尻八三番地、化度寺の西隣であったとされている。昭和三年に現在の市役所がある留ヶ谷字青木沢に移転の敷地を購入し、翌年に町役場が完成する。



多賀城村役場の絵（高崎 小幡善吉氏提供）



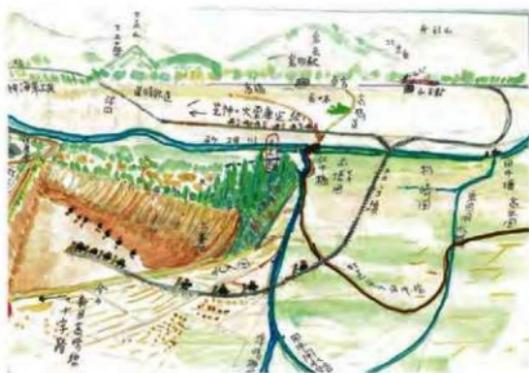
旧村役場2



旧村役場1

## (2) 多賀城海軍工廠建設と高崎

昭和十八年に多賀城海軍工廠が開庁するにあたり、その建設のための土砂が高崎からも運ばれた。特に大きく地形が変わったとされるのが化度寺の西側の土取り場であり、付近にあった仁波多理権現という小祠がこのために廃されたという(多賀城市史編纂委員会 一九八六)。仁波多理権現の隣には熊野社も祀られており、こちらも移動の対象になった。土取りの現場では、囚人や厳しい労働条件のもとで雇われて働かされた「タコ」と呼ばれる人々が作業にあたった。



土取りの絵 (高崎 小幡善吉氏提供)

(裏面 絵の説明)

「昭和十八年春山王より海軍廠への鉄道工事急ピツキで進められ鉄道の盛土工事平野近くの山々は削り取られた。之は私家の田にトロンコ敷き仁和多利神社の山土取の繪なり トロンコ押しの人夫は囚人か「タコ部屋」云う所の飯場に入っている人達である」

## 3 屋号

イドジリ(井戸尻)、イマムラサマ(今村様)、ウワノ(上野)、オカミノイ(御上の家)、カジャ(鍛冶屋)、ガリバ(軽場)、キタノイ(北の家) サカシタ(坂下)、サワノイ(沢の家)、タテノイ(館の家)、ナカノイ(中の家)、ヒガシノイ(東の家)、ヒシヨマ・ヒロマ(広間)

## 二 人々のつながり

## 1 契約講

## (1) 高崎契約会

「第一契約」とも呼ばれており、古くから高崎に住む比較的大きな家を中心として組織されている契約講である。平成二九年時点で、休会中の講員も含めて二六戸が加入している。講を取りまとめる会長が一名置かれてはいるが、任期はなく、年配の適任者が務めている。

主な活動内容は、年に一回、二月に行われる集まりと、葬儀の補助、共有地の管理である。集まりは近隣の店で行われるが、平成二四年までは高崎集会所を会場にしており、さらにその前は講員の自宅で行われていた。各戸から一名代表者が参加するが、戸主の男性が参加することが多い。講員の自宅から集会所へと場所が変更されたのは、昭和四〇年からであり、講で所有する「座本帳」には「昭和三十九年秋 明年度より公民館に於て契約会を行うことを約す」との記録が残っている。集まりの頻度も、講員の自宅で行われていた頃までは二月と一〇月の年に二回であったが、集会所に場所を移したのを機に、二月の集まりのみに変更している。講員の自宅で行われていた頃には昼と夜の二食が準備され、当番になった家が講員をもてなした。当番の家をサモト(座本)、ヤド

(宿)、イエモト(家元)などと呼び、これの補助のためにトエデ(戸合手)という役が二名あてられた。当日は必ず餅が振舞われたといい、料理を盛り付ける椀やお膳は契約講で所有するものを用いた。このお膳などは、長持に入れて当番の家をまわっていたという。



契約会総会  
(平成29年2月)

葬儀の補助については、自宅で行われていた頃までは契約講が主体となり、作りを担当していた。葬儀社による会館での葬儀が普及すると契約講による手伝いは不要になったが、現在でも講員の家で不幸があると、ザモトが講員に知らせている。

## (2) 第二契約講

高崎には「第一契約」の他に、「第二契約」と呼ばれる契約講が存在した。分家したばかりの家や、比較的小さな農家が入っていたとされ、加入していた家も「第一契約」よりもずっと少なかったという。この契約講についての詳細を知る人は少なく、解散の時期も不明である。

## 2 信仰に関わる講

### (1) 馬頭講

馬の守護神として知られる、福島県相馬市の相馬中村神社を信仰した男性の講集団である。主に家を継ぐ男子が入ったもので、中学校を卒業すると加入資格が与えられた。息子と入れ替わりで父親は脱退し、多い時の講員数は、約二〇戸であったという。

主な活動内容は、年に二回、春と秋に行われる集まりと、相馬中村神社への参拝であった。集まりは講員の自宅で行われ、当番をヤド(宿)と呼んだ。日には毎年決められておらず、ヤドの都合で行われていた。当日はヤドで昼と夜の二食が準備され、講員は昼に集まり、食事が終わった後に一



御神水

度解散してから、再び夜に集まったという。ヤドに当たった家を補助する役があり、それをトエデ(戸合手)と呼んだ。トエデは二名ずつであり、ヤドでの料理の手伝いなどにあたった。

相馬中村神社への参拝は毎年一回で、代表が二人一組で参拝する代参の形式がとられていた。当番は、神棚に納める「祈禱神符」と、馬・牛小屋に張る「御神水」を受けて来て、講員全員に配った。この「御神水」は、神水に浸した紙片を乾燥し、馬や牛の絵のついた版を押したものである(千葉市立郷土博物館他 二〇〇三)。参拝に行く日は決められておらず、当番の都合の良い日に行っていた。

馬・牛を用いて農作業をした頃までは活発に活動していたとされているが、耕耘機の普及とともに馬・牛を手放す家が増加し、昭和四〇年前後には解散したとされている。

### (2) 山の神講

子授けや安産の御利益で知られる、美里町(旧小牛田町)の山神社を信仰する女性の講集団である。嫁に来てすぐに入るものではなく、何年かした頃に姑と入れ替わりで入ることが多かったという。昭和二〇、

三〇年代に嫁いできた女性たちが加入した頃には、一二〜三戸の女性が入っていたとされている。

主な活動内容は、年に二回の集まりであった。山神社へ参拝することもあったが、定期的に行くものではなかったという。集まりは講員の自宅で行われ、講で所有する掛軸・オマクラ・蠟燭を並べて拝んだ。集まる日には一日と決められていたが、月はその年によって変わったという。当番をヤド（宿）と呼び、ヤドでは昼と夜の二食、精進料理が振舞われた。昼食の後は、自宅に帰っても良いが、そのままヤドで過ごしても良いとされていた。このように当初は二食をヤドが準備していたが、昭和四〇年頃からは昼食のみに変化した。

掛軸やオマクラはヤドで管理しており、集まりの日に前のヤドの女性から引き継がれた。このオマクラは、お産の時に借りてくると安産の御利益があるとされ、必要時にはヤドに借りに行ったという。

その後、子どもを産む年齢ではなくなったことを理由に徐々に講員は減少していき、平成二年頃に掛軸やオマクラを小牛田の山神社に納めて解散したという。解散直前の講員数は五〜六名であった。

### (3) お太子講

井戸公園の西側にある太子堂を信仰する女性の講集団である。太子堂はおテッサマ（お太子様）と呼ばれており、それを信仰するこの講は、オデスコウ（お太子講）と呼ばれていた。年配の女性が集まっていたとされており、おテッサマの祭日である旧暦三月二日にヤド（宿）にあった講員の自宅に集まった。ヤドでは掛軸を拝み、精進料理を食べていたという。掛軸は聖徳太子が描かれたものであり、裏には明治三六年

に一〇名の女性が購入したことが記されている。

講で所有していた講帳の最後の記録は、昭和三七年旧暦八月二日に八名が集まったというもので、この頃に解散したと考えられる。現在は、元講員の自宅で掛軸などが保管されており、祭日にはこの家の女性が職を上げて供物を供えている。



掛軸



祭日に上げる幟



掛軸の裏面

### 三 神社・寺院・小祠 1 多賀神社

高崎を中心に信仰を集める神社であり、祭神は武甕槌命と経津主命の二柱である。元は多賀城廃寺跡に鎮座していたが、昭和三六年に始まる発掘調査、及び特別史跡指定による環境整備事業に伴い昭和四〇年に現在地に移築された。詳細な時期等は不明であるが、東田中の志引神社と留ヶ谷の天満宮を合祀したことがあるという。その際、それぞれの御神体を多賀神社に移しており、平成一三年に社殿を改築した際に発見されて戻された。

祭日は四月一日である。この日は大代の柏木神社の神職による神事が執り行われ、総代が集まる。現在は人が集まりやすいように、祭日に近い休日に行われている。

神社の組織に関しては、約一五名の総代とそれを取りまとめる総代長が置かれている。総代は昔から総代を務める家によって世襲されることが多く、人数の増減はほぼない。

行事に関しては、一月二四日のどんと祭、四月第三日曜日に行われる例祭、一月三日の感謝祭が主なものである。中でも一月のどんと祭には近隣の住民など多くの人が訪れ、一番の賑わいをみせる。



4月の例祭



どんと祭

## 2 化度寺

高崎・東田中を中心に約七〇〇戸の檀家を抱える、曹洞宗の寺院である。山号は高崎山で、現在の住職は二六代目という。化度寺は昭和六年と昭和三十九年に火災にあつてのことから、過去帳などの史料はほとんど残っていない。『多賀城町誌』には「本尊は延命地藏菩薩の木仏坐像で坐高一尺二寸、行基菩薩御作と伝えられている」(多賀城町誌編集委員会 一九六七)とあるが、この仏像も昭和三十九年の火災で焼失した。

翌年それまでの住職に替わって新たな住職が入り、現在に至っている。寺の組織に関しては、檀信徒をまとめる護持会という組織があり、一六名の護持会役員が寺の運営補助にあつている。また、総代会というものもあるが、総代会に入っている総代は護持会の役員でもある。この他に寺院に関わる組織はない。

一年間の行事は、五月最終日曜日の御回向、八月一三日の施食鬼供養、八月一六日の塔婆焼却供養、二月三日の除夜の鐘が主なものである。五月の御回向はこの中で最も大きな行事であり、大勢の檀家の人が訪れ、法要が行われる。また、八月一六日の塔婆焼却供養も長年行われている。行事で、古い卒塔婆、白木の位牌、盆提灯、竹などを焼却供養している。また、現在も行われていないが、盆の一七日には人形送りという行事も行われていたとされている。『多賀城市史 第2巻 近世・近現代』には、「かつて高崎地区では盆の一七日に人形送りの行事がおこなわれていた。村中の人が化度寺に集まって百万遍の念仏を唱えたのち、麦藁でつくった大きな人形を村境まで送り、境で燃やすという行事である」(多賀城市史編集委員会 一九九三)とある。



御回向



塔婆焼却供養

## 3 日光院

化度寺の西側に祠があり、「日光大権現」と刻まれた石碑が祀られている。日光院は、高崎で亡くなった旅の僧を祀るもので、僧を葬った場所を祠を建てたと伝えられている。旅の僧は亡くなる直前に、自分が死んだら頭を下に逆さまに葬ってほしいと願ったが、村人は通常の体勢で埋めてしまい、その後高崎に疫病が流行ったとする話が残っている。言いつけの通り逆さまに埋め直すと疫病は治まったとされている。

現在日光院を管理しているのは地域の有志であるが、「多賀城市史第3巻 民俗・文学」には、「近くの化度寺には当院の「お姿（本尊）」があったといい、当院のお札を頒けていたという」（多賀城市史編纂委員会 一九八六）とあり、化度寺と関係があったという。しかし、現在の住職が寺に入った昭和四〇年には、既に日光院との関わりはなく、平成一五年前後に八幡のある家から日光院の版木が持ち込まれるまで、日光院に関係するものも所有していなかった。市史編纂にかかる昭和五四年の民俗調査のデータには、この版木で刷った札が化度寺から配られていたとあり、現在の住職が化度寺に入る以前は、化度寺が版木を管理していた可能性もある。その後どのような経緯で八幡の人の手に渡ったかは不明である。

祭日については、『多賀城町誌』では僧の命日である十月一三日とされている。昭和四〇年代後半までは秋祭りに織



奉納されている絵馬



日光院

が立てられ、露天が出て賑やかであったというが、いつの頃からか行われなくなった。



日光院版木 1 (日光院宮)



日光院版木 2 (日光院子育神)

## 4 鬼子母神堂

高崎二丁目にあった日蓮宗の寺院である。キヌボンサマ(鬼子母神様)と呼ばれており、高崎を中心に市内だけではなく、七ヶ浜の方まで広く信仰を集めた。弘安七年(一八四)の年号が刻まれた板碑を本尊として祀っていた。この板碑は市内で最も古いもので、畑の中から見つけられたと伝えられており、その場所に鬼子母神堂を建てたという。

畑から板碑を見つけた男性の息子が二代目となって鬼子母神堂を取り仕切るようになってからは信者も増え、盛大に祭りも行われていた。祭日は一月中旬であり、多賀城駅から大勢の人が歩いて来たという。昭和の始め頃までは青年団による店も出されて賑やかであったとされているが、昭和四三年頃に二代目の男性が亡くなり、徐々に人が集まらなくなっていた。その後も親戚によって存続していたが、平成二年六月七日、火災。(中略)六月十二日契約会と信者合同で解体作業手伝うとある。

現在、その跡地には住宅が立ち並んでおり、当時の面影はない。鬼子母神堂の本尊であった弘安七年の板碑は、化度寺の参道に祀られており、手水鉢や狛犬などの他の石造物も近隣の家で保管されている。



鬼子母神堂のものとする板碑

### 5 太子堂

井戸尻公園の西側にあり、オデッサマ（お太子様）と呼ばれている。聖徳太子を祀っているとされ、中には二基の題目塔とともに、台座に正徳三年の年号が刻まれた石像が納められている。安産の御利益があるとされており、女性の信仰を集めていた。場所の移動はなく、一貫して同じ場所ですべて祀られていたという。

祭日は旧暦三月二二日で、この日には太子堂の近くの家の女性が赤飯や草餅を供え、幟を上げていた。昭和四〇年頃までは、オデッサマを信



前掛けが奉納されていた当時の石像



太子堂



焼失した鬼子母神堂

仰するオデスコウ（お太子講）というものがあつたという。これに入っている年配の女性たちが掛軸を下げて拝んでいたという。

現在はないが、かつては石像には何重にも前掛けが巻きつけられており、これを借りてきて安産祈願をした。お礼詣りの際には、前掛けを二枚にして石像に巻きつけたという。

### 6 オグマンサマ（お熊野様）

高崎二丁目の駐車場に、「熊の神」と刻まれた石碑が祀られており、オグマンサマ（お熊野様）と呼ばれている。現在の場所に来るまでに二回移動しており、元々は化度寺の西側の林の中にあつたという。安永三年の「風土記御用書出」には化度寺境内にある神社として、仁波多理権現社という神社とともに「熊野三社」が記されている。移動前のオグマンサマの横には仁波多理神社と呼ばれる神社が横並びで祀られていたとされており、オグマンサマは風土記の熊野三社と関わりがある可能性がある。

戦時中、海軍工廠建設に関わる工事の際、二社があつた場所から土が取られるために移動したとされ、その際、仁波多理神社は廃された。移動前のオグマンサマは、石の祠のようなものであつたという。

現在祀られている石碑は、昭和三年に新たに建てられたものであり、近隣の家の人によつて祀られている。元々の祭日は不明であるため、一二月三日の勤労感謝の日に縄を張り、供物をつけて拝んでいるという。



オグマンサマ

## 第七章 田中村

### 第一節 地理的・歴史的環境

#### 一 地理的環境

田中村は、現在の行政区では東田中及び中央1～3丁目にあたる。風土記御用書出には

- 一 南者当郡八幡村境当村川淵と申所より  
 一 北者当郡高崎村境当村分水たれと申所迄  
 一 東者当郡高崎村境当村分長嶺と申所より  
 一 西者当郡高崎村境当村分花ノ木と申所迄

と四至を記しており、北・東・西を高崎村に囲まれているように記載しているが、『陸前国宮城郡地誌』を見ると北東は留ヶ谷村、東は等神村となっている。長嶺は留ヶ谷にある天満宮の南東で留ヶ谷一丁目付近となっており、花ノ木はJ R 東北本線の南で三陸自動車道の西側にあたる地域であり、現在も小字名として残っている。川淵は特定できないが砂押川の北岸と考えられ、水たれは不明である。同村は北から続く丘陵の南端部から、砂押側の北岸に広がる沖積地上に立地しており、現在はほぼ全域が住宅地となっているが、一部、通称「観音坂」と呼ばれる一画は未開発のまま残されている。

地形的にみると、北部には松島層の先端が伸びてきており、志引の丘陵部では標高約一〇メートルとなっている。丘陵部が河川に向かって傾斜していく地形であり、標高三〜四メートルのところが多い。

#### 二 歴史的環境

田中地区（現在は東田中）には二箇所の埋蔵文化財包蔵地がある。志引遺跡と東田中窪前遺跡で、いずれも古代・中世の遺跡として登録されているものであるが、志引遺跡は古代の遺物散布地であり、これまで小規模の確認調査を行っているが、明確な遺構の発見には至っていない。かつて、志引遺跡は前期旧石器時代の石器群が発掘されたと公表されたことがあったが、その成果はねつ造されたものであることが明らかにされている。東田中窪前遺跡では、掘立柱建物跡や土壘などが発見されており、中・近世のものと推定されている（多賀城市教育委員会二〇一五）。「観音坂」帯には板碑や供養塔があり、丘陵の前方には「寺前」という地名が残っていることから、何らかの宗教的な場があったと推定される。



観音坂

## 第二節 地名と屋敷名

## 一 地名

各資料に見える田中村の地名は表7のとおりである。

以下、各地名の解説を行うにあたり、「風土記御用書出」は「書出」、「陸前国宮城郡各村字調書」は「調書」、「多賀城村聚落の機構」地名の研究」は「研究」、「多賀城町誌」は「町誌」の略称により記述する(第一章第三節を参照)。

表7 田中村小名

	風土記御用書出		宮城郡各村字調書		戦後
	小名	小名以外	村字	調書	
三所ノ宮	○				
千引	○				
花ノ木			○		
小原			○		
上江中			○		
下江中			○		
樋ノ口			○		
赤			○		
土手前			○		
沼畑			○		○
窪			○		○
志山			○		○
舟橋			○		○
龍ヶ崎			○		○



第32図 田中村地籍図

**赤堰 (あかせき)** ※高崎村の項参照。  
**東街道 (あづまかいどう)** 昔京より多賀城に通ぜし道路。今その通路は明らかではないが、宮城野原国分寺跡近傍より高砂村を過ぎ、八幡の末の松山辺を通り、この舟橋にかかり、塔ノ臺に至り、割石原を過ぎ、留ヶ谷古館の後より野田の玉川に沿うて上り、秦社宮前より多賀城の東

門に至ったようである(「研究」)。

**小原 (おばら)** 砂押川右岸、樋の口橋周辺。

**上江中 (かみえなか)** 市川(砂押川)の上手(「町誌」)。

**観音坂 (かんのんざか)** 志引観音の後、旧街道の坂(「研究」)。

**金掘山 (かねほりやま)** 東田中より留ヶ谷に至る塩釜街道のあたり。金掘山で金を掘って金山の池で洗ったという伝説がある(「研究」)。

**金山 (かねやま)** 志引観音より東方家続き、林の中に半土中に埋もれたル古き墓所あり。その東方が金山で、当地の旧家小川氏の宅地(「研究」)。

**窪前 (くぼまえ)** 沼畑の東(「研究」)。

**下江中 (しもえなか)** 市川(砂押川)の下手(「町誌」)。

**田中 (たなか)** 明治初年、宮城郡には根白石(仙台市泉区)と多賀城に田中村があったため、東側にある田中村を東田中村とした(「町誌」)。

**千引 (ちびき)** 現在は志引(しびき)であるが、安永三年の「風土記御用書出」では千引となっている。砂押川と仙石線が交差するところの北側の丘陵。巨石を動かした少女の伝説があり、その巨石が千引石(志引石)で、志引観音が祀られている丘陵の西麓にある。中世の謡曲「千引」には、千人でも引くことがかなわなかった巨石と、それを動かした貧しい女性が登場する。

**寺前 (てらまえ)** 金山の南方数丁の所(「研究」)。

**土手前 (どてまえ)** ※高崎村の項参照。

**沼畑 (ぬまばたけ)** 役場の前方の田畑となっている所で、市川(砂押川)が氾濫して沼となっ

**志引石**



志引石

た所。それがだんだん埋まって、低き所は田となり、高き所が畑となり、したがって沼畑といわれたことと思われる（『研究』）。

花ノ木（はなのき） ※高崎村の項参照。

樋ノ口（ひのくち） ※高崎村の項参照。

舟橋（ふなばし） 戦後は、多賀城駅の東側からその西側七〇〇メートルの小名舟橋までの広い地域を含んでいるが、明治十九年の地籍図では多賀城駅前の鎮守橋を中心とした小名であった。昭和二〇年代に砂押川の河川改修が行われる以前、橋は現在の鎮守橋の約二〇メートル西側に架かっており、その橋に関わるものであろう。『研究』には、「東街道が八幡より東田中に至る途中、市川（砂押川）にかかった舟橋のあった所。今も当時の材が残っている」としているが、この舟橋は、現在の舟橋周辺のことと考えられる。

山崎（やまざき）

龍ヶ崎（りゅうがさき） 仙石線多賀城駅の北側にある低丘陵の南南部。嵐の時に現れた龍の伝説が残されている（『町誌』）。砂押川に面しており、その氾濫によって川水が荒れ狂う様子から龍に結びついたとされている（宮城県地名研究会 二〇一〇）



龍ヶ崎



沼畑



東田中・高崎地区

## 第三節 寺社仏閣

## 一 志引観音

「風土記御用書出」に「村鎮守 千引観音堂」とあり、宮城三十三番札所の内、三十二番目の札所であった。小名は千引で、堂は南向きの三尺四面であった。勧進した人も年代も不明であり、田中村の空き地にあった。地主・別当もいないと記されている。

現在は覆屋の中に一間四面の堂宇が祀られている。本尊は『町誌』に「一尺許りの木像の観音像」とあるが、江戸時代後期の勢至菩薩坐像である。この像は観音講の講中によって保管されており、堂内には置かれていない。堂内には木箱があり「陸前國宮城郡多賀城村／大字東田中鎮座／郵社千引神社御神璽／明治四拾四歳拾貳月拾四日遷宮行事／奉仕社掌武本時保／社守區長赤井善兵衛／氏子惣代人伊藤源三郎 小川孫吉／小川寅吉」と記されており、黄色の襷袢の布が添えられている。

中世の謡曲「千引」の中に、千引の石という巨石とそれを動かした女性が登場する。観音堂が立地する丘陵の西麓には千引石が現存しており、性が登場する。観音堂が立地する丘陵の西麓には千引石が現存しており、『町誌』では、石と少女の精を慰めるため観音を勧請したとしている。

観音坂にある享保一二年の観音菩薩立像台座には女性名が刻まれており、観音を信仰した女性の講集団の存在が確認できる。八月二十三日の日にも刻まれており、これは現在も続く男性の観音講の祭日と同じである。



木箱

表8 宮城三十三番札所一覧

名称	名称	所在地 (現在)
第一番	長谷堂	名取郡中田村前田村小清水
第二番	天神堂	柴田郡舟泊村
第三番	塩通寺	名取郡愛島村笠島
第四番	長幡観音	柴田郡田崎村小崎
第五番	尼寺	原町村宮城野原
第六番	楳島屋敷	岩切村案内
第七番	神明堂	岩切村余目
第八番	二本山明神	高砂村田子
第九番	三井寺	多賀城村南宮
第十番	松堂	福室村松堂
第十一番	安楽寺	多賀城村新田
第十二番	川島明神	岡田村
第十三番	高見堂	中野村
第十四番	竹内観世音	蒲生村
第十五番	中野寺	中野村神妻
第十六番	杉嶋	多賀城村八幡
第十七番	木の松山	多賀城村八幡
第十八番	安倍待橋	多賀城村留谷
第十九番	野田玉川	多賀城村留谷
第二十番	舟塚	多賀城村笠神
第二十一番	薬師堂	七ヶ浜村津
第二十二番	富岡山	七ヶ浜村花洲
第二十三番	金剛寺	七ヶ浜町吉田
第二十四番	明神堂	七ヶ浜町東宮
第二十五番	船渡山天照寺	利府村
第二十六番	三聖堂観世音	松島村
第二十七番	鳩の峰八幡宮	松島町幡谷
第二十八番	茂見山	松島村
第二十九番	神明堂	利府村春日
第三十番	願成寺	塩竈町
第三十一番	志堂	多賀城市市川
第三十二番	千引堂	多賀城市田中
第三十三番	桜木観音	多賀城市桜木町



本堂



茅葺の輪堂 (『多賀城町誌』より) 年代不明

## 第四節 石造物

### 一 分布と概要

高崎村地域で確認した石造物としては、中世の板碑、近世・近代の供養塔、幟立、石燈籠、手水鉢、墓標などがある。それらの所在地の概要については以下のとおりである（石造物の記載方法については第三章第四節を参照）。

デンジヨウヤマ A 東田中志引の丘陵西端部はデンジヨウヤマと呼ば

れ、江戸時代から続く墓地や供養塔がある。デンジヨウヤマを横断する観音坂という小道の北側をデンジヨウヤマ A、南側をデンジヨウヤマ B とする。デンジヨウヤマ A は観音坂の登り口付近とその奥に板碑一基、供養塔八基があり、その北側の頂部と中腹には平場があつて、それぞれ墓域となつている。いずれも現状をとどめており頂部平場の西端部には低い塚状の高まりの上に三重塔を刻んだ板碑が一基立っている。



第33図 東田中石造物分布図

デンジヨウヤマ B 観音坂の登り口南側に供養塔が一基ある。頂部の山林中には小道に沿つて墓域があり、その周辺にも墓標が点在している。

三所宮跡 住宅地の中に、かつて村鎮守だった三所宮の跡があり、小形の塚上に供養塔が三基あつた。現在その内の一基が三所宮に移動している。

三所宮 民家の北東に三所宮が祀られており、社殿の脇に三所宮跡から移設された供養塔が一基ある。

志引神社 境内に燈籠と手水鉢がある。燈籠はコンクリート製である。社殿の西側に石仏立像の下半部があり、墓標と見られる。

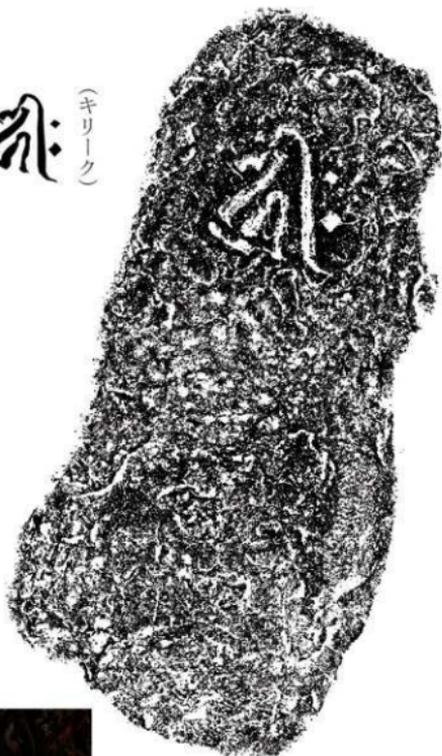
### 二 板碑

193は阿弥陀如来を主尊とした無紀年の板碑である。阿弥陀如来を表す種子「キリク」が一字刻まれている。194は三重塔を刻んだ板碑である。塔の形式は層塔であり、相輪、塔身、基礎が表現されている。第一層の塔身だけが高く、その上には屋根だけが積み重なっている。相輪は長く、頂部には宝珠、屋根との間には露盤がある。塔身には正和三年と嘉暦三年の紀年銘が併記されている。『多賀城町誌』では、「この二つの年号の間は、十七年あるが、これは夫婦の墓が、供養の碑かであり、年月は命日であろう。嘉暦を建立年月日とすれば、十七年忌の碑となる」としており、『多賀城市史』もほぼ同様の見解を示している。県内の中世の板碑で二つの紀年銘を併記したものはなく、その性格については不明である。年代については、併記されている紀年のうち、新しい嘉暦三年が建立の年である。



三所宮跡

(キリク)



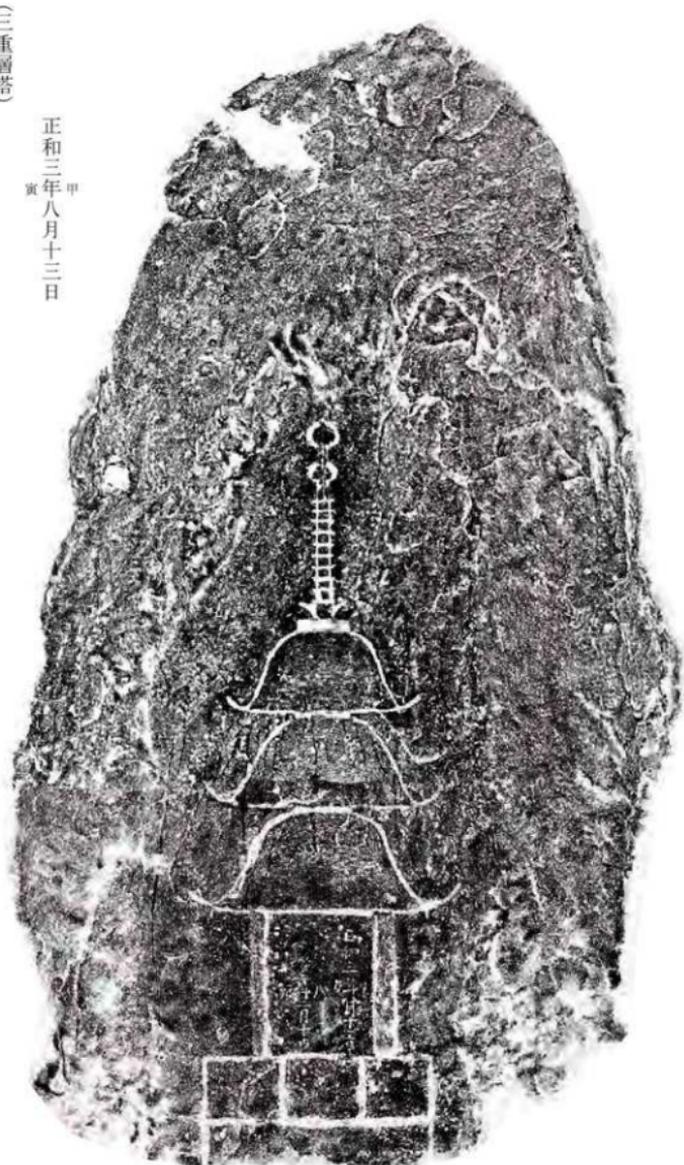
S=1/8 0 30cm



194

デンジョウヤマA (No. 600)

正和三年(一三二四)・嘉暦三年(一三二八)



(三重層塔)

正和三年八月十三日

寅

嘉暦三年二月十日

戌

0 50cm  
S=1/8



### 三 近世・近代の供養塔

#### 1 庚申塔

197は正徳四年の庚申塔である。上部中央に主尊として釈迦如来を表す種子「バク」。その下の「我願既満 衆望亦足」という銘文は、仙台市出花に所在する元禄二年（一六九九）の青面金剛供養塔にも見られる（渡邊「一九八三」）。「肇」は「奉」の異体字かと見られるが類例は見いだせない。九月二二日はこの年五回目（日）の庚申の日。右端付近に「田中高崎 両村」とあり、この庚申供養の造立が、田中村と高崎村の二つの村によるものであり、最下部に三五名の交名がある。すべて有姓の男性名である。導師光徳院は八幡村の天童氏の家中寺。198は寛政六年の庚申塔である。日付の上の「壬」は閏年を示す。閏十一月七日はこの年六回目（日）の庚申の日。上部に瑞雲を伴った日天と月天が配されているが、欠損しており、月天は瑞雲を残すのみである。下部に八名の交名があり、すべて無姓の男性名。

#### 2 自然神信仰の塔

199は寛政九年の山神塔である。「講中」とあり、山神講によって造立されたものである。

#### 3 馬の守護神の塔

202は大正二年の馬頭観世音塔である。個人の造立である。

#### 4 山岳信仰の塔

200は嘉永元年の出羽三山塔である。村中によって造立されたものであり、日付は御緑日の八日である。

#### 5 名号塔

196は享保一九年の名号塔である。紀年の下に、それより大きく「夜念



196

デンジヨウヤマ A (No. 603)

享保十九年(一七三四)



0 30cm  
S=1/8

○ 南無阿弥陀佛

享保十九<sup>甲</sup> 寅 夜念佛

(請花)

赤井善之丞  
相沢道四良  
小川十三郎  
相沢市三郎  
赤井九之助  
鈴木長助

九月二十五日  
節經  
藤田公左衛門  
小川市之丞

相沢清兵衛  
小川十太良  
伊藤甚三郎



197  
デンジョウヤマA (No. 601)  
正徳四年 (一七一四)

不

衆望亦足

我願既滿

葦原申供燈

正徳四年 甲午

九月 廿一日

尊師光徳院



S=1/8 0 50cm



我願既滿

正徳四<sup>甲</sup>午年

衆望亦足

九月廿一日

葦庚申供養

(請花)

導師光徳院

田中 高崎  
高崎 両村

小野七兵衛  
千葉作右衛門  
大山五郎右衛門  
曾我弥兵衛  
相沢正右衛門  
阿部茂兵衛  
松本太郎左衛門  
赤井傳右衛門  
木村十右衛門  
赤井善右衛門  
高橋与次郎兵衛  
戸井田長十郎  
沼倉弥左衛門  
伊藤次郎右衛門  
大山仁右衛門  
磯口九兵衛  
小川六右衛門  
赤井善五郎  
好 四郎右衛門  
松本三郎九

小川頼三郎  
伊藤茂兵衛  
守屋清右衛門  
守屋善左衛門  
戸井田長四郎  
村上勘右衛門  
守屋清六  
守屋次右衛門  
小川作口  
小川清七郎  
伊藤与五兵衛  
阿部左平次  
小川正三郎  
小川三郎兵衛





0 20cm  
S=1/8

(瑞雲)

庚申

寛政六年

十一月七日

(目次) (瑞雲)

□右エ門

清十郎

利右エ門

久之丞

伊之助

志三人



山神

講中

寛政九年三月十二日



199 デンジヨウヤマ A (No. 605)

寛政九年(一七九七)

S=1/8 0 50cm



200

デンジョウヤマA (No.606)

嘉永元年(一八四八)



湯殿山

嘉永元年  
月山

羽黒山

十月八日

當村中

S=1/8 0 50cm





明治十一寅三村中安全

象頭山金毘羅神社

十月十日

世話人

小川松五郎建之

赤井長兵衛

□山□治

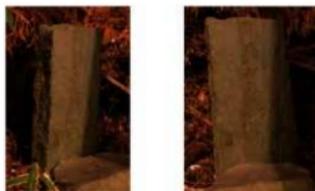
S=1/8 0 30cm



202 テンジョウヤマB (No. 609) 大正二年(一九一三)



S=1/8 0 30cm



馬頭観世音

大正二年  
八月二十六日 小川孫吉建之

203 三所宮 (No. 597) 大正二年(一九一三)



S=1/8 0 30cm



納奉  
蛇王権現

大正十二年  
旧十二月二十日  
伊藤久吉  
建之

204 三所宮跡 (No. 598) 大正二年(一九一三)



S=1/8 0 30cm

(蛇隠所)  
納奉  
蛇王権現

大正十二年  
旧十二月二十日  
伊藤定吉  
建立



205 三所宮跡 (No. 599) 昭和七年 (一九三二)



0 30cm  
S=1/8

昭和七年

伊藤まさゑ  
全よし

奉修靈三所宮大明神

旧九月九日

伊藤こぎく  
全つぎ



四 手水鉢

206 は昭和六年の手水鉢である。女性一名が奉納した旨、記載されている。

206 志引神社 (No. 592) 昭和六年 (一九三二)



0 30cm  
S=1/8

奉 昭和六年旧正月廿三日  
納 遠藤やす



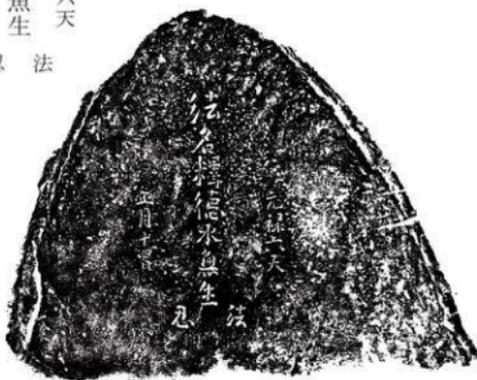
## 五 墓標

207・209は赤井・伊藤家墓地の南側にあり、東西に三基、南向きに並んでいる。積で始まる法名は浄土宗、浄土真宗で用いられている。

210はデンジヨウヤマBの東端部にある。中央頭部に梵字「ア」、続いて阿闍梨法印永順尊蓋と記されている。阿闍梨は師範とも表記され、戒律を守り、弟子たちの規範となつて法を教授する僧侶のことである。法印は僧位の最高位に位置付けられる。永順については、慶長十三年（一六〇八）に開院した八幡村光徳院の三世が永順である（光徳院書出）。光徳院は八幡村の領主天童氏の家中寺であるが、正徳四年の高崎村、田中村の庚申供養では導師を務めるなど、村を超えての活動が確認されており、この墓標が光徳院永順のものである可能性はある。但し、光徳院の墓標は天童氏墓地の一角にあり、永順の墓標が田中村にあることの理由は問題として残る。また、承応元年（一六五二）に大代村の米玄院を開院した修験も永順である（米玄院書出）。貞享二年（一六八五）の没年からすると、両永順が同一人物の可能性もある。

225・234はデンジヨウヤマBに営まれた赤井・伊藤家墓地の墓標である。自然石を用いた墓標であり、いずれも中央に円相と法名、その両側に紀年銘がある。234には傍石が刻まれている。

207 デンジヨウヤマB (No. 667) 元禄六年（一六九三）



S=1/8 0 30cm

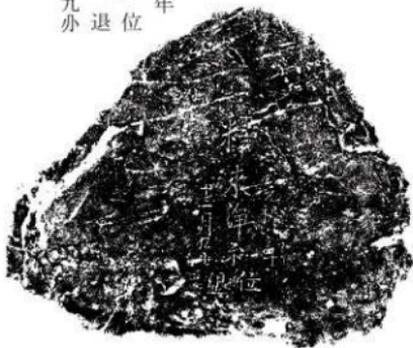
元禄六年  
法名釋德水魚生  
忍法

正月十四日





元禄七年  
释来浄永 位  
十二月九日



S=1/8 0 30cm

208  
デンジョウヤマB (No. 668)

元禄七年 (一六九四)



寛保二年  
○ 澁名积徳隠信士 (請花)  
四月十一日  
行年八十一歳

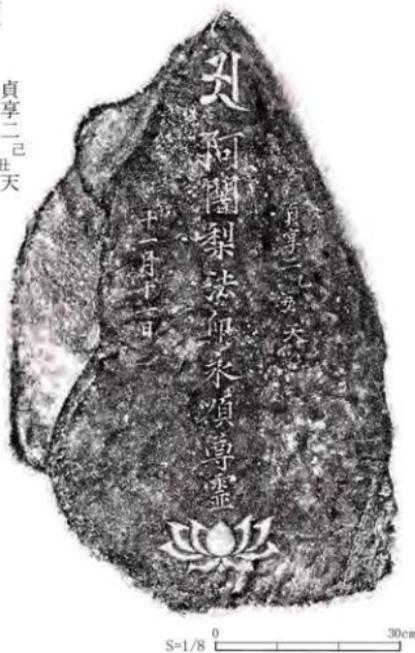


S=1/8 0 30cm

209  
デンジョウヤマB (No. 669)

寛保二年 (一七四二)

210 デンジョウヤマB (No.666) 貞享二年(一六八五)



S=1/8 0 30cm

丸(ア)

阿闍梨法印永順尊靈

(請花)

貞享二年  
丑天

十一月十一日



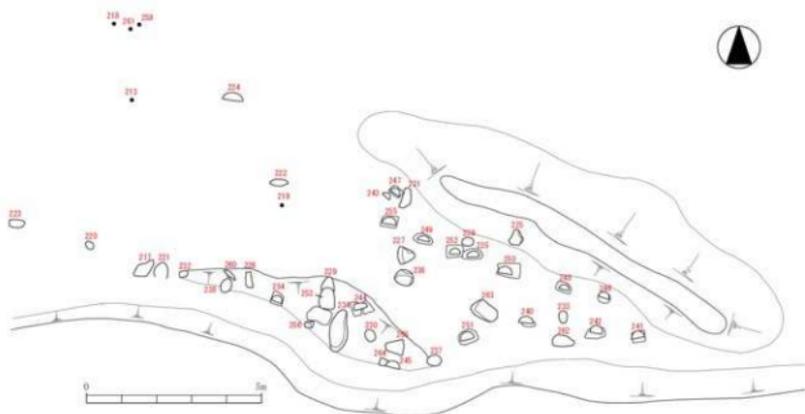
211 デンジョウヤマB (No.670)



権大僧郡阿闍梨法印伝重

212 志引神社 (No.595)





第34図 赤井家・伊藤家墓標配置図

- 219 ○ 宝曆五  
十二月
- 218 (No. 615)  
延享四卯年  
十一月十四日  
地蔵菩薩  
おまつ四才
- 217 (No. 614)  
延享二年  
夏月常圓禪定門(請花)  
三月十六日  
□ 郎  
岳四郎
- 216 (No. 613)  
元文五年  
地蔵菩薩立像  
八月朔
- 215 (No. 612)  
享保十二年  
○ 兼勢狐  
閏正月二十
- 214 (No. 611)  
享保二年  
○ 白翁元  
十一月十
- 213 (No. 610)  
千時宝永六番  
○ 為即宣明心禪定門也  
正月廿二亦
- 226 (No. 622)  
天明二年  
九月九日  
○ 林岳道雲信士(請花)
- 225 (No. 621)  
安永八年  
十月五日  
○ 花岩定心信女(請花)
- 224 (No. 620)  
安永七年  
九月十日  
○ 梅岩智鏡信女
- 223 (No. 619)  
安永四年  
十月十七日  
○ 酒夢了寛信士
- 222 (No. 618)  
明和壬辰九年  
十月廿七日  
○ 覺圓智鏡信
- 221 (No. 617)  
宝曆八年  
十月九日  
○ 西天不外信
- 220 (No. 616)  
宝曆五年  
十二月
- 227 (No. 623)  
天明三年  
二月十四日  
○ 春岸貞光信女(請花)
- 228 (No. 624)  
天明四年  
三月廿六日  
○ 妙柳禪定尼(請花)  
田中村善六  
母
- 229 (No. 625)  
天明  
七月  
○ 泉栄
- 230 (No. 626)  
享和元酉年  
二月初七日  
○ 空華子(請花)
- 231 (No. 627)  
文化二年  
正月廿九日  
○ 春林松信女(請花)
- 232 (No. 628)  
文化六年巳年  
二月十五日  
○ 國慶妙通信女(請花)
- 233 (No. 629)  
文化十四天  
十一月廿五亦  
○ 寒岩道成信士(請花)
- 227 (No. 623)  
天明三年  
二月十四日  
○ 春岸貞光信女(請花)

- 234 (No. 630) 文化十四五年 久右衛門  
○稻越道勝信士 (請花)  
八月十八日 八十三才
- 235 (No. 631) 文政二年  
○夏原松翠童子 (請花)  
五月七日 梅兵衛
- 236 (No. 632) 文政十二  
○常心道休  
二月十九日
- 237 (No. 633) 天保三辰年  
○夏空妙源信女 (請花)  
六月十五日
- 238 (No. 634) 天保七年  
○法妻妙影信女  
十月廿日
- 239 (No. 635) 天保八酉祀  
○夏妻西尚信士  
六月八日 赤井屋長吉  
五十一才  
○夏光淨照信士 (請花)  
十月五日 年七十八
- 240 (No. 636) 天保九戌年  
○長安妙壽信女 (請花)  
興之助 妻
- 241 (No. 637) 天保十二年  
○無返良端信士 (請花)  
壬正月三十日 年五十八才
- 242 (No. 639) 安政四丁巳年  
○花顔妙縁信女 (請花)  
正月十二日 母年七十三才
- 243 (No. 641) 明英孩子  
○明英孩子  
七月十二
- 244 (No. 640) 萬延元申年 系八  
○雪看智庭信女 (請花)  
十一月廿七日 行三六十五
- 245 (No. 642) 文久二戌年 善  
○夏光淨照信士 (請花)  
十月五日 年七十八
- 246 (No. 643) 文久三癸亥年 權藏倅  
○直指人心禪定門 (請花)  
七月二日清五郎 年十七才
- 247 (No. 644) 文久四子年 長吉  
○清安見性信士 (請花)  
八月九日 年十六才
- 248 (No. 638) 嘉永四亥四月十六日  
○夏林善童女 (請花)  
權藏娘十一才
- 249 (No. 645) 明治四未年 勇治7  
○青玉洞林信士 (請花)  
五月廿六日 年七十一
- 250 (No. 646) 明治六癸酉年 文吉妻  
○瑞眼妙光信女 (請花)  
二月七日行年三十九才
- 251 (No. 647) 明治七甲戌年 伊藤權藏 妻  
○綱孫妙喜信女 (請花)  
九月十日
- 252 (No. 648) 明治七甲戌年 多吉 妻  
○霍法妙壽信女 (請花)  
十二月十四日 年八十八
- 253 (No. 649) 明治八乙亥年 赤井善右衛門  
○廣禪修信士 (請花)  
二月十六日年六十三才
- 254 (No. 650) 明治十四年十月五日  
○演室妙鴨信女 (請花)  
松ヶ窪村鈴木源次郎娘  
赤井善右衛門妻ちやう 六十六才
- 255 (No. 651) 明治十七年 赤井長藏母  
○單願妙代信女 (請花)  
十二月九日 年七十才
- 256 (No. 652) 天明 天  
○自明 正月二十
- 257 (No. 653) 心空妙密禪定門  
○心空妙密禪定門  
三月三日
- 258 (No. 654) 天 年五十八才
- 259 (No. 656) 地蔵修
- 260 (No. 655) 地蔵修
- 261 (No. 657) 地蔵修
- 262 (No. 661) 欠指
- 263 (No. 658) (土中)
- 264 (No. 660) (横例)
- 265 (No. 663) (横例)



225

赤井・伊藤家墓地 (No. 621)

安永八年 (二七七九)



○ 花岩定心信女  
安永八年  
十月五日  
(請花)

S=1/8 0 30cm

234

赤井・伊藤家墓地 (No. 630)

文化十四年 (二八二七)

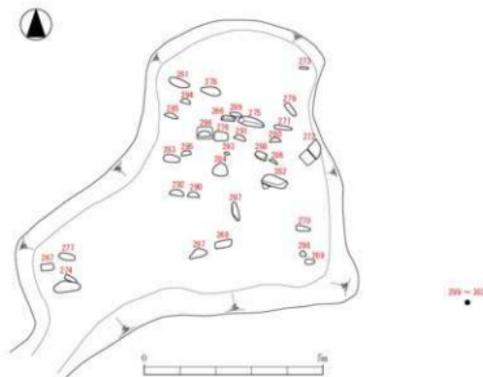


○ 栢翁道樹信士  
文化十四年 久右衛門  
八月十八日 八十三才  
(請花)

S=1/8 0 30cm



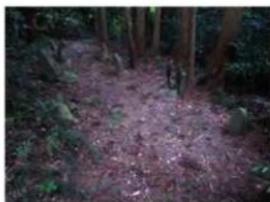
## 小川・伊藤家墓地



第35図 小川家・伊藤家墓標配置図

- 小川家墓地
- 266 (No.6885) 千時延宝九辛酉年 孝子  
点 為 寶蘭道參禪定門菩提也(請花)  
二月五小
- 267 (No.6896) 貞享三丙寅番 敬  
敬白
- 268 (No.6897) 桃室砂花禪定尼  
三月廿一日孝子 白
- 269 (No.6898) 元禄七乙丑  
為冬室砂陰神  
十一月十日
- 270 (No.6899) 元禄辛亥  
為光貞道禪定門  
七月十日
- 271 (No.6900) 元禄十六天  
道本羅空信男(請花)  
九月七日 □四郎 □
- 272 (No.6901) 霜峯亮白信男  
十一月十七日  
小川源三郎
- 273 (No.6902) 享保三天  
白霜幻心童子(請花)  
十月十二日
- 274 (No.6903) 享保十口  
四月廿三日八口庄三
- 275 (No.6904) 享保元年  
慈官了圓信男(請花)  
七月七日  
小川 又兵衛 六十才
- 276 (No.6905) 享保三年  
為夏遊道禪定門  
六月□日 觀十左衛門
- 277 (No.6906) 延享四年  
海洲砂鏡信女(請花)  
十月二十六
- 278 (No.6907) 享保三庚午年  
納露野心信女  
八月廿八日
- 279 (No.6908) 宝曆二壬申年  
春屋砂清信女(請花)  
二月廿九日
- 280 (No.6909) 天明元年  
秋田久次女□  
二月廿一日 享年二十
- 281 (No.7000) 天明四辰年  
霜林紅月信士(請花)  
九月廿三日
- 282 (No.7001) 寛政二年  
透禪定門(請花)  
十二月廿九日 □  
年四拾九才
- 283 (No.7002) 享和三亥年  
孤岸了寿信男  
八月二十二日
- 284 (No.7003) 文化四卯年  
清林砂霜信女(請花)  
十月廿九日
- 285 (No.7004) 文化九申年  
皎月真照信女  
正月十日
- 286 (No.7005) 文化十四年  
源水  
九月十四日

- 287 (No.706) 文政七年  
冷水自林信士(請花)  
六月十六日
- 288 (No.707) 文政九年  
〇六方了道信士  
十月廿七日
- 289 (No.708) 天保十年  
〇雪願菩薩  
十一月廿三日
- 290 (No.709) 又右衛門  
安政三辰年  
〇福壽海信士  
八月廿四日
- 291 (No.710) 又右衛門  
安政六未年  
〇禅應了心信士  
四月十六日
- 292 (No.711) 慶應二丙寅年  
性海良性信男  
三月十八日
- 293 (No.712) 明治元年  
〇百姓童女  
二月廿三日
- 294 (No.713) 又右衛門  
明治二己巳 娘  
〇貞心妙實信女(請花)  
四月廿五日
- 295 (No.714) 明治十四年  
田四十四  
〇遠眼良道信士  
小川八右衛門  
行年二十才
- 296 (No.715) 明治十七申年七月廿三日  
〇長壽良安信士(請花)  
小川又右衛門年八十二才
- 297 (No.716) 不明  
〇(不明)
- 298 (No.717) 不明  
伊藤家墓地
- 299 (No.718) 正徳六年  
〇梅林妙花神定尼  
閏二月廿二日
- 300 (No.719) 享保六年 孝子敬白  
〇重居珍信士(請花)  
二月廿五日
- 301 (No.720) 享保十八年  
〇安心神定尼(請花)  
七月廿七日
- 302 (No.721) (稱朝)  
相澤家墓地
- 303 (No.672) 安永五年 長作  
〇霞月良彩信士(請花)  
正月〇日
- 304 (No.673) 寛政六寅  
〇玄室妙申信  
八月十三日
- 305 (No.674) (石佛面)  
文政十亥正月廿九日  
(正面)  
〇春岳儀法信士(請花)  
(左側面)  
金五郎年三十八
- 306 (No.675) 天保二卯年 長太郎  
〇鐘林妙意信女(請花)  
六月十三日
- 307 (No.676) 七右衛門  
天保八酉年七月八日 巖六十八  
〇秋月白光信士(請花)  
智規神定尼  
天保七申年十二月廿三日
- 308 (No.677) 長右衛門  
安政一卯年  
〇孤獨長光信士(請花)  
十月十日
- 309 (No.678) 長太郎  
明治八亥年  
〇白龍壽鶴信女  
母
- 310 (No.679) 明治十四年二月廿日  
〇真契玄津信  
相沢長太郎
- 311 (No.680) 明治十五年三月十三日  
〇大道傳法信士(請花)  
相沢吉太郎
- 312 (No.681) 相沢長太郎妻  
明治十七三五月廿八日  
〇真相妙玄信女(請花)  
七北村 小野藤五郎  
娘ハル  
七十一才
- 313 (No.682) 〇至
- 314 (No.683) 不明



相澤家墓地



小川家墓地

## 第五節 棟札

70は昭和六年の千引神社通拝所建立棟札である。「天壤無窮 五穀豊稔 諸願成就 國家安全 萬民安業 厄災消除」は等神の仁和多利神社の明治以降の棟札に多く見られる文言である。社掌は柏木神社の本郷勝治、社守は赤井氏である。ウラ面には建立に関わった東田中区の住民の名が記されている。通拝所建立に合わせて賽銭箱、手水盤も奉納され、御坂の修繕も行われたことが記されている。

## (オモテ面)

天壤無窮 五穀豊稔 諸願成就 社掌本郷勝治

奉千引神社通拝所建立二字

國家安全 萬民安業 厄災消除

## (ウラ面)

東田中区 區長

相澤巳之吉 大工

赤井善作

兼氏子総代

氏子総代 伊藤源三郎

全 鈴木善次郎

區長代理 赤井大次郎

世話係 相澤力蔵

社守 赤井春作

総代

鞆奉献者

全 伊藤辰三郎

小川六之助

賽銭箱奉献者

鳥居奉献者

鈴木よし

幕奉献者 小川りゑ

手水盤奉献者

鈴木よし

遠藤やす

遠藤やす

小川捨松

コンクリー御坂奉献者

コンクリー御坂奉献者

赤井春作

赤井春作

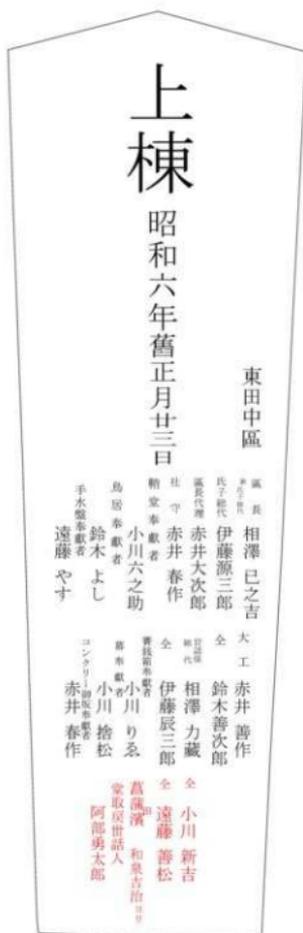
上棟 昭和六年舊正月廿三日

(オモテ)

天壤無窮 五穀豐稔 諸願成就 社掌本郷勝治  
 奉 千引神社遙拜所建立 一字  
 國家安全 萬民安樂 厄災消除



(ウ ラ)



## 第六節 民俗

## 一 地域の概要

## 1 行政区

江戸時代の田中村は、現在の志引・東田中・東田中南・新田中の一部の行政区がその範囲として対応する。この中でも志引と東田中に旧家が存在し、神社や小祠も両区の中にある。

## 2 屋号

ウエノイ（上の家）

エ・ドウサマ（遠藤様）

カネヤマ（金山）

サカヤ（酒屋）

シタノイ（下の家）

ドウバ（道場）

ニシノイ（西の家）

ヒカシ（東）

ムケエノイ（向こうの家）



第36図 東田中地区民俗調査関連図

## 3 デンジョウヤマ

東田中地区にはデンジョウヤマと呼ばれる山林があり、板碑や供養塔が密集しているほか、旧家の墓地も残っている。「田中山」や「殿上山」という漢字をあてるとする説もあるが、「デンジョウヤマ」という呼び方がみか伝わっており、どのような漢字があてられていたかは不明である。この山の中には、山を南北に分けるように道が通っており、道の北側にはかつて寺院があったと伝えられている。いつの時代まであったのかは不明であるが、付近にはテラマエ（寺前）という地名も残っており、墓地もその名残であるという。

山の南側には、カネヤマ（金山）という屋号を持つ旧家の跡地がある。カネヤマの敷地は、鉄道の線路敷設にかかる土地の買収の対象になり、昭和初期に他所に移ったとされている。カネヤマという屋号は、金山もあることからきていると言われており、大変裕福で地域に影響力を持った家であったことがうかがえる。西隣の高橋村まで、他人の土地を踏まずに行くことができたとも伝えられている。



西側から見たデンジョウヤマ

このカネヤマの屋敷跡には、近年までケヤキの大木が残っており、御神木として守られていた。また、江戸時代後期にこの家に留まりながら、近隣の村々で活動をした海龍上人という旅の僧がいたという言い伝えもある。上人はこの家で亡くなり、敷地内に葬られたとされているが、現在は草木が生い茂りその墓標を認めることは困難になっている。

## 二 人々のつながり

## 1 契約講（親睦会）

東田中・志引を中心に約二戸で組織された契約講があり、ケイヤクコウ（契約講）と呼ばれていた。昭和後期には親睦会と名前を変え、契約講としての活動は終了したという。東田中にはこの一つの契約講しかなかったとされ、地域における決め事などもこの組織でなされていた。共有財産として作業小屋を所有しており、そこにムッシュヨバタ（延機）を設置し、織った蓑を売って契約講の資金にしていた。その後は、作業小屋を改装して貸家にしたという。このようにして得た資金は、講員への貸出などに使われた。

主な活動内容は、葬儀の補助と年に一回の集まりであった。この集まりは秋に開かれており、講員の自宅が会場となっていた。当番の家をヤド（宿）と呼び、ヤドでは精進料理が振舞われ、餅搗きが行われた時期もあった。この時に用いるお膳や椀などは契約講で所有しているもので、長持に入れてヤドを回っていた。当日は各戸から代表者が一名参加するが、ある時期までは男性の参加しか認められていなかったという。ヤドには米を一升ずつ持ち寄り、遅刻者は酒を持つてくるという罰則も設けられていた。

葬儀の補助に関しては、墓穴掘り、棺担ぎ、飾り物作り、受付といった役を担当していた。契約講があった頃には、自宅で葬儀を行うことが多く、手伝いは欠かせないものであった。

契約講は昭和後期に親睦会と名前を変えて活動内容が変化し、講員数も三〇戸前後まで増加した。親睦会になった時期は明確ではないが、昭和五〇年代にはすでに親睦会として活動していたという。契約講の時代

は、講員の自宅を会場にして集まりが行われていたが、親睦会になってからはこれが中止され、積立金で年に一回講員で旅行に行くようになった。またこの頃になると自宅ではなく、葬儀会館での葬儀が主流になったため、葬儀の補助も受付などの簡易的なものへと変化していった。平成二〇年頃に当時の会長が体調を崩し、そのまま親睦会は解散になったとされている。

## 2 信仰に関わる講

## (1) 観音講

志引観音を信仰する講である。基本的に戸主の男性が参加する決まりであったため、後述する「女の観音講」に対して「男の観音講」と呼ばれている。講で所有している「御観音講宿前帳」には明治七年からの記録が残っており、その当時は一〇戸前後の講員数であったことが分かる。その後多少の増減があったが大きくは変わらず、最後の記録が残っている平成二五年時点の講員数は七戸であった。

主な活動は年に二回、一月と八月にヤド（屋戸、宿）と呼ばれる当番の自宅で行われる集まりである。志引観音の縁日である「三三日に集まることになってきたが、ヤドの都合によって多少前後しても構わない」とされていた。当日は本尊の観音像を拝み、精進料理を食べて過ごした。ある時期までは、開始時に灯した蝋燭が燃え尽きた時に解散とする決まりがあり、集まりの時間が必要以上に長引くことを防いでいた。その間に飲む酒も日本酒を一升のみとされ、緊張感が混ざった集まりであったことが窺える。

観音像はベットウ（別当）である赤井家で管理しており、赤井家の人

## 観音講の話

これね、男の観音講なの。だから女子参加しちやダメなの。それ、みな婆ちゃんたちばり参加するようになったの。女子ダメだって言うてるのに。他が入りがけの時(27歳の頃)は守られて、厳しかったの。神様が女の人なんだよな。だから女子はヤキモチを焼くというようなことを言うの。男だと、もてはやして祀ってけっから。それがもう半数以上が女人って来たの。

(昭和9年生まれ 男性)



志引観音縁日(平成28年8月23日)



観音講集まりのようす  
(平成28年10月23日)



供物

がヤドまで運び、終わったら取りに行く決まりになっていた。ヤドでの集まりは男性しか参加してはならないとされ、平成一〇年頃まではこの決まりが厳しく守られていた。東田中の観音堂は、志引石とともに空を飛んでこの地に来た少女を祀るために建てられたため、観音像は女性とされている。そのため、女性がその場にいると観音様が嫉妬すると言われており、女性は集まりの様子を見ることが禁じられていた。しかし、各戸で世代交代が進むと、次の戸主が仕事の都合などで集まりに参加できないことが多くなり、前の戸主の妻が参加せざるを得ない状況になっていった。近年では、男性が参加するのは一戸のみであり、他の参加者はすべて女性であったという。

現在観音講の活動は、平成二五年八月の集まりを最後に休止している。平成二八年八月二三日には、赤井家の仏間に観音像が出され、精進料理が供えられた。今後講員が集まつての活動再開は未定である。

## (2) 観音講

志引観音を信仰する女性の講集団である。男性が参加する決まりであった「男の観音講」に対して、「女の観音講」と呼ばれている。現在も活動を続けており、平成二八年時点で約一二戸が加入している。年配の女性が多く、姑が集まりに参加できなくなったことをきっかけに嫁に引き継がれることが多いとされている。

主な活動内容は、五月と一〇月に行われる観音堂での集まりである。日には決まっておらず、講員の都合に合わせて決める。当日は講員が観音堂に集まり、持ち寄った米を供えて蝋燭を灯し、御詠歌をうたう。その後ナオライ(直念)に移り、持ち寄った赤飯や菓子を食べる。毎回当番が二名ずつ出され、観音堂を清掃することになっている。「男の観音講」ではヤド(宿)に赤井家が観音像を運んで行くが、「女の観音講」では観音堂に観音像を持つて行くことはしない。

## (3) 山の神講

子授けや安産の御利益で知られる、美里町(旧小牛田町)の山神社を信仰した女性の講集団である。一戸から一人の女性が入ることになっており、多くの場合、嫁に来て二、三年経った頃に、姑と入れ替わりで入ったとされている。そのため、当初は若い嫁世代が活動していたが、次の世代に引き継がれることが少なくなり、昭和二〇年代後半から三〇年代に嫁に来て加入した講員がそのまま続いている状況であった。その後、講員が子どもを産む年齢ではなくなったことを理由に解散となった。解散時期については、講で所有していた「山神講 宿前帳」に昭和六二年まで講として活動していた記録が残っており、この時期であることが分かる。解散当時の講員数は一名であった。

主な活動内容は、講員の家での集まりと、山神社への参拝であった。「山神講 宿前帳」によると、昭和三二年までは旧暦三月二日と旧暦一月二日という日に二回行われていたことが分かる。その後新暦に変更され、二日という日にも前後するようになっていく。解散直前まで年に二回という頻度は変わらないが、開催する月は講員の都合に合わせて、三月か四月、一〇月か十一月など多少前後している。集まる家のことをヤド(宿)と呼び、一回ごとに当番を回していた。ヤドでは精進料理が振舞われ、蝋燭を灯し、講で所有する掛軸を拝んだ。この掛軸は現在でも元講員によって保管されている。

また、山の神講では講員が積立をしており、それが貯まると小牛田の山神社に参拝に行くこともあった。参拝は、代表者のみが行く代参ではなく、講員全員で行っていたという。

## (4) その他

東田中には、栃木県鹿沼市の古峯神社を信仰する古峯ヶ原講と、山形県の湯殿山・羽黒山・月山を信仰する三山講があったという。いずれも昭和三〇年頃には解散しており、その詳細を知ることには困難である。講員は契約講の加入者とほぼ同じであるとされ、何人かの代表者が参拝する代参を行っていたという。

## 三 神社・小祠

## 1 志引観音堂(志引神社)

東田中・志引を中心に信仰を集める観音堂であり、志引観音堂、または志引神社と呼ばれている。覆屋の中に観音堂が祀られているが、境内は鳥居などが立ち神社として整備されている。この観音堂の近くには、志引石と呼ばれる大きな石があり、その昔一人の少女が石を宙に浮かせ、石をこの地に運んだという伝説が残っており、観音堂はこの少女を祀るために建てられたという。『多賀城市史 第3巻 民俗・文学』に



山の神講掛け軸

よれば、この時に赤井家の水田に石が落ちたため、代々この家がベツトウ(別当)を務めるようになったとされている(多賀城市史編集委員会 一九八六)。また、この時少女が紫色の褌をしていたとされていることから、東田中では紫色の布を使うことを避ける慣習がある。単に神様が使っていた色のため、畏れ多いとする話もあれば、紫色の褌とともにこの地に来たため、紫を用いると今度は違う場所に神様が飛んで行ってしまうとする話もある。東田中に他所から嫁に来た人の中には、紫色の着物を持ち込まないようにと嫁ぎ先から伝えられたという人もいる。

御堂は、昭和初期に七ヶ浜へ一度移築したと伝えられている。納められている棟札には「菖蒲田濱 和泉吉治ヨリ堂取戻世話人阿部勇太郎」との記録が残っており、この移動を裏付けている。当時、御堂を囲む遙拝所を建てたが、そこに夜な夜な若者が集まり、騒いで喧嘩をするということがあったという。その頃、七ヶ浜の人々から観音堂を譲ってほしいと懇願され、若者の御堂の使い方も改善されないこともあり、譲る方向に話が進んだとされている。このような経緯で七ヶ浜に移築されたが、その直後から七ヶ浜と東田中の両方で病気が流行るなどの良くないことが起こり、御堂を元の場所に返却することになったという。それから場所の移動もなく、現在に至っている。御堂を七ヶ浜から東田中に戻したことについては、観音堂に納められている昭和六年の棟札に「菖蒲田濱 和泉吉治ヨリ堂取戻世話人 阿部勇太郎」と書かれている。七ヶ浜に観音堂を誘致したとされる菖蒲田濱の和泉吉治は、高崎の表Bにある「妙法師」に賛助者として名前が刻まれており、鬼子母神堂の信者であったことがわかる。このような人の繋がりの中で、田中・高崎地域と七ヶ浜の間で御堂の移動が行われたと推測される。

建物の移動はこの一回のみとされているが、高崎の多賀神社に合祀されたことがあるという。平成十三年に多賀神社の改修が行われた際に、社殿から「邸社 千引神社神璽」と書かれた木箱が見つかっており、これが合祀された時に多賀神社に移されたと考えられる。木箱が多賀神社に移された時期など、合祀に関する詳細は不明である。この木箱には黄色の褌が添えられており、現在は観音堂に返却されている。

志引観音の祭日は八月二三日である。安永三年の「風土記御用書出」にもこの日にちが記されており、祭日の変更はないと考えられるが、現在は新暦で行われている。この日には、志引観音を信仰する「男の観音講」の集まりが講員の自宅で行われることになってきたため、赤井家の人が当番の家まで観音像を運び、講員全員で拝んでいた。現在の活動は休止しているが、当日は赤井家で供物を上げ拜んでいる。また、赤井家では毎月二三日は精進の日とされており、肉類を食卓に出すことを控えている。



志引観音堂 (志引神社)



志引石

## 2 三所宮

東田中一丁目の住宅地の中にお宮が祀られており、サンシヨノミヤ(三所宮)と呼ばれている。周辺には伊藤姓がまとまって居を構えており、三所宮は伊藤本家、またそこから分家になった家々によって祀られている。かつては田中村の鎮守の神であり、伊藤本家はそのベツトウ(別当)を務めたとも言われている。その後、いつの頃からか伊藤家の氏神になったという。

この南側にも「三所宮」と呼ばれる場所があり、石碑が二基立っている。かつてはここに三所宮があったとされ、水書で水が上がったために現在地に移動したと伝えられている。その後、跡地も三所宮と呼ばれ現在まで残ってきたが、ここに参拝に来る人はいないという。

祭日は旧暦九月九日である。安永三年の「風土記御用書出」にも祭日としてこの日にちが記されており、祭日の変更はないと考えられる。平成に入ると前までは、この日にちで祭りが行われていたが、その後人が集まりやすい九日前後の休日に行われるようになった。当日は各家庭で供物を持って参拝に行くが、平成二年までは八幡の八幡神社の神職による祈祷も行われていた。この祈祷は昭和五八年にお宮を改修した時から始まったものであるという。また、前日の夜には、オヨモリと呼ばれる集まりがあり、周辺の六戸の伊藤家の人々が集まる。各自供物を持ち寄り、お宮の前で飲食をする。

祭日以外にも、病氣平癒の願掛け、子どもが生まれた報告など、生活の様々な場面で三所宮は伊藤家の人々の信仰を集めてきた。境内の櫛の木は神木のように大切にされ、神棚に供えたり、病氣の際にはこの櫛をもらってきて体をさする人もいたという。



三所宮前夜祭(平成28年11月5日)



三所宮



供物



三所宮跡

# 第八章 地誌

## 第一節 大代村

### 一 封内風土記

大代邑 戸口凡二十八

### 二 風土記御用書出

(表題)

宮城郡陸方大代村飯肝人 栗吉

宮城郡風土記御用ニ付書出

安永三年九月 村控(大正十四年写)

大代村 村控

一 村名ニ付由来 但シ慶長年以前ハ大城村ト書キ記シ候モ同年以

後ハ大代村ト改メベキ旨御出サレタル故(城)代ト相改候事

一 田代 拾七貫九百文

一 畑代 四貫貳百六拾文 但茶畑貳拾五文

内

一 七貫六百拾九文 御蔵人

一 拾四貫五百四拾六文 御給所

都合貳拾貳貫百六拾五文

一 人頭 貳拾七人 一家數 貳拾九軒 但シ借屋貳軒

一 男女都合 貳百四拾七人 内 男百貳拾七人 女百貳拾人

一 馬 貳拾五疋 一牛

付 舟十六艘 一 御石米瀧取船 八艘 一 小船 七艘

右ハ御用船並御給人様御申御用船ニ候間何代御役無御座候事

(貼紙)

御用船ニ付人足受持之事

一 御殺米船御人足触レ出シ役ハ茶屋屋敷 卯三郎 触役申付

ラレ居候事

右御人足ハ拾六軒人頭拾六軒ニ而受持 一日替リ御番所

ニ詰居リ瀧取船之一切ヲ引受ケ可申候事 但シ年貢諸上納

者御免之事

一 酒屋 貳軒 一 菓子屋 三軒

一 御殺間屋 貳軒 一 御塩間屋貳軒

年貢諸上納是又同断

一 名所 志 鼓ミケ原ト云フ原ノ中央ニ巖<sup>巖</sup>ノ異音アリ、大鼓ノ

如シ、万治年号以前ノ名ニシテ享保年号ノ頃<sup>山公</sup>鶴山公鶴ヲ放手飼養

シタルヲ以テ鶴野ト称シ、御鳥見役ヲ置キ繁殖シタルヲ以テ春秋

ノ狩遊ヲシタル場所ナルヲ以テ名アリ

一 吉歌 野とならば鶴となりて鳴つらんとどみカ原の音ぞ床か

しき 鹿貫中郡特旨村

一 旧跡 ナシト云共先住民ノ住家ナルカ或蝦穴ト称シル穴<sup>穴</sup>々々ニ

出現セルアリ

一 神社 一

一 樺木明神社 一 小名 柏木

一 勸請 誰勸請申義並ニ年月共相知不申候事

一 社地 竪十六間 一 社 東向四間作 一 鳥居 東向

一 長床 一 額 一 地主 西屋敷善兵衛

一 別当 右善兵衛 一 祭日 九月十七日

右十ヶ条之内印仕候分無御座候事

一 仏閣 一 寺 二ヶ所

一 修験 一 ヶ院 来志院

一 小名 柏木 一 本山派 一 道場 南向 竪二間半 一 本 横二間

尊 不動明王 木仏立像一尺五寸 作者慈覚大師ノ御作ナリト云

一 門 壺 一 額 壺

右六ヶ条之内印仕候分有之候事

一 修驗書出一冊相添指出申候事

付行派寺並虛無僧寺

一 孝子孝婦百歳以吉良民並百歳長寿者 一人 但百六歳ノ長寿者

西屋敷百姓伝五兵衛ト云老人有之 御見得賞品頂戴者有之候事

一 古人

一 品替之御百姓 付御百姓之内御屋御寓ニ罷成御見得仕献上物並

拝領物仕候者

一 御献上品 春ハ白魚 夏ハ鱧 秋ハ鱈 冬鱧ノ四品

一 御献上品 夏ハ鱧 秋ハ鱈 冬鱧ノ四品

(貼紙) 御献上品ハ御殿中ノ御日魚ニ有之、茶屋敷品替百姓ニ於テ受持御番所語段ニ御上納納、御城下原町役所ニ日々御上納可仕居候事 但シ茶屋町品替百姓受持ニ付諸上納御見之事

一 御城場 一 御城場

一 古館 豪族大木戸四郎太夫重信ノ居館といふ、年号者相知不申候事

一 古碑 壺ツ 菊力阿ノ碑と云ふ、但シ不明ニシテ其傳トナリシカ多分慶長以前ノ血波ノ節沈埋シタル由申伝候事

一 古塚 ナシ

一 石仏 一 但シ石仏正観音、正保五年八月十八日剝刻シアルヲ以安永三年迄三百廿三年ニ相成、地主権四郎別當之由ニ御座候事

一 石力森山 高三拾五間

一 来宝檀山 高四拾八間

一 右両山共木立茂り遠見ノ品無御座、但シ何茂他村御境一円無御座

候事

一 御林 三ヶ銘 当村御拝領御林ニ有之事

一 公藏山御林 壺三丁

一 御船入堀東西杉御林 壺七町

一 御舟入東土手松御林 壺三丁

一 右御林共元禄元年御植立ニ御座候、但シ東八当郡松ヶ浜、南八当郡中野村、北者当郡等神村御境

一 川 一 舟場川 但シ万治年号以前ハ神酒川ト云伝候事

一 川前野御林 壺拾五間

一 右御林ハ元禄元年之頃御植立候由申伝候事

一 滝

一 堀 御舟入堀 但シ南八当郡等神村境、北ハ当村大木戸ト申廻

一 二河海二落候事、右堀方ハ万治年中御堀方ニ罷成候由申伝候事

一 橋 一 念仏橋 慶長年号以前ハみたらせ橋ト称へ来リシカ

一 年々歳々水増嵩み、其上血波ノ為メ落橋重ねくナルヲ以、其傳

一 中断シ居候モ通道成難クヲ患セ御郡奉行所ニ御願、享保年間祖母

一 共ノ願ニ衣リ念仏修行十数年ニシテ此橋ヲ架シ通行人ノ御為ヲ

一 ナシタルニ依リ、夫ヨリ念仏橋ト称へ来リタル由ニ伝へ来リ候事

一 沼

一 堤 二 右者小沢空庭御築方已来水持不申ニ付用水溜高一円無

一 御座候事

一 堰 一 坂

一 道筋 三筋

一 一 当村より当郡松ヶ浜江ノ道 一筋

一 一 当村より当村垣籠町江ノ道 一筋

一 一 当村より当郡等神村へ之道 一筋

一 名石

一 一 名水 清水屋敷 大清水 小清水

一 一 付温泉 一名 木

- 一 産物 白魚、鯉、鱒、鱒、四品
- 一 古歌 一 端舞
- 一 小名 船場、新田、柏木
- 一 屋敷数 茶屋敷、拾六軒、一 古屋敷、七軒、一 柏木屋敷、三軒、一 東屋敷、五軒、内活却茶老軒、以上二十八軒、但し活却一軒
- 一 御村境 堅五丁、横谷五丁
- 一 堅 一 南八当郡等神村当村分鼓ヶ原ト申所ト一、北八当郡松ヶ浜境当村分石ヶ森ト申所迄
- 一 横 一 東八当郡後浜境当村分舞形ト申所ト一、西八当郡等神村境当村分小沢ト申所迄
- 一 以上十七ヶ条
- 一 御家当本文四十一ヶ条付ヶ条四ヶ条、都合四十五ヶ条之内印仕候分廿八ヶ条之旨御調へ二相成事
- 一 右之通風土記御用ニ付此度相改メ御書上仕候已上
- 一 安永三年九月 大代村肝入来吉

書 出

宮城郡陸方大代村 来宝院水全  
 本山派 年四十八歳

- 一 開山之事 当院者来宝院坊水順承応元年開院に付当安永三年迄百式拾三年二羅成申候事
- 一 小名之事 柏木
- 一 故事来歴之事
- 一 本山並玉寺ノ事 御城下上先達慈雲山良覺院支配ニ御座候事
- 一 寺縁之事 一 最初之地移替之事 一 寺領並二御寄付之事
- 一 御墓所並二御位牌之事 一 御参詣又ハ御成之事 一 御詠歌等ハ惣而拝願之事 一 御目見並二御意等有之事
- 一 古什物之事 一 本尊、不動明王、一 体
- 一 右ハ長等委細之義ハ村書出ニ御書上仕候已上
- 一 古墓所之事 一 別当所之事 一 境内景地之事
- 一 開山より当迄迄歴代之道号実名之事

- 一 開院 来宝坊水順、二世 明性院水春、三世 来宝院止水
- 一 四世 明性院水永、五世 来宝院水全
- 一 以上五ヶ条

御家当十六ヶ条之内印仕候分十一ヶ条之旨御座候事  
 右之通り風土記御用ニ付此度相改御書上仕候已上

安永三年九月

三 塩松講讀

栢木神祠

栢木神祠ヲ距ル東三里三。等神村ニアリ。祠辺皆栢樹。是鹽籠枝柯ノ一ニシテ祭神神カナラス。

大代

栢木神祠以東二町許。村甚アリ。漁農相半ハス。是レ大代ナリ。巷ノ半ハ二果アリ。潮水来去。渠ニ治フテ北西五里東高浜ニ出。渠ヲ渡テ東三里許。之ヲ水門派ト云フ。

念仏橋

聖々池ノ東ニ在リ。小堤アリ。念仏橋ト名ク。未々其由ヲ詳ニセズ。

栢木神祠(木ハ八樹ニ作ル可シ)

八幡神補祠ノ東ヲ距ルコト三里余。大代村ニ在リ。鹽籠枝柯ノ一。土人曰ク。神栢樹ヲ愛ス。故ニ祠辺皆栢樹ナリ。相伝フ。神體神ニ從テ塩ヲ煮ル。栢葉ニ包ミテ諸生民ニ頒チ与フ。故ニ栢木ノ穢アリ。土人曰。妊婦之レ祈レハ。患苦有ルコト無シト。祠畔ニ道ヲ有リ。明性院ト曰フ。祀ノ事ヲ祭ル。

註1 御書所(御台改所)のことで、来親密売買の取り纏まり、年貢米の輸送や藩の許可する三九か所設置されていた。その運営のために置かれていたのが御用船である御石米瀬取船や小船で、それらに係る御用一切を勤めていたのが一六軒の茶屋屋敷の人であった。

註2 獅山公。仙台湾五代藩主伊達吉村

註3 観六。大代橋ノ築群ニ指していると考えられる。但し、大代村分の「風土記御用書出」は大正十四年写しの村控で、後世の書き込みがあることから、「観六」(觀真六)もたいがいはの記人であろうと思われとしている(多賀城市史2 近世・近現代)。

註4 御台魚。藩主などの御食にあてられるもの。仙台市宮城野区原町にあった代官所に運ばれ、仙台城下着町の五十集荷人を通じて藩に納められた。

第二節 留ヶ谷村

一 奥羽観跡園老志

面和久橋 當<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>吹面橋

在留谷村<sup>二</sup>有一圮橋<sup>一</sup>面和久橋是也天和四年甲子二月依<sup>レ</sup>命<sup>レ</sup>巡<sup>レ</sup>視<sup>レ</sup>宮城郡中勝蹟<sup>一</sup>里老示<sup>レ</sup>其地<sup>一</sup>且言<sup>レ</sup>土人誤曰阿倍松橋<sup>一</sup>視<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>二楓樹<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>是惜<sup>レ</sup>欠<sup>レ</sup>其事<sup>一</sup>史<sup>一</sup>三月二十日歸<sup>レ</sup>城府<sup>一</sup>遠<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>因命<sup>レ</sup>出納司松

林仲左衛門及郡司<sup>二</sup>而即日植<sup>レ</sup>楓樹五株<sup>一</sup>於橋畔<sup>一</sup>且橋東<sup>一</sup>小山亦多植<sup>レ</sup>楓樹<sup>一</sup>以為<sup>レ</sup>紅秋之設<sup>一</sup>焉爾後過<sup>レ</sup>二十二年<sup>一</sup>再<sup>レ</sup>經<sup>レ</sup>其地<sup>一</sup>其猶存<sup>レ</sup>焉鄉人橋呼<sup>レ</sup>紅楓橋<sup>一</sup>山号<sup>レ</sup>紅楓山<sup>一</sup>是併<sup>レ</sup>先君之遺愛也

ふりたるたなはしをもみちのうつみりけるわたりにくとて

やすらはれて人になつねければおもはくの橋と申は是なりと申をきよて

御集

光ぞよ野田の玉川月きよみゆふしほ千とり夜半になくなり  
大神宮百首御歌

夫木集

冬されは野田の玉川氷あて萩こす浪は夜半のしらゆき  
按<sup>レ</sup>古人玉川之於<sup>レ</sup>萩花<sup>一</sup>詠<sup>レ</sup>諸<sup>一</sup>近江<sup>一</sup>玉川<sup>一</sup>者往住有<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>今用<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>奥州<sup>一</sup>玉川<sup>一</sup>者尤可<sup>レ</sup>怪此下有<sup>レ</sup>或分<sup>レ</sup>玉川<sup>一</sup>或分<sup>レ</sup>野田<sup>一</sup>或称<sup>レ</sup>入江<sup>一</sup>或<sup>レ</sup>称<sup>レ</sup>池塘<sup>一</sup>者<sup>一</sup>又録<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>下<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>備<sup>レ</sup>参考<sup>一</sup>

山家集

ふまはうき紅葉のにしきちりしきて人もかよはぬおもはくのはし  
しこのふのさとよりおくに<sup>二</sup>二日はかりいりてあり<sup>一</sup>  
夫木集橋の部に家集をひきておもはくの橋除<sup>レ</sup>奥

此歌は信天郷よりおくへ一日二日はかりいりてふりたる橋あり人にとへはおもはくのほしと云もみちやと云云

或曰面和久字本俗子於<sup>レ</sup>義理<sup>一</sup>亦不<sup>レ</sup>通曉<sup>一</sup>焉郷老曾<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>吹面橋也往昔橋畔<sup>一</sup>有<sup>レ</sup>紅楓林<sup>一</sup>村落秋晚<sup>一</sup>人行<sup>レ</sup>稍稀<sup>一</sup>唯所<sup>レ</sup>經過<sup>一</sup>者<sup>一</sup>農夫野人西風<sup>一</sup>飄飄吹<sup>レ</sup>衣<sup>一</sup>紅葉<sup>一</sup>紛紛飛<sup>レ</sup>面<sup>一</sup>蓋<sup>レ</sup>風吹來<sup>一</sup>則物<sup>一</sup>已<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>者<sup>一</sup>紛也仍<sup>レ</sup>呼<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>吹面橋<sup>一</sup>

野田<sup>一</sup>玉川

在鹽釜村以南<sup>二</sup>往昔有<sup>レ</sup>河流<sup>一</sup>潮汐亦來往<sup>レ</sup>石瀨<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>浮光耀<sup>レ</sup>金<sup>一</sup>深潭<sup>一</sup>地<sup>一</sup>清影沈<sup>レ</sup>鷺<sup>一</sup>皆<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>月<sup>一</sup>得<sup>レ</sup>嘉名<sup>一</sup>如今<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>廢地<sup>一</sup>而唯遺<sup>レ</sup>野田<sup>一</sup>溝梁<sup>一</sup>耳或曰南部領

九戸郡亦有<sup>二</sup>同名者<sup>一</sup>

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

新古今冬

夕されは汐かせこしてみちのくの野田の玉川千とりなくなり

百番歌合に

続古今冬

みちのくの野田の玉川見置せば汐かせこしてこぼる月影

邦省親王家五十首五月雨

続後撰

さみたればゆふ汐ながらみちのくの野田の玉川浅き瀬もなし

御集

光ぞよ野田の玉川月きよみゆふしほ千とり夜半になくなり

夫木集

冬されは野田の玉川氷あて萩こす浪は夜半のしらゆき

新勅撰

みちのくにありといふなり玉川のたまさかにたにあひみてしかな

家集

うつらなく野田の玉川けふみれば萩こす波に秋風ぞかく

周防内侍

みちのくや野田のすかこもかたしきてかりねさびしきとこのうらかせ

家隆

弘安百首

夫木集

さと人や野田のわかかなをすくらん汀でにこる玉川のみつ

為家

建長五年毎日一首

為家

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

為家

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

為家

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

為家

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

為家

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

同 朽のこる野田の入江のひとつは心はそくも身でふりにける

同 せきかくる野田の入江の沢水に水りて留る冬のうき草

同 百首歌野田陸奥

同 霜水る野田のうはてにせく池の汀になひくしのすゝまかな

同 むれわたるいそへのあきさ音寒し野田の入江の霜のあけほの

二 封内名蹟志

野田玉川 鹽釜村の南の方田中にある。

往昔河流あり。潮のさし引もせしと云。石瀨の所は浮光金を躍がごとく。深潭の所は清影珠を泳がごとし。皆月と千鳥とに嘉名あり。今は田野となりて名のみ残り。

陸奥の国にまかりける時よみ侍りける。

夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴なり

陸奥の野田の玉川見たせば汐風こして氷る月かけ

五月雨は夕汐ながら陸奥の野田の玉川浅き瀬もなし

光さそふ野田の玉川月清し夕鹽千鳥夜半に鳴なり

鶺鴒なく野田の玉川けふ見れば秋風吹く

朽残る野田の入江のひとつ橋心はそくも身でふりにける

政村

為家

後鳥羽院

長明

能因法師

順徳院御製

鴨祐夏

後鳥羽院御製

家隆

政村

政村

政村

政村

政村

政村

三 封内風土記

留谷邑。戸口凡廿七。神社凡二。神明宮。不詳何時創設。

天神宮。同上。佛宇一。聖徳太子堂。不詳二何時創建。今荒廢。惟存遺址。寺一。留谷山向泉院。臨濟宗。本部松島。瑞巖寺末寺。

傳云。本尊正親善行基作。而此寺亦其初行基開基也。中興爲臨濟宗。中興僧名。年月共不傳。古皇一。號櫻井館。不詳二人所居。名跡一。面和久橋。見西行法師和歌。古昔有紅楓。而其後紅楓已絶。且土人誤曰阿部松橋。青山君世有命。植楓樹五株於橋畔。橋東小山亦多植之。名跡志曰。邑中有二堤橋。是也。靈元帝。天和四年甲子春。青山君命植楓樹。是以西行和歌也。仍鄉人橋曰紅葉橋。山曰紅葉山。觀跡聞老志曰。或云。面和久字本俗字。於義理亦不。通焉。郷老曾曰。是實吹面橋也。往昔橋畔有紅楓林。邑落秋晚。人行稍稀。唯所經過者。農夫野人。西風飄飄吹衣。紅葉紛紛飛。而。蓋風吹來。則物已分。分者紛也。仍呼之曰吹面橋。

四 風土記御用書出

風土記御用書出

宮城郡陸方留ヶ谷村

野人 西左衛門

留ヶ谷村

留ヶ谷村

留ヶ谷村

留ヶ谷村

留ヶ谷村

留ヶ谷村

留ヶ谷村

留ヶ谷村

- 一 紅葉山 右八 獅山様御代楓樹御植懸被仰付候事  
 一 面和久之橋  
 踏は志し紅葉のにしき散敷て人も通はぬ面和久之橋  
 旧跡 一  
 一 太子堂の跡  
 右八多賀御城主の邸被相建候義二も御座候哉今ハ松一本在之  
 太子堂松と申伝候事  
 神社 二  
 一 天神社 一 小名 むじろ  
 一 勧請 誰勧請と申義並年月共二相知不申候事  
 △一 社地 一 社 南向三尺作  
 一 鳥居 南向 △一 長床 △一 額  
 一 地主 御村野山二付地主無御座候事  
 一 別当 野田屋敷 次五助 一 祭日 九月廿五日  
 右拾ヶ条之内印仕候分無御座候事  
 一 神明社 一 小名 青木  
 一 勧請 誰勧請と申儀並年月共二相知不申候事  
 △一 社地 一 社 南向式尺作  
 △一 鳥居 △一 長床 △一 額 △一 地主  
 一 別当 御村空地二付地主別当無御座候此辺畑所持仕候者  
 四五人中合御神事仕候事  
 一 祭日  
 右拾ヶ条之内印仕候分無御座候事  
 仏閣 一  
 一 観音堂 宮城郡三拾三番札所之内拾八番  
 一 小名 当村臨濟宗留谷山向泉院内  
 一 勧請 誰勧請と申儀並年月共二相知不申候事  
 △一 境内 一堂 南向式間四面  
 一 本尊 聖観音 金仏坐像 御長五寸 行基菩薩御作
- △一 鳥居 △一 長床  
 一 額 堂々様額観世音三字松嶋村瑞岩寺御先住大願和尚筆  
 一 地主 向泉院 一 別当 向泉院  
 一 祭日 三月十八日  
 八月十八日  
 右十一ヶ条之内印仕候分無御座候事  
 一 寺一ヶ寺  
 留谷山 向泉院  
 一 小名 田子屋 一 臨濟宗 一 仏殿 南向 竪四間半  
 一 本尊 聖観音 木仏坐像 御長五寸  
 但作者相知不申候事  
 △一 門 △一 額  
 右六ヶ條之内印仕候分無御座候事  
 一 寺書出一冊相添指出申候事  
 一 修験 ○付行派寺並處無僧寺 ○一 孝子孝婦忠僕良民並百  
 歳以上長寿之者 ○一 古人  
 一 代教在之御百姓 老人  
 清水屋敷肝入 善左衛門  
 当村古人と申者無御座候得共代教有之御百姓ニ御座候間右出一  
 冊相添指出候事  
 ○一 品替之御百姓 ○付御百姓之内御昼御寓ニ罷成御目見仕献上  
 物並拝領物仕候者 ○一 御成場 ○一 御塩焼場  
 古館 一  
 一 屋はきか館 竪四十五間 一 桜拜館 竪十五間  
 一 古碑 ○一 古塚  
 右二館共誰御居館と申儀並年月共相不申候事  
 一 山 六  
 一 大久保山 高二十間 但東八当郡寄神村御境  
 一 西原山 高二十五間 但西八当郡高崎村北ノ浮嶋村御境  
 一 石屋敷山 高三十五間

一 櫻井山 高十間 但南八当郡田中村御境

一 隙子合山 高十間

一 田子屋山 高三十五間 但東八当郡下馬村御境

右八指立候高山ニモ無御座候間遠見之旨御書上不仕候事

○一 御林

一 川 一 大久保川

一 水上八当郡堪羅村母子沢提 出当村境野田之申所江流來申候事

一 末水八当村境龍ヶ崎之申所ニ而當郡笠神川江落合申候事

○一 滝 ○一 橋 ○一 沼

一 堤 二

一 野田堤 当村一田用水 右為高拾四式百五拾七文

一 中沢堤 当村一田用水 右為高宅貫八百五拾五文

一 堰 一

一 龍ヶ崎堰 当村一田用水 右為高拾四貫式百五拾七文

一 坂 一

一 向ヶ坂 長三拾間 当村 當郡笠神村江之通路

一 道 一 筋

一 当村より當郡堪羅町江之道 一筋

一 当村より當郡八幡村江之道 一筋

○一 名石

一 名木 一

一 白清水 右ハ來庭相知不申候得共如何程之早懸ニ茂水潤候義

無御座候事

○付温泉

一 名木 式本 一 杉 式本

一 志本 廻り志丈四尺 一 志本 廻り志丈式尺五寸

右八名木之申ニハ無御座候得共大木ニ付御書上仕候事

○一 産物

一 古歌 一首 前々冬名所之部面和久之權之所江御書上仕候事

○一 端郷 ○一 小名

一 屋敷名 五

一 清水屋敷 十軒 一 野田屋敷 六軒

一 田子屋敷 四軒 一 入屋敷三軒

一 台屋敷 四軒

以上廿七軒

一 御村境 七軒

一 南八当郡八幡村境当村分龍ヶ崎之申所 〆

一 北八当郡堪羅村境当村分野田之申所迄

一 東八当郡下馬村境当村分能ヶ田之申所 〆

一 西八当郡高崎村境当村分野田之申所迄

以上二十三條

御案当本文四十一ヶ条付ヶ条四ヶ条都合四拾五ヶ条之内印仕候分二

十二ヶ条之旨無御座候事

右之通風土記御用ニ付此度相改御書上仕候 以上

安永三年九月

代敷有之御百姓書出

宮城郡陸方留ヶ谷村

肝入 善左衛門

代敷有之御百姓

清水屋敷 肝入 善左衛門

右善左衛門儀先相菅野善兵衛以前之名前代敷共二相知不申候儀儀慶長年中

当村肝入相勤申候間右善兵衛代 御書上仕候事

先祖 肝入 菅野 善兵衛

二代 善兵衛子 肝入 菅野 孫惣

三代 孫惣子 肝入 菅野 孫石衛門

四代 孫石衛門子 肝入 菅野 善兵衛

五代 善兵衛子 肝入 善 内

右善内代迄五代引統肝入相勤候由申伝候得とも被仰渡候年号並在役年数共二相知不申候事

六代 善内子 善 内

右善内儀元禄元年肝入被仰渡同三年高崎村肝入兼役二被仰渡享保四年迄年数三十二ヶ年相勤申候事

七代 善内子 利兵衛

右利兵当儀享保四年カ当村並高崎村肝入被仰渡同拾四年迄年数拾壹ヶ年相勤申候事

八代 利兵衛子 善 内

右善内儀享保拾六年前書兩村肝入被仰渡明和八年迄四拾二ヶ年相勤申候事

九代 善内子 善左衛門

右善兵衛門儀明和八年兩村飯役被仰渡安永式年本役二罷成当年迄飯役年数共二四ヶ年相勤申候事

右之通先祖善兵衛代カ当善左衛門代迄九代御百姓相統仕肝入御役共二引統相勤申候事

以上 甚人

右之者御賞事又家二付持来候武具等無御座候事

右之通風土記御用二付此度相改御書上仕候 以上

安永三年九月

## 五 葦原埃捨録

野田の玉川、市川村三里三拾八町六間、僅の泥川なれとも、水泡沸々と浮て流るなり。其淡玉の如くに見ゆる是奇なり。日本六玉川の、其一所なり。

續古今集 順徳院御製

續古今集

陸奥の野田の玉川見渡せば鹽風して氷る月影。

紅葉橋。

是は人王三百三代 後花園院、文安元年に無着和尚開興す。曹洞宗なり。世の人曰玉川寺此寺西北の方に有二小川一。少き土橋掛るこれを桧橋と云り。此傍に他の木三株あり。

虚橋。八幡村。三里三拾一町五拾間。町より二町程北へ行き。有二小川一少き土橋なり。

不知説人

葦原草

踏はせし紅葉の錦散しきて人もかよはぬ慮の橋。

## 六 塩松勝蹟

野田玉川

市川村多賀城地東南二在り。因風ノ詠スル所ヲ以テ、之ヲ考フルニ、古昔八海湖進退シテ其水甚々巨ナリ。而シテ陸谷委遷今ヤ小渠トナリ。流水消々穢二具現ヲ知ル耳。傍ヲ碑アリ從四尺余衝二尺余。

碑文

歐陽子、雜陳州西漢詩曰、除之城西無澗、都城北有澗、亦水淺、而無負舟之力一也。何江湖之至哉。余嘗謂天地之運何限物換星移。陸谷易地。焉知除淡之非唐之時是。而宋之時非也。何嘗謂人之務一佳句哉。久之遊玉河。於是乎。微余言。焉。玉河我奥之名勝。世誰不知。焉。考諸國風之什。則古時蓋巨水云。海風送潮湧奔而來。水禽千群。盡鳴徘徊。渴渴乎大也哉。而今小汚池耳。天地之運爲爾。嗟呼世之探勝者何限。以其汚池故。不覺爲古之名勝。可レ爲三長太息。法蓮万春。學涉内外。文思蔚然。斌斌法門君子也。嘗慨名区勝境

多變遷其名失之者。於玉川為最。其為秘密法蓮故也。乃猛意任其事。接顯薩黨建立表之。使世之探勝者。配乃猛意。任其事如。有歐陽子。乃以答其難也。遂厲余為銘。銘曰。誰謂河。哀此如帶。目賭難。口碑母害。詢事青雲。刻辭白石。留哉不朽。春公勸役。

王屋富允伯耳撰

玉川寺  
玉川ノ傍ニアリ。後花園帝文安元年。僧無着ノ開興スル所ナリ。

掛糸親音

玉川東南ニアリ。村ヲ留谷ト云フ。堂アリ。觀音大師像ヲ安ス。僧都忠心ノ製スル所ナリ。村婦蚕ヲ折レハ驗多シ。則チ五色糸ヲ以テ賽シ。懸テ堂中ニ満ツ故ニ稱名ス。

思勝橋

千引ヲ去ル南ニ數町。留谷村ニ在リ。一ニ面和久ノ橋。土人之レヲ楓橋ト云フ。右丘ニ楓樹アリ。楓山ト云フ。此樹ハ獅山公(藩ノ五世吉村)ノ世。名勝其微ナキヲ惜ミ、之ヲ植エント云フ。

野田玉川

塔原ノ東南。塩蘆留谷兩村ノ界ニ在リ。塩浦ヲ距ル三里ニシテ近シ。田間ニ小渠有リ。是ヲ玉川ト為ス。(源ハ母子沢ヨリ出、南流シ。八幡川ニ合ス。古老相伝フ。古市川ノ二水合シテ玉川ト為ル。今ノ水源ハ則チ其小流ノミ。水常ニ流リ。雨ニ遇ヘハ則チ消流有ルノミ。)小地ヲ架ク。地ノ南側ニ老松五六株アリ。其下ニ碑アリ。僧能因ノ因風ヲ鐫ル。今古人賦スル所ノ因風ヲ以テ之レヲ考フレハ。則チ古昔海潮進退シ。其水甚々巨也。而シテ陵谷變移シ今小渠消流。僅ニ其処ヲ識ルノミ。又古國野田ト玉川トヲ分詠シ。或水變ヲ賦シ。(因風入江ト作ス。)或池塘ヲ賦シ。又独渠ヲ賦スル者有リ。蓋シ亦々此左右。地ヲ賦スルナラン。余嘗テ古老ノ説ヲ聞ク曰ク。古昔市川ノ冠川ノ二水合流シテ。水門浜ニ至リ(古ノ

多賀ノ水門ハ二見ユ。)テ海ニ入ル。是ヲ玉川トナス。今ノ玉川ハ則チ古國風ニ詠スル所ノ野田ノ入江ニシテ。則古ノ玉川灣奥ナリ。偶王屋文集ヲ閱スルニ。(藩ノ先儒富田充夫字伯耳王屋ハ其号ナリ。)中ニ玉河碑文アリ。而シテ此地ニ其碑ナシ。想フニ文成リテ而シテ其事業果サレ乎。今學子茲ニ録ス。

玉河碑文

富田 充

歐陽子難。除州西澗。詩曰。除之城西無澗。独城北有澗。亦水淺而無。負舟之力也。何江潮之至哉。余嘗謂天地之運何。物換星移陵谷易。地焉。知除澗之非唐之時是。而宋之時非也。何當詩人之務。佳句一哉。久之遊玉河。於是乎徵。余言。玉河我與之名勝。世誰不知焉。考諸國風之什一。則古時蓋巨水也。海風送。潮湧澎湃。水萬千群。盡鳴徘徊。湯々乎。大也哉。而今小澗池耳。天地之運為爾。經乎世之探勝者何。以。其汚地。故不。覺。為古之名勝。可。為長大息矣。法蓮乃春字涉内外。文思蔚然。賦々法門君子也。嘗假名区勝境多變遷。其名失之者於玉河為最甚。為秘密法蓮故也。乃猛意任其事。懲惡薩黨。建立表之。使世之探勝者配乃識焉。且後世如有歐陽子。乃以答其難也。遂厲余為銘。銘曰。誰謂河。哀此如帶。目賭難。違口碑母害。詢事青雲。刻辭白石。留哉不朽。春公勸役。

春宮玉水步月 觀虎班

碧玉何人嘗此投。通川幾歲見方流。花邊雙々清波湧。柳外亭々明月浮。迷霧幽禽啼曲渚。乘風騎客嘯芳洲。今宵勝賞誰論備。一刻千金與輕。

野田塘

玉川ノ北ニ在リ。

箭工宅跡

玉川ノ西南ニ在リ。古昔國守多賀城ニ在リヤ。矢人ヲシテ茲ニ居ラシム。土人今猶ホ之レヲ呼テ矢射館ト謂フ。統日本後紀。仁明帝。承和四年。奥州始ヲ射師ヲ置ク。陸奥國言フ。饑饉ハ交戰ノ利器。弓弩ハ致遠ノ動機ナリ。故ニ五兵更ルク用ヒ。一ヲ廢スルハ不可ナルヲ知りキ。況ニ復々馬馬ニ戰闘スルハ。夷僚ノ生習ニシテ。平民ノ十其一二敵スルコト能ハス。然レトモ射戰ニ至テハ。万々ノ

横機アリト雖トモ。一努ノ飛織ニ封スルコトヲ得ス。是則威狄ノ至テ尤キ者ナリ。願クハ弩師ヲ置キ、督習セント欲ス。勸シテ許シ給ヒヌ。(名所図説、參州矢矧宿矢橋又ハ矢作ト書ス、国名風土記云、昔日本武尊東征ノ時、此宿ニテ矢ヲ多ク作ラシメタマフヨリナツク。此事參考トスヘク。タメモ、二記ス。)

## 西原山

玉川ノ西北ニ在リ。

## 向泉院新世系観音堂

玉川ノ南数百歩ノ丘上ニ在リ。相伝フ。僧正行基ノ創建スト。後久ク廃セリ。正徳三年、僧象田再興セシト。(巡覽記ニ曰ク。南叟西堂開基、松島瑞敏寺ニ録ス。寺前ニ観音堂アリ。大土ノ像モ亦行基ノ製スル所。村婦盃ヲ祈リ験多シ。乃五色ノ糸ヲ以テラシレヲ賽ス。糸掛リテ堂ニ満ツ。故ニ掛糸観音ト稱ス。)

## 田子屋山

向泉院ノ後ニ在リ。

## 白駒泉

向泉院ノ南ニ在リ。土人白泉ト稱ス。昔坂将軍騎ル所ノ馬。地ヲカイテ此泉ヲ出スト。

## 桜井館跡

古塁館アリ。桜井館何人居タルヲ詳セズ。

## 留潮天神祠

向泉院ノ西二百余歩ノ高丘上ニ在リ。祠辺ニ雜樹密ニ茂リ。樹皆數間ナリ。其古キ祠ナルコトヲ知ル可キナリ。土人相伝ヘテ。塩廬ノ枝祠ト稱シキ。曰ク塩神塩ヲ煮ルノ日。海潮屢湧キ多ク民地ヲ割キタリ。塩神ヲ病ヒ。乃此神ニ命シテ之レヲ防カシメ給フ。故ニ留潮ヲ以テ号ト為ス。今塩浦ニ有ル所ノ防波石ハ。則此

神ノ置ク所ナリ。土人或ハ誤テ。菅公ノ祠ト謂フ者有リ。蓋古者廷臣ノ外州ニ血食セルハ皆天神ヲ以テ稱シキ。而ルニ土官國神ト号シテ。以テ之レヲ別ツ。而シテ菅天神ノ名独海内ニ顯ル故ニ誤レリ。

## 大窪山

紅楓山ノ後ニ在リ。

註1 依命 天和四年當時の仙台藩主は、四代伊達綱村。

註2 松林仲左衛門 松林實俊 仲左衛門は通稱。仙台藩二代藩主忠宗の時に勘定奉行となり、綱村治世下で出入司となる。家格は召出。

註3 野田ノ玉川 歌枕として有名な六つの玉川の総称(六玉川)のひとつ。四代藩主綱村の時に歌枕として再整備された。他の五か所は調布の玉川(東京都多摩川)、野路の玉川(滋賀県草津市)、井出の玉川(京都府井出町)、三島の玉川(大阪府高槻市)、高野の玉川(和歌山県高野山付近)。

註4 青山君 仙台藩四代藩主伊達綱村

註5 屋はきか館 「矢作ヶ館跡」の名称で遺跡に登録されている。

註6 桜井館 「桜井館跡」の名称で遺跡に登録されている。

註7 王屋富充伯耳 仙台藩の儒者。富田王屋、諱は充實、字は伯耳。儒教の基本となる六つの経典(六経)を極め、また天文学、曆学、詩賦にも通じていた。仙台藩七代藩主伊達重村の時、藩士の系譜をまとめる作業も行っている。

### 第三節 高崎村

#### 一 封内風土記

高崎邑、戸口凡二十一。神社凡三。神明宮、不詳。何時勸請。二渡極現社、同上。熊野三所権現社。傳云、古昔多賀城主、祈國家安全、而所勸請也。寺一。高崎山化度寺、曹洞宗、仙台府下八塚、大林寺末寺、不詳。何時何人開山。大林寺、舊橋和高中興、不傳。何時。旧跡凡二。七堂佛堂遺址。傳云、古昔多賀城主、祈國家安樂、勸請熊野神社。造二宮七堂佛堂、一切経宝堂、太子堂。其遺礎今猶存。義経馬蹄石、在多賀城址。大石而有「馬蹄痕」、不詳其所。以然也。

#### 二 風土記御用書出

宮城郡陸方高崎村  
町又 善左衛門

#### 高崎村

- 一村名二付出来
- 一 田代 貳拾貳貫五百四拾五文
- 一 畑代 三貫六文、但 茶畑百拾文
- 内 一 八貫四百三拾五文、御藏人
- 一 拾七貫百貳拾文、御給所
- 都合 貳拾五貫五百五拾五文
- 一 人頭 貳拾人、外 寺老々寺 一家数、貳拾軒
- 一 男女 都合八拾七人、内 一 男四拾五人、一 女 四拾貳人
- 一 馬 拾六疋、○ 一 牛、○ 一 舟、○ 一 名所
- 一 旧跡 越原
- 一 塔の跡 右ハ多賀城之節權内ニ御座候由申候事
- 一 塔の跡 右ハ多賀城之節七堂佛堂在之五重之塔相建候跡之由申候候、今以石垣相残居申候事
- 一 薬師堂之跡
- 一 太子堂之跡 右ハ多賀城之節薬師堂正徳太子堂相建候跡之由申候候、藥師如来ハ行基菩薩御作之由當時化度寺江相納居候太子堂ハ當時北屋敷之内ニ相立居候事

#### 神社三

一 神明社 一 小名 塔の越

一 勸請 誰勸請と申義並年月共ニ相知不申候事

△ 一 社地 一 社 南向貳尺作

△ 一 鳥居 △ 一 長床 △ 一 額

一 地主 御村野山ニ付地主無御座候事

一 別当 当村曹洞宗高崎山化度寺 一 祭日 九月十六日

右十ヶ条之内印仕候分無御座候事

一 仁波多理権現社 一 小名 化度寺境内

一 勸請 誰勸請と申義並年月共ニ相知不申候事

△ 一 社地 一 社 東向、當時大破二付社作御書六中候事

△ 一 鳥居 △ 一 長床 △ 一 額 一 地主 北屋敷助八

一 別当 右助八 一 祭日 八月八日

右十ヶ条之内印仕候分無御座候事

一 熊野三社 一 小名 化度寺境内

一 勸請 誰勸請と申義並年月共ニ相知不申候事

△ 一 社地 一 社 東向貳尺作

△ 一 鳥居 △ 一 長床 △ 一 額 一 地主 化度寺

一 別当 化度寺 一 祭日 九月十九日

右十ヶ条之内印仕候分無御座候事

一 仏堂 壹 一 小名 北屋敷

一 勸請 多賀城之節七堂佛堂在之際當時塔の越原之内ニ相立居候由ニ御座候如何年之頃ニ候哉唯今之地江移候義ニ相聞得申候事 一 境内 塔五間

一 堂 南向、當時大破二付堂作御書不仕候事

一 本尊 石仏立像、御長尺八寸、但石仏ニ付作者御書上不仕候、右ハ往古之仏像ニハ相見得本申候事

△ 一 鳥居 △ 一 長床 △ 一 額 一 地主 北屋敷助八

一 別当 右助八 一 祭日 三月十七日

右十ヶ条之内印仕候分無御座候事

一 寺 壹ヶ寺

高崎山化度寺

- 一 小名 舞台 一 曹洞宗 一 仏殿 南向懸間平
- 一 本尊 地藏菩薩 木仏坐像 御長七尺三寸 行基菩薩御作と申伝置候事
- 一 門 南向 △一 額
- 右六ヶ条之内印仕候分無御座候事
- 一 寺書出一冊相添指出申候事

二 開山之事 当時者雪橋和尚開山ニ御座候所 右和尚江化年月共ニ相知不申候事也

三 本山並末寺之事 本山者御城下八塚森城山大林寺ニ御座候、但末寺無御座候事

二 最初之地移轉之事 往古者当村之内塔の越与申所ニ寺在之候由申伝候所、何年之比ニ候哉唯今之地江引移申候事

一 别当所之事 一 熊野三社 一 神明社

○ 一 修験 ○ 付行派寺並虛無僧寺 ○ 一 孝子孝婦忠僕良民並白歳以上長寿之者 ○ 一 古人 ○ 一 品持之御百姓 ○ 付御百姓之内御昼御寓ニ罷成御目見仕献上物並拝領物仕候者 ○ 一 御威場

○ 一 御塩焼場 ○ 一 古館 ○ 一 古碑 ○ 一 古塚

一 山 志

一 中要青山 高十五間

但東八当郡留ヶ谷村南八田中村北ハ浮島村御境

右ハ指立候高山ニモ無之候間遠見之品御書上不仕候事

○ 一 御林

一 川 志 一 赤塚川

一 水八当郡市川二面市川村境当村分舞台と申所江流来申候事

一 末水八当郡八幡村境当村分江中と申所ハ八幡川ニ罷成申候事

但当郡田中村片瀬川

○ 一 滝 志

一 橋 志 一 江中橋長五間

当村ハ当郡田中村高橋村江之邊路

但当郡田中村片瀬川

○ 一 沼

一 堤 志 一 坂下堤 当村一田用水 右溜高四貫六百拾文

○ 一 堰 志 一 一 坂 志 一 弥勒坂 長四十間

当村ハ当郡留ヶ谷村江之邊路

一 道 武筋

一 当村ハ当郡留ヶ谷村江之邊路 一 筋

一 当村ハ当郡田中村江之邊路 一 筋

一 名石 志 一 丸石 右八源義統公御馬を被召掛候ニ付石

われ候由跡之跡之にも残居申候事

一 名水 志 一 大井戸

右ハ如何程之草叢ニモ水潤不申候事

○ 付温泉 ○ 一名木 ○ 一 産物 ○ 一 古歌 ○ 一 端郷 ○

一 小名

一 屋敷名十三

一 上野屋敷 式軒 一 弥勒屋敷 志軒

一 坂下屋敷 式軒 内迄屋敷志軒

一 井戸屋敷 志軒 一 井戸尻屋敷 式軒

一 鍛冶屋敷 志軒 一 館屋敷 志軒

一 高屋敷 四軒 一 南屋敷 志軒

一 北屋敷 式軒 一 表屋敷 志軒

一 古屋敷 志軒 一 長澤屋敷 式軒

以上式十志軒 但 活加志軒

一 御村境

一 南ハ当郡田中村境当村分鍛冶屋敷と申所より

一 北ハ当郡浮島村境当村分上野原と申所まで

一 東ハ当郡留ヶ谷村境当村分西原と申所より

一 西ハ当郡田中村境当村分江中と申所まで

以上 二十ヶ条

御案当本文四十一ヶ条付ヶ条四ヶ条都合四十五ヶ条之内印仕候分二

右之通風土記御用ニ付此度相改御書上仕候 以上

安永三年九月

## 三 塩勝勝

## 塔原及礎石

浮島ノ南ヲ高崎村ト云フ阜アリ。曠平三里許。土人塔原塚ト稱シ。又此テ塔原塚ト曰フ。古昔七級塔アリ。是聖武帝。天平中勅建スル所。寺ヲ化渡寺ト号ス。其創塔ト先後ス。神祠仏堂甚多シ。而シテ年代悠久皆ナ荒廢。独七級塔巍然巖存。故二塔ト此目ニアリ。後塔亦廢シ。今礎ト築土廟豐聡太子堂跡ヲ存ス。礎石ハ大六尺余。上面平中央ヲ斲リ凹孔ヲ穿テ。亘リ二尺三寸。是塔ヲ樹ル心柱ノ孔ナリ。続日本紀。聖武帝十三年辛巳。詔曰。

朕以薄徳。恭承重任。未弘政化。寢夢多驚。古之明主皆能業。國奉人業。朕除福至。修何政化。能臻此道。頃者年穀不豐。疫癘頻至。慙俱交乘。唯勞罪己。是以坦爲蒼生。遍求厭福。故前年馳驅。增顯天下神宮。(先是。是九年十一月癸酉。遣使于畿内及七道。令造諸社。)去歲普令天下。造二級迦牟尼佛金像。高一丈六尺。各一龕。並写大般若經各一部。自今春已來。至于秋稼。風雨順序。五穀豐穰。此乃微誠普願。靈祝如消。載懷慈慕。敬供養。流通此經。王者我等四王。常來擁護。一切災障。皆使消殄。憂愁疾疫。亦令除差。所願遂心。恒生歡喜者。宜令天下諸國。各敬造七重塔一区。並写金光明最勝王經。妙法蓮華經。各十部。朕又別撰写金字金光明最勝王經。每塔各置一部。所冀聖法之靈。与天地而水流。擁護之恩。被二兩明而恒調。其造塔之寺。兼爲國庫。必积好徳。実可長久。近人則不欲。董吳所。及遠人則不欲。勞衆婦。集。國司等各宜務。在。嚴師。兼兼潔清。近感諸天。庶幾臨護。布告遐邇。令知朕意。郷老相伝。塔高十許丈。齋室堂之内。絵仏菩薩及天龍十六善神像。每級間。塔高十許丈。結構甚壯。修後屢經兵燹。不加修葺。殆將廢壞。時自藤清衡。至秀衡三世。修補之。泰衡亡後。不復修理。柱朽礎傾。遂倒焉。今視其址。独於礎南。古瓦累聚。是爲塔倒之方。而其紋細布与多賀城者。全同。又大石數十。乱峙于前後。想是其遺礎。

## 裂石梅

塔原ノ東隅白アリ。六七尺。石腹馬蹄ノ痕アリ。人巧ノ利スル者ニ非ス。且梅樹石心ヲ穿テ生ス。太夫大ナラスト雖トモ。蒼藓封。其花瘦寒幽香他二絶ス。蓋シ奇種ナリ。

## 化渡寺

礎石西二百余歩ニ在リ。相伝フ。古ハ塔原國府在任ノ諸公營修スル所。大伽藍夕

リ。七堂具足シ極メテ壯麗。而シテ久シク廢ス。中世小庵ヲ遺趾ニ建テ。名ヲ存ス。又廢ス。延喜中。禪僧實悟茲ニ移建ス。地蔵像ヲ安ス。僧正行基。製。寺前ニ熊野神祠及仁波多利神祠ハ。此寺古來奉祠スル所。今尚亦存ス。

## 豐聡太子堂

化渡寺南ニ在リ。上古ハ寺中ニアリ。何時力茲ニ移スヲ知ラス。堂ノ開建ハ寺ト同。太子像ハ行基ノ作。今亡フ。安スル処ノ石像。何人ノ置クヲ詳カニセス。中要害山。

寺東ニアリ。山上垣平八幡公保尊ヲ置クノ処。

## 弥勒殿

塔南ニ在リ。秀衡平泉ニ在ルヤ。南白川ヨリ北外浜ニ至ル。其間廿余里。行程每里弥勒堂ヲ置キ。毎丁寄淨園を其前ニ立テ。各洪鐘一口ヲ挂ケ。前面ニ金色弥陀像ヲ因現シ。往來旅人ヲシテ。有信無信共。勝縁ヲ結ハシム。此地是ナリ。

阪下塘及江中橋大井。

塘ハ現在ニアリ。橋ハ太子堂西ニアリ。又大井ハ農家前ニ在リ相伝ヘテ。古井ト爲ス。其水清冽久旱涸シス。郷老曰ク。州ノ刺史多賀城ニアルヤ。辺匠ヲ此左右ニ雇ラシメ。鍊磨此ヲ用フ。井南今尚辺匠遺跡アリ。土人鍛冶屋敷ト稱ス。

註1 大林寺 仙台市若林区新寺小路にある曹洞宗の寺院。天文元年(一五三三)

伊達頼宗が米沢(山形県米沢市)に創建。政宗の移封に伴い岩出山(宮城県大崎市)を経て現在地へ移る。仙台藩における寺社の格式においては、首座格であった。

註2 七堂伽藍遺址 多賀城廢寺跡を指す。かつて多賀城主が國家宋を祈り、熊野神社を勧請した、その跡だとしている。

註3 旧跡四 四つの旧跡は、多賀城廢寺跡を指す。「塔の越原」は多賀城の堀内であつたと伝えられていると書き出し、さらに「塔の跡」「業師堂跡」「太子堂跡」の三か所が当時遺構として残っていたことがわかる。



## 第九章 名所・旧跡

## 歌枕の再整備

江戸時代、それまでの戦乱の時代が終わると各藩は内政に力を入れ、幕府の文治政策とも相まって、藩においても文教政策がとられるようになる。その一つとして、領内の名所旧跡整備があげられる。古人ゆかりの地を保存するなどの試みは、すでに平安時代中期に遡るといわれているが、徹底的に行なわれたのは一七世紀中葉以降である。みちのくの場合、各藩では学者を動員し領内の名所を調査させた。古典を精査し、「みちのく」ゆかりの記載のある文学上・歴史上の名所あるいは旧跡を克明に探索し、それを由緒ありげなそれぞれの土地の伝承と結合させていったと推測される。仙台藩における名所再整備は公私両面から実施されたようで、「公」の立場からは、仙台藩四代藩主伊達綱村の代に、積極的に行われた。この時、直接の任にあたった代表的人物が、儒学者の佐久間洞巖である。また、「私」の立場においては、『松島眺望集』を編んだ俳人大淀三千風を中心とする俳諧関係者の存在があったという（金沢規雄『おくのほそ道とその周辺』一九六四）。

現在、多賀城市内には壺碑、末の松山、沖の井、おもわくの橋など歌枕が数多くあり、これは、綱村の時代に名所旧跡を調査し、古来からの歌枕を整備・保護した結果で、その際、早くからこの地に定着していた「末の松山」を核として整備がなされていったと考えられている。

本書に収めた各村の「風土記御用書出」を見ると、大代村の名所は鼓ヶ原、旧跡は無いとしながらも蝦夷穴を記載している。留ヶ谷村には、

名所として紅葉山と面和久橋、旧跡として太子堂跡が記されている。歌枕として有名な野田玉川の記載はない。高崎村には名所の記載がなく、旧跡として塔の越原、塔の跡、薬師堂の跡、太子堂の跡の四箇所を挙げている。田中村は、名所・旧跡とも記載がないが、名石として千引石が記されている。

## 紅葉山・面和久橋

いずれも西行の和歌「ふままうき もみちのにしき ちりしきて 人もかよはぬ おもはくのほし」に因むものである。仙台藩の儒学者佐久間洞巖の著書『奥羽観跡聞老志』には、天和四年（一六八四）、藩主伊達綱村の命により宮城郡内の名所旧跡を巡視した際、おもわくの橋が地元の人々により阿倍松橋と呼ばれていたことが記されている。さらに洞巖が訪れたときに、西行の歌に詠まれたような楓がないことを惜しみ、藩に報告したところ、すぐに出入司松林仲左衛門と郡司に命じて橋の袂に5株、橋の東の小山に多数の楓が植えられ、二三年後再び訪れると、地元の人々は橋を「紅葉橋」、小山を「紅葉山」と呼ぶようになったことが記されている。また風土記御用書出には、綱村の次の藩主吉村が、楓を植え継ぐよう命じたことも記載され、代々名所として景観保護がなされていたことが伺える。

## 野田玉川

野田の玉川は、塩竈市の大日向に源を発し、本市留ヶ谷を通り砂押側へそそぐ小川である。留ヶ谷村風土記御用書出には大久保川と記される。『奥羽観跡聞老志』や『封内風土記』には、浅瀬の所は光を浮かべ金を

躍らせ、川の深いところには陰影が生じ、珠を沈めるようだと美句で形容する。能因法師の「ゆふされば しほ風こして みちのくの のだの玉河 千鳥なくなり」や順徳天皇の「みちのくの のだのたまがはみわたせば しほかぜこして こぼる月かげ」など、平安時代以来、盛んに和歌に詠み込まれた。

### 千引石

平安時代後期、源顕仲の和歌「君が代は 千びきの石を くだきつ、よろづ世ごとに とれどつきせじ」などにみえる。謡曲「千引」の冒頭には、「これは陸奥壺の碑を知行住。甲斐の守何某にて候。さてもこの所に千引の石として大石の候。・この石を他国へ引き出し。千々に割り捨てさせばやと存じ候」とあり、源顕仲の和歌を受けた語りとなっている。謡曲はこの後、貧しい一人の女性が、男性に混じり石を曳くことを嘆いたところ、千引石の精が現れ、千人でも引くことが適わなかつた石であるが、その女性が引くなら、動かされよう、という展開となる。



志引石



志引石



奥州名所図会 菅原曲溪 文化14年(1817)刊

「奥州仙臺宮城郡留谷村野田玉川楓山全圖」  
 我国の六玉川の名所の一つが、陸奥国にある野田の玉川で、塩竈村の少し南にあり、その昔、奥の細道の通路であった。かつては汐の満ち干があったが、今は野となつてしまい、小さな玉川の流れに橋を渡し、農夫が耕作に行き来する助けとしている。塩竈の文人、白坂文之という者が、名所探勝の人のため、能因法師の和歌を刻した石碑を、玉川の傍らに立てた、と説明にある。



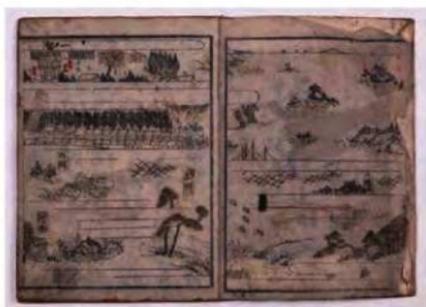
陸奥紀行 寛政8年(1796)写

画面手前、小橋がかかる流れが野田の玉川。塩竈に至る道路沿いの民家に現在も千手観音を祀る小祠があるが、絵図に見えるものがそれか。



奥州仙臺名所尽集 19世紀初

「こがらしに ちれるこのはも 声たてて  
千とりにまがふ 野田の玉河」 雁音楼望丸



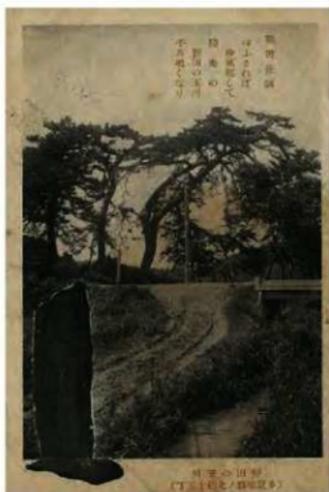
塩竈詣 文政8年(1825)

画面中央に描かれる「玉川」が野田の玉川である。



奥州名所図会 大場雄淵 19世紀初

『鹽松勝譜』(文政5年=1822成立)にある野田玉川の記載には、橋の南側に老松が5・6株生え、その下に碑があり、能因法師の和歌を刻んでいるとある。絵図の情景そのままの記述である。



野田の玉川



松崎往来 文政13年(1817)刊

子供の手習い用教科書として作成されたもの。



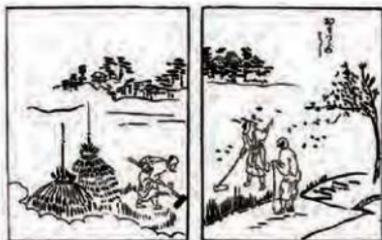
野田の玉川 (『奥の細道』昭和31年)



野田の玉川



野田の玉川



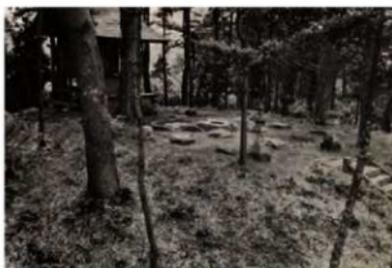
奥州名所図会 大増雄源 19世紀初



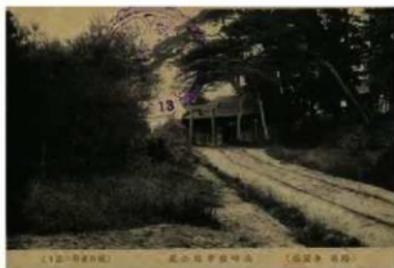
おもわくの橋



おもわくの橋



多賀城廃寺跡 昭和36年



多賀城廃寺跡



多賀城廃寺跡



多賀城廃寺跡 昭和43年の環境整備直後

## 参考文献

- 伊勢崎市『伊勢崎の近世石造物』一九八五
- 伊東信雄『宮城縣史1 古代史 中世史』一九五七
- 伊東信雄ほか『宮城縣史30 資料集V 考古資料』宮城縣 一九八一
- 大塚徳郎・竹内利美ほか『宮城県の地名』一九八七
- 加藤孝・新野直吉『陸奥國多賀城高崎庚寺址の研究』『歴史』第11輯 一九五五
- 加藤政久『石仏圖彙辭典』一九九〇
- 月光善弘『第五章 出羽三山信仰』『西川町史』上巻 一九九五
- 川勝政太郎『櫻嶺 川勝政太郎講述』一九八四
- 菊池武一・司東眞雄『宮城縣史17 金石志』宮城縣 一九五六
- 久保常晴『鰐口』『仏教考古学講座 第八卷』一九三六
- 久保常晴『鰐口の研究』『佛教考古学研究』ニューサイエンス社 一九六七
- 久保常晴『所謂烏八臼の諸形態』『続々佛教考古学研究』ニューサイエンス社 一九八三
- 経済企画庁総合開発局『土地分類図』一九七二
- 庚申懇話会『日本石仏事典』一九七五
- 庚申懇話会『石仏調査ハンドブック』一九八一
- 国立歴史民俗博物館『社寺の国宝・重文建造物等棟札銘文集成—東北編—』一九九七
- 小嶋芳孝『蝦夷とユーラシア大陸の交流』『古代蝦夷の世界と交流 古代王権と交流1 名著出版』一九九六
- 小林圓照『却温神祝』成立の背景と首楞嚴思想』『臨済宗妙心寺派経学研究紀要』
- (6) 妙心寺派宗務本所教化センター 二〇〇八
- 近藤 豊『古建築の細部意匠』大河出版 一九七二
- 佐々木慶市『水沢市史2 中世』一九七六
- 坂本 要『大念仏と民間念仏の系譜』筑波学院大学紀要』第9集 二〇一四
- 塩竈市史編纂委員会『塩竈市史II 本編II』一九八六
- 紫根正隆『史料 仙台南内古城・館 第三巻』一九七三
- 鈴木清威『多賀城市内の板碑について』『宮城史学』八・九号 一九八一
- 鈴木正夫『宮城県北部の庚申信仰』一九八八
- 水藤眞『棟札の研究』二〇〇五
- 仙台市教育委員会『七北田川下流域の板碑 仙台市文化財分布調査報告 VI』仙台市文化財調査報告書第二二集 一九八八
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編5 板碑』一九九八
- 多賀城市『広報たがじょう』No.212 一九八九
- 多賀城市教育委員会『大代横穴古墳群—発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第七集 一九八五
- 多賀城市教育委員会『年報1 昭和61年度』一九八七
- 多賀城市教育委員会『留ヶ谷遺跡 第1・3次調査報告書』一九九八
- 多賀城市教育委員会『矢作ヶ館跡ほか 矢作ヶ館跡第3次調査 市川橋遺跡第31次調査 市川橋遺跡第32・33次調査』二〇〇三
- 多賀城市教育委員会・塩竈市教育委員会『野田遺跡 矢作ヶ館跡』二〇〇五
- 多賀城市教育委員会『高崎遺跡 第56次調査報告書』二〇〇七
- 多賀城市教育委員会『桜井館跡ほか 桜井館跡第3次 西沢遺跡第28次 山王遺跡第13次』二〇一四
- 多賀城市教育委員会『小沢原遺跡ほか 小沢原遺跡第10次調査 留ヶ谷遺跡第5次調査 高崎遺跡第68次調査 高原遺跡第6次調査』二〇〇八
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第6巻 文学史料』一九八四

- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第5巻 歴史資料(一)』一九八五
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第3巻 民俗・文学』一九八六
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第4巻 考古資料』一九九一
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第2巻 近世・近代』一九九三
- 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』一九九七
- 多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会・多賀城市教育委員会『天童家文書Ⅱ』
- 多賀城市文化財調査報告書第二七集 二〇一四
- 多賀城市誌編纂委員会『多賀城市誌』一九六七
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター『年報3 昭和63年度』一九八九
- 高橋富雄ほか『宮城県地名大辞典』一九七九
- 高橋正巳『鹽竈神社旧社家の歴史』鹽竈神社旧社家献贈講 一九八一
- 地質調査所『地域地質研究報告 塩竈地域の地質』一九八三
- 地質調査所『地域地質研究報告 仙台地域の地質』一九八六
- 地名研究会『災害地名』
- 東北歴史資料館『宮城の古絵図』一九九四
- 名取市高館土地区画整理組合・大門山遺跡調査団・名取市教育委員会『大門山遺跡発掘調査報告書 中世における墓制・葬制の実証的基本調査』一九八八
- 野馬追の里原町市立博物館『相馬地方の妙見信仰 千葉氏から相馬氏へ』二〇〇三
- 原田昌幸『山岳信仰の美術 出羽三山』二〇〇五
- 仏教大学民間念仏研究会『民間念仏信仰の研究 資料編』一九六六
- 古川左京『鹽竈神社史』一九三〇
- 本郷馨『鎮守須賀神社略誌』一九七二
- 本郷馨『光 塩竈多賀城七ヶ浜神社誌』一九七三
- 水沢市立図書館『解説中世留守家文書』一九七九
- 三塚源五郎『多賀城村聚落の機構 地名の研究』一九三三
- 三塚源五郎『多賀城六百年史』一九三七
- 宮城県桃生郡河北地区教育委員会『第二章 近世編(各種近世塔)』北上川下流域のいしふみ 一九九四
- 宮城県教育委員会『宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)』一九七五
- 宮城県教育委員会『絵馬調査報告書』一九九〇
- 宮城県教育会『第一篇 地理』『宮城県誌 全』一九八八
- 宮城県史蹟名勝天然記念物調査会『多賀城遺蹟』『宮城県史蹟・名勝・天然記念物 第三輯』一九二七
- 宮城県神社庁『宮城県神社名鑑』一九七六
- 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報一九八〇』一九八一
- 宮城県地名研究会『宮城県「要害」地名調査報告書』二〇〇七
- 宮城県地名研究会『災害・崩壊地名 地名にこめた祖からの伝言』二〇一〇
- 安丸良夫『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈』一九七九
- 山形県教育委員会『山寺夜行念仏の習俗 調査報告書』二〇〇五
- 湯浅吉美『日本暦日便覧 下』一九八八
- 吉岡一男『宮城の観音信仰』一九九二
- 吉田東伍『大日本地名辞書 奥羽』一九〇二
- 渡邊菊治『宮城県の庚申塔』一九八三

国政 番号	場所	名称	年代	石材	法量 (cm)			備考	登録 番号
					高さ	巾	厚さ		
大代村									
1	丸山	坂碑		アノコノス砂岩	(103)	52	22		182
西粟宿									
2	船越	雷神	大正7	アノサイト	83.5	42	18.5		279
3	雷神	高殿山・月山・羽黒山		アノサイト	79	60	28		186
4	相水神社	高殿山・月山・羽黒山	文化11	アノサイト	160	106	66.5		166
5	相水神社	庚申	嘉永7	アノサイト	185.1	93	36.5		147
6	相水神社	雷神	明治22	アノサイト	138	73	20		148
7	相水神社	山神	明治25	アノサイト	(90)	51	27		149
8	相水神社	山神	明治30	アノサイト	80.5	54	22.5		150
9	相水神社	大目如来	明治29	1906 融岩砂質泥岩 (井内石)	(67)	36	7		151
10	相水神社	足尾山	大正10	1921 融岩砂質泥岩 (井内石)	(99)	40	8		152
11	相水神社	高須観世音	昭和5	1930 融岩砂質泥岩 (井内石)	(64)	22	6.5		153
12	相水神社	古某神社	昭和19	1974 凝灰岩層岩	169	81	18		250
13	相水神社	高懸神		花崗岩	114	81	51		154
14	相水神社	山神		アノサイト	(58)	31.5	12.5		155
15	錢仲子安観音堂	菩薩像		アノサイト	本体：63 台座：22	33 46	36 39		181
16	錢仲子安観音堂	観世音菩薩立像	正徳5	アノサイト	本体：105 台座：23	33 46	23 37		180
17	錢仲子安観音堂	高須観世音	文化11	アノサイト	82	51	37		165
18	錢仲子安観音堂	雷神	明治20	アノサイト	47.5	24	15		169
19	錢仲子安観音堂	高須観世音	明治37	アノサイト	88	39	22		170
20	錢仲子安観音堂	高懸神	昭和12	アノサイト	63.5	32	22		171
21	錢仲子安観音堂	山神		アノサイト	(165.5)	88	31		172
22	錢仲子安観音堂	彌天山		アノサイト	44.5	30	20		175
23	高懸寺大代墓池	名号	享保8	アノサイト	179.5	107.5	35		187
24	高懸寺大代墓池	地藏菩薩彫坐像	天保3	アノサイト	本体：73 台座：22.5	73 63	46		189
25	西園寺大代墓池	名号	昭和14	1929 融岩砂質泥岩 (井内石)	158	76.5	10.5		188
26	丸山	子安観音菩薩坐像	享和1	アノサイト	68	48	31.5		183
27	丸山	山神	明治28	1895 アノサイト	111	65	29		184
28	丸山	地藏菩薩彫坐像		本体：含角礫凝灰岩 台座：アノサイト	本体：69 台座：44	70 84	45 53		185
石巻藩・子水林・磯立									
29	相水神社	石巻藩 (東)	明治32	1899 アノサイト	(185)	32-264			158
30	相水神社	石巻藩 (西)	明治32	1899 アノサイト	(187)	32-265			159

31	稻木神社	石付礎(東)	昭和15	1930	花崗岩	154	第一辺49		272
32	稻木神社	石付礎(西)	昭和15	1940	花崗岩	154	第一辺48		273
33	稻木神社	礎立(東)	明治32		凝灰砂質泥岩(井内石)	(119)	15	16	160
34	稻木神社	礎立(西)	明治32		凝灰砂質泥岩(井内石)	(108)	14	14	161
35	稻木神社	手水鉢			テイサイト	(36)	56	49	藤原神社前
36	稻木神社	手水鉢			テイサイト	57	188	122	157
37	稻木神社	手水鉢			テイサイト	71	48	74	251
38	鏡神子安観音堂	石付礎	大正14	1923	凝灰砂質泥岩(井内石)	28		2	176
39	鏡神子安観音堂	石付礎	明治24	1894	テイサイト	(160)	第一辺62.5		178
40	鏡神子安観音堂	石付礎	明治26	1893	テイサイト	(161)	第一辺62.5		177
41	鏡神子安観音堂	手水鉢			テイサイト	(17)	103	70	179
<b>須賀神・石巻神</b>									
42	稻木神社	知所坐碑	昭和3	1928	凝灰砂質泥岩(井内石)	214	91	16	162
43	稻木神社	招神懸碑	昭和30	1955	凝灰砂質泥岩(井内石)	180	71	13	163
44	西園寺大代墓地	石塔碑	昭和52	1977	斑瀧岩	139	198	17	190
<b>葛橋</b>									
45	鏡神子安観音堂	葛橋			宝曆9	1739	テイサイト	42	29
46	鏡神子安観音堂	葛橋			文政8	1825	テイサイト	33	25
47	鏡神子安観音堂	葛橋			天明1	1861	テイサイト	63	45.5
48	鏡神子安観音堂	葛橋			明治29	1887	テイサイト	40	27.5
49	鏡神子安観音堂	葛橋					テイサイト	36	25.5
50	鏡神子安観音堂	葛橋						53.5	33
築神村(牛生)									
<b>供養所</b>									
51	芦野	山神	天保12	1841	テイサイト(?)	80	60	47	722
		石祠	明治30	1897	テイサイト	73	36	46	723
52	牛生B	水神			テイサイト	(35)	22	17.5	724
53	牛生B	龍神			凝灰砂質泥岩(井内石)	(25.5)	17	3	737
<b>石付礎・手水鉢・礎柱</b>									
54	須賀神社	石付礎	文久2	1862	テイサイト	196	第一辺64		729
55	須賀神社	石付礎	慶応3	1867	テイサイト	193	第一辺67		730
56	須賀神社	手水鉢	明治12	1879	テイサイト	71	113	95	昭和51年改刻
57	須賀神社	手水鉢	昭和43	1968	テイサイト	65.5	170	185	734
58	須賀神社	礎柱	昭和38	1963	凝灰砂質泥岩(井内石)	220	19	12	732
<b>須賀神・石巻神(注)</b>									
59	須賀神社	創祀六百六十年記念	昭和38	1963	凝灰砂質泥岩(井内石)	149	83	12	733
60	須賀神社	遷座之碑	昭和43	1968	斑瀧岩	135	104	13	735
61	須賀神社	創祀六百八拾年祭神	平成11	1999	斑瀧岩	146	73	9	736

番号	氏名	生年	没年	住所	備考	備考	備考	備考	備考
62	牛生A	豊徳 (月経知明信女) (横受神職信士)	天保3 弘化3	1832 1847	〒イサイト	88	75	36	725
63	牛生A	豊徳 (住持重信信女)	寛永41	1848	〒イサイト	50	42	?	726
64	牛生A	豊徳 (清清の御信女) 豊徳 (口達文信女)	文久3 明治6	1863 1873	〒イサイト	(46)	44	?	727
65	牛生A	豊徳 (卓喜重信信女)	明治4	1871	〒イサイト	42.5	30	?	728
留ヶ谷村									
66	向楽院A	佐藤			織状砂置地蔵 (井内石) ?	118	15	12	675
伊東郡									
67	野田A	馬頭観音	宝暦11	1761	〒イサイト	42	30.5	25	576
68	野田A	山神	文化1	1807	安山岩	85	70	32	677
69	野田A	法中	文化13	1816	中庭アルコーヌ	122	92	35	578
70	野田A	南無観世音	弘化2	1845	〒イサイト	131	105	44	579
71	野田A	馬頭観世音	慶応3	1867	〒イサイト	108	55	18	580
72	野田A	馬頭観世音	明治25	1892	織状砂置地蔵 (井内石)	50	30	6	581
73	野田A	馬頭観世音	昭和19	1944	織状砂置地蔵 (井内石)	81	36	8	583
74	野田A	馬頭観世音	明治		〒イサイト	(23)	31	12	582
75	野田B	馬頭観世音	明治28	1895		48	37	16	松島町龍尊寺
76	野田B	馬頭観世音	明治45	1912		54	24	7	松島町龍尊寺
77	野田C	題目	明治55	1902	織状砂置地蔵 (井内石)	113	57	6	飯ヶ崎稲荷神社
78	野田D	地蔵菩薩立像			礎灰岩				645
79	向楽院A	地蔵菩薩立像	宝永5	1708	〒イサイト	本体：100 台座：32	67 56	50 43	671
80	向楽院B	題目	大正5	1916	織状砂置地蔵 (井内石)	164	79	17	381
81	清水A	水神	寛永4	1651	中庭アルコーヌ	116	70	20.5	584
82	清水A	酒殿山・月山・御黒山	元治1	1864	中～相庭アルコーヌ	167	119	44.5	585
83	清水B	名号	安永2	1773	安山岩	106	87	16	586
84	清水B	馬頭観世音	明治29	1896	〒イサイト	43	32	15	587
石巻市・千水村・鶴立・島崎									
85	天満宮	島居	大正7	1918	織状砂置地蔵 (井内石)				372
86	天満宮	織立	大正12	1923	織状砂置地蔵 (井内石)	91	17.5	12.5	374
87	天満宮	織立	大正12	1923	織状砂置地蔵 (井内石)	99	17.5	13	375
88	天満宮	織立	大正12	1923	織状砂置地蔵 (井内石)	107	19.5	12.5	376
89	天満宮	織立	大正12	1923	織状砂置地蔵 (井内石)	101.5	19.5	12.5	377
90	天満宮	石巻龍 (東)	大正7	1918	〒イサイト (火袋のみ安山岩)	150.5	95	7	378
91	天満宮	石巻龍 (西)	大正7	1918	〒イサイト (火袋のみ安山岩)	150	95	7	379
92	天満宮	千水林	慶永2	1819	〒イサイト	33	61	75	386

93	天満宮	千水鉢	明治19	1886	〒イサイト	23	87	71	367
94	向泉院A	石巻櫛	明治19	1874	〒イサイト	141	87	505.5	573
95	向泉院A	石巻櫛	明治7	1874	〒イサイト	145	87	505.5	574
96	向泉院A	千水鉢	嘉永4	1851	榎沢岩小字イサイト	54	76	67	509
新起碑・石巻町主办									
97	向泉院B	興隆碑	昭和35	1950	榎沢砂質花岩(井内石)	153	74	15	383
98	天満宮	日蓮敕役記念碑	明治39	1906	榎沢砂質花岩(井内石)	183	88	15	369
99	天満宮	鳥居敕役記念碑	大正7	1918	榎沢砂質花岩(井内石)	192	72	12	373
100	天満宮	記念碑	昭和33	1958	榎沢砂質花岩(井内石)	190	88	12	378
101	天満宮	天満宮一千年創設記念碑	明治35	1902	榎沢砂質花岩(井内石)	165	90	16	368
102	青木沢	昭憲碑	昭和5	1930	榎沢砂質花岩(井内石)	295	124	23.5	741
103	青木沢	愛土碑(記功碑)	昭和55	1960	榎沢砂質花岩(井内石)	420	168.5	36.5	742
新起									
	向泉院B	銘碑(点燈砂岩佛堂定石)	貞享2	1685	中殿アルコース	54.5	38	18	400
	向泉院B	銘碑(住吉口佛堂定石)	元禄14	1701	中殿アルコース	65	59.5	28	401
104	向泉院B	銘碑(貞人砂岩信女)	正徳4	1714	中殿アルコース	62.6	37.6	15	402
	向泉院B	銘碑(行巻藤巻首題)	正徳8		中殿アルコース	104	66	14	403
	向泉院B	銘碑	享保2	1717	〒イサイト	34.5	24.5	17	404
	向泉院B	銘碑(量本宗佛堂定門)	享保3	1718	榎沢~中殿アルコース	80	42.6	9.5	405
	向泉院B	銘碑(宗活佛堂定門)	享保4	1719	中殿アルコース	51	28	20.5	406
	向泉院B	銘碑	享保8	1723	〒イサイト	33.5	25.5	14	407
	向泉院B	銘碑(蓮光佛堂定門)	享保8	1723	中殿アルコース	61.6	53	14.5	408
	向泉院B	銘碑	享保10	1725	〒イサイト	43	26	23.5	409
	向泉院B	銘碑(寛宗妙賢信女)	享保11	1726	中殿アルコース	86	49	6	410
	向泉院B	銘碑(縁宗妙賢信女)	享保12	1727	中殿アルコース	81	45	13	411
	向泉院B	銘碑(貞慶了方彦信石)	享保13	1728	中殿~榎沢アルコース	65.6	50	13	412
	向泉院B	銘碑(親宗妙空佛堂定石)	享保13	1728		65.6	45.5	22	413
	向泉院B	銘碑(一空常圓佛堂定門)	享保14	1729	中殿アルコース	64	30	8	414
	向泉院B	銘碑(秋盛彦女)	享保19	1734	〒イサイト	32	30.6	16	415
	向泉院B	銘碑(月住彦女)	享保19	1734	安山岩	29	28	10	416
	向泉院B	銘碑	享保19	1734	安山岩?	32	21	14	417
	向泉院B	銘碑(心口信女)	元文4	1739	〒イサイト	57	33	24	418
	向泉院B	銘碑(全持尊心信女)	享保3	1743	中殿アルコース	91	48	10	419
	向泉院B	銘碑(圓宗妙賢信女)	享保3	1743	中殿アルコース	43.5	39	17.5	420
	向泉院B	銘碑(一空佛堂佛堂定石)	延享3	1746	中殿アルコース	92	85	20	421
	向泉院B	銘碑(清濁妙賢信女)	延享4	1747	〒イサイト	66	43.5	33.5	422
	向泉院B	銘碑(月清妙賢信女)	延享4	1747	榎沢アルコース(ヲミナ入り)	69	72	49	423
	向泉院B	銘碑(本宗妙賢信女)	寛延5	1752	榎沢アルコース	53	41	13	424
	向泉院B	銘碑(本空祖家信石)	宝暦9	1759	中殿アルコース	69	50	6	425

向泉院B	歌譜 (智光流女)	明和1	1764	相殿アルコーヌ	47	41	12	426
向泉院B	歌譜 (長林休得士)	明和1	1764	中殿～相殿アルコーヌ	80	44	15	427
向泉院B	歌譜 (了邊合得信士)	明和2	1765	中殿アルコーヌ	70.5	49	36.5	428
向泉院B	歌譜 (一過砂谷信士)	明和4	1767	安山岩	67	63	37	429
向泉院B	歌譜 (秋山口得士)	明和7	1770	花崗岩	30	25	11.5	430
向泉院B	歌譜 (國懸上郎)	明和8	1771	相殿アルコーヌ	70	46	27.5	431
向泉院B	歌譜 (國懸休得信士)	明和8	1771	中殿アルコーヌ	82	68	27	432
向泉院B	歌譜 (道方慶庵定門)	安永8	1779	アノヤノト	41	46	25	433
向泉院B	歌譜 (法雲成心信士)	天明1	1781	中殿アルコーヌ	96	68	22	434
向泉院B	歌譜 (秋宗砂谷信士)	天明3	1782	アノヤノト	80	49	17	435
向泉院B	歌譜 (春月道花信士)	天明3	1783	中殿アルコーヌ	59	36	25	436
向泉院B	歌譜 (春月妙蓮信女)	天明8	1788	相殿アルコーヌ	59	39	25	437
向泉院B	歌譜 (慈道清信士)	寛政1	1789	中殿アルコーヌ	68.5	41	22.5	438
向泉院B	歌譜 (秋舟清信女)	寛政2	1790	安山岩	32	24	12.5	439
向泉院B	歌譜 (秋舟清信女)	寛政3	1791	中殿アルコーヌ	66.5	52	18	440
向泉院B	歌譜 (秋藤流女)	享和3	1803	アノヤノト <sup>9</sup>	36.5	23.7	23	441
向泉院B	歌譜 (春林道安信士)	文化3	1806	相殿アルコーヌ	83.5	58	34	442
向泉院B	歌譜 (法蓮普光信尼)	文化8	1811	相殿アルコーヌ	56.5	55.5	7.5	443
向泉院B	歌譜 (國書古風信士)	文化9	1811	中殿～相殿アルコーヌ	94	64.5	39	444
向泉院B	歌譜 (夏岳道清信士)	文化9	1812	中殿アルコーヌ	77	46	45	445
105	歌譜 (智光流女)	文化11	1814	安山岩	34	24	10	446
向泉院B	歌譜 (玉面貞徳信女)	文化13	1816	中殿アルコーヌ	61	62.5	19.5	447
向泉院B	歌譜 (泰敏崇徳信士)	文化15	1818	相殿アルコーヌ	62	52.5	17	448
向泉院B	歌譜 (口口妙蓮信女)	文化		中殿アルコーヌ	77	58.5	20.5	449
向泉院B	歌譜 (直力鳥文口信女)	文化3	1820		90	89	22	450
向泉院B	歌譜 (長仙普流女)	文化4	1821	<sup>9</sup>	26.5	24	11.5	451
向泉院B	歌譜 (桂月妙紹信女)	文化6	1823	安山岩	81.5	66	47	452
向泉院B	歌譜 (智慶妙紹信女)	文化7	1824	安山岩	46.5	40	26	453
向泉院B	歌譜 (戒月白鳳信女)	文化9	1826	アノヤノト	89	85	41.5	454
向泉院B	歌譜 (即心妙安信女)	文化11	1828	相殿アルコーヌ	51	38	20	455
向泉院B	歌譜 (一法見考三居士)	天保4	1833	アノヤノト	76	45	31.5	456
向泉院B	歌譜 (玉露童子)	天保5	1834	アノヤノト <sup>9</sup>	40	24	20.5	457
向泉院B	歌譜 (慈雲妙性信女)	天保5	1834	安山岩	62	58	34	458
向泉院B	歌譜 (心玉因致信士)	天保8	1837	アノヤノト	52	33	24	459
向泉院B	歌譜 (觀音妙性信女)	天保8	1837					460
向泉院B	歌譜 (天孫白蓮信士)	明治3	1870		63	45	29	461
向泉院B	歌譜 (徳川妙蓮信女)	明治6	1903					462
向泉院B	歌譜 (休岩空明信士)	天保9	1838	中殿アルコーヌ	73	48.5	21	462

向泉院B	歌譜 (惠照堂女)	天保9	1838	テテオオト	51	30	15	463
向泉院B	歌譜 (青山了齋伯女)	天保11	1840	テテオオト	81.5	61	35	464
向泉院B	歌譜 (一亭忠房・・)	天保12	1841	テテオオト	49	34	24	465
向泉院B	歌譜 (幻谷勇流子)	天保12	1841	テテオオト	34.5	24	14	466
向泉院B	歌譜 (寶来流子)	弘化3	1846	安山譜	38	31.5	15	467
向泉院B	歌譜 (智茶庵信士)	弘化3	1846	テテオオト	53.5	40	19.5	468
向泉院B	歌譜 (清川晋守信士)	弘化3	1846	中絶テテオオト	47	40	20	469
向泉院B	歌譜 (砂雪堂女)	嘉永4	1861	テテオオト	42	36	14	470
向泉院B	歌譜 (何楽堂女)	嘉永5	1862	テテオオト	47	34.5	19	471
向泉院B	歌譜 (白英堂子)	安政4	1857	テテオオト	25.5	21	11	472
向泉院B	歌譜 (晴室因信女)	安政5	1858	テテオオト	25.5	32	12.5	473
向泉院B	歌譜 (實久良信信士)	安政5	1858	テテオオト	15	32	12.5	474
向泉院B	歌譜 (智恵助性入場)	安政6	1859	テテオオト	59.5	47.5	24.5	475
向泉院B	歌譜 (天澤清堂信士)	文久3	1863	テテオオト	68.5	59	23	476
向泉院B	歌譜 (曹山貞性信士)	萬延2	1861	テテオオト	53	40	19	477
向泉院B	歌譜 (桂島堂子)	文久2	1862	テテオオト	49	40	19.5	478
向泉院B	歌譜 (法林道元信士)	明治2	1869	テテオオト	32	23	12.5	479
向泉院B	歌譜 (我若了齋信士)	文久3	1863	テテオオト	40.5	30	12	480
向泉院B	歌譜 (記名女)	文久3	1863	テテオオト	40.5	30	12	481
向泉院B	常山中興十二位御願 第一歌泉の百歌元海師	元治1	1864	テテオオト	88 (清花香白) 69 (掛身)	藍格48 (清形) 藍格30 (掛身)	24.5	387
向泉院B	歌譜 (慧光妙日大姉)	元治1	1864	テテオオト	74	51	24.5	480
向泉院B	歌譜 (曹法堂女)	明治2	1869	テテオオト	33	24.5	13	481
向泉院B	歌譜 (菊茶妙英伯女)	明治2	1869	テテオオト	67	50.5	21.5	482
向泉院B	歌譜 (岡邊院重玄妙日大姉)	明治2	1869	テテオオト	74.5	38	33	483
向泉院B	歌譜 (盛徳院興成朝儀信士)	明治21	1888	テテオオト				
向泉院B	歌譜 (清蓮院菊亭妙英大姉)	明治5	1872	テテオオト	49	39	15	484
向泉院B	歌譜 (慈雲寺義女)	明治5	1872	テテオオト	23	18.5	9.5	485
向泉院B	歌譜 (鶴持妙貞伯女)	明治6	1873	テテオオト	55	40.5	17	486
向泉院B	歌譜 (真高成宗女信士)	明治14	1881	テテオオト	69	51	21	487
向泉院B	歌譜 (富高多平歌)	明治19	1886	テテオオト	57	43	21.5	488
向泉院B	歌譜 (清光妙蓮大姉)	明治19	1886	テテオオト	55.5	44	19	489
向泉院B	歌譜 (秋風清葉信士)	明治24	1891	テテオオト	63	33	15	491
向泉院B	歌譜 (本室妙高伯女)	明治23	1890	テテオオト	57	38	14	493
向泉院B	歌譜 (仙蓮大善信士)	明治24	1891	テテオオト	40.5	33	15	494
向泉院B	歌譜 (仙蓮大善信士)	明治24	1891	藤井妙霞花譜 (井内石)	57	38	14	493
向泉院B	歌譜 (浄慧妙清童女)	明治25	1892	テテオオト	40.5	33	15	494





147	井戸尻A	題目	明治20	1887	〒イサイト		59	32.5	17	347
148	井戸尻A	山神			細籠～中殿アルコーヌ		85	50	40	319
149	井戸尻B	水神	大正4	1915	織袋砂質花岩(井内石)		130	75	5	364
150	井戸尻C	山神			中殿アルコーヌ (ラミナあり)		40	22	14.5	354
151	井戸尻C	妙法□□大神			細籠～中殿アルコーヌ		87.5	29	6	355
152	太子堂	菩薩像	正徳3	1713	〒イサイト	(台座含)	103	41	37	288
153	太子堂	題目	明治28	1895	織袋砂質花岩(井内石)		95	24.5	15	289
154	太子堂	題目	明治31	1898	〒イサイト		78	44	16	290
155	オアベンツウエ	熊の神	昭和33	1958	甲殿アルコーヌ		101	73	30.5	358
156	オアベンツウエ	題目	昭和47	1972	左武岩		86	53.5	8	359
石巻・手水鉢・竊立・鳥居ほか										
157	多賀神社	竊籠			織袋砂質花岩(井内石)			95	59.5	739
158	多賀神社	手水鉢	明治9	1876	アルコーヌ		36			291
159	多賀神社	石鳥居	大正9	1920	織袋砂質花岩(井内石)			竊籠35	292	292
	多賀神社	竊立(東)	昭和55	1980	織袋砂質花岩(井内石)		133	31	17.5	295
	多賀神社	竊立(西)	昭和55	1980	織袋砂質花岩(井内石)		150.5	30	17.5	296
	多賀神社	石巻籠(東)	昭和53	1948	角籠が入った織袋岩(竊籠)		138	竊立147.5		293
160	多賀神社	石巻籠(西)	昭和23	1948	角籠が入った織袋岩(竊籠)		130	竊立147.5		294
161	日光院	竊立(東)	大正13	1924	織袋砂質花岩(井内石)	(58)	115.5	10.5		335
162	日光院	石巻籠	安政3	1856	〒イサイト		150	竊立253		329
163	日光院	石巻籠	元治2	1865	〒イサイト		132.5	竊立257		331
164	2BB	知大	大正10	1921	〒イサイト		24	47	13 (全体)	352
	2BB	手水鉢			〒イサイト		67	55	47	351
彫彫碑・石巻神社										
165	井戸尻B	御井戸碑	昭和5	1940	織袋砂質花岩(井内石)		222	99	7.5	365
166	2BB	[妙法]	昭和13	1938	織袋砂質花岩(井内石)		217	93.6	25	353
167	多賀神社	彫彫碑			織袋砂質花岩(井内石)		233	233	103	297
168	日光院	善忠親国碑	明治45	1912	織袋砂質花岩(井内石)		202	89	9.5	333
169	日光院	記念碑	大正14	1925	織袋砂質花岩(井内石)		210	78	11	337
墓塔										
170	(化度寺(住職墓地))	墓塔(大林十一世)	享保15	1730	〒イサイト	(塔身) 63 (全体) (65)		(直径) 24.5		300
171	(化度寺(住職墓地))	墓塔(南永平即石室大和尚)	天保2	1831	〒イサイト	(塔身) 55 (全体) (71)		(直径) 23.5		301
172	(化度寺(住職墓地))	墓塔(常寺四世大和尚)			アルコーヌ	(45)	25	12		302
173	(化度寺(住職墓地))	墓塔(・・・石住和尚傳師)			〒イサイト	(24.5)		(直径) 21		303
	(化度寺(大石氏墓地A))	墓塔	正徳		安山岩の〒イサイト	(58)	39	40		304

174	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(彌勒堂定信土)	享保2	1717	テノヤノト	74.5	43	23	305
175	化度寺 (大石氏墓地A)	菩提(津若紗葉信女)	享保11	1726	中脱テルコーズ	74	71	26	306
176	化度寺 (大石氏墓地A)	菩提(大藤松野信士)	文政8	1825	テノヤノト	47	37.5	23	307
177	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(近雪守了五右衛門)	元禄6	1693	中脱～相脱テルコーズ	(96)	68	28.5	308
178	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(冬御明白善信土)	正徳2	1714	テノヤノト	(67)	44	34	309
179	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(御満願心亮兼信士兼位)	正徳4	1714	テノヤノト	(59)	43	18	310
180	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(御満願妙信女)	享保2	1717	テノヤノト	66.5	34	20.5	311
181	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(御幸采柏比呂起)	享保17	1722	テノヤノト	68	37	21	312
182	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(花林負事大姉)	天明2	1722	細脱テルコーズ	(73.5)	36.5	22.5	313
183	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(真道英心信士)	天明4	1784					
184	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(花直妙釋大姉)	文化11	1814	テノヤノト	71	53	25	315
184	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(大安正徳居士)	文化14	1817					
185	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(大安正徳居士)	享和2	1802	テノヤノト	(59)	48.5	32	314
185	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(心月妙性大姉)	文化7	1810					
185	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(大雲了道居士)	慶応4	1868	テノヤノト	67	56	25	317
186	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(空齋宗隆居士)	明治4	1871					
186	化度寺 (大石氏墓地)	菩提(貞室妙徳信女)	文政2	1819	中脱テルコーズ	(103)	30	16.5	316
187	日光院	菩提(日光院妻)	延享7	1679	中脱テルコーズ	101.5	81	41	319
188	日光院	菩提(徳口博定門)	享保30	1725	テルコーズ	45	27	11.5	320
189	日光院	菩提(信妻良綱定門)	延享3	1746	テルコーズ	67.5	38.5	20	322
190	日光院	菩提(大心了道信女)	天明7	1787	テノヤノト	53	32.5	13	323
191	日光院	菩提(観法妙善信女)	安政6	1859	テノヤノト	46	38.5	16	327
192	日光院	菩提(霜林玉雪智男)	享保11	1726	相脱テルコーズ	105.5	89	13	342
		(林風玉光禪定尼)	延享4	1747					

田中村

193	テノヤノテ	松碑			相脱テルコーズ	125	59	28	608
194	テノヤノテ	三重塔供養碑	正和3 番付3	1314 1328	中脱テルコーズ	(185)	93	47	600
伊養塔									
195	テノヤノテ	観音堂	享保12	1727	テノヤノト	78	50	29	602
196	テノヤノテ	名号	享保19	1734	中脱テルコーズ	(130)	116	40	603
197	テノヤノテ	庚申	正徳4	1714	中脱テルコーズ	(205)	164	62	601
198	テノヤノテ	庚辰	寛政6	1794	細脱～中脱テルコーズ	127	40	28	604
199	テノヤノテ	山神	寛政9	1797	中脱テルコーズ	(118)	118	31	605
200	テノヤノテ	熊野山・月山・羽黒山	享保1	1808	相脱～細脱テルコーズ	124	72	46	606
201	テノヤノテ	今思齋	明治11	1878	相脱テルコーズ	136	45.5	15	607
202	テノヤノテ	高田觀世音	大正2	1913	細脱妙賢花塔 (井内石)	64.5	30.5	11	609
203	三所宮	蛇玉権現	大正12	1923	彌陀妙賢花塔 (井内石)	64	25	6.5	597
204	三所宮跡	蛇玉権現	大正12	1923	彌陀妙賢花塔 (井内石)	72.5	24	4.5	598

205	三所宮跡	三所宮	昭和7	1932	細紋～中紋ゾルコーズ	(102)	38	14	599
石川県・手取林									
206	志引神社	手取林	石川県(北)	昭和6	1931	粗紋ゾルコーズ	(27)	91	592
	志引神社					コンクリート	(186)	寛一辺54	593
						コンクリート	(150)	寛一辺54	594
石川県									
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(磯月良形信土)	安永5	1776	中紋ゾルコーズ	77	46.5	28	672
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(空室中台・)	寛政6	1794	粗紋ゾルコーズ	(57)	46	30	673
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(春日原法信土)	文政10	1827	ディ少イ卜	42.5	22.5	17.5	674
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(磯月良形信女)	天保2	1831	中紋ゾルコーズ	71	49.5	32.5	675
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(智藏庵定尼)	天保7	1836	ディ少イ卜	76	41.5	26.5	676
		墓陪(秋月良形信土)	安政2	1837					
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(風間長光信土)	安政2	1855	ディ少イ卜	57.5	41	21.5	677
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(白藏野鶴信女)	明治8	1875	ディ少イ卜	41.5	30.5	16	678
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(寛政久津信・)	明治14	1881	ディ少イ卜	39.5	32.5	15	679
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(大道傳信女)	明治15	1882	ディ少イ卜	46.5	33	16.5	680
2222	3071A (相澤家墓地)	墓陪(磯月良形信女)	明治17	1884	ディ少イ卜	48.5	38.5	19	681
		墓陪(至・)	文・		中紋ゾルコーズ	(25)	(37)	(22)	682
		墓陪(不明)			中紋ゾルコーズ	(28)	(29)	(13)	683
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(点為實齋道春兼定門菩提也)	延享9	1681	中紋ゾルコーズ	58	34.5	12.5	685
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(徳寄妙花禪定尼)	貞享3	1686	細紋～中紋ゾルコーズ	64.5	34.5	19	686
		墓陪(・・・・京尼)	貞享3	1686	粗紋ゾルコーズ	81	45.5	17.5	687
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(為冬彦妙興禪・)	元禄7	1694	中紋ゾルコーズ	52	33.5	10	688
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(為光眞道清禪定門)	元禄8	1695	中紋～粗紋ゾルコーズ	72	47.5	17.5	689
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(道本禪空信女)	元禄16	1703	中紋ゾルコーズ	73	57	11.5	690
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(菅葉亮信男)	享保2	1717	中紋ゾルコーズ	73	39.5	33	691
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(白福心重子)	享保3	1718	中紋ゾルコーズ	43.5	25.5	8	692
		墓陪(白福心重男)	享保3	1718	中紋ゾルコーズ	59.5	(53.5)	24.5	693
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(徳吉了圓信男)	寛政1	1741	中紋ゾルコーズ	83.5	72.5	29	694
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(夏雲道禪定門)	寛政3	1743	中紋ゾルコーズ	66	33.5	25.5	695
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(徳園妙藏信女)	延享4	1747	中紋ゾルコーズ	69	53.5	22	696
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(磯藤勇心信女)	寛延3	1750	中紋ゾルコーズ	81.5	41.5	30	697
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(春道妙清信女)	天明2	1752	中紋～粗紋ゾルコーズ	67	45.5	17.5	698
		墓陪(秋田心重女)	天明2	1752	ディ少イ卜	32.5	30	15	699
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(豊林紅日信土)	天明4	1754	中紋ゾルコーズ	77	50	21.5	700
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(一透庵定男)	寛政2	1790	中紋ゾルコーズ	74	46.5	24.5	701
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(磯月良形信男)	享和3	1803	粗紋ゾルコーズ	47	48	17.5	702
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(清林妙清信女)	文化4	1807	中紋ゾルコーズ	51	46	25	703
2222	3071A (小川家墓地)	墓陪(磯月良形信女)	文政9	1812	中紋ゾルコーズ	48	37.5	13.5	704

『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (源水・・・)	文化14	1817	船越ゾルコーヌ	39	25	8.5	705
『2/2』3011B (小川宗景地)	景譜 (冷木自林信士)	文政7	1824	中殿ゾルコーヌ	66	53.5	22	706
『2/2』3011C (小川宗景地)	景譜 (六方了通信士)	文政9	1826	安山岩	42	35	23.5	707
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (菅野勇康・)	天保10	1839	船越ゾルコーヌ	41	23	14.5	708
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (福善道庵信士)	安政3	1856	ゾイゾイ卜	42.5	35.5	18.5	709
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (福善了心信士)	安政6	1859	ゾイゾイ卜	42.5	35.5	16.5	710
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (性海良任信男)	慶應2	1866	ゾイゾイ卜	46.5	40.5	19	711
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (貞吉寛信)	明治1	1868	ゾイゾイ卜	22	18.5	11.5	712
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (貞心妙實信女)	明治2	1869	ゾイゾイ卜	38.5	29	14	713
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (津浪良道信士)	明治4	1881	ゾイゾイ卜	37.5	29.5	15	714
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (長善良政信士)	明治7	1884	ゾイゾイ卜	51	34.5	20.5	715
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (不明)		1884	船越ゾルコーヌ	(48.5)	52.5	10.5	716
『2/2』3011A (小川宗景地)	景譜 (不明)			中殿～船越ゾルコーヌ	38	27.5	16.5	717
『2/2』3011A (伊藤宗景地)	景譜 (梅井砂左衛門信)	正徳6	1716	中殿ゾルコーヌ	(91)	57	14	718
『2/2』3011A (伊藤宗景地)	景譜 (重法法師信士)	享保6	1721	中殿ゾルコーヌ	106	39.5	34.5	719
『2/2』3011A (伊藤宗景地)	景譜 (安心禪定信)	享保18	1733	中殿ゾルコーヌ	95	(39)	8.5	720
『2/2』3011A (伊藤宗景地)	景譜			中殿ゾルコーヌ	94.5	(40)	10	721
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (為即近明心禪定門也)	宝永6	1709	中殿ゾルコーヌ	74	48.5	34	610
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (白持元・・・)	享保2	1717	中殿ゾルコーヌ	(34)	27	20	611
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (栗崎孤・・・)	享保12	1727	船越～中殿ゾルコーヌ	(66)	69.5	44.5	612
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜	元文5	1740	安山岩	34	21.5	18.5	613
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (夏月常圓禪定門)	延享2	1745	安山岩	(70)	35	12	614
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜	延享4	1747	ゾイゾイ卜	23	38	14	地蔵菩薩立像
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (光光抄・・・)	天明5	1755	船越ゾルコーヌ	28	47.5	16.5	615
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (西天不外信・)	天明8	1758	ゾイゾイ卜	30	34	18.5	617
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (使調習院信・)	天明9	1772	ゾイゾイ卜	52	56	24.5	618
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (梅吉野道信女)	安永4	1775	中殿ゾルコーヌ?	59	35	12	619
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (花岩定心信女)	安永7	1778	中殿ゾルコーヌ	(42)	36	12	620
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (秋の道宣信士)	天明2	1782	中殿ゾルコーヌ	47.5	(20)	(8)	622
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (春岳光信信士)	天明3	1783	中殿ゾルコーヌ	65	49	25	623
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (妙湖禪定信)	天明4	1784	ゾイゾイ卜	44.5	38	15.5	624
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (泉栄・・・)	享和1	1801	ゾイゾイ卜	42	42	24.5	625
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (春林口信信女)	文化2	1805	中殿～船越ゾルコーヌ	39	33	17.5	626
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (國邊妙通信女)	文化6	1809	ゾイゾイ卜	63	25	(8)	627
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (栗吉道庵信士)	文化10	1813	船越ゾルコーヌ	43.5	22	15	628
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (岳谷道庵信士)	文化14	1817	中殿ゾルコーヌ	57.5	35.5	27	629
『2/2』3011B (伊藤宗景地)	景譜 (夏涼松葉信士)	文政2	1819	ゾイゾイ卜	118	52	(15)	630
					45	33.5	19	631

207	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (常心道内)	文政12	1829	相殿了ルコーズ	46	49	40.5	632	
208	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (夏雲砂影信女)	天保3	1832	了ルヤイト	41	38.5	30	633	
209	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (法雲砂影信女)	天保8	1836	了ルヤイト	(38)	不明	不明	634	
210	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (夏雲西四信士)	天保8	1837	相殿了ルコーズ	37	34	25.5	635	
211	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (長安砂影信女)	天保9	1838	了ルヤイト	52.5	38	18	636	
212	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (無衣及端信士)	天保12	1841	了ルヤイト	56	36	20	637	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (花林薄面信士)	文政4	1851	了ルヤイト	34	28.5	14	638	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (花田砂影信女)	安政4	1857	了ルヤイト	48	33.5	19.5	639	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (雪智留延信女)	万延1	1860	了ルヤイト	57	43	18	640	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (明衣信士・・・)	安政7	1860	了ルヤイト	31	27.5	13.5	641	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (親光淨願信士)	文政2	1862	了ルヤイト	53	39	23.5	642	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (親指人心海定門)	文久3	1863	了ルヤイト	43	33	17	643	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (清安見信信士)	文久4	1864	了ルヤイト	40.5	38.5	16	644	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (青玉園林信士)	明治5	1872	了ルヤイト	51	38	20	645	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (翠嵐砂光信女)	明治5	1873	了ルヤイト	50	35	20.5	646	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (親給妙慈信女)	明治7	1874	了ルヤイト	57	37	25	647	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (龍法妙慈信女)	明治8	1875	中殿了ルコーズ	52.5	38	19.5	648	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (廣成薄延信士)	明治8	1881	了ルヤイト	51.5	33	22.5	649	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (御頭砂代信女)	明治17	1884	了ルヤイト	52.5	40	24.5	651	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (自明・・・)	天・		中殿了ルコーズ	25.5	26	16	652	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (心空妙慈・禪定尼)			相殿了ルコーズ	73	(41)	(13)	653	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (天・・・)			相殿了ルコーズ	(38)	38	23	654	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜			了ルヤイト	(43)	36	15	地蔵菩薩立像	655
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜			了ルヤイト	38	28.5	16.5	地藏菩薩立像	656
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜			了ルヤイト	25	28	15.5	地藏菩薩立像	657
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (秋休習休信士)			中殿了ルコーズ	48	32.5	24	土牛	658
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜			中殿了ルコーズ	(47)	不明	不明	659	
	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (法名釈迦大魚生)			相殿了ルコーズ	72	53.5	30	佛例七	660
207	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜			了ルヤイト	69	77.5	26	667	
208	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (龍衣淨土)			中殿了ルコーズ	54	64	23	668	
209	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (龍衣釈迦信士)			相殿了ルコーズ	76	52.5	15	669	
210	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (了阿彌製法印永願尊童)			相殿・中殿了ルコーズ	104	68.5	42	666	
211	♀2/2 3/1+1B (赤井・伊藤実基地)	景譜 (権大僧阿闍梨法印広藏)			中殿了ルコーズ	1674			670	
212	志引神社	立像			了ルヤイト	24	19	19.5	佛例七	595

## 附章 仏像調査

東北芸術工科大学 長坂一郎

### 1 向泉院 木造 地藏菩薩立像

安置場所：観音堂 向かって右

#### (1) 法量 (cm)

像高	60.5	肘張	21.8	台座高	21.5
総高(台座含)	82	袖張	21.5	台座幅	31.9
頂・顎	10.8	裙裾張	17.3	台座奥	24
面幅	6.7	足先開(外)	11.1	光背高	75.2
耳張	8.3	足先開(内)	4.8	光背幅	28.5
面奥	9.2			輪光厚	1.4
胸厚(中央)	8.4				
腹厚	11.3				

#### (2) 形状

通形の地藏菩薩立像。円頂、白毫相、彫眼、耳朵貫通。覆肩衣、衲衣、裙を着ける。左手を屈臂して正面に出し、掌を上に向け宝珠を執る。右手を体側に垂下させ、前膊を僅かに曲げて錫杖を執る。蓮華座の上に直立する。

#### (3) 品質・構造

寄木造、彫眼、彩色。白毫ガラス製か。頭部挿首か。頭部は、前後二材を刳ぎ付けるか(現状、彩色により刳ぎ目確認出来ず)。体幹部材前後二材刳ぎ付け、左右側面材を刳ぎ付ける。両手先材別材差し込み。両足先別材刳ぎ付け(現状、彩色により構造の詳細は不明)。現状、後世の修理により本体は台座から分離できず。

#### (4) 損傷状態

頭部左側面、左肩以下に塗膜の浮き上がり、剥落。台座全面に塗膜の浮き上がり、剥落。

#### (5) 所見

江戸時代の制作。



正面



背面



左側面



右側面

## 2 向泉院 木造 如来形立像

安置場所：観音堂 向かって右

### (1) 法量 (cm)

像高	49.7	胸厚(中央)	6.2	台座高	29.4
総高(台座含)	78.7	腹厚	7.8	台座幅	27.7
髮際高	45.4	肘張	12.5	台座奥	25.2
頂・顎	10.6	袖張	12.3		
面長	6.7	裾裾張	8.3		
面幅	4.1	足先開(外)	7.1		
耳張	5.9	足先開(内)	3.5		
面奥	7.7				

### (2) 形状

如来形の立像。肉髻、螺髮。彫眼、耳朵不貫。覆肩衣、衲衣、裙を着ける。

左手を体側に垂下させて、掌を正面に向けて五指を伸ばす。その内第一指、第三指、第四指を僅かに捻じる。与願印を結ぶ。右手を屈臂し、掌を正面に向けて五指を伸ばし、その内第一指、第三、第四指を僅かに捻じる。施無畏印を結ぶ。

蓮華座の上で僅かに前傾しながら立つ。

### (3) 構造

一木造。彫眼。

頭体幹部を一材で彫出する。両手先別材差し込み。両足先別材刳ぎ付け。

#### (4) 損傷状態

両袖口に鼠によるものと思われる喰害。

#### (5) 所見

江戸時代か。

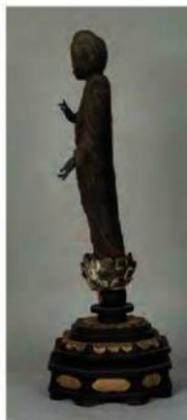
両手先が後補のため尊名は不明。後補では施無畏印・与願印を結んでいることから釈迦如来立像であった可能性が高い。



正面



背面



左側面



右側面

### 3 向泉院 木造 僧形立像

安置場所：観音堂 向かって右

#### (1) 法量 (cm)

最大高(像高)	15
最大幅(袖張)	6.4
最大奥(左袖・背)	3.7
台座高	3.5
台座幅	8.2
台座奥	8.1

#### (2) 形状

僧形の立像。円頂、彫眼、老相。法衣、裙を着ける。左手を屈臂して、五指を伸ばし掌を右耳下につける。右手を屈臂して、左手の下に重ねる。

八角台座の上に直立する。

(3) 構造

一木造、彫眼。

頭体幹部を一材で彫出する。両足先別材矧ぎ付け(現状欠失)。

(4) 損傷状態

左袖口一部欠失。

(5) 所見

江戸時代の作か。



正面



背面



左側面



右側面

4 向泉院 木造 地藏菩薩立像

安置場所：観音堂 向かって右

(1) 法量 (cm)

最大高(像高)	18.1
最大幅(袖張)	6.2
最大奥(左袖・背)	5.1
台座高	7.7
台座幅	7.6
台座奥	6.3

(2) 形状

地藏菩薩の立像。円頂、彫眼、三道彫出。覆肩衣、衲衣、裙を着ける。左手を体側に垂下し、僅かに前膊を正面に出す。右手を屈臂して正面に出す。

蓮華座の上に直立する。

### (3) 構造

一木造。彫眼、彩色、漆箔。

頭体幹部蓮肉軸木までを一材で彫出する。両手先材差し込み。框座は後補。

### (4) 損傷状態

両手先材現状欠失。後頭部に塗膜の剥落。右側面前面に塗膜の浮き上がり、剥落。

### (5) 所見

江戸時代中期の作か。



正面



背面



左側面



右側面

## 5 向泉院 厨子入 金銅聖観音菩薩立像

### (1) 法量 (cm)

最大高(台座含)	4.6
最大幅(肘張)	1.2
最大奥	0.7
厨子高	8.2
厨子幅	4.2
厨子奥	2.9

### (2) 形状

聖観音菩薩の立像。髻、彫眼。条帛、裙、腰布、天衣を着ける。左手を屈臂して、前膊を左胸につけて、蓮華を執る。右手を屈臂して、前膊を右胸につけて第一指から五指までを伸ばす。腰を僅かに右へ捻り、左足を前に出して蓮華座の上に立つ。

(3) 構造

金銅製。頭体幹部、台座までを一材で鑄造する。

(4) 損傷状態

像底に何かを削った痕跡あり。

(5) 所見

室町時代後期から江戸時代初期か。

鎌倉時代風の姿勢(腰を右に捻り、左足を前に出す形)をしているが、側面視では量感がなく、像が薄くなるため。



正面



背面



左側面



右側面

6 向泉院 厨子入 木造十一面観音菩薩立像

1 法量 (cm)

最大高(台座含)	6.6
最大幅(台座)	2.9
最大奥	1.2
厨子高	8.3
厨子幅	3.5
厨子奥	2.5

## 2 形 状

十一面観音の立像。髻、頭上面を一段で表わす。頭部正面に化仏。彫眼、耳朵不貫。条帛、天衣、裙を着ける。左手を屈臂して正面に出し、水瓶を執る。右手を体側に垂下させ、五指を伸ばして、数珠を執る。腰を僅かに左へ捻り、右足を前に出して台座の上に立つ。

## 3 構 造

一木造。彫眼、彩色。

頭体幹部を一材で彫出する。

## 4 損傷状態

現状、本体が台座、厨子に張り付けられているため本体を取り出すことが出来ない。

## 5 所 見

江戸時代後期か。



正面（厨子内）



正 面

## 7 向泉院 木造 天部形立像

安置場所：観音堂 向かって左

### 1 法 量 (cm)

像高	44.5	袂張	16.8	台座高	10.5
髮際高	41.7	裾張	11.2	台座幅	19.5
頂・頸(現状)	8.6	胸厚(左)	8	台座奥	19.5
面長	6	腹厚(左)	9.3		
面幅	5	背の開(外)	8.9		
髮張	7.2				
面奥	8				
肘張	16.2				

## 2 形状

吉祥天の立像。髻、彫出。天冠台(帯状)彫出。髪は両耳を覆って背中に垂らす。白毫相(欠失、現状径0.2cmの小孔をみせる)彫出。二道を刻む。筒袖衣を着けて、その上に大袖衣の衣を右前に着け、旗袖付きの襜褕衣を右前に着ける。裙を着ける。左手は体側に垂下してやや屈臂し、掌を前にして五指をやや伸ばす。右手を屈臂して前に出し、掌を前にして宝珠をのせる。脊を履いて直立する。

## 3 構造

寄木造、彩色。

頭頂やや後ろ寄りで前後二材矧ぎ付け(内削りを施す)。こめかみを通る線で面相部別材矧ぎ付け。左肩以下別材矧ぎ付け。左前膊以下別材矧ぎ付け。左手首先別材矧ぎ付け。右肩以下別材矧ぎ付け。右手先別材矧ぎ付け。宝珠別材。両足先各別材矧ぎ付け。

## 4 損傷状態

髻欠失。正面天冠台一部欠失。右袖口一部欠失。頭体に彩色層の浮き上がり、剥落。

## 5 後補

後頭上部、両相部、左肩以下、右肩以下、両足先。

## 6 所見

頭体は鎌倉時代。後頭部上部の後補部及び面相部、左肩以下前膊半ばまで、及び右肩以下手先までの後補部は鎌倉末～南北朝の補修か。左前膊半ば以下、右手先、両首先は台座と共に近年の後補か。

吉祥天像は、通常左手で宝珠を執るのに対し、本像は右手を屈臂して宝珠をのせるため吉祥天ではないか。或いは神像か。ただし、両肩以下後補の為当初は不明。



正面



背面



左側面



右側面

## 8 向泉院 木造 菩薩形坐像

安置場所：観音堂 正面

### (1) 法 量 (cm)

像高	30.3	胸厚(中央)	7.6	台座高	15
髮際高	21.7	腹厚	9.3	蓮台径(左・右)	21.7
頂・顎	13.1	膝張	20.1	蓮台径(前・後)	22.7
面長	6	膝高(左)	4.2		
面幅	5.9	膝高(右)	4.2		
耳張	6.4	坐奥	17.7		
面奥	6.4	裙先出	3		
肘張	14.4				

### (2) 形 状

菩薩形の坐像。髻を結び上げる。天冠台を彫出する。天冠台は、二重の幅広の蓮弁と幅の狭い蓮弁を交互に表す。彫眼、二道を刻む。覆肩衣、衲衣、裙を着ける。両腕を腹前に出す(現状両手先欠失)。右足を上にして結跏趺坐する。

### (3) 構 造

頭体を通して一木。髻中央から両耳前を通る線で面相部別材矧ぎ付け。頭部内割り、体部は内割りなし。両手先別材矧ぎ付け(欠失)。両脚部一材製別材矧ぎ付け。裙先別材矧ぎ付け。蓮台前後二材矧ぎ付け(現状、本体と台座が接着する)。胡粉下地に漆箔。頭髮墨彩。

### (4) 損傷状態

像全体に塗膜の浮き上がり、剥落。両手先欠失。

### (5) 所 見

江戸時代後期。



正面



背面



左側面



右側面

## 9 向泉院 木造 菩薩形立像

安置場所：観音堂 正面

### (1) 法 量 (cm)

像高	40.8	胸厚(中央)	6.4	蓮台最大幅	15.1
髮際高	36.2	腹厚	7	蓮台奥(前・後)	13.2
頂・顎	10.2	天衣の張	16.8	框座高(全高)	14.8
面長	5.7	裾張	11	框座幅	26
面幅	4.4	足先開(外)	5.8	框座奥	17.7
耳張	6.4				
面奥	6.3				
肘張	13.5				

### (2) 形 状

菩薩形の立像。髻を結い上げる(正面に三つ葉形の飾りをつける)。天冠台彫出。地髪毛筋彫り。白毫相、彫眼。耳朶不貫。天衣、条帛、腰布、裙(折返し付)を着ける。左手を屈臂して左胸前に上げ、五指をまるめ持物(未開敷蓮華の茎)を執る。右手を屈臂して右胸前に上げ、掌を前に向け五指をやや曲げて開く。左足を僅かに開いて両膝をやや曲げて立つ。

### (3) 構 造

彫眼、彩色。

頭部は耳後を通る線で二材矧ぎ付け。内割りを施す。挿首とする。体部は柄を含んで一材製。首後から地付までを割り、現状新補材で埋める(体部は、元は一木か)。両手先別材矧ぎ付け。天衣左右の垂下部各一材矧ぎ付け。

### (4) 損傷状態

条帛、天衣、裙、右前膊材、持物に塗膜の浮き上がり、剥落。

### (5) 所 見

江戸時代後期。



正面



背面



左側面



右側面

## 10 向泉院 木造 菩薩形坐像

安置場所：観音堂 正面

### (1) 法量 (cm)

像高(現状)	27.5	胸厚(中央)	8
髮際高	25.7	腹厚	9
頂・顎(現状)	8.3	膝張	23.5
面長	6.9	膝高(右)	4.7
面幅	5.4	膝高(左)	4.5
耳張	7.2	坐奥	15.7
面奥	6.6		
肘張	16.6		

### (2) 形状

菩薩形の坐像。髻欠失。現状、地髪部頂に7つの小孔を穿つ(面相部材上に小孔1つを穿つ)。天冠台彫出。天冠台は正面中央部を下げる。天冠台の形状は、紐一条上に列弁。白毫相。彫眼、三道彫出。条帛を着ける。条帛は正面で端を上から入れて下から出す。天衣を着ける。天衣は両肩を覆い、両手内側に垂下する。左手を屈臂して前に出し五指をまるめ、胸前で持物を執る。右手を屈臂して前に出し掌を左に向けて五指をやや曲げて伸ばす。裙、腰布、腰帯を着ける。右足を上にして結跏趺坐する。右足裏を半ば見せる。左足裏を3分の2ほど表わす。

### (3) 構造

ヒノキ材、彫眼、彩色。

頭体幹部一木(両肘及び天衣を含む)。内割りなし。頭体幹部は木心を遠く前方に外したヒノキの一材から彫出し、地付から最大7.0cm高で削り上げる。髻別材(現状欠失)。面相部別材刳ぎ付け。両脚部一材刳ぎ付け。左手前膊部以下肘まで一材刳ぎ付け。左手首先一材刳ぎ付け。右手前膊部以下肘まで一材刳ぎ付け。右手首先一材刳ぎ付け。

### (4) 後補

面相部、右手前膊以下。

### (5) 損傷状態

像全体に塗膜の浮き上がり、剥落。左大腿部一部欠失。

### (6) 所見

体幹部は両肘を含め一材から彫出する古風な造り。体部は厚く、やや背中を丸める姿勢。条帛の端を下から出す形式。下半身に腰帯を纏う形式から制作は鎌倉時代か。



正面



背面



全体



左側面



右側面



像底

## 10 向泉院 石造 厨子入不動明王立像

安置場所：観音堂 向かって左

### (1) 法量 (cm)

全高(像・台座含)	43.3	台座高	14.5
像高	29.1	台座幅(正面)	40.5
頂-顎	6.7	台座奥(上面左側)	20.7
耳張	5.3		
肘張	17.9	厨子高	58
裙裾張	11	厨子幅(天板)	39.4
		厨子奥(天板)	31.8

### (2) 構造

像及び台座共彫。石材製。光背は木製(彩色)、下方に木製の別材を光脚とする。

### (3) 墨書銘

厨子 正面扉(観音開き)左側面内側

「歎我淳迪信士 法庵如孝信女 文化元甲子十一月

為兩親菩提 納主 塩釜南町 栄吉 世話人 吉右衛門」

台座正面

「寄附人 菅野左市 菅野春吉 大正六年二月廿八日」



全 体



正 面

## 12 向泉院 木造 大日如来坐像

安置場所：本堂左側 ガラスケース内

### (1) 法 量 (cm)

像高	42.7	腹厚(条帛上)	11.2	台座高	40.9
髮際高	30.9	肘張	22.3	台座幅(下框)	52.9
頂・頸	17.7	膝張	28.5	台座奥(下框)	52.8
面長	7.4	膝高(左)	5.2		
面幅	6.3	膝高(右)	5.5	光背高	43.2
耳張	9.8	坐奥	19.3	光背幅	24.2
面奥	9.1	裙先出	2.8	輪光厚	1.1
胸厚(中央)	9.6				

### (2) 像底黒漆塗 朱漆書銘文

「大日如来 奉寄進鹽竈 相應院干 延寶二甲寅八月上旬

仙臺渡辺平右衛門尉□□(快命力) 施主法名蓮居士」

### (3) 形 状

智拳印を結ぶ大日如来の坐像。鬘は頂に一房を後方に流し、上下二段(各三房)とする。頂正面に三葉形の飾りを着ける。根元に紐二条、上際列弁。冠を着ける。地髪毛筋彫り、鬘髪一条耳を渡る。白毫相(水晶嵌入)。玉眼嵌入。耳朵貫通。三道彫出。条帛を着ける。条帛の端は下か

ら出す。裙(折返し付)、腰布を着ける。腰布の結び目を正面に表す。胸飾(金属製)を着ける。臂釧、腕釧(各金属製)を着ける。右足を上にして結跏趺坐する。

台座は蓮台、敷茄子、華盤、敷茄子、蕊、受座、蕊、反り花、上框、中框、下框の十一段となる。

#### (4) 構造

木造、寄木造、肉身金泥、衣漆箔、玉眼。

頭体幹部は、耳前を通る線で前後二材刳ぎ付け。内削りを施す。玉眼嵌入(瞳は黒、周りに赤、血走りは青)。両手は肩、肘、手首で各刳ぎ付け。両脚部は裙先を含んで一材刳ぎ付け。髻一材刳ぎ付け。髪は群青彩。冠は金属製。底面は上げ底式(地付から2.8cm高)とする。

#### (5) 所見

像底の朱漆書銘文により製作年代が延宝二年(1674)であることがわかる。鎌倉時代、慶派風の特徴を示し、江戸時代の作としては珍しい。



正面



背面



全体



左側面



右側面



像底

### 13 祇園講 木造 牛頭天王坐像

#### (1) 法量 (cm)

像高	18.4	腹厚	5.1	台座高	6.3
髮際高	15.3	肘張	9.6	台座幅	15.3
頂・顎	6.2	膝張	11.1	台座奥	8.4
面長	3.3	膝高(左)	3.6		
面幅	2.4	膝高(右)	3.7		
耳張	3.2	坐奥	6.3		
面奥	4.3				
胸厚(左)	4.3				

#### (2) 形状

牛頭天王の坐像。焰髪。頭上正面に牛頭を表わす。その下に頭飾を着ける。忿怒相、彫眼。耳朶不貫。紐一条を背中から両脇下に通して正面胸下で結ぶ。条帛を着ける。裙を着ける。裙は、腰紐を巻き正面で結ぶ。臂釧、腕釧を着ける。左手を屈臂して正面に出し、第二指のみ伸ばして他を曲げて棍棒を執る。右手を屈臂して拳をつくり韃索を執る。結跏趺坐して岩座の上に坐す。

#### (3) 構造

一木造、彫眼、彩色(胡粉下地、弁柄、黒漆)。頭体幹部を一材で彫出。両肩以下、別材矧ぎ付け。左手前膊半ば別材矧ぎ付け。

#### (4) 損傷状態

左手前膊材をセロハンテープで止める。像底に虫の巣(調査時に除去)。

#### (5) 所見

江戸時代後期。



正面

背面

左側面

右側面

## 14 志引観音講 木造 勢至菩薩

### 1 所見

像が小さく、目は細く、鼻、口に力がないこと、髪の毛筋を彫るものの細くないこと、衣の衣文線も同じように、画一的であることなどから、江戸時代後期のもと考えられる。また、光背の雲の形も力がないことも特徴の一つである。

東田中では観音像とされているが、像は合掌しているため、観音像ではな、「勢至菩薩」であると考えられる。勢至菩薩が独尊として作られるのは珍しいため、阿弥陀三尊の脇侍像として作られたものが、利用されたと推測される。

(像) 高さ：18.3cm 幅：12.0cm 奥：10.7cm

(台座) 高さ：27.9cm 幅：15.0cm 奥：13.3cm



正面



背面



全体



左側面



右側面



全体 (厨子含)

多賀城市文化財調査報告書一三六集

多賀城市の歴史遺産

大代村 笠神村牛生  
留ヶ谷村 高崎村 田中村

平成二九年三月発行

編集 多賀城市教育委員会

千九八五―八五三一

宮城県多賀城市中央二丁目一番一号

発行 多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会

印刷 今野印刷株式会社

千九八四―〇〇一一

宮城県仙台市若林区六丁の目西町二―一〇

本報告書は、平成28年度「文化庁 文化遺産を活かした地域活性化事業」で作成したものです。